

---

# Zero of the Beowolf

T・K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Zero of the Beowolf

### 【Nコード】

N9954C

### 【作者名】

T・K

### 【あらすじ】

ようやく戦いに終止符を打ち、アインスト空間から通常空間へ帰還しようとするハガネ、ヒリュウ隊。人の意思の光が全てを照らす中、なぜかキョウスケだけは別の場所に飛ばされてしまう。そのたどり着いた場所とは？！無茶と分かっていながら、無茶をすする企画です。いわゆるクロスオーバー作品でゼロの使い魔とスーパーロボット大戦OGsを混ぜたものです。嫌いな方はどうぞ回れ右してください。

## 第一章：プロローグ 始まりの光（前書き）

一応作品に忠実にキャラを再現するつもりですが、至らないところがあったらどしどし抗議してください。結構です。あとOGsのOG2のラストの部分から始まりますが、多少再構成して既にアルフイミイが消滅した事になっていてオリジナルの会話も混ぜており、またここからが本題なのですが、生身における戦闘のキョウスケの描写が原作中にはあまり無かったのでそこいらに関しては独自解釈が大いに入ることになります。ご了承ください。

## 第一章：プロローグ 始まりの光

「必ず帰ってみせる……」

自らの愛機の中で、男はつぶやく。

年は二十歳を越えたぐらいだろうか。均整の取れた体を赤いパイロットスーツに包み、茶色の髪の毛の先に金のメッシュを施している。顔は若々しい精悍さに溢れ、たくましい。口は一文字に結ばれ、一見すると無感情な、むっつりとした表情である。しかしその瞳には隠し切れない意志の強さと熱い感情のほとばしりがあった。

男はある一つのことを一心に、ひたすら念じていた。

ふと男は首をまわし、周りを見る。男のいる場所はコックピットらしい。機体の外部の様子を知らせる全周囲のモニターがあり、そこには彼の仲間達が乗っている、巨大な、鋼鉄の巨人といえる機体が空間に浮かんでいた。彼らの機体の損傷は激しく、恐らく男の乗っている機体も同様だろう。

彼らは戦い続けてきた。そしてついに、アインストという異形のモノ達を倒すことに成功したのである。

だが彼らは今、危機に直面していた。彼らのいるその空間は通常のものではなかった。オレンジ色の宇宙に何か結晶のようなものが漂っており、明らかに通常の、彼らの属していた世界ではない。しかも有り得ないことだが、空間自体が揺れていた。

そう、まもなくこの空間が崩壊するのである。空間を維持していた、アインストの首魁が倒れたことによつて。

だからこそ男は一つのことを念じていた。浮かんでいる機体の中にいる男の仲間達も、男と同じことを念じているだろう。

即ち、元の宇宙に、地球へ帰る、ということである。

「キョウスケ……」

突然男は声を掛けられた。見ればモニターの一部にコックピットに座る人の姿が映し出されている。声の高さ、そして男、キョウス

ケと同じ赤いパイロットスーツに包んだ体は丸みを帯びていることから、その人物は女性と分かった。

その女性は豊満な体つきをし、ヘルメットに隠れていて分からないが艶やかに光る金髪をポニーテールでまとめており、顔は形のいい鼻筋と、感情豊かにくりくりと動く大きな青い瞳をもつ美女であった。しかし男には、その瞳には高い知性の光を隠していることが分かっていった。

キョウスケは念の集中を一旦やめる。

「エクセレンか。……どうした」

エクセレンと呼ばれた女性は顔をキョウスケの視線からそらし、俯いている。いつもは軽い調子と明るい愛嬌に溢れている彼女が、いまは抑えきれない不安に震えていた。

「んー、ちよつとね。これで終わりかもって思ったら、我慢できなくなつちやつて」

「言うな、そんなことは。やる前からそんなことを言っていたら、成功するものもなくなる。……それに、言いたいことはそれだけじゃないだろう」

エクセレンがはつとした様子で顔を上げる。そして、明らかに無理をしていると分かる笑みを浮かべた。

「やっぱり分かつちやつ？ ……あの子のことを考えてたの」

「……アルフィミイのことか」

キョウスケは彼女に似た少女の、いや、少女の形をした異形の仲間の名を口にした。エクセレンが頷く。

「あの子はノイレジセイアの消滅による破滅の運命を逃れることができなかった。でも、私は消滅せずにここにいる」

「……」

「私のヴァイスちゃんもそのままだし、もし通常空間にもどれたとしても私がいたら……」

「それ以上は口にするな」

淡々とした、しかし彼女の体が震えるほどの怒りがこめられた声。

その激しさに、彼女はそれ以上口を開くことができなくなる。

「確かにあいつは破滅の運命から逃れることができなかった。しかし、それがどうした？ なぜお前まで消えなくてはならないことになる」

「……………」

「もう少し単純に考える。お前は破滅の運命にはなかった、それだけだ。他は知らん。そして……………」

そこで一旦、キヨウスケは言葉を切った。

「お前はお前のままで、おれの側にいればいい」

「え……………」

「それに安心しろ。もしお前の不安が事実になったときは、おれがお前を殺してやる」

「……………」

あまりといえばあまりの台詞である。しかし、エクセレンはしばしの間ぼかんとしたあと、くすくすと笑い始めた。

「……………ふふ、キヨウスケも言うときはいうもんね。これがほんとの殺し文句ってやつ？ ていうか深く物事考えてないだけじゃないの？」

先ほどまでの思いつめた感じがなく、軽い口調、そして軽口がその口から出てくる。しかし、ヘルメットの中に浮かんでくる輝く雫はごまかしきれなかった。

キヨウスケはそれに気づかない振りをし、微かな笑みを口に上らせた。

「……………それでいい。それでこそおまえだ」

「はいはい。そうですね、キヨ、ウ、ちゃん！」

今度こそ、こぼれんばかりの満面の笑みをエクセレンは浮かべた。

「あゝあゝ、それにしても」

「？ どうした」

「今みたいな台詞、これからはいつもしてくれればいいのにな。そうすれば欲求不満になることもないってのに」

少し口を尖らせ、愚痴をもらしてくる。しかし同時にどこかうつとりとした表情をしており、彼女は自分の体を抱きしめてくじやくにゃと身をよじっていた。……何か変な想像、いや、妄想でもしているのだろうか。

「ラブラブオーラ全開でー、みんな目をそらすくらいにー」  
「断る」

にべもない。しかも即答であった。

「え、なんでよキョウスケ！ せっかくしてくれたのに〜！」  
「そんなことに一々付き合っていられるか。それにおれはさっきのあいつらが受ける目にはあいたくない」

あいつらとはキョウスケの仲間の男女二人のパイロットのことである。普段女の方は男にツンツンしている、要はツンデレと言う奴なのだが、先ほどその二人がこの上なく甘い会話をしていたのだ。

……プライベート通信でない状態で、である。つまり全員に丸きこえた。

これから彼らが受ける目を考えると、同情せずにはいられないキョウスケであった。

エクセレンがぶーぶーと文句を言ってくる。

「なんだ、いいじゃないそんなの。むしろ見せ付けちゃえーって感じにはならないわけ〜？ 周囲にはどうせ知れ渡ってるし、さつきみたいに殺し文句バリバリでー、あとあのと看みたいにぎゅっと抱きしめてくれるとか」

「ならんしお前の趣味に付き合うつもりも毛頭無い」

「何よ、キョウスケのいけず！ 一回やったんだから二回や三回、もしくはそれ以上やってくれたって罰は当たらないわよ！」

「どういう理屈だ」

まるで夫婦漫才である。そこに、男の声で通信が入った。

「システムの準備が整った。全員、念を集中させてくれ！」

即座に緊張に身を硬くする二人である。おちゃらけていても、この切り替えの速さは彼らが歴戦の戦士たる証であった。

「来たな。……やるぞ、エクセレン」

「ええ、もう一度私達がやり直すために。……生きるために！」

二人は念を集中させた。ただひたすら、元の場所、地球へ帰ることだけを想う。すると、仲間の機体の一機、SRXと呼ばれる巨大な機体が輝きを発し始めた。

(あれが人の意思の光か……！)

キョウスケは思わず感嘆の吐息をついた。

その光は美しく、力強かった。

ある男が言った。人の意思は何者も可能にする力になるのだと。

それはT-LINKシステムという人の意思を発現させる特殊な装置を用いなくとも、本質は何も変わらない。そしてその意志の力が集まれば、この空間と地球をつなぐ道を作ることまでできるのだと。

その言葉を信じさせてしまうほどに眩い、強い光であった。

だんだん光が強くなり、周りが見えなくなってくる。白が視界を覆い尽くしていく。その中にあっても、キョウスケは念じ続けた。だがその中で、

(……？ 何だ、これは)

自分の機体の前には、何か別の光が広がりつつあった。それは、彼とその愛機を包み込んでいく。

そして人の意思の光は、全てを飲み込んだ。

## 第一章：プロローグ 始まりの光（後書き）

他のサイトでゼロの使い魔とフロントミッション3のクロスオーバーがやっていたのでそれに触発されてしまいました。強さの調整やアルトを出すことのやばさは重々承知しているのでそれを踏まえたと上で何とかやっていききたいと思っています。

目を開けると・・・？

光で視界が埋まる中、キョウスケは目を閉じ、ただ地球へ帰ると  
いう一念のみを念じていた。それを支えるのは、

(こんなことで死ぬわけにはいかん)

ただこの考えのみである。

念じるだけで元の宇宙に戻れることが可能か不可能か、そんなこと  
とは考えてもいない。いや、やると決めた以上そもそもそんなことを  
考えたところで無駄なだけと、直感で分かっていた。

しかし直感、身もふたも無い言い方なら勘だけで正しい答えが導  
き出せるというのも恐ろしい話である。戦闘においてもこの勘に従  
って博打としか言いようが無いことをしても必ず生き残ってしまう  
のだから尚更質が悪い。

(まったくもって短絡的ではあるがな)

もっとも、それはキョウスケ本人も気付いており、自覚していた  
が。

やがて光が引き、目を閉じていても視界に色が戻り始めたことが  
分かった。そこは元の宇宙か、はたまたアインスト空間が崩れるこ  
とで生まれるという次元の狭間か。

(分の悪い賭けは、嫌いじゃない……)

しかし、彼は動じない。自然、彼は元の宇宙だと思った。彼の好  
きな、分の悪い方に賭けるギャンブルになぞらえて。

そして彼は目を開き

「あんだ誰？」

無然とした声が耳に響き、視界には一人の少女が入ってきた。

抜けるような青空をバックに一人の少女がキョウスケの顔を覗き  
込んでいる。どうやら先ほどの「あんだ誰？」は彼女が言ったらし  
い。年は中学生くらいだろうか。黒いマントの下に、白いブラウス、

グレーのブリーツスカートといった出立ちだ。髪の毛が綺麗な桃色をしている。小作りの顔は整っており、瞳は鳶色でエクセレンと同じようにくりくりとよく動くが、別の意味を持っているようだ。

即ち、

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

誰かがそう言うと、キヨウスケをじっとのぞき込んでいる少女以外の全員が笑った。

「ちよ、ちよっと間違えただけよ！」

キヨウスケの目の前の少女、ルイズというらしい、が顔を真っ赤にして鈴のようによく通る声で怒鳴った。

……ここまでのやり取りで分かるだろう。感情の起伏が激しい、である。

「間違いつて、いつもルイズはそうじゃんか」

「〜！ ……ま、まあいいわ。今はこっちが先よ。 ……もう一度聞いわ。あんた、誰なの」

よほど怒鳴りたかったのだろうが、我慢したらしい。口端を引くつかせながら、再びキヨウスケに聞いてきた。

そこで初めて、キヨウスケは自分の状態に気付いた。草むらの上で大の字になっていたのである。このままでは必要も無く、身を起こして胡坐をかき、口を開いた。

「……そういうお前は誰だ」

「……！」

キヨウスケがそう答えると、目の前の少女の顔が更に真っ赤に染まった。

「平民のくせに貴族に口答えするの?! いいから答えなさい!!」

(平民? 貴族? なんだそれは)

キヨウスケはよく働いていない頭で、いぶかしげに思う。しかし、怒鳴られているにもかかわらず、彼は態度をまったく変えなかった。「知らんな、そんなものは。だいたいなぜおれがお前に命令されな

くてはならない」

必要と思えば上官にすら反対意見を口にす、彼らしい不遜な態度である。そんな返答をされてますますルイズは顔を真っ赤に染めていく。そしてそこに、更なる油を注ぐギャラリーたち。

「しかも平民に口答えされてるし」

「さすがはゼロのルイズだ！」

誰かがそう言うと、人垣がどつと爆笑する。ルイズはトマトのように顔を真っ赤にしたままうーと唸っている。

一方少女に受け答えはしていたものの、事態の進展についていてないのがキョウスケだった。

(何だここは……?)

物事に対する対応が早い、部下に厳しい鬼教官でもあったゼンガ  
ー・ゾンボルト少佐にそう言わしめた彼だったが、あまりの事態に多少頭が混乱していた。しかし彼も去るものである。戦士としての本能が、混乱していながらも彼の頭は自分と周囲の状況について分析にかかっていた。

(確かおれは、機体の中で元の空間に戻るために念を集中させていたはずだ)

それがなぜ、次元の狭間でも元の空間でもないこんな場所にいるのだろう。それに周囲には彼の愛機の姿も無い。

周りを取り囲んでいる少女たちは彼女と同じような服装で、手に何か小さな棒を持っていた。更に周りを見回してみると、中世ヨーロッパ風の大きな石作りのお城のような建物がキョウスケの目に入った。

(どこぞのファンタジーか……?)

そこで思わず、益体の無い考えがキョウスケの脳裏に出てきてしまった。しかしどう見てもこの風景や目の前にいる少女が身に付けているものを見ると、彼の時代において普通見るものではないためそう考えてしまう。彼にしる何らかのファンタジーといわれる物は、興味は無かったものの目にしたことはあり、それらを参考に

しての話であったが。

（ドラマや映画の口ケ、もしくは妙な団体の集まりといった可能性もあるが……）

だからといって、キョウスケが彼らの様子を見るに、演技をしているといったことは無いと思えた。さっきの貴族だの平民だのと言っていたルイズという少女の怒りは紛れも無く本物であったし、なにより戦闘といった命がかかった状況になるとたんに働き始める彼の直感、勘がそう言っていた。となるとこれはファンタジーと言った非現実ではなく、紛れも無い現実の世界ということになる。

ならばここは一体どこなのか？ ルイズの態度や話の内容からすると貴族と平民が明らかに区別され、差別化されているようだが、そんな国柄で、しかも洋風な国など現代においてあったらどうか？ 少なくともキョウスケは聞いたことが無い。

（それに何故おれの服装が変わっている？）

彼の周りの状況からすれば大したことはないのかもしれないが、彼が今着ているのは赤いパイロットスーツではなかった。では知らない服かといえば、そうでもない。

上半身は黒いシャツの上に肩の部分に金属のガードが付いている赤いジャケット、そして指が出る黒いグローブをしている。下半身はジャケットに合わせたのか、ポーチが付けられた赤いパンツを穿き、足には茶色の軍靴を身に付けていた。

何を隠そう、これらは戦闘時以外で着けている彼の普段着だったのである。

しかし何故服装がこれに変わっているのか、何故自分はこんな場所にいるのか、まったく訳が分からない。

（いや、待て……）

と、そこまで考えて何か引つかかるものがあつた。あまりに彼のいた時代とは違う風景、服装、考え方とそして摩訶不思議な現象。

これらが彼が経験してきたことと照らし合わされ、一つの考えをなそうとしていた。しかし、

「ミスタ・コルベール！」

ルイズが人垣に向けて怒鳴ったせいで、思考が中断してしまった。驚きはしなかったが、なんだと思っただけで彼女が声をかけたほうを見る。すると声のほうの人垣が割れ、中年の男性が現れた。その頭の上はさびしいことになっていたが、瞳は穏やかで温厚な性格が滲み出ている。しかし、それは問題ではない。

（何だあれは……）

その中年のしていた格好に、さすがのキヨウスケも驚いた。

真つ黒なローブに身を包み、彼女たちのものに比べるとかなり太くて長い杖、彼も杖のような棒を持っている。その姿は先ほどまで考えていたファンタジーの体現、魔法使いそのものの姿だったのである。だがその珍妙な格好は中断していた彼の考えを再開させる、いや、それをまとめさせる切欠になった。

キヨウスケがはつとす。

（まさかここは、異世界というやつか……！？）

普通なら冗談と笑って済まされる考えだろう。しかし、キヨウスケはそう考えることができなかった。

実際にラングランという魔法を平気で使っている（と仲間の一人から聞いた）地底 世界やそこから来た魔装機神、平行世界から来た者達、そして次元転移という実例を見まわっている。また、ラングランには地上から人を呼び寄せる召喚という魔法もあるらしいのだ。ここまでの実例があつて、笑い飛ばせるはずが無い。

それに異世界に飛ばされたとしても、頷いてしまえる事情もあるのである。

（アインスト空間から脱出するときだ……）

思わずキヨウスケは唸った。

システムXNという次元転移装置を用いてあの時は通常空間に帰還しようとした。しかし、その時脱出しようとした空間はどうなっていた？ ただでさえ崩壊しそうな不安定な状況の中で、人の意思を結集させて脱出しようなどという無茶をしたのである。まあ意思

の結集自体は無害かもしれないが、脱出するというのは相当空間に負担のかかる行為だろう。何らかのイレギュラーが発生したとしてもなんら不思議は無い。

(そしてそれは恐らく、あの別の光だろう……)

人の意思の光に飲み込まれそうになつた際、突然キヨウスケと彼の愛機を包んだ光があつた。あれのためにこちらに来たのだろうと推測する。

(だがあれは意思の光とは別のものとはいえ、似たようなもののように思える)

そこでキヨウスケは、こちらをのぞきこんでいた少女に目を向けた。確か彼女、いや違う、彼女を笑っていた誰かが『呼び出した』といつていたような気がする。

(……まさか……)

まだ異世界であることも、『呼び出された』ことも断定するには至っていない上、更に彼としても本気かと思う考えである。しかしキヨウスケは悩む必要は無かつた。

「もう一度『サモン・サーヴァント』を、召喚をやり直させてください！」

コルベールという中年につかみかかるルイズが、そう叫んだのである。ご丁寧に『召喚』といつてくれた。

(……八割方は決まり、と言つた所か)

本人は鈍いだけと言うが、この何事にも動じない男には珍しく彼はため息をついていた。

なんとなくではあるが、これまでの周囲の会話からキヨウスケはイメージをつかんでいた。彼の優れた状況把握能力の賜物である。

恐らくさつきルイズが言つた『サモン・サーヴァント』という魔法　このようなものがあると仮定してだが　を用いて召喚、こちら風にいえば空間転移を用いて何かを呼び出そうとしたが失敗し、ハガネ、ヒリユウ隊の脱出によって更に不安定になっていたアインスト空間に干渉して代わりに自分が呼び出されてしまった。こんな

ところだろう。

（まだ魔法と呼ぶには抵抗があるが、しかしそうも言っている状況ではないか……）

確信は深まるばかりである。だが、まだ残り二割は決まったわけではない。

（分の悪い賭けは嫌いじゃないが、な）

今回だけは本気で当たって欲しいものだと思うキョウスケである。気が進まないながらも彼は立ち上がり、ルイズ達の所へ歩いていった。

彼女らはまだ騒いでいる。

「……どうしてもう一度やってはだめなのですか！」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今、やっている通りですな」

「ご丁寧に中年がもう一度召喚と言ってくれた。しかも使い魔とは（サモン・『サーヴァント』、か。……恐らくおれのことだろうが、まだ……分かん）

キョウスケは残り一割に減った希望に一縷の望みをかけた。歩みを進める。

「それによつて現れた『使い魔』で今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進みます。一度呼び出した『使い魔』は変更することができません。なぜなら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからです。好むと好まざるに関わらず、彼を使い魔にするしかないのです」

「でも平民を使い魔にするなんて聞いたこと……って、何よあんだ！ こつちは取り込んでるんだから近づいてこないでよ！」

そこで目ざとくルイズが気付き、怒鳴ってくる。しかしキョウスケはそれを無視した。そして、

「コルベール、でしたか。……聞きたいことがあります」

中年に話しかけた。彼が顔をキョウスケに向け、首を傾げる。

「……何ですか？」

そのとなりであからさまに無視されたルイズは更に大きな声でギ

ヤーギヤーと騒いでいたが、またしてもキヨウスケは完全に無視した。

キヨウスケが聞いたのは現代における各国の主要都市と、そして世界の統治機構の名前である。これらは幼い子供でも知っている常識中の常識であり、答えられるのが当然の質問だった。これで本当にここが彼の世界かどうか、試してみたのである。だが結果は無情なものだった。質問をしたコルベールと言う男も、騒いでいたルイズもぼかんとした表情で「そんなものは知らない」と答えたのである。

(決まったか……)

しかし、最後に一つだけ聞いておく。

「ここは……どんな名前の場所ですか？」

「……？ 異な事を聞かれる。ここは高名な、由緒正しきトリステイン王国魔法学院ですぞ」

知らない国名、しかもはっきりと『魔法』と言われてしまった。思わず、またため息が出た。

(どうやら賭けには負けたらしい……)

彼、キヨウスケ・ナンブは目の前にいるルイズと言う少女に、魔法によって異世界に『召喚』されてしまったようだ。

目を開けると・・・？（後書き）

ずっとパイロットスーツじゃまずいし似合わない、ということでは  
思議パワーで服装をキョウスケのデフォルトに変えさせて頂きまし  
た。すこーし、と言うかかなり強引ですが関係品も一緒に引っ張ら  
れたと言うことで勘弁してください。あとラングランの話はマサキ  
から聞いていたということになっています。これは時系列からして矛  
盾はないと思いますが、どうでしょう？

## ペーオウルフ、異世界にて

「何ため息ついてんのよ。つきたいのはこっちのほうよ!」

また騒ぎ出すルイズ。再びコルベールのほうに向き直り、

「本当にこいつじゃなくちゃだめなんですか……?」

鬱な様子で問いかけた。コルベールが頷く。

「これは伝統なんです、ミス・ヴァリエール。例外は認められませんが。彼は……」

いって、コルベールはキョウスケを指差した。

「ただの平民かもしれないが、呼び出された以上君の『使い魔』にならなければなりません。古今東西、人を使い魔にした例は無いが春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する。彼には君の使い魔になってもらわなくては」

「そんな……」

ルイズはがっくりと肩を落とした。

だがルイズを諭すその一方で、コルベールは目の前にいる青年に奇異の目を向けていた。何か彼に引つかかることでもあるのだろうか。

しかし結局首を振った。

「さて、儀式を続けなさい」

そして何事も無かったかのように、コルベールはルイズを促した。

「……こいつと、ですか?」

ルイズはじろりとした目をキョウスケに向ける。

「そうです。早く。次の授業が始まってしまいますぞ。君は召喚にどれだけ時間をかけたと思ってるんだね? 何回も何回も失敗してやっと呼び出せたのです。いいから早く契約しなさい」

そうだそうだ、と野次が飛ぶ。

ルイズは困ったようにキョウスケの顔を見つめた。現在彼はなぜか腕を組み、なにやら思いつめた表情で俯いている。

(こいつと……?)

先ほどまでのやり取りでルイズのキョウスケに対する心証はすこぶる悪い。平民にもかかわらず貴族に口答えしたり、何よりかんっぺきに無視なんぞしてくれやがったのだ。良くなるわけが無い。しかし少し落ち着いて彼を良く見てみると……

(……けっこう、イケてる?)

そうルイズは思えた。見慣れない服装であるが、それを除けば均整の取れた体つきをし、むっつりとして口を一文字に閉じているが精悍な顔つきをしている。顔の造作も悪くなかった。髪は茶で先端が金と言う変な色をしていたが、それも案外似合っている。

思わず、顔が火照った。

(ふ、ふん。まあ契約してやる分には、悪くない相手じゃないの) 気を取り直してふんと胸を張り、キョウスケに近づいて堂々と言い放つ。

「か、か、感謝しなさいよね。きき、貴族にこここんなことされるなんて、普通じゃ一生無いんだから」

しかし声が震えていたため、その堂々とした態度も台無しである。だがキョウスケはまたしても無視した。そもそも反応さえしない。

またルイズの頭に血が上りかけるが、ふと気付いてちよんちよんとつついてみる。反応が無い。

(まさかこいつ、考え事してて他に気がまわってないの?)

そのことに気付いた。しかし無視されているのとあまり変わらないため、やっぱり頭に血を上らせて再びギャーギャーと周りで叫びまくった。

「こらー、何ずっと考えてんのよ!! 契約しなくちゃならないんだから早く腰を下ろしなさい!!」

契約にはあることをしなくてはならないのだが、彼とルイズではけっこう身長差があつてこのままではできないのである。キョウスケに気付いてもらい、腰を下ろしてもらわなければ何も始まらないのだ。

「き、き、な、さーいー！！ 貴族がこんなことするなんて、普通じやありえないんだからー！！！！」

それでもキヨウスケは気づかない。いつしかこれを見ていたギャラリーは全員笑い転げ、爆笑していた。ちなみにコルベールは呆れかえっている。

しかしそれを見て、ついに本気でルイズが切れた。

「ふーんそうなんだ……あくまで私を、貴族を無視するって言うんだ……」

笑みを浮かべる。しかしそれは鬼も裸足で逃げ出すと言う奴であった。つまり、とんでもなく怖かった。自然、ギャラリーの笑いも止まる。

後ろ向きに歩き、キヨウスケと距離をとっていく。

「仕方ないわよねえー、さっきからあんまりな態度とりまくってるんだもんねえええ」

くけけけ、と調子の外れた笑い声が周囲にこだまする。尚更怖かった。

キヨウスケは周囲が気にならないほど真剣に考え、悩んでいた。

その内容はここでどう自分が振舞うか、である。勿論元の世界に変えることも重要だったが。

(エクセレン……)

酒好きでおちゃらけた、彼の恋人にして相棒の姿が脳裏に浮かぶ。彼女は無事に地球へ帰れただろうか。それに、仮に地球へ帰れたとしても「俺の側にいろ」などと言ってしまった後、すぐにこんなことになってしまったため、自分が死んだと思って落ち込んでいるのではないかと心配になる。更に他の仲間たちのことも気にかかった。(帰ってみせる、必ずな。だが今はこれからのことだ)

ここが異世界であると思当がついた以上、これからどうするかを考えるのは避けて通れないことだ。帰る手段をどうやって探すか、生活はどうするのか。もっとも帰る一番の手がかりはすぐ近くにあ

るが、とにかく様々なことを考えていかなければならないことは事実だろう。

しかしそれよりも、今は重視すべきことがあった。

(まだ何とも言えんが……)

キョウスケは今、ある『可能性』について考えていた。まだ彼がこの世界について知っている情報は少なく、ここでの文化や技術、戦闘における武器のレベルを詳細に見てみなければ判断することができない問題であるが、だがもし仮にキョウスケの考えが現実となり、この世界の武器が一定以上のレベルに達していない場合、どういった事態になるのか。

(おれの行動しだいで、この世界の運命が決まることにもなりかねん……)

そう、あのキョウスケ達の世界に侵入してきた『向こう側』の『あの部隊』以上の災厄になることもあるのである。それを危惧しての思案であった。

しかし悲しいかな、それをするタイミングがかなり悪かった。もう少しあとでやっていればこれからの悲劇を受けることも、と言うより普段の彼なら余裕で回避できただろう。運命とは残酷なものがある。

(これからどうするか……おれの考えが正しければ……ぐう!?)

突如後ろから凄まじい衝撃を受け、キョウスケがつんのめる。衝撃の正体は無論、

「懺悔しろこの平民……!!!」

見事なとび蹴りを放ったルイズである。

キョウスケが何があったのかと振り返った。しかし、ここで彼は更にミスをしてしまう。そう、腰を曲げたまま振り返ってしまったのである。そして怒れる獣と化したルイズは、その一瞬のチャンスを見逃さない!

「わが名はルイズフランソワズドラヴァリエール五つの力を司る大いなるペンタゴンこの者に祝福を与え我の使い魔となせ!」

！」

ものすごい早口で呪文を唱え、即座に間合いをつめた。そして、

「!?!」

キヨウスケと唇を合わせた。と言っても敵かなものではなく、まるで力づくで分捕るようなヤツである。

慌ててキヨウスケがルイズを引き離し、距離をとった。

「な……何をする!?!」

あまりの事態に動転してしまう。様々なことを経験してきた彼であつたが、さすがに見知らぬ少女にいきなりキスされるなどと言うことは想像もしていなかつたらしい。本当に彼にしては珍しく、表情はあまり変わっていなかつたが目を白黒させていた。

ルイズが猛然と言い返してくる。

「仕方ないじゃないの! あんたがまるで私のこと気づかないもんだからこうするしかなかったのよ!」

「おれが言っているのはそれじゃない……なぜキスをしてきたのかを聞いている!」

蹴りもどうでも良くはないが、キスのほうが重要である。

「あんた本当に人の話し聞いてないのね!? 契約よ契約! 使い魔と主人の! ああもう、何で契約するのに一々キスなんかしなくちゃならないの!?! しかもこんな奴相手になんて!」

「……契約だと? おれがお前に呼び出された時点で、お前の使い魔とやらになつたんじゃないのか?」

「それならどんなに良かったのか分かりやしなわいわよ!」

キー、と天に向かって叫ぶルイズ。怒りで我を忘れていた。

キヨウスケは目を伏せ、痛くなってきた頭を抑えた。だんだん動転していた頭が冷えてきて、先ほどのキスは使い魔とやらの契約のためだつたとようやく理解できた。

(悪趣味なことだ……しかし、どうにかならんのかこれは……?)

叫んでいるルイズをちらりと見る。考えているときも何か周囲が騒がしいと思つたが、ルイズが騒いでいたためらしいとようやく気

付いた。で、そのルイズは未だに天に向かって叫び続けている。

どうするかキョウスケが考えていると、

「ぐー!？」

妙に体が熱くなった。思わず体を丸くする。耐えられないほどではなかったが、何が自分の身に起きているのか不安になった。

「何だ……一体何が起きている……!」

「……ん？ ああ、心配ないわよそんなの。『使い魔のルーン』が刻まれてるだけだから」

叫んで気が晴れたのか、ルイズが平然として言ってくる。

(ルーンを刻むだと?)

一体何をしたというのか。

そこで騒動のとはつちりを避けるため、一旦彼らから離れていたコルベールとギャラリーたちが戻ってきた。

「……ふむ、どうやら『コントラクト・サーヴァント』はうまくいったようすな」

「相手がただの平民だからさ」

「そいつが高位の幻獣だったら『契約』なんてできやしないって」

コルベールとギャラリーたちが思い思いに言う。

特にギャラリーの言葉に、もう何度目か分からないがまたルイズが血を上らせそうになった。しかし幸か不幸か、その時ちょうどキョウスケの体から熱が引いていったのである。そしてキョウスケの体には、左手の甲に光る何かが残されていた。

(何だこれは?)

グローブを取る。そこには見慣れない、文字とも何らかの文様とも見えるものが躍っていた。そこでキョウスケにルーンが刻まれたと知って、ルイズとコルベールが近づいてきた。二人して左手の甲を覗き込む。

「なにこれ、見慣れないルーンね?」

「ふむ、そうですな」

ルーンを確認し終わった後、コルベールがギャラリーに向き直り、

声をかけた。

「さて儀式も無事全員終わりましたし、今日はここまでと致しまし  
よう。……解散！」

そしてコルベールはきびすを返し、宙に浮いた。他のギャラリ―  
もみな宙に浮き始める。その中の一人、見事な金髪の巻き髪とそば  
かすを持った女の子がルイズをあざ笑った。

「その平民、あなたにお似合いよ。ゼロのルイズ！ せいぜい一生  
懸命その平民と歩いて帰ることね！」

ピクリとルイズの体が震え、彼らに方に体を向ける。だが悪いこ  
とに彼女を皮切りにして、他の者たちまでルイズを嘲り始めた。

「あいつ、『フライ』はおるか『レビテーション』さえまともにで  
きないんだぜ！」

「さすがゼロ！ ゼロのルイズって呼ばれるだけはあるなあ！」

口々にそういつて笑いながら飛び去っていく。

残されたのはキヨウスケとルイズだけになった。

(……なるほど、あれが魔法か)

いや、その一端と考えるおいた方がいいかとキヨウスケは思い直  
した。無論魔法があるらしいと分かっている、実際に使われている  
様を目にすると驚きが生まれた。しかし彼にとっては、単にそれ  
だけだった。

脅威になるかならないか、今の彼にとって重要なのはそれだけな  
のである。その点で言えば、飛んでいようと銃で叩き落せばいいだ  
けの話であった。

(もっとも、あればの話だがな。……まあ、今こんなことを考えて  
いても仕方がない)

まず初めに、やらなければならぬことがあるのである。

グローブを付け直し、丸めていた体を伸ばした。そして顔をルイ  
ズの方に向ける。

彼女は背を向けており、その背は何か痛みを耐えているようでも  
あった。先ほどまでの騒々しさとは正反対である。

キヨウスケはそんな彼女の肩に手をかけた。

「……何よ、平民。馴れ馴れしく触らないでよ」  
振り返りもせず、応じてくる。しかしキヨウスケはそれに構わず、ルイズに言った。

「どこか落ち着ける場所が無いか？ ……話がしたい」

そう、まずは帰る一番の手がかりである彼女と、話をつけることだ。

「それほんと？」

「本当だ」

ルイズは疑わしげにキヨウスケを見つめながら言った。二人はテーブルを挟んだイスに座っている。

ルイズの部屋である。個室の割にはなかなかの大きさがあり窓を南向きとするなら、西側にベッドが置かれ、北側に窓、東に大きなタンスが置いてあった。家具は一見シンプルな作りだが、光沢があり素材の良さが窺えた。

窓からさす光は赤く焼けており、既に日は傾きかけている。

話がしたいとキヨウスケに言われたルイズはまだキヨウスケの無礼な態度を許していなかったようだが、このままでいても仕方がないと思つたらしく自分の部屋に連れて来たのである。そしてキヨウスケは自身の身上をルイズに話したのであった

「でも信じられないわ。魔法がない別の世界から来たなんて」

テーブルに肘をつき、ルイズが言う。

キヨウスケは頷いた。

「こちら側の人間からすれば、普通はそう思うだろうな。だが事実だ」

……まあ魔法もあることにはあるが、とキヨウスケは心中でつぶやく。しかし今それを話すと話がややこしくなるため、伏せておくことに決めた。

キヨウスケは先ほど話した単語は自分の世界の都市の名前や、治

めている者の名前と教えたが、まだ信じていないようだった。無理も無い話である。自分だって様々な、しかも信じられないような経験をしているために異世界ということもすぐに飲み込むことができたが、ルイズのような反応をするのが普通だろう。

疑いの眼差しを変えず、ルイズが口を開いた。

「そもそもそんな世界が本当にあるの？ それにそこから来たって言うなら、何か証拠を見せてよ」

キヨウスケは無言でジャケットのポケットに手を突っ込み、そこからあるものを取り出し、ルイズに差し出した。

不思議なことに、キヨウスケのジャケットやパンツのポケット、そしてポーチには拳銃やら弾やら、ありとあらゆるものが入っていた。しかもそれらは全てキヨウスケ本人のものである。キヨウスケはありがたいと思っただが、妙なことだとも思っただ。この服装を着ていることからして不思議だったが、もしかしたら自分の所持品や関係品も一緒にこちらに召喚されたのかもしれないとキヨウスケは考える。

(そしてその考え方でいくと、無論アレもということになる……)キヨウスケは校庭での思いついた『可能性』についてまた考えはじめそうになるが、無理やり押しとどめた。

ルイズはキヨウスケが差し出したものを手にとる。

「何これ？ 何か映ってるけど……」

「Dコンという。一種の携帯端末だ」

「でーいーこん？ けいたいたんまつ？」

頭に？マークをいつぱいに浮かべ、ルイズが鸚鵡返しに聞いてくる。

「言ってしまうえば、ある種の万能機具だ。これを使って様々なことができる」

「様々って……どんな？」

キヨウスケは腕を組んだ。少し考える。

「……そうだな。例を言えば計算や通話、つまり遠くにいる人間と

やり取りができるといったものが挙げられるか。もつとも、通話は同じ種類のものを相手方も持っていないければ使えん」

「……何よそれ。魔法じゃないの？」

「ちがう。科学だ」

「カガク？」

また考える。

「……一つ聞く。こちら側では遠方にいる相手と交信できる魔法があるのか？」

「へ？ え、ええ、あるけど」

「ならそれが誰でもその器具を使えばできるようになると考えればいい。つまり、誰でも使える魔法といったところだな」

ふうん、と言ってルイズはしげしげとDコンのディスプレイを眺めていた。しかし手を広げ、首を振る。済ました顔をしていた。

「でもこれだけじゃあ「他にも見るか？」は？」

キョウスケは再びポケットに手をつ突っ込む。すると出てくるわ出てくるわ（しかしさすがに拳銃は見せなかった）。ルイズは慌てて止め、Dコンと出されたものを戻すようにキョウスケに言った。

そしてはあ、とため息をついた。

「……分かったわ、認めてあげるわよ。あんたが違う世界から来たって言う話。これだけ知らないものを見せられたし、あとあんたの服装も見たことが無いし」

「そうしてくれると助かる」

「……はあ、何でこんな変なやつを呼び出しちゃったのかしら……ってちょっと待って！ あんたの話信じると魔法のない世界から来たんでしょ。それにしても、妙に落ち着いてるじゃない？ さっきだって、『フライ』の魔法見ても驚かなかったみたいだし」

今頃だが彼の冷静な態度が気にかかり、ルイズが聞いてきた。

「当然最初は驚いた。だが驚いたままでも始まらんだろう。それにお前は知らんだろうが、今までも色々信じられんようなことを経験してきたんでな。先ほどまでのやり取りでここはどういっ

た世界か、今は大まかな状況はつかめている以上、大したことはない」

「……すごい順応の速さね。呆れるくらいだわ。……あとどうでもいいけど、あんたもう少しそのぶつきらぼうな喋り方、何とかしてくれないかしら？ 私はあなたのご主人様なんだけど」

ルイズがジト目でキヨウスケを見る。が、

「すまん。基本的には上官や目上の人間以外にはこれ以外の喋り方をすることがない……更に言えば、主人などという人間にも会ったことが無いんでな」

キヨウスケのこの言葉にいきり立った。

「な、何言ってるのよ！ それならどうして私にはそうした言い方しないわけ！？ 私は貴族よ。それに魔法が使えないんならあんたは平民でしょうが！ しかも今使い魔で、敬うのは当然よ！」

イスを蹴飛ばしてルイズが立ち上がった。校庭から今までで溜まっていたキヨウスケへの不満が爆発したのだらう。しかしキヨウスケは不遜な態度を崩さない。腕を組んだまま、言い放つ。

「それなら言わせてもらう。おまえは上官でもなければ目上の人間でも、更には敬えるほどの人間でもないからだ。それに、おれはそんな理由でなれる貴族など知らん」

「な！」

「さっき言っていたが、魔法が使えれば貴族だと？ 馬鹿馬鹿しいにも程がある。おれがおれの世界で会った貴族は幼かったが、人に対する礼儀をわきまえていたし身分を鼻にかけることも無かった。だがお前はどうか？」

「……！」

「一言目には貴族、二言目には平民と言い、相手を身分だけで判断しているだけだ。そんな人間をなぜ敬う必要がある？」

「な……な……！」

顔を真っ赤にして何か言おうとする。しかしあまりの怒りのために、出てこないようだった。そして駄々っ子のようにこぶしを振り

回して叫んだ。

「何であんたみたいな奴が私の使い魔なのよ！ ああもう、こんなんだっいたら使い魔の儀式なんてするんじゃないわ！！」

「……そう思っているのか？」

「当たり前よ！！」

「なら話は早い。送り返してくれ」

「……え？」

突然の提案にルイズは動きを止めた。

「おれはこんな世界なんぞに用は無い。おまえはおれのような者には用がない。利害が一致している以上、送り返してもらえば全てうまくいくと思うが？」

『可能性』のことを考えるとすぐ帰るわけにはいかなかったが、キヨウスケは帰ることができるかどうかをこの際はつきりさせておきたかったのだ。

ルイズはこの申し出に心を引かれかけたようだったが、首を振って、

「……無理よ」

と無情に言った、その時だった。

突如として部屋の空気が変わったのである。それに反応しルイズがはっとしたようにキヨウスケを見る。するとその顔が青くなり、体が震え始めた。

キヨウスケの表情は目を鋭く細めたこと以外はまったく変わっていない。しかし、その体や鋭く細めた双眸から発せられる凄まじい怒気や殺気は誤魔化しようがなかった。今やキヨウスケは、恐ろしいまでの怒りをむき出しにした一匹の獣と化していたのである。

彼はやはり、エクセレンや仲間のことや気になっていた。そのために、本当にどうこうしようとは思っていなかったものの、ルイズがあまり考えずに答えたように見えたためについ本気に近いものを出してしまっていたのだ。

「……何故だ？ 召喚のための魔法があるんだろう？ それなら相

手を送り返すための魔法もあるんじゃないのか」

キヨウスケから吐き出される声の口調は変わってないものの、触れれば切れるほどの鋭さがこめられている。そしてそこには返答しだいでは、というメツセージもこめられていた。

その怒りをまともに浴びたルイズは、思わずひ、と声を上げかけた。

当然であろう。彼女は知らないが、元いた世界で数え切れないほどの激戦を潜り抜けてきたキヨウスケである。その彼が放つ凄みは並大抵の男とは比べ物にならない。

しかし、それでも彼女は踏みとどまったのである。引きがちだった顎を毅然と上げ、必死に震えを押さええて話し始めた。

「……無理なものは無理よ。あれは一方通行でこっちに呼び出すだけ。そもそもこのことは違う世界があるなんて聞いたこと無いわ」

「……」

「それに『サモン・サーヴァント』はこの世界、ハルケギニアの生き物と呼び出す魔法なの。普通は動物や幻獣なんだけど、人間が呼び出されるなんてのも初めてよ。……わ、悪いとは思ってるわよ。」

反感はあるが、多少の罪悪感もルイズにはあるらしい。少しの謝罪も含めてキヨウスケに言う。

見た感じ、ルイズは本当に知らないようだった。これ以上彼女を怖がらせるのは無駄なだけだろう。

キヨウスケは舌打ちをし、怒りを納めた。ルイズはほつと息をついている。だがこれで、帰る一番の手がかりは消えたことになる。キヨウスケは簡単にはいかなかったことに多少の落胆を覚えた。

だが落ち込んでなどいられない。無ければ探すだけである。そのためにはどうすればいいか？

テーブルに身を乗り出して、キヨウスケはルイズを見すえて言った。

「……使い魔の役目はなんだ？」

「え？」

「お前が俺を送り返すことができない以上、おれはお前の使い魔をやるしかない。これも」

キヨウスケは左手のグローブをはずし、甲に刻まれたルーンをルイズに見せた。この意味は部屋に来る途中で聞いた。

「それを示すためのものなんだろう？ おれは死ななければこれを外せず、またお前は俺がいる限り新しい使い魔を呼び出すことができない。ならば仕方がない、やるだけだ。どんな役目があるのかを聞いている」

突然キヨウスケが態度を変えたことにルイズは戸惑った。

「な、何よ。突然やる気出し始めたじゃない」

「別にお前に仕えることに同意したわけじゃない。魔法でここに呼び出されたのなら逆に魔法で帰ることもできるのではないかと考えただけだ。しかもここは魔法学院という魔法を教える施設らしいな。ここにいて調べれば何らかの手がかりが掴めるかもしれない」

「はあ!？」

「だがここにいさせてもらう以上、何らかの働きはしなくてはならんだろう。そのためにお前の使い魔をやらせてもらう……それだけだ」

「はああ!?!??」

あまりの言い方にルイズは呆然とした。つまりキヨウスケはこう言いたいのだ。

帰るための手がかりを探したいからここにいたい。しかしそのためには何かしないとまずいと思う。だから使い魔をやらせてくれ……である。

ルイズは先ほどまでの怒りがぶり返す。

「あんた、ご主人様を何だと思ってるわけ!？」

「……別に何も」

「……! この……!?!?!」

ルイズがぎりぎり歯が軋むぐらいにかみ締める。拳も振り上げ

かけた。しかしそこに

「……だがまあ、使われるくらいなら構わないとも思っている。仕えたり、敬ったりするのはまだ遠慮するがな」

キヨウスケは不意打ちをかけた。本人はまったく自覚が無かったが。

「……え？ いま、何て……？」

ルイズは言われたことが分からなかったようで、聞き返してくる。自然と拳も下がっていった。

「……おれもまだまだだな。正直、お前のことを見くびりすぎている。……おれの殺気を浴びても怯まないとはいっててもいなかった。

……お前は、気骨はあるようだ」

グローブを付け直しながら、ルイズとしっかりと目を合わせてキヨウスケが言う。相も変わらず淡々としていたが、それがかえって他心なく褒めていることを彼女に伝える。

キヨウスケはあの時、ただルイズは怯え、震えるだけだと思っていた。

しかし彼女は震えながらも態度を変えず、キヨウスケの怒りに耐えたのである。口にはしないが、思わず心の中でほう、と感心したくらいだ。

そういえば校庭にいるときも同じだった。事情を知らないキヨウスケでも分かったが、ルイズは同級生から見下されているらしい。

しかしルイズは悪口を言われたときも、相手が大勢いるにも関わらず決然として向かっていった。そのときは子供のじゃれあいとはかり思っていたのだが、その時と今とで彼女が表した行動には、何の違いは無いのだろうか。

いかんせん平民と貴族との区別が激しいのが難点だが。彼女は貴族であることに、そして自分に誇りを持っている。そう知れた。

（上官に恵まれないのがおれのジंकスだが、今回は少しはマシな人間を引いたらしい。……使い魔の主人が上官といえるかは分かんがな）

そして、思ったことを伝えるために口を開き、

「ただ貴族だ貴族だと言っているわけではないことは、それから分かった。悪し様に言い過ぎた点については謝罪する」

キヨウスケは、軽く頭を下げた。それに慌てたのはルイズだ。

「え、わ、えええ？」

よほど驚いたのか、わけの分からない言葉が飛び出してくる。なぜか頬が染まり、手もパタパタとわけも無く動いていた。

キヨウスケはそれに構わず、続ける。

「ついさっきまではお前なんぞに使われるのもごめんだと思っていましたが、言うだけの人間ではないと分かった以上異論はない。調べものついでだが、おまえの使い魔としての役目を果たそう。……どこまで役に立つかは、分からんがな」

そして最後にルイズに向かい、

「よろしく頼む、御主人」

という言葉と、口端を僅かに上げた、微かな笑みを送った。

その顔を見たたん、ボン！ と爆発したかのようにルイズは顔を真っ赤に染めた。ただし、今度のは怒りによるものではない。内心で慌てまくり、浮かんでくる言葉も変になっていた。

（ななな、何言ってるのよこいつ。い、今更褒められたって別に嬉しくないわよ。散々口答えした上に、ききつ貴族を貴族とも思わないうようなこと言いまくってたし、その上つ、使い魔も何かの、その、アルバイトか何かと勘違いしてんじゃないかしら）

今まで生きてきた中でここまで平民（とキヨウスケをまだそう思っている）にぼろくそに言われたことのないルイズである。まだ怒りや不満は胸に残っていた。

（……でも）

ルイズは思う。さっきのはキヨウスケへの反感と、何より貴族の誇りがキヨウスケの怒りに屈することを許さなかったため強がって言っただけなのだが、それを褒められるなんて……

(褒められたことなんてこの所なかったし、それにこいつ、いつもむつつりしてるけど、あんなふうには笑うんだ……)

とルイズはそこまで考え、ぶんぶんと首を振ってあたし何考えてんの!? と思考をぶった切った。

気を取り直し、腕を腰にやる。顔はまだ赤い。

「ふ、ふーん、そうなんだ。そんなに私に使い魔として使われないんだ。じゃあしょうがないわよね。特別にあんたを使い魔として使ってあげるわ」

そして、ふんぞり返った。自分でもなぜか分からないが、機嫌がものすごく良くなっていた。

「それじゃ、あんたが言った通り使い魔の仕事を教えてあげる。せいぜい感謝しなさい!」

ルイズは得意そうな様子で使い魔の役目を説明していく。

「まず、使い魔は主人の目となり耳となる能力が与えられるわ」

「……どうということだ?」

「使い魔が見たものは主人も見ることができるようよ」

「ほっ」

それは戦闘の際役立ちそうだと、キョウスケは兵士としての考えが身にしみこんでいるのか、そんなことを考えた。

「でもあんたじゃ無理みたいね。私、何も見えないもん!」

「……すまん」

しかしそうだった影で、ただの人間にそんなことを期待されても困る気がするがな、という呟きがルイズの耳に聞こえてきた。

ルイズは少し眉を吊り上げる。

「……それから使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。たとえば秘薬とか」

「秘薬とは何だ?」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒のことよ。硫黄とかコケとか……」

「ふむ」

「でもあんた、そんなの見つけてこれないでしょ。秘薬の存在すら知らないのに」

「……まあ、な」

問答を続けるうちに、だんだんとルイズの機嫌が悪くなってきた。偉そうな態度をしていたわりには、こいつもしかして何もできないんじゃないのかしら？　と思えてきたのである。

（もし何もできないって言うんなら、どうしてやるうかしら？）  
物騒なことを考えたくなる。

ルイズは苛立たしそうに言葉を続けた。

「……そしてこれが一番重要なんだけど……使い魔は主人を守る存在でもあるのよ！　その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！　でもあんたは……」

「ああ、それで安心した」

「え？」

予想外の返答に、まじまじとキヨウスケの顔を見るルイズ。

「秘薬を探すといった、人間に無理そうなことばかりだったらどうするかと思っていたのだがな。……だが戦いが使い魔の本分というのなら、問題はない」

「え？　え？　どゆこと？」

突然の展開に訳が分からなくなるルイズ。

そんな彼女に向かい、キヨウスケは再びあの微かな笑みを浮かべた。しかしそれは先ほどのように優しくはない。不敵さを感じさせるものであった。

「簡単なことだ。俺は元いた世界で、兵士だったのでな」

「……へいし？　あんたが!？」

キヨウスケが頷く。

「本職はこの身で戦うものではないが、それでもそれなりの戦闘はこなしてきた。戦いとなれば、俺に任せてもらっても構わん。それに今の俺には、元の世界で使っていた武器もある」

ここでキヨウスケは右手でポーチに手をいれ、拳銃を取り出した。

ルイズは始めて目にする武器に驚く。

「なに？ それ。何か銃みたいに見えるけど」

「……この世界でも銃はあるのか。その通りだ。これは、銃だ」  
しかしルイズはこの答えを聞き、目に見えて落胆した。

「何だ。あんたの武器って銃だったの？ それじゃあ平民と変わらないじゃない。期待して損したわ」

「……どうということだ？」

「だから、そんな武器じゃ魔法の相手にはならないの。平民達はその武器を使うけど、魔法にかかったらいちころよ」

「……」

キヨウスケは太ももに肘をつき、空いている右手で拳を作って口に当てる。何か考え込んでいるようだ。自分の実力に自信を持っていたのだろうとルイズは思ったが、いい気味とも思った。平民が自分たち貴族に勝とうなど愚かもいいところなのだ。そう考えて言葉を続けた。

「第一魔法と銃じゃ差がありすぎるんだもの。銃なんて単発しか撃てないのに……」

その言ったとき、キヨウスケが急いで顔を上げ、ルイズに聞いてきた。

「……さっき何と言った？」

「……こっちは撃ち放題……って、何？」

「さっき何と言ったかと聞いている」

キヨウスケはただならぬ様子である。ルイズは気圧され、戸惑いながらも答えた。

「な、何よ。『魔法と銃じゃ差がありすぎる』ってこと？ でも事実だからしょうがないじゃない。あんたのいた世界は違ったのかもしれないけど……」

「違う、そこじゃない。その次だ」

「もう、なんなのよ！ 『銃なんて単発でしか撃てないのに』……」  
「それだ」

「え？」

銃を持ったまま、キヨウスケは再び腕を組んだ。そしてルイズに問いかける。

「……聞くが、この世界の銃は単発しか撃てないのか？」

「……？ そうよ、当たり前じゃない」

そこでキヨウスケは息をついた。

「……技術の差も頭に置いておくべきだったな。……すまんが、この銃はこちらの世界の銃じゃない。俺たちの世界の銃だ」

「？ 何よ、どういうこと？ それも銃なんでしょ？ 変わりなんてないじゃない。まあ形は変わってるけど」

「いや、違う。変わっているのは形だけじゃない。性能もだ。……実際に見てもらったほうが早いか」

「え！？」

言つや否や、キヨウスケは銃を持った手を伸ばし、横の壁にむけたのである。これを見て慌てたのはルイズだ。自分の部屋を壊されるといふのもあるが、何より銃の音の方が気になった。あれは撃つたびに、ぱぁーんという大きな音がするのである。しかもここは学院だ。もし誰かに聞かれたらと思うと騒ぎを起こした罰として何をされるか。下手したら、停学となるかもしれないなどの不吉な結末が群をなして頭に押し寄せてきた。

止めようと思って飛びかかろうとするが、既にキヨウスケの指は銃を撃つトリガーに力を入れ始めていた。もう止められない！

ああもう、こんな使い魔なんてやつぱり呼び出すんじゃない

！ と思いつながら、目を閉じ、耳をふさいだ。

「……？ あれ？」

しかし、いくら過ぎてもあのぱぁーんという音はしなかった。恐る恐る目を開いてみると、

「！？ なにこれ！？」

ルイズは目をむいた。キヨウスケが銃を向けた壁には、多くのひび割れが入っていたのである。

「すまん、壁を壊して。だが口で説明するより、目で見てもらいたほうが早いと思ったのでな」

キヨウスケが銃を下ろし、話しかけてきた。しかしルイズはそれどころではない。

ルイズの知っている銃は、この部屋の壁くらいとなるとひびを入れるのが精一杯のはずである。だがこの壁を見てみると、それとは比べ物にならないくらい大きなひびが入っている。桁違いの威力の差だ。その上、

（私が目をつぶってる僅かな間に、何発も撃ったっていつの！？）

そう、ひびが入っている場所は一箇所ではなかったのである。見たところ、六ヶ所は同じように大きなひびが入っていた。しかも、

「な、何で撃ったのに音がしなかったのよ！」

そう、あのばぁーんがなかったのである。

しかしキヨウスケは平然としたものだ。

「言っただろう。性能が違うとな。もつとも、音が出なかったのはこいつのおかげだな」

そう言って、銃の先端にあった筒のようなものを取り外した。

「それは？」

「サイレンサーという道具だ。これを銃につけると音が消せる」

「そんなものまであんたの世界にはあるの！？」

「ああ」

あまりにも大きな性能差にルイズは愕然となった。

魔法には詠唱が必要であり、元々銃には詠唱がなく先制できるというアドバンテージがあったが、威力と数を撃つことができないうために魔法に劣るとされていた。しかしこの銃は先制攻撃できるという点に、魔法以上かもしれない威力と弱点であった速射性が加わったのである。術者殺しもいい所であった。

そしてこの時、今更ながらルイズはキヨウスケが異世界の人間であることを実感した。先ほど様々なものを見せられたときはただ珍しいものぐらいにしか考えていなかったが、その認識が甘かったこ

とを思い知らされたのである。

驚きで身を固めてしまったルイズ。しかしキヨウスケはそんな彼女の様子に頓着せず、銃をしまつて彼女に話しかけた。

「これが今のおれの最強の手札だ。……さっきおれが考えていたのは、あまりに魔法が強力すぎて銃では相手にならないのではないかということだ。だがそれが単発式の銃でのものなら、話は変わってくる。これを使って相手が魔法使いの場合、どれくらい戦えると思うか？」

「……え？ あ、そ、そうね。多分、魔法を使う際詠唱を入れる必要があるから、先手を取ればものすごく有利に戦えると思うわ。ついでに数でも、その銃だったら何発も撃てるみたいだから負けないだろうし……」

言っている間に、ルイズは自分の中にだんだん喜びが湧いてきたのが分かった。壁が壊されたことも気にならなくなる。

人間でしかも平民 只者ではないことは分かっているが、魔法を使えないので一応平民である の使い魔であるが、しかしこの男は魔法に匹敵するほどの武器を扱えるのである。強さで言えば十分納得できるものであった。

そしてこれ以後もキヨウスケの魔法と、この世界の技術についての質問は続いた。どんな魔法があるのか、威力はどれくらいなのか、範囲はどういったものか。またはどんな兵器があるのか、e t c。しかしそれらは全て戦闘に使われるものについてだけであり、種類や分類については「どうでもいい、興味がない」といつて聞かなかつたあたりは彼らしい、といったところだろうが。

ともかくそれらの質問を通して、キヨウスケの銃の有効性を確かめて言ったのである。

ルイズはそれらの質問に丁寧に答えてやった。いつしかかなり時間が過ぎており、日も暮れてしまう。

しかしそれでもルイズの喜びは尽きなかった。

興奮に頬を染め、しかし表向きはつんとした態度をとりながらル

イズはキヨウスケに言う。

「……うん、よく分かったわ。あんたが十分使える使い魔だつてこと。ならいいわ。このまま私の使い魔として使われなさい！」

キヨウスケ（正確にはその武器である銃）が使えるということは分かったが、ただでさえ無礼な口を利いてくるのに、褒めでもしたら余計に付け上がらせるとルイズは考えたのである。また、キヨウスケに自分の立場を思い知らせることも思いついていた。心の中でむふふ、と笑いをもらった。

「でも忘れないですよ。私のご主人様なんだから。だから自分の立場を理解して、態度を改めて私の身の回りの世話を「断る」なんてよ！？」

また割り込まれた。しかもずいぶんと早い。まるで会話に割り込むことになれているようだ。

「言ったはずだ。使われてはやるが、仕えるつもりはないとな。それにお前を認めはしたが、まだ敬意を払うというほどでもない。だから、俺がそんなことをする理由はどこにもない」

「……ッ、まだそんなこというわけ！？」

「当たり前だ。それにこのことは先に言っておいたはずだ。文句を言われる覚えはないぞ。……さて」

キヨウスケはそこで立ち上がった。さっさとドアに向かう。

「な、何よ。どこ行くつもり！？」

「話をついたし、もうここにいってもやることはない。それに少し、やりたいことがあるんでな。……失礼させてもらう」

言つて、ドアを開けた。ルイズが声をかける暇もない。あつという間に外に出て行ってしまった。

ここ出でどうすんのよだの、あんたこら辺のこと知ってるの、などと言った言葉がルイズの脳裏に流れるが、相手は既にいないため結局形にもならず、ルイズはしばしの間呆然としていた。

しかし正気に帰るや否や、

「何よ、何なのよ、あのバカ使い魔——————！！！！！」

力いっぱい小さい体を震わせ、叫んだのであった。

## 鋼鉄の孤狼との再会、そしてキヨウスケの決意

キヨウスケは後ろ手でドアを閉め、廊下を歩いていく。途中、何か叫び声があった気がしたが、どこその野生の獣でも吠えているのだろうかと考え、気にも留めなかった。

何人かの生徒とすれ違うことも会ったが気にせず足を進め、そのまま外に出た。そしてジャケットのポケットからDコンを取り出して何やらキーを打ち込み、操作し始める。

すると、認証確認という文字が出て、新しい操作アイコンが現れる。キヨウスケは更に操作し、今度は解析中という文字が画面いっぱいに現れた。

しばらくの間、その場で立ち尽くす。彼は、確かめたいことがあったのである。そう、ずっと考えていた、『可能性』のことだ

(外れていてくれればいいが……)

祈るような気持ちで解析を待つ。そして、ついにその解析の結果が出たことを知らず文字が画面に出た。キヨウスケはすぐにその結果を呼び出す。

「……………!! ……やはり、か……………!!」  
唸り声を上げ、口を歪めるキヨウスケ。きつくDコンを握り締めた。

Dコン自体は一般にも広く販売されているものであるが、彼が持っているのはその一般に売られているものではない。軍で、しかもパイロットのみに支給される特別品である。

この特殊Dコンはより多くの機能を持っていることでも一般の物と違いを知ることができるが、パイロット用ということである一つの特異な機能がついていた。その機能が解析した結果、キヨウスケの世界のあるものがこの世界に来ていることを知らせており、彼の考えていた『可能性』の一端が現実のものになってしまったことを知らせていたのである。

（だとしたらこうしてはいられん。確かめなければ……！）

急いで周囲を見渡し、誰もいないことを確かめる。そして建物の影に飛び込み、誰にも見つからないようにして学院の外に出た。

（場所は……こっちか！）

Dコンがそれがある場所を示す。

そこはこの学院からかなり遠く、その上周囲は既に暗くなっている。だが、キヨウスケはそんなことになど構ってはいられない。

彼はDコンの示す方角に向かい、走り始めた。

……どれくらい走っただろうか。今は体力を考えて早足に切り替えているが、キヨウスケの周りには木々が生い茂ってそこは深い森と知れた。ずいぶんと学園から離れてしまっている。月が出ているようだがその光もあまり届いておらず、うっすらとした明かりしかなかった。

目的地の位置は分かるために方向で苦しむことはなかったが、暗さについてはどうにもできない。キヨウスケは一応、Dコンを持ちあげて下からその指示を見ると同時にディスプレイの光をライト代わりにしてこの状況をしのいでいた。だがそれも、Dコンの電源が切れてしまえば終わりである。

（下手をすれば、遭難ということにもなりかねんだろうな。だが、今は立ち止まっていられん……！）

しかしキヨウスケは歩みを止めなかった。これ以上進むことの危険は承知していたが、それよりもDコンの結果の確認をするという意思のほうが危険を避けて引き返すことを封じていた。

段々とDコンの指す場所に近づいてくる。思わず足元を照らしていたDコンの光を前に向けた。そのときだった。

「……！」

キヨウスケはそこにあるものに目を見張った。そして、何とも言えない複雑な表情を浮かべたのである。

「……そうか。お前も、来ていたのか」

彼はDコンを上にかざし、目の前にあるものを見上げた。

そこには何か大きな、いや、巨大なものが仰向けに横たわっていた。

ここからではその一部分しか見えない。しかしキョウスケにはその横たわっているものの全体像をすぐに思い浮かべることができた。それは真紅の巨人であった。ただし、これは生物ではない。その体は鋼鉄できています。

頭部には角があり、左腕には五連チェーンガン、右腕にはリボルバー拳銃の弾倉を付けた巨大なパイルバンカーを装備している。背には大型スラスタールとテストドライブを付け、体は無骨で装備の関係もあつてずんぐりとしており、その中でも肩は他の部分と比べても大きく肥大化していた。

なぜ彼はこの場所にこれがあることが分かったのか？ そしてなぜこつも簡単に、彼はこの横たわっている物の全体図を頭に描くことができたのだろうか？

しかし、それは簡単なことだ。

一つ目は、彼のもっているDコンについている特殊機能によるものである。パイロットにとつて自機の所在を知っておく事は何よりも優先される。しかし不幸が重なり、機体とはぐれてしまうこともあるだろう。そのため、機体には特殊な周波数を発信させる装置を取り付け、そしてDコンがその特殊周波数を解析し、所在を明らかにする機能を取り付けられているのである。

二つ目はもつと簡単だ。これは彼が命を預け、共に多くの激戦を駆け抜けてきた、彼の相棒とも言える機体だからである。全体像を知っていて当たり前なのだ。

彼は拭い切れない愛着と、なぜ来てしまったのかという苦悩を持つて、その名を口にする。

「……アルトアイゼン……」

自らの愛機との再会に、少しの間立ち尽くしていたキョウスケだった。

彼はアルト 略称としてこつ呼んでいる が自分と違う場所

に出現したことについてはあまり気にしていない。出現の座標が狂ったぐらいだろうし、むしろこのような人目につきにくいところに出てくれて助かったとさえ思っていた。それよりも機械とはいえ相棒とすら言ってしまうほどの機体であるため、無事だったことを喜ぶ気持ちの方がよほど大きいのである。

しかしその一方でこの世界のことを考えた場合、どうしてもその喜びはしほみ、代わりにこの機体をどうするべきなのかという考えに至らざるを得なくなってしまう。

(この世界に、お前は来るべきではなかった……)

ルイズから聞いた話　実は銃の有効性を計るといった理由の他にアルトに通じる威力を持ったものがあるかを調べる目的もあった。では戦闘用の魔法にも様々なものがあり、中には幻獣といった怪物を殺すための大掛かりな魔法もあるらしい。そしてそれは魔法の代わりとして使われる大砲といったような攻城、もしくは野戦兵器も同様だった。しかし、

(そんなものではアルトの抑止力にはならん。例え攻撃を受けたとしても、蚊の刺すようなものだ)

そう、これが問題なのである。

怪物といつてもルイズの話から察するに、アルトほどの大きさのものはいなかった。それに魔法の威力も聞いてみたが、せいぜいが歩兵用の重火器程度の威力である。その上大砲などの重火器と呼べるものは旧時代的な代物であった。これでは話にもならない。

そしてこれらの話から、ある結論が出る。

(アルト一機があればこの世界における大概の敵や軍勢にも勝ててしまう、ということだ。しかも武器も使わずに……)

ルイズの知らない魔法や技術があることや、実際の威力は試してみなければ分からないことも考えに入れておかなければならないが、それでもこの結論は大方正しいだろう。

(そしてそれは、おれの意味一つでこの世界を変えてしまえるというところでもある)

無論キヨウスケにこの世界をどうこうしようなどという考えは無い。しかしそれでも、彼が、そしてこの機体はその力を持っていることを世界の国々（トリスティン以外はまだ知らないが）が知ればどうなるか。

（必ずおれとアルトを確保しようと思き始めるに決まっている……）  
各国の軍事バランスを一瞬にして崩壊させてしまえるほどの威力がこの機体にはあるのだ。目の色を変えて自分たちを捕らえようとするだろう。特に自分の国の勢力を強化したいと思っている国なら尚更だ。そしてその争奪戦が引いては、戦争の引き金になってしまうことも有り得る。

これこそがキヨウスケが考え、恐れていた『可能性』である。

（……あの男なら喜んで戦争を引き起こそうとするだろうが、な）  
そこでふと、今は亡きある男の名前が頭に浮かんできてしまい、キヨウスケは思わず舌打ちをもらした。

その男は赤い髪を持ち、目尻を下に垂らしたその目に鋭さを宿していた。

キヨウスケにとって彼は宿敵とも言える存在であった。そしてその男が所属していたのは、『向こう側』と呼ばれるキヨウスケのいた世界の平行世界から来た『あの部隊』だ。彼らは自分の世界の技術と兵器をキヨウスケたちの世界に持ち込み、様々な勢力と手を組むことでキヨウスケのいた世界に戦火を広げた。

今ある現状は、ある意味ではそれと似通っている。キヨウスケにはそんな意思は無いが、この世界にキヨウスケとアルトアイゼンが存在すること、つまりその破格の強さ自体が、『あの部隊』以上の災厄となりえてしまうのだ。

それだけはなんとしても防がなくてはならなかった。では、防ぐためにはどうすればいいのか？

キヨウスケは腕を組み、考えを巡らせる。

（一番早く、そして安全な方法は破壊してしまうことだが……）  
真っ先に浮かんだのがこの案である。自分で機体を操ってもでき

るし、操作不能にさせるといふのならコックピットに入って拳銃の弾を計器類に叩き込めばすむ話だ。だが、キヨウスケは何故かそうする気にはなれなかった。

今までで分かるように、彼は寡黙で無表情ではあるが熱い感情を秘めた男である。しかし同時に兵士として高いプロ意識を持つ男でもあった。その極めつけとして、仲間を救うという大きな目的を果たすためにある事情で敵に回ったエクセレンを本気で殺そうとしたことが挙げられよう。ゆえに普段の彼なら、多少の名残惜しさは感じただろうがアルトを破棄することに躊躇はないはずなのだ。

キヨウスケは戸惑っていた。破壊することの有効性は十分に承知している。しかし、それを押し止めているのは他でもない。彼の頼みとする感覚、勘である。

(アルトを破壊することを考えるとどうも胸騒ぎがする。だが、なぜ……?)

そもそもその感覚自体あやふやなものである。考えても答えは出るわけが無かった。それとも、破壊することで何か良くない事態でも起こるといふのだろうか。

(……いや、考えているだけではどうしようもないか)

そこでキヨウスケは、まずはアルトの状態を調べることが先決と考えを切り替えた。アルトアイゼンはアインストとの決戦を経てそのままである。相当損傷しているはずであり、まず機体のコンディションを確認しておこうと思ったのだ。

キヨウスケは機体に近づき、よじ登って機体の胸の部分にあるコックピットを目指した。

(しかし……)

その途中、彼はアルトの様子に疑問を覚えた。

(今いるのは腹部辺りだが、そこから全体を見るかぎりは……いや、これは別に今考えるべきことじゃない。コックピットで確認すれば分かることだ)

そう思い直し、考えを断ち切った。

コックピットの近くに着いたキヨウスケはその周りに隠されたレバーを引き、ロックを開放する。プシュ、と空気の抜ける音がし、ハッチが開いた。そのまま中に潜り込んでシートに収まる。

そのとき、キヨウスケの胸には何とも言えない感情がこみ上げて来たのである。まるで、自分のいるべき場所に戻ってきたかのようにだった。一瞬、ふ、とキヨウスケは笑みを浮かべた。

(……これは懐かしさ、とでも言うのか?)

機動兵器にも感じるのかは分からないが、少なくともその類のものであることは確かだった。

キヨウスケはシートの前に据え付けられたコンソールを操作し、アルトを起動シーケンスに入らせた。

(しかし、ここから面倒なのだが……)

操作を続けていると、キヨウスケの目の前のモニターに「照合してください」の指示が出た。彼以外の者に使用されることを防ぐセキュリティである。ここから生体認証やパスコードなど、様々な工程を経なければならない。当然キヨウスケはこの機体の正式なパイロットであり、全てクリアできるに決まっているが、面倒なことには変わらなかった。

キヨウスケは手早く済ませるために、両の手をコンソールにつけた。……そのときだった。

「!?!? 何だ、これは……!!」

目の前で起きる不可解なことに、ついキヨウスケは声を出してしまった。コンソールに左手をつけたとたん、グローブに隠れた甲の部分が光り始めたのである。だが不可解なことはそれだけでは終わらなかった。グオン、という音。それに続きエンジンの引き起こす振動がコックピットを揺らし始めたのだ。

キヨウスケは驚きを隠せない。

(セキュリティ解除もしていないのに、起動シーケンスが始まっているだ?!?)

ハッチが閉まり、そして周囲の全周囲モニターなどの全ての計器

に光が点り始める。そして全ての計器が起動した後、「起動完了」の文字が前のモニターに現れた。今ここに、アルトアイゼンは完全に起動したのである。

あっけに取られるキョウスケ。しかし、不可解なことはまだ続く。(……何だ？ 俺の頭の中に、何か流れ込んでくる……)

そして流れ込んできたものを理解した瞬間、更なる驚愕がキョウスケに襲い掛かった。

「……冗談にも程があるぞ……」

シートにぐったりと体を沈みこませ、キョウスケは力なく呟いた。「……この世界には、機動兵器の状態を知る力まであるのか……？」ルイズは言っていた。使い魔には主人の目となり耳となる能力が与えられると。ならば、このことをぜひ聞いてみたかった。

頭に流れ込んできたのは、なんとアルトアイゼンの機体状態だった。それも機体各部の損傷率から武器の弾薬の残り、終には人工知能の劣化の度合いまで、ありとあらゆる情報がキョウスケの頭に流れ込んでくる。

しかも流れてくる機体の情報の中身もまた驚くべきものだった。機体のステータスがオールグリーンになっていたのである。

(機体の上を歩いている際、妙に傷がないと思ったが、このことだったのか……)

あまりの非常識に、もう呆れるしかない。

(しかしこれも、おれの服装が変わっていたこと、そしておれの所持品がその服に入っていたことの二つと同じように考えればいいのか……?)

いや、いささか規模や状況が違うように思うが、そう考えざるを得ないだろう。キョウスケの場合は服が変わったように、召喚の際の何らかの作用でアルトアイゼンの損傷は修復されたのだ。……無茶苦茶なことの上なかつたが。

だがキョウスケにとって、現状はいつまでも周りの状況に驚いている場合ではなかつた。事態が悪化していると彼は思えたのである。

キヨウスケはコンソールに置かれている左手を見た。甲にあるルーンはまだ光を放ち続けている。アルトの損傷が無くなっているのは違っただろうが、彼は機体状況が頭に直接流れ込んでくるのはこの左手にあるルーンのためとしか思えなかった。

(……これがルイズの言う使い魔の能力で、自分だけに与えられた能力だったら問題は無い。しかし、もしこの能力を持つものが他に大勢いたしたらどうなる……?)

まだルイズに戦闘に関する魔法を聞いたくらいで、この世界にはそれ以外どういった魔法があるか分からない。しかし、このような能力を持つものが他にいないという確証も無かった。ますます機体の破棄という案が魅力的に思えてくる。

キヨウスケは再び考えを巡らせた。

(現状では機体の破棄が最良の選択なのだろうが、しかし……)

今まで彼を助け続けてきた、自身の感覚も無視できなかった。苦悩するキヨウスケ。

そのうち彼は、モニターに映る二つの月に気付かないほどに、思考に没頭していった。

キヨウスケが苦悩していた一方、ルイズもまた苦悩していた。

しかし何故彼女が苦悩しなければならないのか？ そのためには少し説明が必要であろう。

(使い魔のくせに使い魔のくせに使い魔のくせに使い魔のくせに使い魔のくせに……!!)

今現在、彼女はもう手の付けようが無いほどに怒り狂っていた。

キヨウスケが出て行ったそのときは怒ったもののどうせ夕飯には帰ってくるだろうと思い、勝手なことをした罰としてご飯を抜いた彼の前で夕食をおいしそうに食べる姿を見せ付けるといふ罰を考え一応は機嫌を直していた。

しかし何ということだろう！ 彼は帰ってこなかったのである。

ご主人様ほつぱり出して何やってんのよと更に怒り狂いそうになるが、夜食時というものがあることを思い出し、そのときこそはと思っただろうじて機嫌を直した。間一髪であった。

しかしまたまた彼は帰ってこなかった。

そこでついに、ルイズは怒りの極地というものを発現してしまったのである。

髪は逆立ち、顔は怒りによってどす黒く染まっている。そしてくりくりと動いた愛らしい目は吊り上り、前述のことと合わせて鬼のような形相を作っていた。

今のルイズを見れば、大概の人間が裸足で逃げ出すだろう。それほどに怖い。恐ろしい。

そんな彼女が考えることは一つであった。

あのムツツリ使い魔に自分の立場を思い知らせてやる！！

明かりを消してベッドに入ったルイズは、見事示した主人の威光の前にひれ伏すムツツリ使い魔 キョウスケの特徴を見事に捉えたあだ名といえよう の姿を思い浮かべ、ぐふふと凄惨な笑みをもらしていた。

そのために彼女は考えられる限りのお仕置きを考えていた。で、これが苦悩していた理由である。……あほらしいといえればそれまでだが。

しかし今となって、ルイズはあの使い魔は只者ではないことを理解していた。物事に動じない異様な落ち着き様や周囲の状況をよく分析する判断力など、手強い事この上ない。だからこそ、考えを練る必要があったのである。そして夜を通して考えた結果、ついにムツツリ使い魔に有効と思われる三つのお仕置きを考えることに成功したのだ。

以下がルイズの考えた、使い魔に主人の威光を知らしめるためのお仕置き計画の全貌である。

その一 生きていく上で必要なことを与えない。早い話がご飯を抜かすのである。

単純だが使い魔は一夜の食を抜かしていると思われるため、一番有効な手と思えた。さらにこれからの脅しにもなる。

その二 部屋にいられてやらない。

これまた単純である。しかしこれも寝る所を確保できないという本能に訴える攻撃であり、眠れず辛そうな顔を晒したムツツリ使い魔を思い浮かべただけで笑みがこぼれてしまった。

その三 昨日中で壊した壁の修理費を請求してやる。

あの時は嬉しさのあまり気にならなかったが、ここまでの態度をとられたのだ。容赦してやる必要などもはや露ほども感じない。一生召使としてこき使ってやるのも良かった。

そして現在、これらの完璧（少なくともルイズはそう思っている）を以って、ルイズは使い魔を倒すことに氣勢を上げていたのだ。元の世界に帰るといふ目的がある以上、ムツツリ使い魔はこの学院に帰ってくることは確実なのだ。そのときこそが裁きのときである！

（見てなさいよムツツリ使い魔。許してくれって言ったって聞かないんだからねえ〜！〜！）

そして、運命の朝を迎えたのである。

使い魔がいつ帰ってきてきてもいいように寝間着を学院の制服に着替え、身支度を整えてドアの前に陣取る。お仕置きの際に見苦しい姿では格好がつかないというのがルイズの信条であった。

そしてドアが開き、一人の男が入ってくる。その男は見慣れない服装をし、頭には茶と金に分けられた髪をもっている。何より、ムツツリとしたその無表情は忘れようはずが無い。

ルイズは獲物がかったことを知り、そしてそれを屈服させるべく、緊張に身を硬くするのであった。

「すまん。少し手間取って今まで帰ってこれなかった……どうした？ 何をそんなに怒っている？ それに目の下に隈ができています」

部屋のドアを開け、夜が明けるまで帰らなかったことを謝りながら入ってきたキョウスケは、凄まじいまでに怒っているルイズの姿を見つけてそう言ってきた。その態度は平然としている辺り、キョウスケもなかなかのものである。

ルイズは自分の怒っているさまを見てもまるで気にしていない使い魔を見て、頭に上る血が増量しかけたが何とか自制した。何のためか昨日の夜からずっとお仕置きを考えていたのかを思い出し、余裕の無いところを見せれば即座に使い魔につけこまれると思ったのである。キョウスケにとっては言いがかりも良いところであるが。

怒りで震えそうになる声を押さえつけ、ルイズは使い魔に声をかけた。

「別にあんたが気にすることじゃないわ。それより、あんたは私に言うべきことがあるんじゃない？」

「……？ 何のことだ」

ルイズは腰に手を当て、ふふんと胸をそらした。

「あんた自分で私の使い魔になるって言ったわよねえ。なら私がご主人様だつてことも分かっているわよねえええ」

怒る彼女の声は不気味で、まるで地獄の底から響いてくるようであった。

「なら何で私のことをそんなにぞんざいに扱うのかしら。使い魔の自覚まるでないっいたらありやしない。だからね、私あんたに罰を与えなきゃならないの」

いよいよだ。このむつつり使い魔が自分の前にひざまずく時が来たのだ。今度は喜びによって震えそうになる声を押さえ込んでルイズは続け、一つ目のお仕置きを高らかに宣言するのだった。

「言い渡すわ。あんたは今日全ての食事は無しよ！ 昨日から何も食べて無くてひもじいでしょうけど、主人に対して無礼をしてきた当然の罰として受け止めなさい！」

言い終えた後、ルイズはたまらない充足感が体に満ちてくるのを感じていた。これでこのムツツリ使い魔がひれ伏すところを見ることのできるのだ。さあひれ伏せ、崇め立てろ！

「……別に構わんが？」

(そうそうそうやって……へ?)

「……今なんつったの？」

「別に構わんといった」

まるで動じた様子も無く、使い魔が答えてきた。

ルイズは一瞬呆然とするが、すぐに体勢を立て直した。そうだ、これは強がりだ。そうに決まっている。

「……っ、強がりと言ったって無駄よ。あんた、出て行っただけ帰ってなかったじゃない。お腹すいてんでしょお？」

「……すまんが強がりでもなんでもない。食事はこれがあるからな」  
言ってまたポケットに手を突っ込む。そして何か小さな棒のようなものを取り出した。

「レーションとってな。おれたちの世界での保存食のようなものだ。見ためは小さいが、これ一つで一食分の栄養を取ることができ」

(〜ッ！ そんなものまでそっちの世界にはあるの!? 反則もいとこるじゃない……ってちよつと待った!)

「……ふう〜ん。でもほんとに構わないって言っっちゃっていいのかしら? そんなもん、あんたがいくら持っているのかしらないけど、食べつくしちゃったら終わりじゃないの！」

さあ言え、今度こそひれ伏せとルイズは念じる。しかし現実残酷だった。

キョウスケは呆れたような目でルイズを見た。

「……ご主人、おれがなんだか忘れたのか」

「何よ、今あんたが何かなんて関係……あ……」

「思い出したようだな。兵士だ」

兵士という職業上、不測の事態に備えて様々なことを訓練するのは当たり前である。それはルイズの世界でも変わらない。勿論キヨウスケもパイロットとはいえ、機体に何かあつた際の備えとして士官学校時代や所属部隊における訓練でサバイバルにおける知識や技術は身に付けていた。

つまりキヨウスケにとつては食事を抜かされても外で調達すれば良いだけで、まったく意味が無いのである。

ルイズはうくと唸り、心の中で地団太をふんだ。

（何てヤツなのよ、こいつ！ 次から次へと私に逆らつて！）

誰も逆らつていない。ルイズの完全な逆恨みである。

（これじゃどつちが主人か分からないじゃないの！ でもまだ手はあるわ。次の……あれ？）

そのとき、今頃になつてだがルイズはキヨウスケが右手にトランクを持つていることに気付いた。

「ねえ、ちよつといい？ あんたの右手に持つてるトランクみたいな、なに？ 何か金属でできてるみたいだけど」

「……ああ、これが。昨日出て行ったのは、これを探すためだ。召喚される際おれが持つていたはずだったが近くに無かつたんでな。手間取つたが、何とか見つけられた」

そういつてキヨウスケは腰を折つてトランクを下に下ろした。

「詳しい説明は省くが、この中にはおれの世界の武器が入っている」「！？」

「他の人間にとられることも考えられる。だからこそ早めに回収しなければならなかつた。だが、既に回収はすんだ。……あと、ルイズに頼みがある」

キヨウスケはルイズを見上げた。

「これから魔法の授業があるらしいが、俺もそこについて行っているか？」

「……何で？ まああなたは使い魔だし元から連れて行くつもりだったけど、どうしていきなりそんなこと言うの？」

「……魔法に少し興味が出てきてな。戦闘用と帰還のための魔法以外には何があるのか、そしてどんなことができるのか知りたくなっただ」

この言葉をルイズは疑問に思った。この男は昨日質問してきた際、戦闘に関することしか興味を示さなかったのだ。それ以外は本当にばっさりという擬音のように「興味が無い」で済ませていたのである。しかし今は熱心にそのほかの魔法のことについて聞いてくる。この態度の豹変はなんなのだろうか？ しかし、次の言葉がルイズの疑問を打ち消した。

「考えてみれば俺はまだまだこの世界のことについて知らないことが多すぎる。それは使い魔の役目を果たす際も、おれ自身としても危険なことだ。だからこそ準備しておきたい」

「え……それってつまり……」

「言っただろう、使い魔として使われてやるとな。考えてみれば、戦闘に使われるもの以外でもお前を危険に晒すものもあるかもしれない。そのためにもこれが、」

使い魔がトランクを視線で示した。

「必要だった。そしてそういった手も防ぐための知識を仕入れたいだけだ」

ぶつきらぼうな言い方は変わらなかったが、目の前の男は自分を守ると、遠回しであったが言ってくれたのである。そしてその手段を探すために昨夜出かけ、今は知識を集めようとしているのだ。

ルイズはまたしても顔が赤くなってしまい、すぐに俯いて頬の赤さを隠した。自覚はしていなかったが、彼女はこういうストレートな表現に弱いのである。

（や、やだ。何で頬が熱くなるわけ？ ただこいつは使い魔として最低限の役割を果たすって言われてるだけじゃないの）

しかし頭に浮かべる言葉とは裏腹に、ルイズの頭には昨日のキヨ

ウスケの笑みや自分を褒めてくれた言葉が浮かんできてしまった。昨日の夜は勝手に出て行ったと思っていたが、きちんと自分のことも考え、そしてそのために行動してくれたのだ。

(ばか……そんなことされたら怒るに怒れなくなっちゃうじゃないの……)

ルイズは自分の中の怒りが急速になくなっていくのを感じていた。その代わりにルイズの胸にこみ上げてくるのは、守ってくれると言われた事への喜びである。

しかし平民に褒められたくらいで嬉しくなるなんて思う気持ちも一方ではあり、悟られたくないと思ってしまう。難儀なルイズのプライドであった。

(態度も口調も何も直していないし、お仕置き案も二つ残ってるけど……こんなんじゃ怒るに怒れないわ。これは次に使い魔が今回のようなことをやったら、するようになしよう)

そう思い直した。そして少しだけ顔を上げ、いかにも仕方なさそうに言い方でキョウスケに話した。

「はあ、仕方ないわね。そういった事情があるなら許してあげるわよ。でも今度からはきちんと理由をいつてから出るようにしてよね」  
そのルイズの言葉にキョウスケは笑みを浮かべた。

「……了解」

それを見てしまい、また俯いた。頬の熱さも蘇ってきてうくと唸るが、どうしようもない。

その後、今日の予定をキョウスケに話したルイズは授業の用意を整え、ドアを開けて部屋を出たのである。

しかし、知らず気分が浮かれていたからか、ルイズは気付かなかった。

ルイズの後ろに控えたキョウスケが、彼女の背中に向かって謝罪していたことに……

ドアに向かうルイズの背を見て、キョウスケは頭を下げていた。

(こついうのは好きじゃないが、今はそうも言っていられん……) キヨウスケはルイズの貴族という立場を利用し、魔法の授業を受けさせてくれるように頼んだことに痛みを感じていた。……あくまでキヨウスケはルイズの立場を利用しようとしていることに、である。ルイズ本人も自覚していないが、キヨウスケに何かしら好意に似たようなものを持っているとはまるで考えてもいなかった。そういう鈍い点においては、二人とも同じかもしれない。

ともあれ、彼がこつという手段に出るといっものは普通なら考えられないことであり、よほどの事情があることは容易に想像がつく。そしてその事情は無論、彼の愛機のことだ。

あの後、結局キヨウスケはアルトを破壊しなかった。危険を承知の上で、自分の感覚を信じることに決めたのである。しかし万が一のことを考えてやれることはやっておいた。

まず誰かに見つからないよう機体に装備されていた迷彩シートを被せておいたし、その上から森の偽装もとりつけた。そして機体に装備された生体センサとDコンをデータリンクさせ、アルトに近づいてくる人間がいるかを分かるようにし、最後にあるコードを直接、もしくはデータリンクしたDコンを通して打ち込めば、即座にアルトが自身のコックピットにバンカーを打ち込んで自爆するというプログラムを組み込んだのである。

(……ラミア。お前の覚悟を見習い、コード名を付けさせてもらっただ)

心の中で仲間を助けるために自爆した仲間呼びかけた。

そしてキヨウスケ自身も、この世界で使い魔として生きていくために、魔法使いや怪物との対決に備えるために、何よりアルトをこの世界の混乱の原因としないために、アルトからルイズに見せたトランクを持ち出してきた。

ルイズには中身を見せていないが、そこには様々なものが入っていた。包帯や止血剤などの医療セットや非常食としてのレーション、そして一番重要なのが、ルイズに言った通りアサルトライフルやア

ーミーナイフなどの武装類、そして弾薬類である。

このトランクの名称はサバイバルキットという。機体を放棄するような事態になった緊急時への対応策として備えられているものだ。機体がなくなつた時点で搭乗者が命を落としている場合も多いため役に立たないだの費用の無駄だのと囁かれ続けていた代物だが、今の状況ではこれほど心強いものは無かつた。弾の問題もあつたし、予備があるのは非常に助かる。

（これではばらくは弾の心配をしなくてすむ。むしろ問題は、この世界にある力の方だ……）

キョウスケは左手を見た。そこには使い魔の印であるルーンが刻まれている。この世界に機動兵器のようなものがあるとは思えなかつたが、しかし実際にアルトのセキュリティを突破して起動させてしまったのだ。警戒しないわけがない。だからこそ……

（この世界にはどんな魔法、力があるのか、知らなければ対策を立てようがない。そのためにも魔法の種類から使い魔の能力まで、隅々まで調べなければならん……）

そう、ルイズに授業を見せてくれと言つたのはこういうことだ。魔法などの、この世界の力の知識を得ようというのだ。

元から帰る方法を探すためにルイズの使い魔であることを利用してここにいるつもりだったが、立場とはいえルイズ本人を利用するというのは気分が悪かつた。それに事情が事情だけに、話すこともできない後ろめたさもある。

（その代わりではないが、ルイズ、お前を守ることに俺は全力を尽くす……）

今回のことも考えるとさすがに申し訳なく、また自分がいることでアルト絡みの騒動に巻き込んでしまう可能性もあつた。今までも一度言つた以上貫き通すつもりだったが、改めて決意を固めなおす。（使い魔としてな……！）

そして身支度を整えたキョウスケは、ルイズを追って部屋から出た。

## 鋼鉄の孤狼との再会、そしてキヨウスケの決意（後書き）

ついに出てきてしまいました。・・・アルトアイゼン（リーゼ）！  
まともに活躍させたらとんでもないことになるのは目に見えている  
ので、絡み手を使ってこれから活躍させたいと考えています。あと  
Dコンには少し独自設定を加えさせてもらいました。  
最後に、こんな無茶なことに付き合ってくださいる方々、本当にあり  
がとつございます。

## 『ゼロ』の由来

キョウスケはルイズと一緒に部屋を出て、彼女の後をついていった。これから食事に向かうらしい。

その途中の廊下を歩いていると、廊下の角で一人の女子生徒と会った。

燃えるような赤い髪と褐色の豊満な肉体を持ち、魔法学院の征服もブラウスの上の二つのボタンを外して胸元を見せて健康的な色気を周囲に放っていた。

その女子生徒がルイズに声をかけてくる。

「おはよう、ルイズ」

嫌そうな顔をしてそちらの方を向くルイズ。そして顔と同様、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう、キュルケ」

「あなたの使い魔ってそれ？」

キョウスケを指差して言う。その一方で目はじろじろとキョウスケを見ていた。

ルイズは一瞬キョウスケに目をやって、

「そうよ」

と答えた。

「あつはつは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

お腹を抱えて笑う。

「『サモン・サーヴァント』で、平民呼んじゃうなんてあなたらしいわ。ゼロのルイズ」

ルイズの白い頬にさつと朱がさした。力が分かっててもキョウスケが平民ということは変わりがないため、反論のしようがないらしい。ただ、

「うるさいわね」の一言をいった。

その間手を握りしめて震えている辺り、キョウスケの力を喋りた

くて仕方ないのはい目で分かる。しかしルイズも喋っても誰にも信じてもらえないだろうし、むしろ何話しているんだと思われるだけであろうことは分かっていたようだ。キヨウスケの持っている力はこの世界では異質すぎるため、実力を見せる実戦と言う機会が来るまで我慢するしかないのだ。

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って一発で」  
「あっそ」

「どうせ使い魔にするんならこういうのがいいわよねえ」。フレイム」

首を横に向け、勝ち誇った様子でキュルケが何かに呼びかけた。すると廊下の角からのっそりと、赤い肌をした巨大なトカゲが現れた。

キヨウスケは鋭く目を光らせた。

(……これが普通呼び出される使い魔か……)

キヨウスケはじつとキュルケの使い魔、フレイムを見る。それに気付いたキュルケが声をかけてきた。

「あら？ もしかしてあなた、火トカゲを見るの初めて？」

「……ああ、初めてだ」

そっけなく言っただまま、しかしキヨウスケは視線をフレイムから外さない。

怪訝に思ったのか、キュルケが聞いてくる。

「どうかしたかしら。そんなにこの火トカゲが珍しいの？」

「……いや、確かに珍しいが、俺が気にしているのは違う。……どういった力をもっているのかが知りたいだけだ」

「え？ どういうこと？」

なぜそんなことを気にしているのかが分からず、キュルケが間の抜けた声を上げる。

しかしルイズははっとして、そして青くなった。さっきの発言が何を意味しているのかを読み取ったらしい。すぐさまキヨウスケに近づき、耳打ちする。

(あんた何考えてんのよ！ キュルケに喧嘩売るつもり！？)

(……いや、せっかくの機会だからどれほどの力を持っているのか、知っておくのも悪くないと思ったのでな)

(でも相手に喧嘩吹っかけるようなことしないでよ！ あんたのその考えは、まあ、その、嬉しかったけど、だからって時と場合、あと相手によるわ！)

キョウスケは知らないが、彼女は同学年の中でかなりの力を持っていた。一泡吹かせてやりたいという気持ちはあったが、いきなり彼女と戦うのはいくらなんでも早いとルイズは考えたらしい。

(しかしまだ実戦で試していないこともある。丁度良いと思うが……)

(とにかくだめのものはだめ！ それに早く行かないと！ このままここにいたらばれちゃうわ！)

ちらりとキュルケを見て、未練がましくフレイムを見ているキョウスケを引きずって慌てて去っていくルイズ。

「……なに、何なわけ？」

いきなり取り残されたキュルケは、フレイムと共に首を傾げていた。そして少し時間が過ぎたあと、ルイズにフレイムの自慢をする機会を失ってしまったことに気付くのであった。彼女が悔しかったのは言うまでもない。

なぜかルイズはキョウスケと一緒に学院の食堂に入らないことに残念そうな表情を浮かべたがすぐにそれを消し、待つてなさいといつて建物に入つていった。

それを見送ったキョウスケであるが、その後彼は暇をもてあましていた。

(どうしたものか……)

トリステイン魔法学院の食堂は学園の一番背の高い真ん中の本塔の中にあつた。しかしキョウスケは既に食事を取っており、中に入る必要がない。内装を見ることにも興味がないため外で待つている

ことに決めたのだが、そこで手持ち無沙汰になっていることに気付いた。

今現在、キョウスケは食堂の壁に寄りかかって空を見上げていた。それぐらいしかすることがなかった。肉体を維持する上では欠かせないトレーニングをするのもいいかもしれないが、昨夜学院とアルトの出現した場所の二つを往復した疲れが溜まっているのか、どうも乗り気がしない。

(次の授業が始まるまでこのままか? …… 退屈だな)

こんなことだったら興味がないうまでも食堂の見学を試みるのも悪くなかったかもしれない、そう思ったときだった。

ふと、建物の影から視線を感じた。

(何だ? …… おれを見ている?)

その方向には首を向けず、視線に含まれているものを探る。敵意は、ないようだが……

(アルトがらみ……いや、いくらなんでもそんなことはないか)

Dコンの反応も現在無いし、尾行ならもつとうまく気配を隠しているはずだ。あからさまに分かれては意味がない。

(しかし、いつまでもこうしているのもな…… 声をかけてみるか)

「おれに何か用か?」

首を向け、声をかける。すると「きゃっ!」という声と共に一人の少女が陰から転がり出てきた。

メイド服をした素朴な感じの少女であった。カチユーシヤで纏めた黒髪とそばかすが可愛らしい。カチカチになってキョウスケに声をかけてきた。

「す、すみません! なんか学生の方にも見えませんし、しかも見慣れない服を着てますし、一体誰なのかなと思ってます!」

「……そういうことか。おれが何者か気になった、というわけか」

「いえ、あの、そうではなくてですね」

わたたと手を振っている。その様子にキョウスケはおかしくなった。しかし、このままほうっておくわけにもいかない。

「別に気にしなくていい。今の場合、こんな格好をしているおれの方がまずいんだろっしな」

そういつて安心させてやる。メイドは顔を赤く染め、俯いている。恥らっているようだった。

「す、すみません。じろじろ見ちゃって。でも、気になってたのはあなたの格好を気にしていただけじゃないんです。昨日、ミス・ヴァリエールが平民の使い魔を召喚したって聞いたものですし、見慣れない顔だったから……」

その話を聞いてキヨウスケは成程と思った。見慣れない服に見慣れない顔を見て、もしかやと思つて気になつたらしい。

「そういうことなら話は早い。いかにも、おれがその使い魔だ。……しかし、まだ呼び出されて一日だぞ？ そんなに早く話が広がるものなのか？ それにお前は、」

そこでキヨウスケは、もう一度少女の服装を見た。

「魔法使いには見えん格好をしている。貴族でもないのに、なぜそんな話を知っている？」

「ああ、それは私達がこの学校に奉公している者だからですよ。貴族じゃないけど学院にいる身ですし、けっこう貴族の方の話が聞こえてきちゃうんです。こんな話なんて今まで聞いたことありませんし、平民の中でもけっこう噂になってますよ」

そう言つて、初めて少女はにっこりと笑つた。その屈託のない笑みに、キヨウスケも微笑みを浮かべる。場が和んだ。

「そうか。一躍有名人だな、あいつは……」

「あ、いえ、そうでもありませんよ。まだ呼び出されたばかりで知らないでしょうけど、ミス・ヴァリエールって私達平民の間でも……」

そこまで話したときだった。

「使い魔、授業行くわよ」

食堂の入り口辺りから、主人の声が聞こえてきた。食事が終わつたらしい。キヨウスケは肩をすくめた。

「主人のお呼び出しだ。……すまん、話の途中で」

「いえ。気にしないで下さい。……シエスタといます。これから  
もよろしく願います」

「キヨウスケ・ナンブだ。こちらこそ頼む」

変わったお名前ですね、でも悪くないです。そう言ってシエスタ  
は走っていった。

それを見送ったキヨウスケも、ルイズの方に向かって歩いていく。  
食堂の入り口で待っていたルイズは仏頂面で口を尖らせていた。

「今までどこに行ってたのよ。あんたが言い出したんでしょ、魔法  
のことが知りたいって。うるついてちゃだめじゃない」

「すまん。すこし退屈だったんでな」

別にシエスタのことを話す必要も無かったため、こう言ってごま  
かした。

何やってんのよと言いながら、ルイズはキヨウスケを授業の行わ  
れる教室まで連れて行った。

魔法学院の教室は大学の講義室のようなりだった。講壇を中心  
に半円状に階段が設えられており、その階段にイスと机が配置され  
ていた。既に生徒で賑わっている。

ルイズとキヨウスケは教室の中に入り、イスの一つに座ろうとす  
る。すると教室のあちこちで、くすくすという笑い声が上がった。

キュルケのときと同じく、やはりルイズは拳を握ってそれに耐えて  
いた。そんなルイズが少し不憫になり、キヨウスケはルイズの肩に  
手を置いて「気にするな」と小声で言っただけだった。

ルイズが首をキヨウスケに向ける。

「常に怒っていたのでは疲れるだけだ。おれとしてはさっき実力を  
見せたいところだったが、それでもいざれその機会は必ず来るだろ  
う。笑いたい奴には笑わせておけばいい」

「……そうね」

ルイズは不承不承ながらも頷いてくれた。首を元に戻し、肩の力

を抜いて席に座る。ルイズが落ち着いたことを確認したキヨウスケも続いて座ろうとすると、ルイズが何か言いかけたが、結局何も言わずキヨウスケの座るままに任せた。

キヨウスケは座ったまま教室の中を見回した。するといるわいるわ、マンティコアなどのファンタジーそのままの不思議な生き物が跋扈していた。しかし、キヨウスケにとって気になるのは……

（おれと同じような能力を持ったやつがいるかどうか、だ……）

キヨウスケは腕を組む。早いうちにこの力の正体を探り、対策を練らなければならない。そうしなければおちおち帰る手段も探していられないだろう。授業だけでは足りない可能性もあるため、この図書室へ行って独自に調べることになるかもしれない。

そう考えていると、扉が開いて一人の中年の女性が入ってきた。

ふくよかな頬をしており優しそうな雰囲気をしている。どうやらあれが先生らしい。

（そして魔法使いの先生は当然、魔法使いか）

服装からしても分かった。紫色のローブに茶色の帽子をしている。どう見ても魔法使いとしか思えない。

その先生は教室を見回すと、満足そうな声を上げた。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」  
そこでシュヴルーズは、ルイズと隣にいるキヨウスケに目をつけた。

「おやおや、換わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズとぼけた声で言う。すると教室中がどっと笑いに包まれた。それにキヨウスケが眉をひそめる。

キヨウスケ自身は気にしていないが、ルイズのことを考えると少しばかり不快な気分になった。さっき彼女に気にすると言ったばかりだが……

（……ルイズは時と場所、相手を考えろといったが、今ここで使っ

たほうがいいんじゃないのか?)

思わず手が常備している拳銃に伸びる。ここでこれの威力でも見せれば嫌が応でも黙るだろう。しかし、そんな考えはルイズを見て消えた。唇をかみ締め、先ほどから言い返したくて仕方がないのを必死に我慢していた。キヨウスケは侮られている彼女自身がここまです我慢しているのに、言った自分が手を出してはまずい。

舌打ちしたいのを抑え、拳銃から手を離れた。しかし、この雰囲気は気に入らないので、

「はははは……ヒ!?」

主に笑っていた奴に殺気を飛ばし、黙らせた。隣のルイズに気付かれないよう慎重に、ではあったが。

彼らは何があつたのかときよるきよると周りを見回す。

「そこまでにしなさい。貴族が相手をバカにするなんてこととしてはいけません」

しかしそこに厳しい顔をしたシュヴルーズの注意が飛び、彼らの動きを止めさせた。そして更に杖を振り、彼らの口にどこから現れた赤土の粘土を飛ばして口を封じる。変な魔法もあつたものだとキヨウスケは考えた。

「そのまま授業を受けなさい」

そしてシュヴルーズは授業を始めた。

キヨウスケは机に身を乗り出し、聞きやすい体勢をとった。

授業は滞りなく進み、キヨウスケはこの世界の魔法使いはメイジと呼ばれていること、そして魔法の種類についてと錬金という魔法について学ぶことができた。

その中でも、キヨウスケはこの錬金というものに驚かされた。目の前にいるシュヴルーズというメイジは石ころを真鍮に変えて見せたのだ。

(完全に物理法則を無視している……昨日の『フライ』や戦闘魔法、さっきの赤土もそうだが、これはその上をいくな)

詳しいことは分からないが、物質そのものを変化させることには

凄まじいエネルギーが要るということぐらいは理解していたキョウスケである。目の前の光景がどれほど非常識かというのは理解できた。

（しかし、もし物質を変化させることができればアルトもその応用で倒すこともできるかも知れんな……）

そこで思いついたのがこの考えである。アルトの元々の装甲この世界の武器や魔法などまるで効かないだろう。しかし、装甲を違うものにしてしまえば攻撃が通じるようになるかもしれない。

（そんな機会はないと思うが、おれがアルトを動かす際は気をつけようかも知れん）

授業が中盤まで終わったところで、一つキョウスケは分からないことがあった。スクウェアやらトライアングルという言葉が出てきたのだが、その意味が分からない。隣のルイズに小声で話しかけるするとそれはメイジのクラスで、最下級がドット、次がライン、そしてトライアングルとクラスが上がることに『点』が増えていくこと、そして足せる属性が増えてより強力な魔法が使えるようになることを教えてくれた。それがまずかった。

「ミス・ヴァリエール。授業中の私語は慎みなさい」

シュヴルーズに注意されてしまったのだ。すぐに会話をやめ、ルイズはうな垂れた。しかし、次のシュヴルーズの言葉が彼女を困惑させた。

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょ

う」

「え、わたし？」

「ええ、そうです。ここにある石ころを望む金属に変えて御覧なさい」

しかし、ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじしている。

キョウスケは怪訝に思い、「どうした？ 行ってくればいいだろう？」と促した。

「ミス・ヴァリエール！ どうしたのですか？」

シュヴルーズが再び呼びかけると、生徒の一人、見ればキュルケだった、が困った声で言う。

「先生」

「なんです？」

「止めといた方がいいと思いますけど」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケはきっぱりと言った。教室のほとんどが頷いている。

この様子にキョウスケはますます怪訝に思った。危険とはどういう意味なのだろう？ それに彼らの様子はまるで……

（何かを、恐れている……？）

そうキョウスケには思われた。キョウスケに疑問を残したまま、シュヴルーズと生徒達のやり取りは続く。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ、でも彼女が努力家ということは聞いています。さあミス・ヴァリエール。気にしないでやって御覧なさい。失敗を恐れていては何もできませんよ」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。しかしルイズは立ち上がり、

「やります」

と緊張した面持ちで言った。つかつかと教壇へと歩いていく。そして教壇の前に立ったルイズにシュヴルーズはにっこりと笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

ルイズはこっくりと頷く。そして呪文を唱え始め、杖を振り下ろそうとする。

「！」

そのときだった。キョウスケの頭の中に、まずい、という声が響き、それに従って体が動いた。一気に教壇のあるところまで飛び降り、受身を取ってすばやく立ち上がる。そして杖を振り下ろしたルイズとシュヴルーズに飛び掛って押し倒し、体の下に隠して庇った。直後、石ころが爆発を起こした。

キョウスケの背中に砕けた木片やら石片が当たり、使い魔たちは爆発に驚いて暴れた。教室が阿鼻叫喚の大騒ぎになる。

そのときルイズがキョウスケの下から這い出してきて、キョウスケに文句を言おうとする。

「もう！ いきなりなにすんの、よ……」

しかし辺りの有様を見て自分が何を引き起こしたのかを悟り、後半は声が小さくなる。だがルイズはさすがだった。こほん、と一ツせきをつき、済ました顔でここのたまったのである。

「ちよつと失敗したわね」

「ちよつとじゃない！」「何がちよつとよ、ゼロのルイズ！」「いつも失敗しまくってるくせに！」「いつだって成功の確率、ゼロじゃないか」

即座に始まる反論の大合唱。キョウスケは納得した。

(……なるほど、『ゼロ』というのはそういうことか……しかし……)

そこでキョウスケは一つの疑問を抱いた。立ち上がり、いまだ呆然と座り込んでいるシュヴルーズに声をかけた。

「……すみません、シュヴルーズ先生。一つ質問してもいいでしょうか？」

「……え？ は、はあ、どうぞ……」

なぜだか頬が赤い。キョウスケ本人はまるで気にも留めていないが、彼も十分美男子といえる部類に入るのである。そんな人間にいきなり飛び掛られ、年甲斐もなく動揺してしまったシュヴルーズは相手が平民であるにも拘らず先を促してしまった。しかし、続くキョウスケの質問に戸惑いを隠せなかった。

「おれには良く分からないんですが、魔法というのは失敗すると爆発するものなのですか？」

「え……」

キヨウスケはわざと声を大きくし、生徒の連中にも聞こえるように言っただけだ。

「生徒の方々は失敗と聞いていますが、確かに錬金はなされていないという意味では失敗でしょう。だが爆発は引き起こされています。普通錬金というものは失敗すると爆発が起きるのですか？ もしそうならなぜ爆発が起きるのか、原理をご教授していただきたい」

この質問にシュヴルーズが、そして騒いでいた生徒全員が黙り込んだ。ルイズも驚いた顔をしてキヨウスケを見ている。

キヨウスケは黙った生徒達を見回してふん、と息をついた。

（シュヴルーズはともかく、奴らはなぜこうなるのか知ろうとせよ、単に失敗と決め付けてルイズを馬鹿にしていたという訳か。……呆れるな）

心の中で侮蔑の言葉を吐くキヨウスケ。

その時、丁度授業終了の鐘が鳴った。キヨウスケの質問に戸惑い、答えを持っていない彼らにとってそれは救いの音色のようにも聞こえたのだ。

## 牙を剥く狼

「その……さつきはありがとう」

「……ん？ 何のことだ？」

授業が終わり、休み時間となった教室にはキヨウスケとルイズの二人が残っていた。そして目をそらしつつぼそぼそとした声であったが、ルイズはキヨウスケに礼を言う。

「さつきの授業のことよ。あの爆発の起きたとき庇ってくれたときと、皆に私の爆発が何で起きるのかって聞いてくれたときの二つ。

一応、礼を言っておくわ」

キヨウスケは思い出し、ふ、と笑った。

「そのことか。……あれはおれが気になったから言っただけだ。礼を言われる覚えは無いぞ」

「それでもよ。それに、考えてみれば私も含めて皆、あの爆発を『失敗』っていうだけでなんでそうなるのかなんて考えたこと無かったわ。それを気付かせてくれたっていうだけでも感謝していいわ」

ルイズがキヨウスケを見上げ、はにかみながらも笑う。その意外な可憐さにキヨウスケは驚いた。思わずそれが顔に出そうになったほどである。

(意外と映えるものだ。……油断ならんな)

内心ではまだ驚きが残っていたが、勤めて無表情を作ってルイズに応じた。

「……そうか。お前がそう考えているのなら、それでいい」

「うん、そうするわ。……でもね、もう一つ言いたいことがあるんだけど……」

そこでルイズが急にジト目になった。

「もう少しご主人様を手伝おうとか言う気持ちにはならないわけ……？」

先ほどからルイズはしゃがみこんで床を拭いている。先ほどの爆

発の責任を取って教室の清掃を任されたのだ。で、その問いに対してキヨウスケはいつもどおりに「ない」とぼつさり断るのだった。

「……やっぱりお仕置きしておいた方がいいのかしら……？」

暗いオーラを放ちながらルイズが呟いたのを、キヨウスケは知らない。何とも幸福なことである。

そして、ようやく掃除が終わった頃には昼になっていた。

「あー、それにしてもいつも馬鹿にしてる連中の困った顔が見れてスツとしたわ！」

「……よかつたな、ご主人」

「そりや当然よ！ まあ私自身もなんでこうなるのか分からないまま放つといたけど、でもこれからはああ言って反撃できるわね」

そういうキヨウスケとルイズは学院の中庭にあるカフェテラスに向かっていた。昼食のためである。

ルイズは掃除の後の開放感からか、上機嫌だった。キヨウスケに抱いた暗いオーラが影を潜めているあたり、日ごろルイズを馬鹿にしている生徒達に一泡吹かせてやれたことがよほど嬉しいらしい。手や足を大きく振って体全体でそれを表している。

「だいたいそうよね。爆発が起きるのなんて普通に失敗するんじゃないし、何か別のことが引き金になって起こってるって考えることもできるわよね」

ふむ、とキヨウスケが頷いた。

「……恐らくその考えであっているだろう、ご主人。しかし、その別のことについて何か心当たりはあるのか？」

すると大振りな手足の動きがおさまった。そして歩きながら、ルイズはうーんと考え始めた。

「……そうね。あんたの言ったとおり、魔法自体は発動しているみたいだから完全に失敗って言うわけじゃないのは確かみただけ、でも魔法が発動する時のリズムみたいなのはなかったし……」

ぶつぶつと呟きながら歩いている。どうやら考え込んでいるようだ。周りのことなど目に入っていないようだし、今何を話しかけて

も無駄だろう。

キヨウスケはルイズを放っておき、周りを見渡した。その時、ルイズたちは既にカフェテラスについていた。

足つきのテーブルやイスが芝生の上に設置されており、それらの席に座って生徒達が食事と談笑をしている。その周りには給仕と思しきメイドたちが駆け回っていた。

見れば、その中には授業前に話したシエスタもいる。キヨウスケがシエスタを見ていると、シエスタもこちらに気付いたらしい。軽く手を振ってきた。

そこで、一つのハプニングが起きた。

手を振るのに気をとられ、シエスタは談笑していた生徒の一人とぶつかってしまったのである。

「す、すみません！ よそ見をしていました！」

すぐにシエスタはその生徒に謝った。その生徒はきざったらしくその金色の巻き髪をかきあげ、

「ふん、気をつけてくれたまえよ」

と尊大に言う。自然その生徒にキヨウスケの視線が移る。そしてその生徒を見て、キヨウスケは一瞬、何だあれはと思ってしまった。フリルのついたシャツを着込み、バラをポケットに挿している。

顔も整っているといつてよいのだろうし、そのままいれば大層見栄えのあったことだろうが、その軽薄なきざったらしさが全てを台無しにしていた。その気取った喋り方もどこか滑稽に聞こえるほどであり、道化としか思えない。

（だが自覚が無くあれほど板についていないとなると、むしろ感心すら覚えるか……ん？）

その時、キヨウスケはその生徒のポケットから何かが落ちたことに気付いた。近づき、拾い上げてみる。それはガラスの小壘であった。中に紫色の液体がゆれている。

（何だこれは……いや、詮索する必要も無いか）

中に何が入っているようにと自分には関係ない話である。それならば

っさと持ち主に返すだけだ。

キヨウスケはその生徒に声をかけた。

「少しいいか？ さつきそのポケットからこの壘が落ちたぞ」  
壘を突き出す。しかし生徒は振り向かなかつた。

この距離なら聞こえないはずが無い。無視しているのだろうか？  
しかし自分がこんなものを持っていたところで仕方が無い。無理矢理にでも返すだけである。

生徒の前に回りこみ、テーブルに壘を置いた。

「おれが持っていても仕方が無いんでな。無理矢理になるが返させてもらおう」

すると生徒は苦々しげにキヨウスケを見つめ、小壘を押しやった。  
「これは僕のじゃない。君は何を言ってるんだね？」

そこで周りの彼の友人らしき生徒が小壘に気付き、大声で騒ぎ始めた。

「何だギーシュ。その香水はもしか、モンモランシーのじゃないか？」

「おおそうだ！ その鮮やかな紫色はモンモランシーが自分のために調査している香水だぞ」

「そんなものを持っていてるって事は、おまえモンモランシーと付き合っているのか？」

次々に追及の矢がぎざな生徒、ギーシュというらしい、に飛んでくる。

「違う。いいかい、彼女の名誉のために言っておくが……」

彼が話せたのはそこまでだった。ふと寒気を感じ、キヨウスケは後ろを振り向いた。続いてギーシュも振り向く。

そこには栗色の髪をした少女と、始めてこの世界に来たときにルイズを馬鹿にしていた金髪の少女の二人が立っていた。

「ギーシュ様……」「これどういうこと……？」

二人は身が凍るほどの寒さを声に含ませ、ギーシュに迫る。ギーシュは電光石火の速さで立ち上がり、彼女らの前に立って言い訳を

始めた。

「いや違う。これは、なんと言うかだね、きわめて複雑な事情が……」

「複雑な事情ですか……？」 「きわめて単純な事情だと思っけど……？」

詰め寄る少女達。この迫力を止める者は、もう誰もいないだろう。「つまりギーシュ様が……」 「二股かけてたつてことよねえ……」  
ギーシュの顔が青くなる。

「だからケティ、モンモランシー、これは……」

「うそつき！」

重なる声、そして頬を張る音。

そしてそれを済ますと、二人はふん！ と鼻を鳴らして去っていった。

沈黙が流れた。

ギーシュは巻き毛をさつきやつたようにかきあげ、言う。

「あのレディ達はバラの存在の意味を理解していないようだ」

その言い分にキョウスケは呆れた。馬鹿らしいにも程がある。

(……こいつのどこにあの二人は引かかったんだ？ 顔は良からうが、頭の方が足りてないことは付き合えばすぐ分かるだろうに) 大層な謎であった。しかしすぐに興味を失い、キョウスケは後ろを向いてそのまま離れようとした。

「待ちたまえ」

そこでギーシュはキョウスケを呼び止める。そして髪をかきあげながら言った。

「君が軽率に香水の壺なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉に傷がついてしまった。どうしてくれるんだね？」

「……どういう意味だ？」

首だけをギーシュの方に回し、問い返す。ギーシュはやれやれと手を振った。

「分からないのかい？ ふむ、見慣れない服装をしているが、どう

やら君は平民のようだね……」

そこまで言つて、ギーシュはたと手を打った。

「そうか、君が噂になつてゐるルイズの呼び出した平民か。まあ仕方が無い。平民に貴族の機転を期待した僕がまずかつたのだろうしね。つまり、君のせいで彼女らは僕という薔薇に手を出させるといふ不名誉を与えてしまったのさ。謝るのが当然のことではないかね？」

「……」

「ここまで説明すれば分かつただろう？ さあ謝りたまえ」

黙つてギーシュの口上を聞いていたキョウスケだった。しかし、ルイズの時で分かるように彼がこのような言葉に従うわけが無い。無表情のまま、言い放つ。

「断る。さっきの二人に叩かれたのはお前のせい以外の何者でもない。ついでに言えば、おれはそんな馬鹿げたことに付き合つつもりも無い」

「なに！？」

いきなり馬鹿呼ばわりされたギーシュがいきり立った。しかしキョウスケの口は止まらない。

「それに人に厚意を受けて逆恨みで返す程度の神経しか持つていないと言ふのなら、貴族もたかが知れているな」

「な、なんだと！」

「自分の行いを棚に上げて人のことを責める、か。大方貴族らしいといえは貴族らしいが、だがおれはおまえのような人間に謝る義理など持つていない」

あまりの台詞にギーシュは啞然とした。周りの生徒達も呆然としている。

ようやく立ち直つたギーシュは顔を真っ赤にした。

「き、君はそこまで僕を侮辱するか！？」

「侮辱も何もない、全て事実だろう。押し付けがましく人に謝ることを強制するお前のことだ。それとも、事実すら受け止められない

ほどにお前は狭量ということか？」

「……！！」

わなわなと震えるギーシュ。そして口端を吊り上げ、にやりと笑った。

「……ここまで平民に馬鹿にされるとはね。どうやら君は、貴族に対する礼儀というものを知らないようだ」

「……」

「だから君に、貴族に対する礼儀というものを教えてやろう」  
周囲にいる生徒たちに向かい、薔薇の造花を掲げて叫んだ。

「諸君、決闘だ！」

それを聞き、カフェテラスにいた生徒達が、うおー！ と声を上げた。ギーシュは続けて叫ぶ。

「これからヴェストリの広場にて決闘を執り行う。相手は僕を侮辱した平民だ。大層面白いことになるだろう！」

そしてキョウスケに向き直った。

「付いて来るがいい、平民。たつぷりと先ほどの発言を後悔させてやろうじゃないか」

そう言って歩き出す。しかし、そこでキョウスケは思いもよらない行動に出た。

ギーシュの向かう方向とは逆の方向に足を向け、歩き出したのである。それに気付いたギーシュは慌てた。

「ま、待ちたまえ！ どこに行く！？ 逃げるのか！」

「付き合う義理もない」

にべもなく言い放つ。今朝方のキュルケの時のように力を試してみたいという考えはあったが、さすがにこんな相手では戦う気も起きなかった。

ギーシュが焦り、キョウスケを挑発し始める。

「ふ、ふん。あんなことを言っておきながら怖くて逃げるのか。さすが平民、プライドなどかけらも無いらしい」

しかしキョウスケは何も言わない。どンドン歩いていく。

「自分の誇りすらも守らぬとは、名誉とは無縁の平民ならではだない！」

勝手な理屈だ。当然無視である。

「ここまで言われても何も言わぬのか！ 臆病者め、ルイズは本当にどうしようもない使い魔を召喚したものだ！」

完全無視。相手にもしない。

ここに来て、とうとうギーシュの方が我慢できなくなった。こうまで無視され、ギーシュにもキョウスケは本当に相手をする気が無いのだと分かったのである。

ぎりぎりと言葉をかみ締め、「そうまで、そうまで貴族を馬鹿にするか……ならば！」と言つて、声をあげて宣言する。無論、それもきざつたらしかった。

「周囲の皆が証人だ！ 僕はあの平民に侮辱された。しかも、我慢ならぬほどにだ！ よってこれから始めるのは私闘でもなければ決闘でもない、当然の制裁だ！」

そして腕を振り上げ、薔薇の花を振るう。

するとその花びらが、甲冑の女戦士の姿をした人形になった。しかもその数は八体。

今まで生きてきた中でここまで馬鹿にされたことなど彼には無かつたのだろう。ギーシュは完全に頭にきていた。相手が平民であることも忘れ、全力で以ってキョウスケを叩き潰すつもりのようなのだ。

「ゆけ、ワルキューレ！ あの無礼な平民を叩きのめせ！」

下る号令。それに従い、ワルキューレたちがキョウスケめがけて突っ込んでいく。キョウスケはまだ後ろを向いたままだ。そこにいる誰もが次の瞬間にはキョウスケの倒れふす姿があるのだと思つていた。

しかしそんな状況にあつても、キョウスケはまるで動じない。一つ、息をつく。

後ろを向きながら、一瞬見えたその姿から既に分析を終えていた。この魔法もルイズから聞いた戦闘用魔法の知識にあつたため焦る必

要が無いのだ。

(……相手をするつもりなど無かったのだがな。だがこうまで仕掛けられた以上、仕方が無いか……しかし)

「……怒りに我を失って、相手の様子も見ずにジョーカーを切る、か。素人としか言いようが無いな」

そんな呟きをキヨウスケは漏らした、その直後であった。

キヨウスケは体を沈みこませ、向かってくる一体の足を払ったのである。

「な……!？」

ギーシュが驚きの声を上げる。しかし、それはまだ序章に過ぎなかった。

キヨウスケは更に、バランスを失って倒れるワルキューレの頭を掴んで地面に叩きつけ、足で体重をかけて動きを封じる。そして手に持った何かで、真つ二つにしてしまったのだ。

ギーシュの驚愕のせい、ワルキューレの動きが止まる。そんな中で、キヨウスケは平然と立っていた。

「……ギーシュ、といったな。聞きたいことがある」

そして、キヨウスケは言う。

「おれが後ろを向いているときに仕掛けるのは、貴族の誇りとやらに反しないのか？」

「な……ふん、ふん、当たり前だろう。無礼を働いた君が悪いのだ！」

しかし、動揺しているのか声に自信が無い。ふん、とキヨウスケは鼻を鳴らした。

(……まあここで、おれの実力がどこまで通じるか試してみてもいいか)

右手に握ったアーミーナイフを弄ぶ。拳銃を使っても良かったが、それをするやすぐに勝負が決まってしまうため、一旦生身でどこまでいけるか試してみるつもりだった。

(さて……やるうか……!)

突然キヨウスケの雰囲気が変わった。

彼の双眸には鋭い、鋭すぎるまでの光が宿り、体からは噴出すような闘志が湧き出している。もう彼には敵と見なしたギーシュのことしか頭に残っていない。

先ほどとは逆に、今度はキョウスケがギーシュに向かって宣言した。

「いいだろう。不本意だがお前の決闘とやらに乗ってやる。ただし……」

その声はいつものように淡々としている。しかし、幾多の戦いによって鍛え上げられた気迫は隠しようもない。知らず、ギーシュは震え始める。

「……確かこの人形の素材は青銅だったか。だが、そんなものでキョウスケはギーシュにアーミーナイフを向け、

「おれを止められると」

体の体勢を整えて、言い放つ。

「思うなよ……！」

そしてギーシュめがけて、突撃を仕掛けたのだった。

キョウスケ以外の人間は息を止めていた。

キョウスケが止まらないのである。

ギーシュは突っ込んでくるキョウスケを止めようと四方八方からウルキューレを襲い掛からせたが、怯みもしない。

あるものは避け、あるものは受け流し、あるものは足を払って転ばせて切り伏せる。何度やろうと、どんな角度から攻めようと

止まらない！

「何だ……何なんだ君は！」

ギーシュは恐怖に駆られて叫ぶ。なぜ平民にここまで自分の攻撃がかかわれるのか分からない、といった様子だ。

だがキョウスケにとって見れば、この展開は自然なものであり、当然のことでもあった。

キョウスケの本職は機動兵器のパイロットである。しかし、だか

らと違って生身で戦う白兵戦に弱いということにはならない。機動兵器で戦うに際しても相手の機動についていけるだけの反射神経と動体視力、更には加速に耐えられるだけの強靱な肉体が必要とされるのだ。しかもキョウスケが所属していた部隊は敵陣への突撃を主任務としており、その性質上白兵戦の技能は相手側の制圧のために必要不可欠なものだった。

そして今、キョウスケはそのための武器も持っている。さすがに常時フル装備というわけにはいかず、携帯しやすい拳銃とアーミーナイフしか装備していないし、しかも今はナイフだけで戦っているが、それでもギーシュ程度ならこれで十分だった。超硬度を誇るゾル・オリハルコニウム程では無いにせよ、このナイフの硬度も青銅とは比べ物にならない。易々と切り伏せることができるのだ。

また、キョウスケの優れた観察眼はギーシュの戦い方を冷静に分析していた。

(……数と勢いだけを頼りにした、極めて単調な戦い方だ。大方自分が安全なのを良いことに、格闘や集団で仕掛けるタイミングを計ると言った技能を身に付けていないらしいな……)

その程度の技能では、何度と無く実戦を潜り抜けてきたキョウスケに通用するはずが無い。

そして以上の要素により、一つの結論が導かれる。

キョウスケがこの戦いにおいて負けることなど、有り得無い、という結論を

「く、来るな、来るな――！！」

止まらないキョウスケの突撃に、ギーシュは耐えられなかったようだ。情けなく悲鳴をあげ、戦術も何も無くただ自分を守らせるためだけに直近のワルキューレを呼び戻し、盾にしようとする。

すぐにキョウスケはその動きに気づいた。しかしそれはキョウスケにとって少々厄介だった。ワルキューレに突っ込まれる分には、動きの単調さと単体を相手にすればいいという二つの利点があるためむしろやりやすい。だが守りに入られるとその二つがなくなつて

しまうのだ。

「ち……」

キョウスケは舌打ちした。無論突破できないわけは無いが、時間がかかるだろう。となれば……

（何かで奴の術に対する集中を解かせ、人形どもの集結を遅らせるしかない、か……）

キョウスケはギーシュに迫りつつ、こう考えた。目の前にはギーシュと、その盾になろうと駆け寄る二体のワルキューレがいる。この状況でギーシュの術に対する集中を解くには、やはり銃による威嚇が適任だとキョウスケは判断する。後はワルキューレが先にギーシュの盾になつて射線を塞ぐのが先か、それともキョウスケの射撃が先かの二つだ。

この銃の弾も青銅ごとき容易く貫通するだろうが、相手が見えなければ狙いが付けられない。しかも悪ければギーシュに当たって殺してしまうかもしれないのだ。それはまずかった。

見た感じ、ワルキューレの方が先に到達しそうではある。ここは一旦止まり、相手の様子を見てこれからの行動を決める方が良いのかもしれない。だがキョウスケは構わず、不敵に笑って空いている左手を銃に伸ばしたのだった。そう、彼は……

（分の悪い賭けは……嫌いじゃない！）

……こういう、男だった。そしてグリップを握り締めた。

（！？ 何だと……！？）

直後、キョウスケは驚きに目を見張った。銃を握った途端、アルトのコックピットの時と同じように左手のルーンが光り始めたのである。

だが今回はあの時とは違い、キョウスケに起こったのは体の感覚の変化だった。今まで戦っている中でもギーシュやワルキューレの動きを遅いと感じていたが、それが今は止まっているようにすら思えた。

周囲のゆっくりとした動きの中、キョウスケは銃を構え

撃った。

ギーシュは突っ込んでくる平民に危険と恐怖を感じ、近くに二体のワルキューレに自分の盾になるように命じたすぐあと突如破裂音が響き、続いてものすごい速さの何かが耳を掠めていった。

「ひー!?」

それに驚くあまり情けない声を上げてしまう。だがギーシュはそこから先、自分に何が起きたのか分からなかった。腹に重い衝撃が加わったことを感じた途端意識が暗転し、気付けばギーシュは地面に仰向けに転がされていた。

訳が分からなかったが、急いで立ち上がるうとする。

「? 何だ?」

そこでギーシュは首に何か、冷たいものが押し当てられていることに気が付いた。見てみると、そこには鈍い輝きを放つナイフが押し付けられていた。

「な!?!」

息を呑み、慌てて頭を動かして離れようとする。しかし動かない。何かが頭を鷲掴みにしている。

(な、何だ!? 何が起きているんだ!?)

ギーシュが半狂乱になりかけた時だった。

「……お前は言っていたな、大層面白いことになるよ」

淡々とした声がギーシュにかけられる。渋いが、よく通る男の声。しかもそれはギーシュにとって忘れられない声であった。目を上に向けると、そこには無表情を顔に張り付かせ、しゃがみこんでいる自分の顔を覗いている平民の姿があった。ギーシュの顔が凍りつく。男は言葉を続け、

「戦いを決闘と呼び、面白がるのも別にいいだろう。好きにすれば良い。だが……」

目が細められ、震えが走るほどの殺気がギーシュに叩きつけられた。

ギーシュは悲鳴を上げそうになったが、恐怖に喉が詰まって声が出ない。体を捻って逃げればいいのかもわからないが、体も動かなかつた。

そして男は止めの言葉を口にし、

「……戦いには変わりがない以上、覚悟はできているな？」

逆手に握ったナイフを、更に首に押し付けてきた。

「ひいひいー！ー！！」

そこでやっと声が出るようになり、体も動くようになった。しかしギーシュは気づいていた。この男からは逃れられないのだと。

もうなりふりになど構っていられなかった。ギーシュは必死に命乞いをした。そうしなければならぬと本能が叫んでいたからだ。

「そ、そんなに本気にすること無いじゃないか！　こんなのは遊びだ、ただのお遊びだ！！　た、確かに僕も少し言い過ぎたかもしれない。そこは謝ろう。だからもういいじゃないか！　お互いに手を引こうじゃないかね！？」

何とかして説得しようとして声を上げ、喋って喋って喋りまくった。

その普段からは想像もできないギーシュの様子に周りも騒ぎ始める。

「ど、どうする……？」「どう見ても、これ、やり過ぎでしょ……」

平民のくせに……」「じゃあおまえ、止めにいけよ……」「ば！

何で僕が！？　言った君が行けばいいだろ！？」

生徒達も、ここまでやることは見逃せなかったようだ。だがいざ行こうとする段になると、男の迫力に飲まれて口を挟むこともできない。

彼らがそうしている間もずっと使い魔に対して命乞いをしていたギーシュだったが、いくら言っても男の殺気は衰えない。半泣きになり、もう殺されるしかないのかとギーシュが思った。その時だった。

「何やってんのよー！ー！！」

一人の少女の声が、カフェテラスに響き渡った。

(……やつと来たか)

キヨウスケは殺気を放ったまま、心の中でそう呟いた。殺気は放っていたが、それも相手に対する威嚇で本当は殺す気など無いキヨウスケである。しかし、理由も無く手を引くのも不自然なので、恐れずに彼を止めてくれるであろう人物、即ちルイズを待っていたのだ。

首を回して声の上があった方を見ると、キヨウスケの主人が肩を怒らせながら歩いてくるさまが見えた。

「私が少し考え事をしている間に、あんたは何をしてるわけ……？」  
しかもキヨウスケの放つ殺気に怯まず、ルイズは声をかけて来るのである。

そこで一瞬、ほんの一瞬キヨウスケは笑みを口に上らせた。感嘆の笑みである。

(やはりおまえは本物らしい……)

満足感のようなものがキヨウスケに満ちる。しかし表面上は無表情を保ち、体勢も変えないまま、ルイズの質問に淡々と答えた。こういう時は普段からの無表情に感謝したい。

「……何をしているとは何だ？ ご主人。見て分からないか？」

「ええ、分からないわ。分からないから聞いてんのよ。だから」

そこでルイズはこめかみに青筋を立て、笑顔を浮かべた。

「……さっさと答えなさい……？」

キヨウスケに負けず劣らずの迫力であった。

キヨウスケはやれやれと肩をすくめた。視線を転がっているギ―シュに向ける。

「単純なことだ。詳しい経緯は省くが、要はこの男に男に決闘を申し込まれたということだ」

「……あんたが？ でもあんた、決闘なんて……」

「当然最初、おれは断った。だがこいつがその返事に承諾できずに襲い掛かってきたから仕方なく相手をし、その結果としてこうなっている……それだけだ」

「ふうん……」

そこで、顎に手を当てた。

「ねえ、ちよつと聞くけど、あんた前言った銃を使ったわけ？ それにしちゃこいつら、切られたみたいなきずがあるけど」

「……ああ、使った。だがそれも最後だけだ。大半は」  
視線で右手に握ったナイフを示す。

「これで戦った。人形の傷もこれのためだ」

そう言われたルイズはキョウスケを見て少しの間黙っていたが、やがて、はあとため息をつく。

「あんたの持つてる武器もだけど、あんたもでたらめだったわけね。誤解してたわ」

ルイズは周囲に転がるワルキューレの残骸を見渡し、言った。

「あんたは魔法も使えないのに八体のワルキューレと一度に戦って無傷。で、そのナイフの方はとんでもない切れ味。青銅って言うてもここまで見事にすばすば切れる武器なんてあんまり無いわよ」

疲れたような声で話すルイズ。そして顔を上げ、懇願するような目でルイズを見ているギーシュを一瞥して、

「それになんとかこうなったわけが分かったわ。どうせあんたのことだからギーシュが言ったことに突っかかって、それにギーシュが腹を立てたって言うのが大筋のことなんでしょうけど、でももういいんじゃない？ さっさとそいつを離してやんなさい。戦いに関する事なら、使い魔として使っただけでいいんですよ？ ……認めたくないけど」

と、口を尖らせながらキョウスケに指示した。その言い分にキョウスケはしばらくの間ルイズを見ていたが、やがてふ、と笑って

「……主人の命令なら、仕方ない」

と言い、殺気とナイフを納めた。

とたん、がばりと上半身を立たせ、荒い息をつきながら涙を流すギーシュ。

「た、助かった……」

口から出る言葉もいつものようなきざさが無い。命乞いの言葉でさえ気取ったものだったのだから、よほど安心したのだろう。

ルイズは立ち上がったキョウスケに近づき、腰に手を当てて小声で文句を言う。

「もう少しあんたも手加減しなさいよ。ここまでしてどうするわけ？」

「……戦いには変わらん。不本意ながらやる羽目になったが、一度やると決めた以上手加減などできるはずがない」

「そうじゃなくて、銃を初めから使っちゃえば良かったじゃない。あれならすぐに終わらせられるでしょ」

「……まあ。だが、一度生身でもどこまでやれるか試してみたかったんでな。……まあ、結局はおれの世界の武器に助けられたのかもしれないが」

そこでキョウスケは自嘲の言葉を漏らした。それにルイズが驚く。「……驚いた。あんたって傍若無人で自信満々な奴かと思ってたんだけど、そんなことも言うんだ」

「……その言葉はそっちにそっくり返すぞ、ご主人」  
「なんですって!?!」

そのまま二人は睨み合う。だが、そのうちどちらとも無く笑い出した。

「いいわ。今回は、っていうか今回もかも知れないけど、許してあげる。やっぱりあんたは当たり前みたいだしね」

「……感謝する、ご主人」  
「……それにしてもあんたがご主人って言うと、何か皮肉言われてるみたいね……」

そんなことを話しながら、ルイズはキョウスケを連れて歩き出した。

昼食のために来ていたが、二人とももうそんな気分ではなかった。一人は嬉しさのために。そしてもう一人は、困惑のために。

(銃を握った時に起こったあの感覚は、一体何だ……?)

キヨウスケはギーシュに銃を向けたときのことを思い出していた。あの時、ギーシュたちの動きが止まって見えるようになった。感覚が鋭敏化したのだろうか？

しかも銃を向けたときの自分の体の動きもおかしかった。

実のところ、キヨウスケは射撃は苦手なのである。機動兵器においても、また白兵戦においてもそれは変わらないし、利き腕で無い左手では尚更それが当てはまった。だから始め、危険を少なくするために射線を下に向け、ギーシュの足辺りを狙うつもりだったのだ。だが左手が光ったとたん、今度は銃をどう扱えばいいのか、より効果的に威嚇するにはどうすればいいのかといった情報が頭に流れ込んできたのである。

（アルトの時も同じようなことが起きた。だが、なぜ銃を握っても同じ事が起きる？）

そこが分からない。アルトと銃、何か関係があるのだろうか？アルトのような機動兵器のみかと思っていたが、今回の一件で疑問が出てきた。

（……一応部屋に戻ったら、色々な物を握って同じ事が起きるか試してみたほうがいいのか。それでこのルーンの効果の正体分かるかもしれない）

キヨウスケはそう結論付けたときだった。

「こら〜遅れてるわよ〜！」

ルイズの声が耳に響いたのである。

気を取り直して見てみると、なるほど、かなり距離が開いていた。考え事をしていたせいで歩みが遅くなってしまったらしい。

「すまん、今いく」

キヨウスケは駆け出て主人に向かっていき、連れ立ってカフェテラスから離れていった。

そしてカフェテラスに残された人間たちは、そんな掛け合いをしている落ちこぼれメイジと平民の使い魔を様々な思いで見送ったのだった。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、圧勝してしまいましたが……」

「……うむ……」

トリスティン魔法学院の本塔、その最上階に位置する学院長室で白い口髭と髪を揺らした学院長オスマンと教員の一人であるコルベールは顔を見合わせ、『遠見の鏡』で見ていた使い魔とギーシユの戦いを振り返っていた。

オスマンはセコイアのテーブルに肘を突いた。

「四方八方から襲ってくるウルキユーレをもともせず突っ込んで無傷。しかも近づけば腹に拳を叩き込んでそのまま背負い投げ。なんちゅう戦闘能力、そして武器じゃ」

「……確かにギーシユは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に遅れをとると思えません。しかもあの異常なナイフがあつたとしても学院長の仰つたように動きが際立ってましたし、その上銃を使ったのは最後の威嚇だけです！ やはり彼は、伝説の……」

コルベールの言葉に、オスマンは頷いた。

「恐らく、『ガンダールヴ』じゃろうな」

二人は黙り込んだ。

オスマンはい先ほどまで秘書である女性の尻を撫で回し、彼女に蹴りたぐられるという自業自得の暴行を受けていたが、そこにコルベールが乱入してきたのである。彼の様子から秘書に席を外すように言い、コルベールを促した。すると、彼の話す内容は驚くべきものであったのである。

先日ルイズが召喚した平民に刻まれたルーンが気になり、図書室に行つて調べてみるとなんとそのルーンは始祖ブリミルの用いた伝説の使い魔の一体、『ガンダールヴ』のルーンだったというのだ。

オスマンはもちろん、話したコルベールでさえ半信半疑になつて

いたが、その時オスマンの秘書がギーシュと件の使い魔が争っているという報せを持ってきた。そこでいい機会とばかりにテーブルの前におかれた『遠見の鏡』で二人の戦いを覗いていたのだ。

そして争いの結果はというと、先ほどの話の内容どおり使い魔の圧勝であった。そしてこのことから、彼が『ガンダールヴ』であることには疑いは無いように彼らは思えた。

コルベールはオスマンを、興奮した様子で促した。

「オールド・オスマン、これは一大事です。さっそく王室に報告して指示を……」

「それには及ばん」

オスマンは首を振った。それにコルベールは不満の声を上げる。

「何故です？ これは世紀の大発見ですよ！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではないことは君も分かっているじゃろう？」

「勿論です。『ガンダールヴ』は始祖の呪文詠唱の無防備を守るために生み出された使い魔といわれています。その性質上、主人に手を近づかせないために強大な力を持っているとも……」

「だからこそじゃ。そんな強大な力を持っている使い魔が、しかもとんでもない装備品のおまけつきで現れたことを王宮の連中に報告してみるがいい。たちまちあのボンクラどもが目の色を変えて欲してくるであろうよ」

コルベールはオスマンの言にはっとした。

「暇を持て余している連中にはあの使い魔の青年は最高の玩具になるであろうよ。そうしたらまたぞろ戦争をおっぱじめかね。わたしはそんなことになんぞ付き合いたくないわい」

オスマンはふんと鼻を鳴らした。コルベールが感服した様子で頭を下げ、オスマンの思慮に賛辞を贈った。

「仰るとおりです、学院長。深謀、恐れ入りました」

しかしコルベールに褒められても、オスマンは難しい顔をしていった。

「……ミスタ・コルベール。この使い魔を呼び出したのは確か……」  
「はい。『ゼロ』というあだ名で呼ばれているヴァリエール嬢です」  
「そこが謎じゃ。彼女はそのあだ名が示すとおり無能なメイジ、しかし使い魔は伝説という。こりやどうということじゃ？」

「はあ……それは気になるところですが……」

うーむと二人は考え始めた。

どう見ても二人の実力が釣り合わない。呼び出せるはずの無いように彼らには思えてしまう。

しばらく二人はうんうん唸っていたが、オスマンがいきなり顔を上げてやめじややめじやと言った。コルベールがオスマンを見る。

「こんなもん判断の材料が少なすぎるわい。この問題は後々考えるとして、今は他のことをするでしょうかの」

「と、いいますと？」

「確か昨日、儀式の報告で言っておったの？ 聞きなれぬ単語をあの使い魔の青年がきみに聞いてきたと」

コルベールはああ、と頷いた。

「その話ですか。ええ、少し気にかかったので確かに言いました」

「わしもその時は『何だそれ』で済ましていたがの」

オスマンは茶目つ気を含んだ笑いを浮かべた。彼の脳裏には青年のギーシュにした啖呵と恐ろしい切れ味を持ったナイフ、そして見慣れない形をした銃が浮かんでいる。

「あれらの武器を見ると、あの青年の正体は何なのか気になってきてしもうたわい。それらの単語の意味も含めての」

## 夜の会談

「……あんだ、何してんの？」

ルイズはイスに座りながら、床に腰を下ろしてその前に持ち物を広げている使い魔に声をかけた。

使い魔は目の前に並べたそれらを左手でとっては離し、また別のものを取っては離しを繰り返している。

辺りは暗くなってきたしており、そろそろ夕食の時間というところである。この時間までルイズは授業に出ており、ようやく終えて部屋戻るや否や使い魔がこれを始めたのだ。

「……少し、こいつの力が気になってな」

グローブを脱ぎ、左手のルーンをルイズに示すキョウスケ。

「昼の、ギーシュと言ったか、あの男と戦った際に左手で銃を持ったとたん、おれの感覚が鋭くなった上に武器の扱い方が頭に流れ込んできた。しかも以前は銃ではない別のものでも同じことが起こったからな」

そこで一旦言葉を切った。

「以前、使い魔には様々な能力が付加されると言っていたな？ もしかしたらこの力がそれなのかもしれない。……だから、どんな物であればこいつが反応するのか調べておきたい」

そこでルイズは別の機会に左手で何か握ったことがあるのかしらと一瞬思った。だが、

「……ふーん」

さほど気に留めず、すぐに忘れてルイズは気の無い様子で返事をした。今のルイズにはそれよりも大事なことがあるのである。

「別にいいじゃないそんなの。それよりそろそろ夕食の時間よ。あんたはどうすんの」

「おれは別にいい。一人で行ってくればいいだろう」

予想通りといえば予想通りの返事であった。

(こいつほんとに私に仕えたりっていうのには付き合わないつもりね……)

ここまで突き抜けているとむしろ見事なものであった。ルイズも思わず感心してしまったほどである。ここでただ態度だけというのならまだルイズも何か言えたのだろうが、実力の方も持っているとなれば文句を言う気も無くなりそうになる。しかも恩義までこの使い魔にはあるのだ。

ギーシュとの昼の事件以降、それ程時間はたっていないがルイズを正面きつて馬鹿にしてくる生徒がぱったりといなくなったのである。それはキヨウスケの問うた質問のせいもあるのだろうが、一番効いたのはキヨウスケの実力と迫力である。近くにキヨウスケがいるとしり込みして言えなくなってしまふのだ。

(自分の実力で言わせなくなったわけじゃないと言う点は残念だけど、それに関しちゃ、まあ、その、か、感謝しても良いわ。でもやっぱり貴族として、何よりご主人様としてどうかしてこいつを従わせるようにしないと示しつかないもん！ 昨日いわれたこともあるから尚更に！)

だがルイズはこう考え直し、使い魔を自分の命令を聞かせるようにしなければと心の中で拳を握り締めるのであった。実のところで言えばもう使い魔という呼び方を変えてもいいと思うほどにキヨウスケを認めているルイズである。

しかし、今でさえこんな態度をとっているのに、人並みの扱いをしたら更に付け上がるのではないかという勝手な考えから素直にそう呼べないのだった。プライドと言うのは本当に悲しいものである。(そのためにもどうにかしてこいつの気を引かないと……)

意を決して再び使い魔に話しかけるルイズ。そこでルイズは気になっっていたことを話題に出した。

「でもあんた、それだとまたあの棒みたいなやつ食べるんでしょ？  
っていうか、あれってそんなにおいしいの？」

「……」

そこで一瞬動きを止める使い魔。しかしルイズはその一瞬を見逃さず、目を光らせた。

（ははくん、さては……）

「おいしくないんでしょ？」

「……まあ、な」

言いにくそうに話す。それにルイズはこれだ！ とますます目を光らせた。にやりとした笑みを浮かべ、言葉を続ける。

「ふくん、そうなんだ。あれってそんなにおいしくないんだ。……」

学院の食堂に行けば少しはいいものが食べられるかもね」

「……！」

「でもこれでもかっていうくらい料理が出されるからむしろ食べ切れなくて困っちゃうのよ。どうしようかしらね〜残ったの。困っちゃうわ」

「……！！」

無表情ながらぴくぴく反応する。それにルイズは凱歌を上げた。

学院で食べなくても携帯食やサバイバルの知識があるため問題は無いキョウスケであるが、やはり毎回毎回味気の無い携帯食では飽きてくるし、できることなら美味なものを食べたいというのが人間の本能だ。しかも現在は昼食をとらなかつたために小腹をすかしている状態であった。

図らずもキョウスケの弱みを見事に突いたルイズであった。しかしこの使い魔相手に油断はしない。

（我慢してくるっていう可能性もあるし、いくらこれが良い手でも今夜だけじゃ落とせないかもしれないわね）

使い魔が只者ではないことは承知済みのルイズである。それに、何となくではあるがこの使い魔が簡単にこちらに従うはずが無いとルイズは分かっていた。

（でもそれなら持久戦に持ち込むまでよ！ 何日も何日もおいしくない物を食べているこいつにこの攻撃はさぞ応えるでしょうねえ〜）  
顔に浮かべているのとは別に、心の中で凄惨な笑みを浮かべるル

イズ。いざとなったら温存している二つのお仕置き案も彼女にはあるのだし、それを使えば良い。……だんだん手段を選ばなくなってきた感が出てきたが。

ふふん、とした顔をしてイスから立ち上がるルイズ。

「そろそろ時間だわ。じゃあ、今から食堂行つて来るわね。あんたも食事を取つてなさい」

「……了解、ご主人」

ドアに向かうルイズ。使い魔は立ち上がる様子は無い。やはり今夜だけでは落とすことはできないようだ。

（ま、せいぜい頑張んなさい。この調子でせえ〜つたいあんたを従わせて見せるから！ ……ま、まあ、ちょっと手段が嫌味すぎるけど、でもこれも私に素直に従おうとしないあんたが悪いんだからね!？）

つい良心がとがめてしまうルイズ。こんなことで従わせてもどうしようもないことは分かっているが、このまま使い魔に今の態度をとられ続けるのも嫌なので、意味は無いが心の中で言い訳して一応謝っておくルイズであった。

ドアノブに手をかけ、外に出る。

しかし出てすぐにうんうん唸りだした。やっぱり少しやりすぎたかしらと不安になってきたらしい。

（……うゝ、でもちよつと悪辣すぎるかしら。でも舐められるわけにもいかないし……）

でもどうすればいいのだろうか？ あんまり好待遇しすぎるのもあいつを付け上がらせるだけだし、だからと言って今のままじゃ……そこまで考えて、ルイズははっ！ とした。そうだ、すぐ近くに虚無の休日があるではないか！

（そうだわ、その日にでもあの使い魔に何か武器を買ってあげよう！ そうすれば多少は機嫌も……って何言つてんのあたし!？）

見せてくれたあのナイフはとんでもない切れ味があるようだ、どうにもあの体格とナイフとでは見栄えがしない。自分の使い魔で

あるからには見栄えもしつかりしてもらわなければ困るのだ。

（そうよ、そう。そのためだけよ。それ以外にはなにもあるわけ無いわ！ そうに決まってるのよ！！）

で、無論ルイズの本心としてはキョウスケの心証を少しでも悪くしないための方策にすぎないのである。そして勿論、自分の心と言ってもプライドの塊のルイズがそんなことを容易に認めるわけが無い。まったくもって（以下略）

（あいつもあんな武器だけじゃつまないだろうし、銃だって近づかれちゃ使えないもんね。よし……）

実際にはあれがベストの装備でこれ以上は必要無いのだが、貴族ならではの傲慢さから勝手に決め付けてしまうルイズであった。

「……あいつもやるようになってきたな」

といても、まだ二日目だがなと漏らすキョウスケ。

（しかしいくらおれに態度を改めさせたいからと言って、ここまでするか……？）

キョウスケはキョウスケで悩む。こちらもルイズの本心にまるで気づいて無いため、鈍さは相変わらずである。

（……まあいい。いくらレーションが味気なくてもあいつに頭を下げるよりはマシだ。いざとなったら外で何か捕らえて食べればいいだけだしな）

こうなってしまうてはもはや意地の張り合いのようなものである。キョウスケも徹底抗戦を決めた。が、すぐに肩の力を抜かし、ふつと笑みを浮かべた。

（何をむきになってしているんだ、おれは。それよりもむしろ、こちらを済ませたほうが良い……）

目の前に散らばっている品々を見るキョウスケ。ルーンが光るかどうかの実験で、この中の半分既に試し終わっている。終わった中では拳銃以外にもナイフ、そしてアサルトライフルにこれは反応するようだ。そしてその結果から、ひとつの予測が立てられた。

(まだ決め付けることはできんが、どうやらこれは……)

そこまで考えたときだった。いきなりドアがノックされた。

「失礼します。ミス・ヴァリエールの使い魔の方はいらっしやいますか？」

続けて、ドアの向こうから女性の声がする。だがキョウスケはその言葉の内容が気になった。

(……ルイズではなく、おれに用があるのか？ だが何故……)

キョウスケは気にしつつも無視するわけにもいかず、ドアを開けた。

そこにいたのは緑の髪を持った、理知的な雰囲気を漂わせている女性であった。かけている眼鏡がそれをより強調させており、またローブを身に付けていることからメイジと知れた。

ドアから現れたキョウスケを見て、女性は頭を下げた。そして持ち上げかける。

「夜分だというのに申し訳ありません。実は学院長が……!？」

その途中で彼女は言葉を詰まらせた。視線がルイズの後ろで固定されたまま動かない。

何だと思つてキョウスケは振り返つてみた。するとピクリと、ほんの少しキョウスケの眉が上がった。

(……なるほどな)

特大に目を引くものが、そこにはあった。そう、キョウスケが銃をぶつ放したせいでできたひび割れである。そしてそんなことを正直に言えるはずが無い。

キョウスケはごまかしに入った。

「……ああ、あれは、おれの主人が室内で魔法の練習して爆発させてしまったためです。驚かせて申し訳ない」

「……え？ あ、ああそうなんですか。そういえばミス・ヴァリエールは魔法を使うと爆発してしまうんですね。ぼつつとしてしまつてすみませんでした」

女性は再び頭を下げた。

ルイズの曰ごろの爆発のおかげでどうにかごまかせたようだ。ほつと胸をなでおろしながら、心の中でルイズに詫びた。……申し訳程度に。

(多少の仕返しだ。悪く思うなよ、ご主人)

女性は気を取り直し、話し始めた。

「先ほどの続きですが、学院長がミス・ヴァリエールの使い魔のあなたを呼んでおります」

「……学院長が、おれを？」

「はい。申し遅れましたが、私は学院長の秘書を勤めるロングビルといえます。ミス・ヴァリエールには知らせるなど言われておりまして、彼女が出て行くところを見図らせていただきました」

「……わかりました。しかしなぜ学院長が……？」

「私は詳しい話しを教えてもらったわけではありません。ただあなたに話があるので連れてくるようにと……」

キヨウスケは疑問を覚えた。何か学院長に呼び出されることをしたのだろうか？

(心当たりと言えば今日の使い魔の騒ぎぐらいか……?)

有り得ないことは無いように思えた。ここでは平民は貴族には敵わないと言っのが常識となっっているようだし、キヨウスケの活躍はここではタブーに近いものだったのかもしれない。

だが、そうはいつでも学院長の呼び出しとなっでは逆らえるはずが無い。すぐに行きますとロングビルに言い、共に学院長室に向かった。

やってきた学院長室には白い髪と髭を持った老人とコルベールがいた。どうやら老人が学院長とやららしい。彼はテーブルの前にあるイスに座り、コルベールはその傍らに立っていた。ロングビルはここに着くや否や「ではこれで」といつて去っていつてしまった。

「おお、来たみたいじゃな。わしがこのこの学院長を勤めておるオスマンじゃ。よろしくのう」

「……はあ」

「なに、そう硬くなることは無い。早く座ると良い」

(……そういわれても、何だあれは)

キヨウスケは困惑していた。流れる雰囲気を見るに、どうやらキヨウスケが危惧していたようなことは無いらしいが、目の前のテーブルの上にあるものはよりキヨウスケを困惑させていた。

「ちと長くなりそうでの。夕食時というのに呼んでしまったこともあるからこちらで用意させてもらったんじゃない」

オスマン学院長は笑い、テーブルの上にあるもの、うずたかく積み上げられたご馳走を指して言う。

オスマンはご馳走の一部を手でつまみ、口に放った。

「うむ、うまい。……いや、食事長のマルトー親父がわしがミス・ヴァリエールの使い魔を招待したいと言ったら張り切ってしもうての。よほどメイジに平民が勝ったことが嬉しかったらしい。後伝言で、何か食べなくなったら厨房の裏まで来いということを言っておったぞ。食堂で出してるものの賄いでよければ、ともな」

(……ほう)

それは今まで味気の無い食事をしてきたキヨウスケにとって、ありがたい申し出であった。しかし、そこでオスマンに聞きたくなかった。

「……そんなことを許して良いんですか？ おれも、まあ、平民ですが賄いとはいえ貴族に出しているものを……」

「まあ、の。じゃがマルトー親父にはわしも世話になつとるし、賄いを出すくらいなら問題があるというわけでもない」

「それにどんなに学院長が禁止といつてもあの厨房で一番偉いのはマルトーコック長ですから、彼が出そうと思えば出してしまうのですよ。正式な彼の辞令を出せば別でしょうが、今現在の彼の勤務態度ではそんなことできそうにもありません。そのような心配は無用ですよ」

コルベールが割り込んで、オスマンの言に補足を加えてくれた。それらによつやくキヨウスケは頷き、「……ではいただきます」と

言った。

食事が始まった。持ってきたイスにキヨウスケは座り、オスマンやコルベールもそろってご馳走にフォークを伸ばした。

オスマンとコルベールは楽しく談笑しながら食を進めている。しかしキヨウスケは内心穏やかでなかった。

(こいつらはこんなものを毎日食べているのか……?)

先ほどの話からすればこれは特別なケースなのだろうが、比較対象を見たことが無いのでそんなことを考えている。

「しかし見事なもんじゃのう。平民なのにマナーをそこまで知っておるとはの」

「……いえ、別に大したことはありません」

キヨウスケは自分が知っているテールマナーを試してみたが、それに関しては違いは無かつたらしい。ちなみに何故キヨウスケが知っているかといえば、それはエクセレンとのデートのおかげである。

(たまには雰囲気のあるところに連れて行けとか言ってきたしな。

……その度に金がなくなつたが)

苦いんだか甘いんだかよく分からない記憶である。

(しかし、何が目的でおれを呼んだ……?)

オスマンに視線を向ける。キヨウスケとしてはこのまま食べているのも良いが、呼び出された用件とやらが気になるので早く言っただけで済ませたいところであった。今のところ危険はなさそうだがその用件次第では、と言うこともありえる。

やはりそろそろ始めるかと考え、手を動かすのを止めて口を開いた。

「……学院長。そろそろ私達が呼ばれたわけを話してもらいたいのですが……」

キヨウスケの言葉にふむ、と頷きオスマンが一旦フォークとナイフを置いた。

「そうじゃの、そろそろ始めるとするか。……わしらが君らに話し

たいことは二つある。まず、君に刻まれたルーンのことじゃ」

(！？ 何だと……)

その言葉にキョウスケは反応した。このルーンのことについて何か知っていると言うのだろうか？

「……このルーンが何かあるんですか？」

「うむ、それが大いにあるんじゃない。……はつきり言おうかの。それは始祖ブリミルの使い魔、ガンダールヴのルーンじゃ」

(……？ なんだそれは……)

始祖だのガンダールヴなどと言われてもよく分からないキョウスケである。どう反応して良いのが分からず、無言でいることしかできなかつた。

だがその様子にオスマンはきらりと目を光らせる。

「……妙じゃな」

「……は？」

「何故おぬしはそんなに反応が薄いんじゃない？ 始祖はこの世の全てを作ったとされるいわば創造主にも等しきもの。いくら平民とはいえそれに関することをいえば多少は反応するんじゃないが、これほどの反応の薄さは……」

失敗した、とキョウスケは心の中で舌打ちをした。

(どうやら宗教だかの神のようなものらしい……反応しなかったのはおれの素性を言っているようなものか)

アルトのことがばれなければいいため、異世界から来たことを隠す必要は無いのかもしれないが、わざわざヒントを与える必要も無いだろう。

キョウスケは無表情を保ったまま、言い逃れようとする。

「そうですね。しかしおれがいた場所ではそのような話は聞いたことがありません。ここら以外の場所におれはいましたから」

「……ふむ、まあ世界は広いし、の。ならばこのコルベールがおぬしが言っていたというチキュウレンポウなる単語らも、おぬしの見慣れぬ服や武器もおぬしの故郷でのものなのか？」

「……そうですね。おれの故郷での地名や政府の名前です」

せつかく相手が納得しかけているのだ。ここはこう言うしかない。やはり異世界と言う発想は普通は思いつかないようだ。

「しかし、何故おれの武器のことを知っているんですか。確かあの時、お二人はいなかったような気がするんですが……」

オスマンが豊かな髭をなで、片手でなにやら鏡らしきものをテーブルの下から取り出した。

「いや、昼間の決闘騒ぎをこの『遠見の鏡』でみての。おぬしのもつとる武器があまりにもわしらの知つとるものとは違う。また、おぬしのギーシュに対するあの態度もの」

「……」

「あそこまで見事な啖呵は聞いたことが無いし、それにどこかわしらとも平民たちとも違った部分があると思うての。それで気になつてもうたというわけじゃ。話が移ってしまったが、おぬしを呼んだ理由の二つ目はおぬしの素性が気になったからじゃよ」

そこまでオスマンの話を聞き、見通しが甘かったこと、そしてずいぶん深くまで読まれたことをキョウスケは覚った。

（おれたちの世界の武器、そして考え方ですらこの世界では異質すぎる、か。……迂闊すぎたな）

アルトはまずすぎるにせよ、拳銃やらナイフやらもここではまずいようだ。

分かつてはいたが、性能が違いすぎる。そして貴族が普通はいなかったことから来る考え方も……

（さっきの説明でこの場はごまかせるかもしれん。だが突き詰めて質問されてしまえば、目の前の二人のような知識を有している人間はいずれおれの正体に気付くだろう……）

それに嘘に嘘を重ねるにせよ、今のキョウスケのこの世界の知識では限界がある。

（それらにも気をつけなければ、この二人のような人間が出てきた時にごまかしきれなくなる、か。……ならば、ここは……）

キヨウスケは決断した。そして、

「……申し訳ありません、オスマン学院長、コルベール教諭」

「ん？」

「先ほどまでのおれの話は嘘です」

「「なんじゃと（ですと）」」

「信じてもらえないかもしれませんが……おれはここではない世界、異世界からやってきた人間です」

賭けに出た。

アルトのことはさすがに話さなかったが、キヨウスケは自分がこの世界ではない人間であること、そして中庭で使った銃とナイフは自分の世界の武器であることを説明した。

（さて、これでどうするか……）

二人は目を点にしてしばらく呆然としていた。そしてお互いに顔を合わせ、

「……にわかには信じられんの」

「……ええ、信じられません」

と言った。だが二人は一旦間を置き、首をキヨウスケに向け、

「しかし、そうはいつてももの」

「ええ、そうはいつても、ですね」

二人してキヨウスケに頷いた。どうやら、信じてくれたらしい。

だが……

「……おれの話信じてもらえるんですか？」

望みどおりの結果になったものの、キヨウスケは驚きを隠せなかった。ここまで簡単に信じてもらえるとは思ってもしなかったのだ。キヨウスケの様子に二人はこともなげに答えた。

「まあ。いろいろと見させてもらったこともある」

「その通りです。例えば世界広しといえども、それなりに我々も世界のことを知っています。それでもあのような性能の銃やナイフ、服装など見たことも聞いたこともありません」

「……」

「ですが、そういう事情があったとなれば多少は納得できます。あれらの単語もあなたの世界の都市の名前や政府の名前だったんですね。道理で知らないわけです。……しかし……」

ふと、コルベールが口ごもる。

「お尋ねしたいのですが、何故急に我々に素性のことを言う気になられたのですか？ 初めに話さなかったということは話したくない事情があるのでしょうか？ あのまま嘘を通していれば騙し通せたはず……」

「……それは俺も考えました。しかしあなた方二人はかなり深いところまでおれのことを読んでいました。しかもおれはまだこの世界に詳しいとは到底言えない。いずれボロが出てばれてしまうでしょう」

「……」

「ならば今は手の内を見せ、この場でその対策を練った方が良い……そう考えたからです」

キヨウスケのこの言葉に、オスマンがふむ、と髭をなでた。

「なるほどの。異世界から来たことは隠しておきたいが、正体を知られそうなのこの場では逆にばらしてむしろにその対策を教えてもらった方がよい、と……そういうことじゃな？」

「……ええ」

まだ彼らのことを知らないにも拘らず、自分のことを話したのはいささか早計だったかもしれない。もし彼らが他の事を詮索してくるのなら、この学院から出て行くことも考えなくてはならなくなるだろう。

（だが、多分そうはならんはずだ……）

キヨウスケはまだ二十二という若輩であるが、その人生濃度は濃い（特にこの数年）。戦いの中にあつて多くの人と出会い、彼らの考えや信念、果ては狂気と言ったものを感じ続けてきた。人を見る目もそれなりには養われていると自負している。

そしてそれらの経験からこの二人を見るに、信頼できる人物と思

えたのである。

キヨウスケは言葉を続けた。

「初めに話そうとせず、それでいてこんなことを言うのは失礼なことを重々承知しています。ですが……」

「そこまででよいよ」

オスマンは手でキヨウスケを制した。

「まあ何かしらの事情があるんじゃないだろう。そのためにさっきは話さなかったんじゃない？　そこまで硬くならんでよいし、異世界から来たこともわしらのうちで止めておこう。じゃが、帰る方法についてはわしらも知らん。申し訳ないがの」

オスマンは笑いながら、だが、最後の部分は声を落として言うてくれた。しかし止めておいてくれるだけでも良かった。感謝に、キヨウスケは素直に頭を下げる。

「……ありがとうございます。それだけで十分です」  
手をひらひらさせながらオスマンが応じた。

「なに、わしらとしてもおぬしに言動を気をつけるようにと言うところじゃったんじゃない。むしろ都合がいいわい」

「……？　というと？」

「初めに言っただいじゃろ？　おぬしのルーンのことじゃ」

(！　そう言えば……)

今までの話しに気をとられてすっかり忘れていた。初めはそのことについて話していたのだった。

キヨウスケは左手のグローブを外し、ルーンに視線を落とした。

「……このルーン、確か『ガンダールヴ』と言っていましたか、それがそれ程重要なことなんですか？　始祖とか言う相当の権威を持つ人間の使い魔がそうだったこと、そのために名前が知られていることも分かりましたが……」

「確かにそれもあります。しかし、実際の力としても『ガンダールヴ』は恐ろしいものがあるのです」

ここでコルベールが口を開く。そしてガンダールヴの力の伝説に

ついで語り始めた。曰く、ありとあらゆる武器を使いこなして主人の呪文詠唱の無防備を守ったこと。そのために強大な力を有し、千人もの軍隊を一人で壊滅させることができ、並みのメイジで歯が立たなかったこと。

キヨウスケは納得した。確かにそんなことが言われているのであれば、言動に気をつけなければ注目を集めたときの対処がやりにくくなる。

(厄介なことだ……しかし、『千人の軍隊を一人で』の下りは眉唾もいいところだが、な)

そして自分にそんなことを期待されても困る話だ、とキヨウスケは思った。無理があるにも程がある。しかし世間でそう言われている以上、警戒しなければならぬのは事実だろう。

(……だが、収穫もあったか)

『ガンダールヴ』の伝説を聞いてこの能力を持ったものはそうそういないことが分かったし、また部屋でしていた実験から、ルーンがどのようなときに光るかの予測を補強することができた。

(恐らく、『武器』に反応しているんだろう……)

どのような武器でも使いこなしたと言う『ガンダールヴ』、それはこのルーンのためにどのような武器でも使えるようになった為なのではないか。そしてその効果は、武器に左手が触れることで発動する……

(そうとしか思えん。それにこの予測なら、おれの銃の扱いが異常にうまくなったことも説明がつく……しかし、やはりでたらめだな) 武器なら機動兵器でもお構いなし、ということがだ。もう笑うしかない。

(まあでたらめさはおれももう知っていたことだ。これ以上言っても仕方が無いだろう。それより今は今後の身の振り方の方だな)

「……なるほど、分かりました。この伝説があるため、『ガンダールヴ』であることを知られぬよう気をつけると言うことですか」

オスマンが頷いた。

「うむ、そうじゃ。王宮の連中なぞに知れたらそれこそ戦争に使われかねんからのう」

「……はい」

「で、ここからさっきのどう振舞えばいいかという話に戻るんじやが……」

そこからは素性について聞かれた際、また武器について聞かれた時はどう対処すれば良いのかを話し合う。そしてそれは小一時間ほどかけて、ようやく話がまとまった。

オスマンが息をつく。

「ま、こんなもんじやる。これで早々疑われることはなくなるはずじゃ。……そろそろ時間も遅くなってきたの。ここら辺で切り上げの方が良さそうじゃな」

「ええ、そのようです」

そういつてキョウスケは立ち上がり、ドアに向かった。既に食事も済んでいるし、これ以上いても邪魔なだけだ。

「……しかし、のう……」

「……？ 何か？」

歯切れの悪い言葉に、キョウスケは後ろを振り向いた。そこには真摯な目をキョウスケに向けているオスマンがいた。

「……つかぬ事を聞くが、この世界に呼び出されて辛くは無いのか？ いきなりわけも分からぬ場所に呼び出されて、のう……」

「……そのことですか」

キョウスケは笑みを浮かべた。

「心配はいりません。おれは状況への適応は早いようで、当初は戸惑いましたがもう慣れました」

「……ていつても、まだ二日しかたつとらんぞ？ それにお前さんはやけに落ちついとるし、普通なら帰ることに躍起になつと思ふんじやが」

「適応が早いと言いましたが？ それにこの態度は地です。慌てふためいても帰れるというわけでもありませんし、だからといって帰

るのをあきらめたわけでもありません。今も手がかりを探していません」

動じることなく言うキヨウスケにオスマンが呆れたような顔になり、降参と言うように手を上げた。

「分かった分かった。確か庭でもミス・ヴァリエールが言っておつたが、おぬしは武器だけでなくおぬし自身も本当にでたらめじゃのう。普通ならパニックでも起こしておるだろうに、まるでそんな様子も見せんのだからの」

「……それは褒め言葉と受け取っておきます」

「わしとしては呆れて言っただんじやがの。……まあいいわい。おぬしの話にも興味が湧いたことじゃし、帰る手段が無いかわしのほうでも調べてみるとしよう」

じゃがの、とオスマンは続け、にやりとした笑みを口に上らせた。「もし帰る手段が見つからんとしても、恨まんでくれよ。なあに、こつちの世界も住めば都じゃ。それにそれだけの男ぶりじゃし、一人や二人、嫁さんもすぐに見つけられるだろうよ」

しかしオスマンのその言葉に、キヨウスケは笑みを崩さぬまま応じる。

「……ご厚意、感謝します。しかし、その話は無かったことにしてください」

「ほう、何故じゃ？」

「帰る手段は必ず見つけ出すからです」

アルトがある限り、いつまでもここにいれば争乱の火種を残すようなものだ。そして……

「……それにおれには」

仲間の姿が、そして明るい愛嬌を振りまく一人の女性の姿が、キヨウスケの脳裏に浮かぶ。

「帰りを待っているやつが、いますから」

そう言って、学院長室から出て行った。

## キヨウスケの長い夜

学院長室に残された二人は、お互いにイスを向けた。

「いやはや、まさか彼が異世界からやってきた人間だったとは……想像もしておりませんでした」

「うむ、まったくじゃ。この年になってこんなに驚くなんぞ滅多に有り得ん話じゃわい。……しかし異世界、か……どんな所なんじゃろうのう？」

そこでオスマンがいすにもたれかかり、目を閉じた。その閉じたまぶたの裏には、キヨウスケから聞いた話を基にして想像した異世界の情景がある。といっても想像しきれない為、不確かなものだった。

コルベールも手をあごに添えて考え始めた。

「興味はありますが、しかし魔法が無くその代わりに力ガクというものが発達して魔法の代わりをしていると言われましても……」

「うむ、その想像がまったくつかんからの。魔法が無くてどうやって金属の練成などをしてるんじやろうか」

「まったくです。しかもそれでいて銃といった武器のレベルは段違い、と……仰る通りまるで想像できませんな」

「……じゃが……」

「はい、だからこそ興味が湧きます。彼はいくつかその世界の道具を持っているようですから、いつか貸してもらいましょう」

そして、二人して彼方の世界に思いを馳せた。

彼らがキヨウスケから聞いたのは、衣食住の話と武器や機械の一部についてである。キヨウスケは話す内容にも気をつけていたらしく、ああは言ったものの、アルト自体はもちろん、それに繋がる技術のレベルについては隠していたらしい。

しかしその程度の話でも、まるで見たことも聞いたことも無い世界の話ではキヨウスケの話をただ納得するしかなかったし、また好

奇心を起こしてアルトがらみの技術から目をそらさせるに十分だったようだ。

「家を建てるに際しても科学によって作られたキカイなるものでやるらしいが」「レビテーシオンなどのように浮かせる魔法の変わりとなるものがあるんでしょうか」「うーむ、どうじゃる。食物も力ガクでつくつとると言うが……」「錬金で肉の代替品として作ったものが平民の間ではやっていると言う話を聞きます。しかし彼の話を察するに……」

いつしか話の内容が異世界談義になっていた。

オスマンはその話が一段落したとき、一つ頷いた。

「うーむ、考えれば考えるほどに興味が湧いてくるのう。こりゃもう一度あの青年……なんつう名前じゃったっけ？」

「キヨウスケ・ナンブだそうです。……この名前も聞いたことがあります」

「おお、そうじゃった。彼を呼んでもう一度話してもらいたいもんじゃのう。……それに」

「……？ それに、なんですか？」

「……いや、彼の武器を見た時に気が付くべきだったんで情けない話なんじゃが、宝物庫にある『あれら』の正体が分かるかもしれん。その言葉に、コルベールの顔に驚愕が走った。

「な、なるほど！ 私も今まで気付きませんでした、『あれら』も我々が見たことも無いものでしたし、どこと無く彼の武器に似ている部分がありました！ とすると、『あれら』は……」

「まだ分からんがの。じゃがわしも彼の武器を見て『あれら』……『破壊の杖』と『壊不の鎧』らと同じような感触を受けた。彼なら正体を知つとるかもしれんし、もしやもしたら帰る手がかりになるかもしれん。折を見てあれらのことも話すとしてよう」

「はい、学院長！」

コルベールは興奮で顔を赤くしながら、力強く頷いた。

「……しかし、見事なもんじゃったのう」

「は？ ……と言いますと？」

突然漏らしたオスマンの呟きの意味が分からず、問いたですコルベール。

そのオスマンの目は、キョウスケがくぐっていったドアに向けられていた。

「なに、彼の態度のことじゃよ。いささかぶつきらばうすぎるくらいはあるが、それでも終始落ち着いた態度じゃったしの」

オスマンは先ほどのキョウスケの様子をこう評した。ああと、コルベールも同意してくる。

「確かにそうですね。見事なものです」

「……確かまだ二十二歳と言っておったが、その若さであれか。一体どんな経験をしてきたんじゃか……」

オスマンは腕を組み、顔を伏せた。

「はい。おなじ世代の人間でもあそこまで老成していると言うつか、落ち着いた者はそうはいません。彼の世界もそうです。彼自身にも興味が湧いてきます」

「うむ。……しかし、この後あやつはどうなるのか、そしてどうトリストインで、いや、ハルケギニアで生きていくのかのう……」

これから彼に起こる出来事を考えながら、オスマンは再び呟く。

……しかし実際の所、もうその出来事の二つは起こっていたのであった。

キョウスケは歩きながら、ある問題について考えていた。それは当然……

（さて、どうルイズをなだめれば良いか……）

そう、キョウスケの偉大なご主人様のことである。ある意味では切実な問題であり、キョウスケが部屋にいないことで盛大にむくれているに違いなく、そして一目キョウスケを見れば途切れることなぐ文句を言ってくるだろう。この二日の内にそれくらい分かってしまった。

(別に怖くは無いが、面倒なことこの上ない……な)

学院長室を出て、廊下を歩きながら方策を考えるキヨウスケ。学院長室に言ったことは話せるわけが無いし、やはり無難なところで出歩いていたと言う以外ないだろうが、しかしこれぐらい遅くなつたとなれば納得がいくはずも無い。どれほど喚き散らされることか。キヨウスケはこの所増えてきたため息をついた。

(前途多難だが、これしか手が無い以上仕方が無い。やるまでだ……)

重くなりそうな足を引きずり、ルイズの部屋がある通りまでやってきた。すると、

(? 何だ?)

何故だか分からないが赤い巨大なトカゲ、確かサラマンダーと言っただろうか、が廊下に出ていた。

(だがあれは、キュルケとか言う女生徒の使い魔だったはずだ。それが何故部屋に入らず廊下に出ている……?)

キヨウスケは訝しがる。するとキヨウスケに気付いたのか、サラマンダーがキヨウスケに近づいてきた。

思わず身構えかける。だがサラマンダーはきゆるきゆると人懐っこい鳴き声を上げ、そしてそのままキヨウスケのジャケットの袖をくわえて引っ張ってきた。どうやら害意は無いようだが……

(どうやらおれをどこかに連れて行きたいようだが……)

周囲を見渡してみると、一つの部屋のドアが開け放たれており、それはルイズの部屋の前にあった。恐らくあそこに引っ張り込みたいのだろうか……

(無視しても良さそうだが……おれに用があるというなら、ここで片付けてしまった方がいい、か)

恐らく昼間、ギーシュに勝ってしまったことに難癖でも付けたいのだろうとキヨウスケは考えた。いくらこのサラマンダーに害意が無いとしても油断はできない。それにこの使い魔の主人であるキュルケはルイズのことを馬鹿にしていたし、その使い魔で、しかも平

民であるキョウスケがあのような活躍をされては困るのだろう。

再びため息をつき、サラマンダーに連れられながら自然な動きでワンアクションで右手をナイフに、左手を拳銃のつかめる位置まで持っていく。そしてドアをくぐった。

異世界二日目の夜は、まだ終わらないようである……

入ると、部屋は真っ暗だった。サラマンダーの周りだけぼんやりと光っている。キョウスケが身構えながら歩いていると、暗がりからキユルケの声がかかってきた。

「扉を閉めて？」

しかし疑いも解いていないのに、そう易々と従うキョウスケではない。

「……使い魔でこの部屋に引っ張り込んで、おれに何の用だ？」

「……何の用って？」

「理由も分からずに連れ込まれて警戒しない人間などいないと思うが？」

ああ、とキユルケが言った。

「そういうことね。大丈夫。そんな気は無いし、そうね、態度で示した方がいいかしら」

キユルケが指を弾く音が聞こえた。すると、周囲に明かりが灯っていく。

(……何だあれは)

キョウスケは目の前に広がっている光景を見て唾然とした。

何本もの蠟燭が一行に並べられており、それらがキョウスケの近くにあるものからキユルケの近くのものまで順に灯が点っていった。しかし問題はそこではない。

蠟燭の点った先のベッドの上にキユルケがいたのだが、その格好が何とも、悩ましい姿だったのである。エクセレンが一度こんな格好をして誘惑してきたことがあったため、余計な知識が一応頭に残っていた。

(よく知らんが、確かベビードールだったか？　しかし何故そんなものを着ている……？)

疑問を覚えるキョウスケ。一方キュルケはそんなキョウスケに声をかけてきた。

「襲うつもりならこんな格好なんかしないでしょう？　さあドアを閉めてこっちに来て」

確かに害意はなさそうだ。しかし依然何故こんな姿をしているのか訳が分からない。無視してルイズの部屋に行くと言う手段もあるにはあったが、害意や悪意が無い以上そう邪険に扱うわけにもいかなかった。どうやらここは……

(仕方が無い。行くしか……ないようだ)

キョウスケはしぶしぶ武器から手を離し、そしてドアを閉めてキュルケの座っているベッドに近づいた。

キュルケが燃えるような赤い髪を優雅にかきあげ、につこりと笑って言う。

「座って？」

「言われたとおり座ってやる。」

「……で、何の用だ？」

普段とまったく変わらない声で話すキョウスケ。その様子に何故かほんの少しキュルケが眉を上げたが、すぐに気を取り直して話し始めた。

「あなたはあたしを、はしたない女だと思っでしようね」

「……は？」

意味が分からず、間抜けな声が出た。しかしキュルケはお構いなしに続ける。

「思われても仕方が無いでしょうね。でも、私の二つ名は『微熱』って言うの。その意味が分かる？」

「……いや、分からん」

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だからいきなりこんな風にお呼び出ししてしまうの。分かってる、いけないことな

のよ」

「……」

格好もそうだが言っていることも訳が分からなくなってきた。相槌を打とうにもどうしていいのかまるで分からず、何も言えなくなってしまう。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

そこでキュルケは潤んだ瞳でキヨウスケを見つめてきた。その瞳を男が見れば十人中八人か九人は原始の本能を呼び起こされるに違いないだろう。

しかし何事にも例外はあるものだ。

「……すまん、本当に言っている意味が分からん。何を許すんだ？」  
相も変わらずの無表情のキヨウスケ。……そう、ここにいた。

キュルケの目の奥に激しい焦りが走る。しかし表情を崩さず、今度は手を握ってきた。

「そうね、遠まわしに言うことでもないわ。はっきり言うわね」  
そしてキヨウスケの指をなぞりながら、言う。

「恋しているのよ。あたし。あなたに。恋はまったく突然ね」

「……は!？」

また間拔けな声が出た。今度のはいくらばかりか大きい声だったが。

「あなたがギーシュを倒した時の姿……かっこよかったわ。まるで、そう、孤高の狼みたいに野性味溢れていて激しかった! あたしね、それを見て痺れたのよ。信じられる! 痺れたのよ! 情熱! ああ、情熱だわ!」

「……」

「二つ名の『微熱』はつまり情熱なのよ! あの時からあたしはぼんやりとしてマドリガルを綴ったわ。マドリガル、恋歌よ。あなたのせいよ、あなたが余りにもかっこよすぎるから……ほんとにわたしたったら、みっともない女だわ。そう思うでしょう? でも全部あなたの所為なのよ」

キヨウスケはなんと答えればいいのか分からなかった。何と云うか……余りにも気障過ぎる台詞に呆れていたのである。

キュルケはその沈黙をイエスと受け取ったのか、ゆっくりと目を瞑って唇を近づけてきた。

が、キヨウスケは落ち着いてキュルケの肩を押し戻した。呆れていただけで別に冷静さは失っていない。

どうして？　と言わんばかりの顔でキュルケがキヨウスケを見つめてきた。キヨウスケはそれに真っ向から向き合い、

「……まあ、言いたいことは分かった。つまりお前は惚れっぽく、そしておれに惚れてしまったと言いたいのか」

きっぱりと言う。それは凶星だったようで、キュルケは顔を赤らめた。

「そうね……人よりちよつと恋ツ気は多いのかもれないわ。でも仕方が無いじゃない。恋は突然くるものなのよ」

「……一応言っておくが、おれは平民だぞ？」

「そんなの関係ないわ。恋は突然よ！　すぐにあたしの体を炎のように燃やしてしまうんだもの！　この炎の前には平民も貴族も無いわ！」

キュルケが自信たっぷり言い放つ。

キヨウスケはルイズの時のように痛くなってきた頭を押さえながら、キュルケにあることを言おうとした。

「……すまんがおれには……」

その時だった。いきなり窓の外が叩かれたのである。

見てみると、そこには恨めしげに部屋を覗く一人のハンサムな男の姿があった。

「キュルケ……待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば……」

「ベリッソン！　ええと、二時間後に」

「話が違っ！」

ここは確か三階である。どうやらベリッソンと呼ばれたハンサムは魔法で体を浮かしているらしい。

キュルケは煩そうに胸の谷間に差し込んだ派手な魔法の杖を取り上げ、そちらをろくに見もしないで振った。

蝋燭の火から炎が大蛇のように伸び、窓ごと男を吹っ飛ばす。

「まったく無粋なフクロウ「待て」何？」

「……さっきの男はなんだ？」

「彼はただのお友達よ。とにかく今一番恋しているのはあなたなのよ」

そう言っただけでまたキョウスケに唇を近づけてきた。だがこれ以後もそれどころではない事態が続いたのである。

次から次へと男が現れて、そして吹き飛ばされていった。ついに面倒くさくなったのか、使い魔のサラマンダーを呼んでそいつらを吹き飛ばさせた。

「今日はお邪魔な虫がいっぱいね。ともかくあなたを愛して「帰る」待って！」

問答無用で立ち上がるキョウスケ、そして慌ててそのジャケットの袖を掴むキュルケであった。だがそこに、

「何やってんのよあんた達はああー！ー！！」

扉を蹴破ってルイズが乱入してきた。丁度良いといったタイミン  
グである。ちなみに寝る前だったのか、ルイズはネグリジエ姿と言  
うあられの無い格好をしていた。

艶やかに部屋を照らす蝋燭を一本一本忌々しそうに蹴り飛ばしな  
がらキョウスケとキュルケに近づいていく。そして袖を掴んでいた  
キュルケの手を引つpegし、ものすごい形相でまくし立てた。

「いつまでたつても使い魔が帰ってこないから嫌な予感がしてあ  
んたの部屋を覗いてみれば、誰の使い魔に手を出してんのよツェル  
プ  
ストー！」

しかしキュルケは気にしたそぶりもなく応じる。

「仕方ないじゃない。好きになっちゃったんだもん」

キュルケは両手をすくめた。

「恋と炎はフォン・ツェルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命

よ。恋の業火で焼かれるならあたしの家系は本望なのよ。あなたが一番ご存知でしょう？」

ルイズの手がわなわなと震える。そしてキヨウスケを睨んだ。

「来なさい、使い魔。今ばかりはどんな反論も許さないわ。あのふざけた屁理屈もねええ……！」

そこにキュルケが割り込んだ。

「ねえルイズ、彼は確かにあなたを使い魔かもしれないけど、意思だつてあるのよ。そこを尊重してあげないと」

ずいぶんなことをしれつと言ってくれるものである。キヨウスケの意思を尊重したらキヨウスケはこの部屋からすぐに出て行くことになってしまふのだが……

（挑発のつもりなんだろうが、おれに惚れたというなら少しは言い方を工夫してほしいんだがな……）

このままではとぼつちりを食らうのが目に見えている。どう言つて主人をなだめるかをキヨウスケは考え始めた。しかし幸か不幸か、とぼつちりを食らう前にキュルケがルイズに再び言葉をかけたため、ルイズの注意がそちらに向いてくれた。

「それにね、あなたはいなかったから分からなかったでしょうけど、カフェテラスでの彼の活躍は凄かったのよ。それにギーシュに言った啖呵や首にナイフを突きつけたときの雰囲気なんか本当にかっこよかつたわ」

「……ふ、ふん、それがどうしたつて言うのよ。ナイフがどれほど使えたつて、後ろから『ファイヤーボール』や『ウインド・ブレイク』を撃たれたらどうしようもないわ」

本当はキヨウスケが使えるのはナイフだけではないことを知っているルイズである。しかしここは言い負かされたくないあまり、その辺は伏せて話すようにしたらしい。

だがキュルケも負けてはいなかった。

「ふうん、本当にそう考えているの、ルイズ？」

「な、何の話よ」

「本当にこの……なんていう名前だったっけ？」

キヨウスケは思わず特大のため息をついていた。どうやらろくに名前も知りもせず恋を囁いてきていたらしい。首を振りながら、一応教えておいてやる。

「……キヨウスケ。キヨウスケ・ナンブだ」

「そう、キヨウスケ……って変な名前ねえ……まあいいわ、キヨウスケがそいつらに易々とやられるような人だと考えているわけ？」

「……う」

「どうせあんたのことだから、私に言い負かされたくないばかりにそう言っているだけでしょ？ 見え見えよ」

「そ、そんなこと無いわ、何言ってるのよ『お熱』のキュルケ！」

「『微熱』よ！ 言ってくれるじゃないの『ゼロ』のルイズ！」

「あによ！」「何よ！」

言い争いが睨み合いになってしまった。双方うくと唸りながら歯を剥き出しにしている。

呆れ返って首を振るキヨウスケ。

(……こいつらと付き合っていると本当に疲れるな……)

もう付き合っていないらしい。勝手にしてくれとばかりに急ぎ足でさっさとキュルケの部屋から出た。

「……あ！ くら、待ちなさいよ使い魔！」

で、ルイズも付いてくる。結局そのまま二人でルイズの部屋に帰っていったのであった。

部屋に帰るや否や、

「夕食から帰ってみればあああんたがいないし、夜出歩くぐらいなら文句はいい言わないようにしようとおおおお思っていたけど、よりによってあの女のとととところに行ってたなんてえええー！ー！ー！」

髪を逆立て、腕を振り回し、声を震わせてこれ以上無いくらいに怒りまくるルイズ。

もうどうでも良くなりかけていたが、それでも一応キヨウスケはなだめてやった。

「誤解だ、ご主人。おれは確かにあの女の部屋に入ったが、それはあいつの使い魔に連れ込まれたからだ。別にあの女には何もしていない」

「嘘ばかり！！ どうせあの女の色香に惑わされたんでしょ、このムツツリ使い魔！ いえ、今となっては使い魔なんていうのもおこがましいわ！ この犬！！ ムツツリ犬ーーーー！！！！」

興奮してこちらの言うことなどまるで聞いていない。しかも振り返って机の方に向かったと思っただら、なんと乗馬用の鞭まで持ち出してきた。

「ああああなたのこと少しでも認めた私が馬鹿だったわ。やっぱり使い魔は使い魔として、こここここの場でしゅしゅしゅ修正をしておかないとねええええーーーー！！」

そしてそれを振り回し始め、あるうことがキヨウスケに突進してきたのである。

もうこっちに来てから何度目か分からないため息をキヨウスケはついた。

（これを見ていると段々評価が揺らいでくるな……おれも目が狂ったか？）

キヨウスケの殺気に怯まなかった点は大したものだが、しかしこんな取り乱し方をされては本当にこいつが主人で大丈夫かと思わずにはいられない。難儀と言うか、余りにも直情的過ぎる主人である。

（……だが今はそんなことを考えている場合ではない、か）

目の前の怒れる主人を何とかせねばなるまい。突っ込んでくるルイズを横に体を移して避け、さっさと足に引っ掛ける。

「え？ きゃっ！」

そして倒れそうになるルイズの腰に腕を巻きつけ、更にもう一方の手で鞭を没収した。力も技もなく、考えなしに突進してくるだけなのだ。簡単に押さえられるに決まっている。

「は、離しなさいよ!!」

ばたばたとキョウスケの腕の中で暴れるルイズ。なぜか顔が赤くなっている。

「いい加減にしろ。おれはあの女に何もしていないと言っただろう。何なら明日にでも本人に聞いてみればいい」

重ねて言うキョウスケ。あくまで不遜さを崩さないその態度が功を奏したのか、だんだんルイズの動きも収まってきた。

「……ほんとに？ほんとに何もしていないわけ？」

疑わしげに聞いてくる。

「ああ、本当だ」

「……え、ええと、でもあの女って、言うのも腹立たしいけど美人じゃない？それなのに何にもしないって……あ、あんたまさか……!？」

……何か変な想像をしだしたらしい。今度は段々顔を青ざめさせ、戸惑ったようにキョウスケに聞いてきた。キョウスケは思いつきり疲れた顔をした。

「……そんなわけが無いだろう。しかも何故そんなことを想像する」  
「で、でも私の姿を見ても何にも言わないし……って違う！そ、そう！女の子のことなんてあんまり見てないからよ!!」

ていうか離しなさいよ、と言ってキョウスケの腕を振り払った。  
キョウスケは首を振り、眉間を思いつきり寄せて（といつても実際は少ししか動いていない辺り、キョウスケらしい）答えてやる。

「……それで何故その考えに行き着くのかおれにはいまいち分からんが……まあいい。理由は、単におれがあの女に興味が無い……それだけだ」

元々キョウスケはその手の話には無関心だったし、しかも今はエクスレンという恋人がいる。彼女以上の女性などキョウスケの中には一人もおらず、そしてそんな女性が胸の中にいる以上他の女性に興味を持つはずが無いのだ。……気恥ずかしいため、口には出さないが。

そこで今度は逆に、キヨウスケがルイズに聞いた。

「しかしなぜそこまであの女を嫌う。別におれはあの女に興味は無いが、おれがああの部屋にいたくらいで何もそこまで怒ることは無いだろうか？」

「いいえ、大いにあるわ。……そうね、まずそこから説明しなきゃならないかしら」

床を踏み鳴らしながらルイズが話し始める。

「まずキュルケはトリステインの人間じゃないの。隣国ゲルマニアの貴族よ。それだけでも許せないわ。私はゲルマニアが大嫌いなもの……」

「でもそれだけじゃないわ。私の実家にあるヴァリエール領はね、ゲルマニアの国境沿いにあつて両国が戦争になるといつも先頭切つてゲルマニアと戦つてきたの。そして、そして国境の向こうにある地名はツエルプストーよ！ あいつが生まれた場所だわ！」

ルイズは歯軋りをしながら叫ぶ。だがこれだけでは終わらず、それからルイズの憤慨は途切れることが無かつた。

曰く、戦いになるなり殺しあつた仲である。曰く、ルイズの家系の人間は代々恋人をキュルケの家系の人間にとられまくつた……だそうである。しかも一々とられた人間の名前を挙げてくれたため、妙に生々しい話になつた。

「……なるほど」

よくもそこまで因縁が続く家系もあつたものだ。それなら確かにここまで嫌うのも領けないことも無い。

「しかしおれは別にご主人の家の者でも何でもないだろう。そこまで拘る必要も無いと思うが」

「いいえ、たとえ使い魔であろうと小鳥一匹であろうとキュルケにとられたりするのには絶対に許せないわ！ とうかがやつぱりあんだ……！！」

「……だから違つと言つただろう。あくまで例えの話だ」

やれやれと首を振り、部屋に置いてあつたサバイバルキットを手

にとって再びドアに向かった。ルイズが慌てる。

「な、何よ！ また出て行く気！？」

「そうだ。……ご主人が頭を冷やしてくれんと眠れそうにないんでな。だが今の状態では無理そうだ。外で寝た方がよく眠れる」

「な！」

「だが安心しろ。明日の授業が始まる際にはこの部屋の前に来ておくし、使い魔としての役割は忘れずに果たす。そうすれば文句は無いだろう？」

「う……いや、あるわよ！ 態度を直したり、私の世話もきちんと……」

「そういうことだ、ご主人。じゃあな」

で、長い夜もようやく終わると安堵しながら部屋から出て行くキヨウスケであった。

少したった後、再び獣の叫びが聞こえてきたのは言うまでも無い。

## 虚無の日のお出かけ

キュルケは昼前に目を覚ました。今日は虚無の曜日である。キョウスケを部屋に連れ込んだ日から数日が経っていた。

「よし……！」

いつになく気合を入れ、キュルケは起き上がって化粧を始めた。これもやけに念入りである。だがこれはキュルケにとって見れば当然のことであった。

未だにキョウスケが落とせないのである。

始めはルイズの気性を考えてすぐに追いつくものと思い、そしてその時を狙えば良いと楽観的に考えていた。しかし予測は見事に外れてしまったのである。ルイズは何かしらの不満をキョウスケに持っているようだが、かといって外に放り出すといったことはしなかった。なら正攻法で正面から攻めようとしてみれば、そこもルイズが目を見張らせてキョウスケに近づいてくる人間を見張っていた。どうやらこちらの動きを警戒されていたらしい。

それならルイズのいない時をと狙ってみたのだが、何とキョウスケもガードが固かった。しかも部屋に呼んだ際に付き合っている男達を見られてしまったせいで、余計に不信感をもたれてしまったようだ。

ここまで来るとさすがにキュルケも手ごわいと感じざるを得なかった。しかし、

（この『微熱』のキュルケが一人の男も落とせないなんて冗談じゃないわ！）

……これは男殺しのプライドとでも言うのだろうか？ ともかく念入りに準備を整え、今日こそキョウスケを落としてみせると気合を入れた。

そして部屋を出て、ルイズの部屋の扉をノックする。始めの頃は外で寝ることの多かったキョウスケだが、今は部屋で眠るようにな

っている。恐らくいるだろう。

ノックした後、キュルケは顎に手を置いてにっこりと笑った。

（キョウスケが出てきたら抱きついてキスをして、ルイズが出てきたら、そうね、流し目を送って中庭に誘い出そう。そこで手練手管を使って落として見せるわ！）

キュルケは未だに自分の求愛が拒まれるとは思ってもいないのであった。

しかしいくら経ってもノックの返事が無い。あけようとしたが、鍵がかかっていた。

キュルケはなんの躊躇いもなくドアに『アンロック』の呪文をかけた。本来は校則違反なのだがキュルケはまったく気にしない。恋の情熱は全てのルールに優越する、というのがツエルプストー家の家訓なのであった。

ドアを開けて入る。しかし、部屋の中には誰もいなかった。

キュルケは部屋を見回した。

「相変わらず色気の無い部屋ね……」

そんな感想を漏らす。ふとそこで、ルイズの鞆が無いことに気付いた。虚無の曜日なのに鞆が無いということは、どこかに出かけたのだろうか？

キュルケは窓に近づき、外を見回した。すると門から外に出て行く二つの影を見つけた。目を凝らしてみると、それはキョウスケとルイズであった。

「なによー、出かけるの？」

キュルケはつまらなさそうに呟いた。そして少し考え、ルイズの部屋を飛び出そうとした。

「……ん？ 何あれ」

だがそのすんでのところで、キュルケは火の気配のするものを見つけた。火属性のメイジのため、キュルケは火の持つ気配に詳しいのである。

それは見たことの無いものが詰め込まれているトランクだった。

どうやらこの火の気配はこれらから漂っているらしい。

近づき、しげしげと眺めて見るキュルケ。

(何かしらこれ。以前来たときはなかつたけど……そうか！ これダーリンの持ち物ね！)

……いつの間にかキョウスケはキュルケのダーリンになっていたらしい。

「火の気配を持っていている物をたくさん持っているなんて、やっぱり私とダーリンは相性が抜群ね！ ……でも見たこと無い物だらけね。服もそうだったけど……あら？」

そこでキュルケは特に気配が強いものを見つけた。思わず手に取り、じろじろと見てしまう。

それは手触りがごつごつとしていて歪だが、卵のような形をしていてしかも金属でできていた。だが、なぜこんなものから火の気配がするのだろうか？

(……分かんないわね……ま、でもいいか。どうせ恋人になるんだし、ちょっと歪だけど記念にこれを持って行ってこれが何か教えてもらうかしら！ 火の気配が特に強いんだし、私とダーリンとの橋渡しには最適よ！)

よく分からないままウキウキ気分でそれを持ち出すキュルケ。そしてようやく、ルイズの部屋から出て行った。

(……一体こいつはどうしたんだ？)

馬の背に乗りながらキョウスケは思う。視線の先には桃色の髪をしたキョウスケの主人がいる。ふと視線に気付いたのが、ルイズが首を回してこちらを見上げてきた。……ここのことろずっと続いている、不機嫌顔で。

「あによ。じろじろ見て」

「……いや、何でもない、気にするな。それより手綱の方に意識を向ける」

分かっているわよ、と口を尖らせながら言って再び前を向いた。

……ここ数日の間に色々なことがあった。

厨房で食事ができると聞いて行ってみれば平民であるにも拘らずメイジを倒した英雄ということで料理長に騒がれたり、キュルケにしつこく付きまとわれたり、何故かは知らないが妙な目で見てくる女生徒が出てきてそのせいで男子生徒からも敵意のこもった目で見られたりと、基本である主人の授業に出て魔法の知識を仕入れたりというのは変わらなかったが、その間に挟まれる出来事が変に多くなったのである。

しかしもつとも大きな出来事といえば、やはり目の前にいる主人のことだろう。一言で言えば扱いがマシになったのである。かといって態度の方はどうか言えばそちらの方はなぜか悪化してしまい、常時不機嫌顔という有様になってしまった。

何故こんなことになったのか、こつちに来てから最大に訳が分からない。

(確か、キュルケに部屋に連れ込まれた次の日からだったか……)

キヨウスケはその日、授業に参加するためにルイズの部屋に向かった。恐らく怒鳴られるだろうとは思っていたため、疲れることだと呟きながら。

しかし部屋に入ってみても、怒ってはおり、口の端がぴくぴくと引きつっていたがルイズは怒鳴り散らさなかったのだ。

キヨウスケは不覚にも驚いてしまい、つい「……ご主人は、本物か？」と口に出してしまっただが、「……証明してあげようかしら……？」と徹底的に据わった、しかもまた隈ができていて余計に怖い目つきで言われたため「分かった」と言うしかなかったのだ。しかし未だに疑いは晴れない。その後もあれほど従わせようとして何故か遠まわしに 食事に関することを言ってきたくせにある日突然食堂に来ていいと言いだしたりもした。そして今回に至っては武器を買ってくれるという。

いよいよ疑いは深まるばかりであった。

(本来ならいらんと言う所だが、言い訳はあるにせよ『こちら側』

の武器ばかりを使うわけにもいかんしな……むしろ丁度良い、か。  
……しかしどうも腑に落ちん……）  
こいつの扱いの、そして態度の変化は一体なんなのかと、ますますの疑いを含んだ目でルイズを見るキョウスケである。  
しかし実のところ、このルイズの変化は彼女にとつて見れば当然のことであった。それは、キョウスケがルイズの部屋を出ていったときから始まっていた……

「まったくあの使い魔は……！」

地団太をふみながらベッドに向かうルイズ。こつちの話を聞いてないこと甚だしいと、忌々しげに呟く。

（しかもご主人様をほつといて出かけた拳句、キュルケの部屋に入つて、やっぱり外で寝る？ ふざけんじやないわよ！）

やっぱりここは残ったお仕置き案、外にほつぽり出すのは今の様子を見る限り没とした方が良さそうだが、を実行に移すべきかと思いかけた。

しかしそこで、何かが早まるなどルイズに告げてきたのである。何でよとそれに反論しかけるが、ルイズ自身もどこかで引っかかる部分があったのだらう。何か見落としがあるのではないかと思いつき、少し考えてみた。すると、

（……！ そうよ、ツエルプストーリー！）

そのことに気付いたのだった。

今キョウスケにお仕置きなんかしてしまつたら、間違いなくあの色ボケが使い魔に誘惑をしてくるだらう。食事を抜いても色ボケが出すであらうし、しかも最悪、愛想を尽かして使い魔自身がルイズから離れていってしまうかもしれない。

（あの使い魔ならやりかねないわ……というか絶対にやる！）

そう考えると、どうしてもこれ以上扱いをひどくするのはまずいという考えが出てきてしまうのだった。

ここら辺は言ったことを貫くキョウスケの性格を知っている者な

ら、そんなことは有り得ないと言う所であろう。しかし、ルイズはキヨウスケの人柄の一端に触れたといつても出会ってまだ数日である。これ以上したらまずいのではないかと思う気持ちがあった。

（た、確かに活躍の割に余り良い扱いはしてなかったかもしれないわ。でも使い魔なんだから、これぐらいは当然、なんだろうけど……）

ベッドに入っても眠れず、悶々と考え込んでしまう。結局昨日と同じく朝まで考え込み、そこでようやく許すことに決めたのだった。しかしプライドの問題もあるため、直接は言わないにせよ食事関連で攻めることにしたのであった。まったくもってプラ（以下略！）しかし！！

その認識が甘いと思い知らされるのはすぐであった。

どうもその日以降の使い魔の様子がおかしかったのである。食事のことに關して遠まわしに仕掛けてみたのだがなにか反応が変だった。リアクションは返してくるのだが、どうも薄いような気がするのである。感覚的なものであるため、断定はできなかったが。

だがそれが間違いではないことはすぐに分かった。偶然使い魔が厨房に入っけいき、そこで賄いを食べていることを見つけた生徒と会ったのだ。ルイズに悟られないように気をつけていたキヨウスケであったが、しかし偶然というものまでは防ぐことができなかったようだ。

これですますルイズは危険だということを確認（誤認）する。しかもその頃には更なる追い討ちが来ていることにも気付いていた。キュルケ以外の数人の女生徒の使い魔を見る目が変なのだ。そこで品は良くないが、聞き耳を立てて彼女達の会話を盗み聞きをした。

すると、驚くべき発言を彼女達はしていたのである。

「ね、ねえ、大っぴらには言えないんだけど……ルイズの使い魔の人って……」

「う、うん……なんか、かっこいいよね」

「私もそう思う。なんか、この男子には無い頼もしさがあるって  
いうか、野性味があるっていうか……」

「初めは平民のくせになって思ったけど、今になって考えてみると……  
…凄かったよね、あれ……」

あるうことが、使い魔に狙いをつけたと言う内容であった！

何とか表面上は顔が引きつく程度で抑えられた。（実際はそこま  
でなっついては意味が無い）しかし内心では驚きまくっていたルイ  
ズである。どうやら相手が平民ということも忘れさせるほど、カフ  
エでの活躍は目を見張るものがあつたらしい、が、ルイズにとって  
は冗談ではなかった。

（う、嘘でしょ……！ キュルケに続いて厨房、果ては学院の女生  
徒まであいつに味方するなんて！ も、もしほんとにここで扱いな  
んでひどくしたら……！！）

間違いなく出て行く、というかどんな人間でもそうする！ ……  
この結論に達してしまったルイズであった。ますます悶々と考え込  
む。

（でもあんな態度許せないし、でも扱いをひどくしたら出てっちゃ  
うかもしれないし、でもあいつって私のことどう思ってるか分かん  
ないし、でも許しちゃうのも癪に障るし、でもキュルケたちにあい  
つを取られるのはもつと嫌だし、でも、でも……！！！！）

……素直に自分の気持ちを認めればいいのにも拘らず、悶々とい  
つまでも考え込むルイズであった。まっつったく（以下略！！）

で、結果として扱いは良くするものの、納得できないという考え  
から常に不機嫌顔になってしまい、そして剣を買いに行く今もなお  
継続中となつてしまったルイズであった。強情もここまでくると見  
上げたものである。

そしてそうこうしている内に、城下町に着くのであった。

トリスティンの城下町をキョウスケとルイズは歩いていた。ちな  
みに魔法学院からここまで乗ってきた馬は町の門のそばにある駅に

預けてある。

(……少し腰が痛むな)

ぼんぼんと腰を叩く。生まれて初めて馬というものに乗ったため、上下の動きはPTで慣れていたものの少し腰を痛めてしまったようだ。

(しかし、それよりも……)

キヨウスケは辺りを見渡しながら、

(ここがこの国の首都、と言うわけか。…狭い道だな)

そんなことを考えてルイズの後ろについて歩いていく。ルイズはそんなキヨウスケの様子を田舎くさいわよと言ってきた。無論今も不機嫌顔である。

「仕方ないだろう、一応初めてくる場所だ。次に来たときは興味がなくなっているだろうが、な」

心の中で、おれの世界では珍しいこともあるが。という言葉を書き記しておいた。

ルイズはそんなキヨウスケの様子に納得できず、振り向いてぶーぶー文句を付けてくる。

「そんな様子でどうすんのよ。私財布持ってるし、そんな様子じゃスリだとかに襲われたとき対処できないじゃない」

こんなに人通りがあるっていうのに、と視線で周囲を指しながら言う。なるほど、確かにキヨウスケが狭いと評したように道路は五メートルもなく、そこを大勢の人間が行きかっているためスリには絶好の場所と言えた。

ちなみルイズは当然のことながらキヨウスケに一度は財布を押し付けようとしたが、やっぱりぱりぱりさりと断られたのであった。

しかし言われたキヨウスケはまるで動じず、

「それなら追って叩きのめすまでだ。それに、おれもそういった気配ぐらい読める。近づいてきたところを叩いてもいい」

自信たっぷりと言い放つ。

するとみるみるルイズの不機嫌顔が深刻になっていった。うーと

唸り声を上げ、それでも言い返してくる。

「で、でもメイジが相手だったらどうすんのよ!」

「……メイジは貴族なんじゃないのか?」

疑問に思い、キヨウスケはたずねる。

「確かに貴族は全員がメイジだけど、メイジの全てが貴族ってわけじゃないわ。いろんな事情で勘当されたり家を捨てたりして身をやつして傭兵になったり犯罪者になったりする連中もいるのよ」

「……そうか。だが、その時はこれを使えばいい」

拳銃をポケットから出すキヨウスケ。そう何度も使うとまずいだろうが、一回しか使わず、なおかつ単発で仕留めればこの世界の銃でやったとごまかせるだろう。

この数日のうちにガンダールヴの力を確認しておいたため、この人ごみで撃ったとしても間違いないと当て、なおかつ殺さないことができる。そのことをキヨウスケはルイズに（ガンダールヴの内容は避けて）断言してやった。

「要らん心配などするな。それよりも武器屋に行くんだろう? 早く案内してくれ」

まったくもつてにべも無かった。悔しさ丸出しの顔でう〜!! と唸るルイズ。そしてふいつと前を向いて黙ってしまい、足を速めるのだった。

キヨウスケは首をかしげ、一体いつになったらこれは直るんだと思いつながら足を進めた。鈍いのは相変わらずであった。

その内、ルイズは更に狭い通りに入っていった。ごみや汚物が道端に広がっており、悪臭が鼻を突いてくる。

（臭いな……だが、確か『こちら側』でもこういう時代の都市では、道にごみを捨てていたと言う話があったか……そこらへんは変わらんようだな）

考察するキヨウスケ。しかしその一方、臭いと思っただけでも表情が変わっていないあたり、鉄面皮と言うにも程があるような気がしないでもない。

そしてそのまま歩き続け、ようやく武器屋を見つけ二人。扉を開け、店に入っていった。

店の中は昼間だと言うのに薄暗く、ランプの灯りが点っている。様々な武器や甲冑が店内に乱雑に並べられていた。

店の奥でパイプをくわえていた中年の男が入ってきたルイズとキヨウスケを胡散臭げに見る。そこでルイズの紐タイ留めに描かれた星の紋章に気付き、パイプをはなしてドスの利いた声を出した。

「貴族の旦那、うちはまっとうな商売をしまさあ。お上に目を付けられるようなことをした覚えはありませんぜ」

(……そういつている時点で怪しいんだがな)

目を少し細め、こう考えるキヨウスケである。一応警戒として、足を気付かれない程度に下げた。

そこでルイズは一歩前に出て腕を組み、

「客よ」とまだ続いている不機嫌顔で言った。

ほう、と男は驚いた声を上げた。

「こりやたまげた。貴族が剣を買って言うんですかい！」

「……どうしてよ？」

「いえ若奥様、坊主は聖具を振る、兵隊は剣を振る、貴族は杖を振って陛下はバルコニーからお手をお振りになるっていうのが相場となっておりまして」

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣を振るようですよ」

主人は商売つ気たつぷりにお愛想を言った。そしてキヨウスケをじろじろと眺めてきた。

「剣をお使いになるのはこの方ですか？」

ルイズは頷き、

「私のために、なるべくこいつの見映えがよくなるものを選んでください」

ツンとした声で言う。

主人はいそいそと奥の倉庫に消えていった。途中、聞こえない小

声で呟く。

「こりゃ鴨がネギをしょってやってきたわい。せいぜい高く売りつけておきましょう」

程なくして、一メートルほどの大剣を持って主人が現れる。鋭い光を放っており、なかなか切れ味も良さそうだった。

「両手持ちのツヴァイハンダーでさあ。その方もかなり鍛えておられるようで、これなら見映えも良くなり、更に威圧感も増すこと請け合いでございませう」

そして付け加えるように言う。

「そういや昨今は宮廷の貴族の方々で下僕に剣を持たせるのがはやっておりますね。まあその際に選ぶのはレイピアなんですが、この方だったらこれでございませう」

ルイズはその言葉にぴくりと眉を上げ、たずねる。

「貴族の間で下僕に剣を持たせるのが流行ってる？」

主人はもつともらしく頷いた。

「へえ、なんでも最近このトリスティンの城下町を盗賊が荒らしております……」

「盗賊？」

「そうです。なんでも『土くれ』のフーケとかいうメイジの盗賊が貴族のお宝を盗みまくってるって噂で、貴族の方は恐れて下僕にまで剣を持たせる始末で、へえ」

「ふーん……」

ルイズは盗賊には興味が無かったようで、気の無い返事で返した。その目視線はずっと、目の前にあるツヴァイハンダーに向かっている。と、そこで店の扉のところまで立って黙っていたキョウスケが口を開き、「ご主人」とルイズに近づいて呼びかけた。

「あによ」

「おれにも少し触れさせてくれ。一応おれの使う武器になるかもしれん以上、おれにとつて使い勝手がいいか知っておきたいんだが」

ああとルイズが頷き、「分かったわよ」と言っていてくれた。

キヨウスケは主人に近づき、ツヴァイハンダーを受け取る。とたん、キヨウスケのルーンが輝きだし、この剣とキヨウスケとの相性から、使い方、構造に至るまでの情報を伝えてきた。

その時ふと、キヨウスケは周りに気付かれないほどの微かな笑みを漏らし、ルーンを見た。

（おれは元々こういう武器とは無縁だったんだがな……ブリットや少佐なら、これが無くても使えただろうに）

仲間の何人かを思い出してそんな感想、そして感傷を持ったのであった。しかしそれは一瞬で、すぐにもとの表情に戻り、ルイズに呼びかける。

「いいだろう、これなら使いこなせるはずだ」

続いて店主に向き直り、これはいくらだと告げようとした……その時であった。

「おまえさんがその剣か……もったいねえな」

と言う声が、店内に響いたのである。

突如聞こえてきた謎の声に反応し、キヨウスケはその方向に向き直って剣を構えた。

「おいおい、そんな警戒すんなって。ただ俺はおまえさんの実力を褒めただけだぜ」

しかし、かかってくる声は変わらぬ口調のままである。しかも声はするのにまるで姿が見えない。キヨウスケはいぶかしんだ。

（これほど近くにいと分かる声であるにも拘らず、姿がみえんだと……透明になる魔法でも使っているのか？）

そして魔法のことを思い出して、そんなことを思っただった。だが、キヨウスケの不安は杞憂に終わる。

「こらあ、デル公！ 余計なこと言っんじゃねえよ！」

主人が声の方に近づき、一本の剣を手を取った。

それはキヨウスケが持っているツヴァイハンダーと長さはそれ程変わらないが、刀身の細い薄手の長剣であった。ただ表面にはさびが浮き、お世辞にも見映えがいいとはいえない代物だったが。

なぜ剣を取るとキヨウスケが思っていると、

「何だよ、本当のことじゃねえか！ いい代物が無くてあんなモンしかまともに出せねえ店の店主が威張ってんじゃねえよ！ ちったあ口で売るより中身を売ることが覚えやがれ！」

なんとつばの部分をかチャカチャと鳴らして、剣が喋ったのである。非常識には大概慣れたと思っていたキヨウスケだが、再び驚かされることになったのであった。

「それって、インテリジェンスソード？」

ルイズも戸惑った様で、当惑した声を上げる。振り返りもせず到店主が答えた。

「そうでさ、若奥様。意思を持つ魔剣インテリジェンスソードでさ。いったいどのメイジが始めたんでしようねえ、剣を喋らせるなんて……とにかくこいつはやたらと口が悪いお客に喧嘩を売るは、果ては店主の私に歯向かって来る始末で……やいデル公！ いつもいつも俺が商売していれば余計な口を挟みやがって。これ以上逆らうと本気で溶かしちまうぞ！」

「おもしれえ、やってみろ！ どうせこの世にやもう飽き飽きしてたところだ！ 溶かしてくれるんなら上等だ！」

……本当に口が悪い。同じ意思を持った作られたものである彼女等とはえらい違いであり、しかも平然と、造物主ではないにせよ、主人に歯向かっていた。感心すら覚える。

（……大したものだ。……しかし、ずいぶん簡単に受け入れられているな……もしかしたら、一部では『こちら側』の技術を越えているんじゃないのか？）

そこでふと、剣にできるのならアルトといった機動兵器にも意思を持たせることができるのではないかと言う妙な考えが浮かんだ。

しばしそのことを考え、そして即座に首を振った。危険すぎる。

（特にこんな状況でそんなことをしたら、一歩間違えればアルト自身が世界征服に乗り出しかねん。しかも）

ちらりとまだ争っている二人を見る。

(これでは余計に不安になるだけだ。……馬鹿なことを考えたな)  
そこで思考を打ち切った。しかし、その一方で興味は湧いてきて  
いることを自覚していた。

(喋る剣、か。……面白い)

ツヴァイハンダーをそこらへんに置き、キヨウスケは二人に近づ  
いた。そして口を開く。

「デルFRINGER、と言ったな」

「ん？ なんでえ、まだ決着はついてねえんだから後にしろい！」

「そうですぞ下僕のおんちゃん。どうにかしてこの野郎を……」

口を揃えて反論してくる二人(?)。しかし、キヨウスケはばっ  
さりと無視した。

「さっきおれに言っていたことは本当か？」

「へ？ さっき……ああ、俺がお前さんじゃあの剣は似合わねえっ  
てことか。おうよ、本当だ。掛け値なしでな」

「なら聞く。どんな剣がおれに合うと思うんだ？」

「もちろん俺様のような剣だ！」

「違うわよ(だろ)！」

間髪いれずにルイズと店主が反突っ込んできた。しかしキヨウス  
ケは構わず、デルFRINGERの答えに一つ頷いて、店主の腕からデ  
ルFRINGERを取るのであった。

ルーンが輝き、デルFRINGERという剣の情報をキヨウスケに伝  
えてくる。そして、微かな笑みを浮かべた。どうやら言うだけのこ  
とはあるらしい。なかなかの潜在能力であった。だが、

(……おかしいな。読み取れん情報が、一部にある……?)

そう、ガンダールヴのルーンでも読み取れない情報がデルFRING  
ガーにはあるのだった。疑問に思うが、しかし使えることは確から  
しいと考えてそこで考えるのを止める。そして

「いいだろう、お前を買ってやる」

とキヨウスケは言うのだった。

とたん、ルイズが慌て始める。

「ち、ちよつと！　ここに来た理由を忘れてない？　私はあんたのみ、見映えをよくするために……」

「それでもいいが、おれは少し興味がこいつに湧いてきたんでな。……だが、デルフリンガーと言ったか？　一つ、買うには条件がある」

「ん？　……！」

キヨウスケは笑みを消し、険しい目を向けていた。デルフリンガーはその視線の鋭さに一瞬、言葉を失う。

「言うておくぞ。お前はお前のことをあの剣以上だといった。おれはお前への興味とそれを信頼してお前を買うが、だが言った以上証明して見せる。……いいな？」

ガンダールヴの能力で大体は掴めたものの、やはり実践してみなければ信用できない。情報はスペックというだけで、信頼性があるかを知るのは試さなければ分からないのだ。機動兵器のテストパイロットを多く務めてきたキヨウスケは、そのことを身に染みて分かっていた。

キヨウスケは店主の方を向き、言う。

「余っている鉄材が何かは無いか？　この二つの剣の試し切りがしたい」

「もう、結局そんなボロ剣を買っちゃって……！」

ぶつぶつと通りを歩きながらいうルイズ。そう、キヨウスケの背中には鞘に収めたデルフリンガーがあった。

あの子の試し切りで見かけとは正反対の切れ味をデルフリンガーは見せ、その結果にぼんやりとしている主人に店に飾られていた値段で買い取ったキヨウスケである。（当然デルフリンガーの真価に気付いた主人はそれなりの金額を取ろうとしてきたが、先手を打って飾られていた値段を突きつけ、押し切ったのであった。店主が悔しかったことは言うまでも無い）

キヨウスケはしれつとした様子で言い返す。

「使う以上、見掛けが悪かろうが使えるものを使った方が良いに決まっているだろう。それとも何か？ 見かけだけを重視して、おれが使い魔の仕事をするのを邪魔したいのか？」

「……ッ！！ 分かったわよ、もう！！ ほんつとに主人の言うこと聞かない使い魔なんだから！！」

非の打ち所の無い正論に、顔を赤くして顔を背けてしまいうルイズそこに、

「いやはやたいしたもんだねえ、相棒」

余計な乱入が入った。デルフリンガーである。

「『使い手』で貴族相手にこの立ち回り、しかもまるで怯えてねえときてる。さつき俺に向けた目も相当の迫力だったしな。見慣れねえ服を着てたりするし、おまけに俺たちのしらねえ武器も持ってやがる。……おめ、一体何モンだ？」

同じ武器同士だからなのか、キョウスケが持っている武器に気付いたようだ。一瞬キョウスケの目が細まり、前を歩いていたルイズはキョウスケの発する雰囲気の冷たさにびくつとする。

だがすぐにキョウスケは肩をすくめ、言ったのである。

「単なる使い魔だ。そこにいるご主人のな。……これ以外の答えがあるか？」

そして視線でルイズを指した。この答えにしばしデルフリンガーは黙っていたが、やがてけらけらと笑い始めた。

「ま、それもそうか。変なこと聞いてすまねえ。これからよろしくな、相棒」

「ああ、頼む」

そう言いあいながら、二人の親しげな態度にますます不機嫌になつて早足を始めたルイズ。そしてそれを追いかけるキョウスケであった。

その一方で、先ほどの店の店主がもう一度痛い目を見ているのを彼らは知らなかったのだった。人の話によると、店主は自棄になっ

て今日は店じまいだと叫んだらしい。ご愁傷様である。

## フーケ、襲来

「参ったわね……」

キヨウスケとルイズが買い物を終えていた頃、一人のメイジが鉄でできた、太い錠前のかけられた巨大な扉の前で呟いていた。

ミス・ロングビルであった。

しかしキヨウスケと話していたときと雰囲気が違う。理知的な感じは変わらないが目からは鋭い光を放っており、そしてどこか危険な雰囲気を感じさせていた。恐らく彼女を普段から見ている人間であれば、別人ではないかという疑いをもつであろう。

「『アンロック』も『鍊金も』効かないなんて、さすが魔法学院の宝物庫ね」

ロングビルは片手に持った杖を弄びながら、言葉とは裏腹の妖艶な笑みを浮かべて再び呟いた。

そう、ここは魔法学院の宝物庫であった。

ロングビルはかけた魔法とその効果についての考察を始める。

（私の魔法が効かないとなると、この扉にかかっているのは恐らくスクウェアクラスのメイジがかけた『固定化』の魔法、そして『ロック』と言ったところかしら）

『固定化』の呪文は物質の酸化や腐敗を防ぐ魔法である。これをかけられた物質はあらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続けることができる。しかし、この扉にかかっているのは相当強力なものらしく、土系統の魔法のエキスパートであるロングビルの『鍊金』が通用しなかったのだ。

ロングビルはかけた眼鏡を持ち上げ、扉を見つめていた。そのとき、

「……おかしいなあ、どこ行っただらう、キヨウスケ君は……せつかく『破壊の杖』と『不壊の鎧』等のことを話したかったのに……それにしても学院長も人使いが荒い。行っただけだから、宝物

庫の様子も見てこいだなんて……」

階段を上ってくる音と、男の咳きが聞こえてきた。この声は、コルベールだろうか。

杖を折りたたみ、ポケットにしまう。

現れたのは案の定、コルベールだった。そして彼はロングビルの姿を見て、間抜けな声を上げた。

「……おや？ ミス・ロングビル、ここで何をしているんですか？  
ロングビルは愛想の良い笑みを浮かべながら、答える。

「いえ、私も少し宝物庫の様子が気になります。ほら、近頃よく現れると言っ……」

「ああ、『土くれ』のフーケですか。なるほど、仕事熱心なことですなあ。まったくあのジジイ、いや、学院長も少しはミス・ロングビルを見習ってくれればいいのに……」

愚痴をこぼすコルベール。それをくすくすと笑いながら、ロングビルは言う。

「ところでミスタ・コルベール。先ほどこの様子を見に来たと言われていたようですが……」

「え？ あ、ああ、まいったな、聞こえていたんですか……ええ、その通りです」

「そのときに確か、キョウスケと仰っていましたね。たしかそれはミス・ヴァリールの使い魔の方の名前のはずですし、しかも『破壊の杖』や『不壊の鎧』等についての話を聞きたいとか。……彼と『破壊の杖』、そして『不壊の鎧』とは、何か関係があるんですか？」

その問いに、コルベールは一瞬ぎくりとした様子になった。しかし、ロングビルはその様子を見逃さなかったようで、その瞬間に目を細めていた。

「あ、いえ、その、そ、そうです！ か、彼はここら辺では見ない服装をしているでしょう？ 彼は遠い東方の地、ロバ・アル・カリイエから来たのです。彼は我々の知らない知識があるようで、なら

あの正体不明のものについて、何か知っているのではないかと思いまして！」

しどろもどろになりながら言うコルベール。だがロングビルは納得したらしく、ああ、と頷いた。しかし、目は細めたままである。

「見かけない服をしていると思うたら東方の方だったのですか。私も少しは聞きかじったのですが、それら、特に『破壊の杖』は奇妙な形をしているだとか」

コルベールが驚いた顔をする。

「良くご存知ですな。その通りです。『破壊の杖』はどう使うか分からない奇妙な形。そして『不壊の鎧』は一応鎧らしく見えるからそういつているだけで、本当に鎧なのかどうか分からないという代物ですからなあ。しかし、耐久力は名前の通り、そこら辺の鎧とは比べ物になりませんが」

「なるほど。それらが東方の品であれば、東方から来たという彼なら知っているかもしれせんね。……でも前に学院長室に呼んだこともありましたわ。その時には聞かなかったんですの？」

「ああ、あの時ですか。そのときは学院長は、といっても私も含めてなのですが、東方の話聞くのに夢中になってしまっ忘れてしまったのですよ。だから暇な今日に聞いてみようと思っていたのですが、あいにく留守にしているようで……」

恥ずかしげに言うコルベール。「あらあら」とロングビルは言い、コルベールの苦労をねぎらった。

「タイミングが悪かっただけですわ。それに出かけているといつても夜には帰っていることでしょうし、そう気を落とさないで下さい。……ところで今更なのですが、様子を見に来たとおっしゃられていましたが、どうかしたんですか？」

コルベールは頷いた。

「そのことですか。といつても、この扉がどうにかないかを確認しにきただけですよ。大したことではありません」

「そんなもので大丈夫なのですか？」

「ええ、確かに他の宝物庫なら他のことも考えなくてはならないでしょう。しかしこの宝物庫は一味違います。スクウエアクラスのメイジが何人も集まってあらゆる呪文に対抗できるように設計したそうです。そのため、どんなメイジを連れてきてもあけるのは不可能でしょう」

「なるほど……それほどのつくりなのですか……」

ロングビルが感心したように言った。

「さすがミスタ・コルベール。物知りでいらっしやいますのね」

「え？ い、いやあれ程でも……」

ロングビルのような美人に褒められてコルベールは相好を崩した。だがそのせいで有頂天になっていたのか、いらぬことまで喋ってしまふ。

「で、でも何事も完璧と言うのは無いものです。先ほどはあんなことを言いましたが、この宝物庫にもひとつだけ弱点があると思うのですよ」

「……あら、どんな弱点なの？」

ロングビルの目が光り、先を促す。

「それは、物理的な力です。宝物庫は魔法には耐えられるのですが、強い衝撃であつたりした場合、『固定化』がかけられているといつても元々の材質の関係で強度に限界があるのですよ。……まあ、自説ですが」

「物理的な力、ですか？」

得意げに話すコルベールの説を聞き終わったロングビルは、満足気に微笑む。

「大変興味深い話ですわ、ミスタ・コルベール」

その後、下心丸出しでなんやかやと食事などの誘いをしてくるコルベールを適当にあしらひ、ロングビルは足早に去っていった。

日が沈む頃になって、ようやくキョウスケたちは学院に帰ってきていた。

キヨウスケは町での成果に満足していた。持っているナイフと同じくらいの切れ味を持つ剣を手に入れることができたのだ。まあ言い訳は考へてはあるが、なるべく『こちら側』の世界の武器を使わない方がいいし、用心するに超したことは無いだろう。……ルイズの機嫌は未だに直っていないが、とはいえそれは別に問題とすべき事項ではない。このまま問題無く一日が終わってくれば、満足して眠りにつけたことだろう。

(……そうだ。それだけですんでくれれば、よかつたんだがな……) 　しかし、キヨウスケの顔は暗かった。原因は目の前にいる二人である。

「どついう意味？ ツェルプストー」

腰に両手を当て、ぐっと不倶戴天の敵をにらんでいるのはルイズである。そして、

「どついう意味も何も無いわ、ルイズ。よりキヨウスケに似合う剣を買ってきたから、そつちを使いなさいと言っているだけよ」

その視線を悠然と受け流しているのは不倶戴天の敵、キュルケであった。

彼らは学院の中庭にいた。ようやく帰ってきたと思つたとたん、突然キュルケが現れてキヨウスケに持つている剣を勧めてきたのである。そしてそれにルイズが我慢できるはずが無く、この対決が始まつたと言つわけだ。

(今日は早めに寝て、明日に備えたかつたんだがな……)

やるせない気持ちになりながら、キヨウスケは思う。授業のこともあるが、それだけでは足りない雰囲気が出てきたためいよいよ図書室に足を運ぶ時期が来たかと思つていた。だがその矢先に、これだ。しかも無視して立ち去ろうとしたら今度は二人して睨んできてここにいろと無言のプレッシャーをかけてきたのである。二人はこつうい時だけ仲を良くするらしい。で、仕方なくここにいるキヨウスケであつた。……ちなみにデルフリンガーはキュルケが現れてすぐに茶々を入れてしまい、そのせいでキュルケ、ルイズ、キヨウス

ケの三人に睨まれて黙らされている。

(後で二人分の騒動を受けて眠れなくなったなどという事態になったら、笑い話にもならん。……しかし、早く終わらんものか……)

キヨウスケはルイズを見、そしてキュルケを見る。どうやらキュルケはキヨウスケたちを追いかけていたらしく、しかもその目的も知られていたようだ。そしてルイズに対抗してキュルケも剣を買ってきたようで、その剣は……

(……ずいぶんと派手な剣だな)

と、それについてこんな感想を持ったキヨウスケであった。しかし彼でなくともそう思うであろう程に、それは派手だった。

それは1.5メートルほどの大剣であり、その所々に宝石が散りばめられ、鏡のように刀身が光っていた。確かに見た感じは切れそうであるが、どうにもその派手さが胡散臭い。

キヨウスケがそんなことを考えているとはまるで知らず、キュルケが口を開いた。

「そんなぼろぼろの剣を買うなんてキヨウスケに失礼だと思わないの、ルイズ？」

しかも、あからさまな挑発であった。ルイズはうくと唸りながら反撃する。

「し、しょうがないじゃない！ この使い魔がそれで良いって言うんだもん！ 私だって嫌だったけど、こいつが見かけよりも使い勝手が良い方がいいって言うから、仕方なく……」

「あらそう。でもそれなら尚更この剣を選んだほうがいいわよ。見掛けも中身もあるし、まさにキヨウスケのためにあるような剣だわ」  
しかしその反撃もさらっとかわすキュルケ。熱っぽい流し目をキヨウスケに送りながら、しかも追い討ちまでかけてくる。

「ねえ、知ってる？ この剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金術師シユペー卿よ。やっぱり剣も女も生まれはゲルマニアに限るわ。トリステインの女きたたらこのルイズみたいに嫉妬深くて気が短くって、しかもヒステリーでプライドばかり高くってどうしようもないん

だから」

怒涛のような攻撃であった。しかしここまで言われてもルイズは屈しない。

「へ、へんだ。そう言うあんたなんかただの色ボケじゃない！ なあに？ ゲルマニアで男を漁りすぎて相手にされなくなったからトリストインに留学してきたんでしょ？」

ルイズは冷たい笑みを浮かべてこう言ったのであった。

この言い分に、キュルケの顔色が変わる。しかしルイズは止まらない。ちらりとキョウスケを見て、言い放つ。

「それにそんなこと言ってるけど、こいつには相手にされなかったじゃないの！ どうせあんたなんてそんなもんよ。色ボケがばれて相手にされなかったんでしょ、『お熱』のキュルケ！」

「……言ってくれるわね、ルイズ……」

低い声を発するキュルケ。そして二人は同時に、自分の杖に手をかけた。

しかしそこに乱入が入った。突然つむじ風が舞い上がり、二人の手から杖を吹き飛ばした。

これにキョウスケは、

(なるほど、これがウインド・ブレイクと言うやつか)

と感心し、続けて、それを起こしたであろう人物、近くの木に寄りかかって座っている一人の少女を見た。

青みがかった髪とブルーの瞳を持ち、眼鏡をかけている。しかし杖を振ったままの姿勢でいる、魔法学院の制服で包んだその体は同年代の同姓と比べても小柄であった。

キュルケ曰く、彼女の友人らしい。そしてキュルケが馬でも数時間かかる距離でもキョウスケたちを追いかけることができたのは、彼女の使い魔のおかげだそうだ。

少女、タバサは短く言う。

「建物、近い」

そして片手に持った本を、再び読み始めた。なるほど、言われて

見れば周囲には宿舎などの建物がある。ここで魔法を使うのは少々まずいだろう。しぶしぶと魔法を使うことをあきらめる二人（ルイズは忌々しげにタバサを見たが）。だがどちらの剣を使わせるのかと言う議論を終わらせるつもりは無いらしい。再びにらみ合うキュルケとルイズであった。

しばらくはあら見合っていた二人である。だがしばらくして、キュルケは自信たっぷりの笑みを浮かべた。

「ルイズ、でもね、ひとつだけ確かなことがあるわ。ここまでは言いたくなかったんだけど、あんたがああまでいうんだもの。仕方ないわよね」

そして突然、こんなことを言い始めたのである。

キュルケの様子を不審がりながら、ルイズは「……なにがよ？」とたずねる。すると、キュルケは勝ち誇ったように胸を張った。

「それはね、あたしとキョウスケのとても相性がいいって言うことよー！」

一瞬何を言われたか分からなかったルイズ、そしてキョウスケ。

しかしルイズはすぐに正気を取り戻し、

「……はあ！？ 何でそんなことが分かるわけ！？ ふざけたこと言ってるんじゃないわよー！」

と叫んだのであった。

キュルケはさも残念そうに首を振る。

「いいえ。これはね、はつきりとした事実よ。その証拠に、ほら」  
キュルケは服のポケットから何かを取り出した。そう、それはキュルケが持ち出した、あの卵のような形をしたものである。

「私は火のメイジ。火の気配を読み取るのは得意なの。そしてこれからはすごい強い火の気配するわ。しかもこれだけじゃなくて、キョウスケの持ち物からは多くの火の気配を感じたの！ これだけで私達の相性がいいことは証明されたも同然よ！」

笑いながら言うキュルケ。しかし、ルイズはそれどころではない。

「な、何であんたが使い魔の持ち物を持つてるの」「それからすぐに手を離せ」よ……?」

そのとき、使い魔が口を挟んできた。

ただならぬ使い魔の口調に思わず振り返るルイズ。するとそこにあったのは、いつもの無表情にはつきりと分かる緊張を漲らせている使い魔の姿があつた。

その様子にキュルケが慌てた。

「な、何? 勝手に持ち出したことを怒ってるの? 心配しないで、ただ持ち出しただけ」「すぐに手を離せ!」……っ!」

再び口を挟まれ、思わず口をつぐんでしまうキュルケ。その声には真剣と言っただけではなく、何か切羽詰った感じがあつた。

見たことの無い使い魔の様子にルイズは驚くが、同時ににやけた笑いがルイズの顔に浮かんでくる。ここ数日もややもやしていたが、それが一気に晴れるかのようにあつた。

(な、なによ。私の味方してくれるって言うの? ……よ、ようやく使い魔としての自覚が出てきたようね。でももう少し早く味方してくれても良かったんじゃない? ……ま、まあ絶好のタイミングだったから許してあげるけど……)

照れくさを隠すために頭の中で言い訳する。そしてキュルケに向き直り、馬鹿にしたような口調で話しかけた。

「だって、ツエルプスト!。どうやら使い魔はあんたにそれをさわつていてほしくないそうよ。たいした相性の良さね!」

「何ですって!?!」

「だってそうじゃない。でも、それもそうか。勝手に人の部屋に入り込むくらいなんだし、愛想尽かされたって当然よね。……さ、もういいでしょ? さっさとそれを返しなさい」

言いざま、キュルケに近づくルイズ。使い魔が焦りを顔に滲ませるが、元々の距離が近いためすぐにルイズはキュルケのそばにつきしてしまう。そして卵らしきものに手を伸ばした。

「ぶざけないで! そっちこそ勝手に決め付けないでくれる!」

だが先ほどのように挑発され、しかもその相手が仇敵であれば素直に従うわけが無い。卵を両手で包み、ルイズの手から逃れようと腕を振り回す。だがその拍子に、何かが、宙を舞った。

「……あれ？ 何これ？」

ルイズはそれを拾い上げる。それは金属でできた小さなもので、指が通るくらいの穴があつて銀色に光っていた。どうやらキュルケの持っている卵から抜けたらしい。

(……何かしら？ ……ま、何でもいいか。それより早く取り返さない……！?)

考えられたのはそこまでだった。いきなり腰に使い魔の腕が巻きついてきたのである。

「え、え!？」

戸惑う間に持ち上げられる。そのまま使い魔はキュルケに近づいて卵をすごい勢いで取り返し、そしてそれを学院の壁に放り投げ、キュルケもルイズと同じように持ち上げて押し倒したのである。

直後、

大きな衝撃が、大気を揺らした。

「「な、何!? 何が起こったの!？」」

使い魔の下で騒ぐルイズとキュルケ。周囲にはまだ石片や土やらがばらばらと降っていた。

「……手榴弾だ」

「「へ?」」

使い魔が口を開いた。

「俺の、」

ちらりとキュルケを見た。そしてルイズが持っている金属に目をやって、身を起こしながら解説してくる。

「故郷で作られた武器だ。そのピンを抜いて数秒のラグの後、魔法が使えなくとも爆発を起こすことができる。……ルイズ、お前の魔

法のようにな」

「……そ、そうだったんだ……」

ルイズは納得し、そして命拾いしたことに気付いた。だからキュルケがあれを取り出したとき、切羽詰った声を出したのだ。が、ルイズは続いて不満顔になった。

「……でもあんまり嬉しくない例えね、それ……あ、そうだ！ こんなことしてる場合じゃないわ！」

爆発の被害が気になり、ルイズは急いで立ち上がり、爆発が起きた方を見てみた。あそこ辺りは……

（宝物庫、よね……良かった……）

その辺りは人があまり寄り付かないところだった。どうやら使い魔は、人の気配を読んで投げてくれたらしい。ルイズの顔が緩やかに上下し、ほう、と安堵の息が漏れる。

「……ご主人」

使い魔がそこでルイズを呼んだ。そちらに向き直るルイズ。

「一応人の気配は読んで投げた。だが、あそこは……」

ああ、とルイズは頷き、爆発があった部分のことについて説明してやった。無表情は相変わらずだが、やはり人に被害が出なかったことに安心したのだろう。使い魔も安堵の息を漏らした。

（壁が崩れている程度で済んでるから中に影響は無いだろうしね……って、壁が崩れてる！？）

その時それに気付き、急いで顔を向けるルイズ。そこにあつたのは間違いなく、崩れた壁であつた。しかしそのこと自体が異常である。

見れば、キュルケも同じように固まっている。

（た、確かあの壁ってかなりの厚さで、しかも『固定化』の魔法がかかっているんじゃないか……？）

その壁が中ばまで崩れかかっている。恐ろしい威力であつた。

「……あれ？ でもあんたの故郷の武器ってことは……！」

ふと気付き、ルイズはそこまで言いかける。だがその時、使い魔

がこちらを見ていることに気付いた。

は！ として、慌てて口を塞ぐ。

何故か使い魔は異世界から来たことを隠しておきたいらしく、そのことについては黙っている。この数日のうちに言い含められたのだった。知られると色々事情がややこしくなるから、と言う理由らしいが、その理由に首を傾げる。

(でもそれってそんなに隠さなきゃいけないことなのかしら……?)

一抹の疑問が残るルイズだった。別に知られても問題は無いと思うのだが……

ルイズが考えている間に、使い魔が言葉を続ける。

「……おれも退屈で少し目を離していたからな。反応が遅れた。……

だが、勝手に人の物を持つてくるとは思ってもいなかったがな」

「……それは、その……」

キュルケに視線を戻す使い魔。その視線に、さすがにバツの悪そうな顔をするキュルケだった。しかし、

「……まあ、勝手に持ち出したのは悪かったわよ、キョウスケ。でも嬉しかったんだもの。火の気配を持つ物をたくさん持つて……」

こんな状況でもしなを作りながらキョウスケに言い寄ってくるのは流石であった。で、それを鬼のような形相ですぐさま引き剥がすルイズ。考え事よりもこちらの方が優先らしい。

「勝手に使い魔に近寄らないでよ、ツエルプストー！ 言っとくけど私はあんたを許したわけじゃないわよ！ 勝手に人の部屋に入っただ上に、しかも危うく死ぬところだったじゃないの！ どう責任取る気よ!？」

もっともな意見である。といっても、キュルケがそう簡単に引き下がるわけが無い。髪をかきあげながら、色っぽいしぐさで再度キョウスケに言い寄る。

「でもそんなこと言っただって仕方が無いじゃない。やっちゃったんだもの。それよりキョウスケ、あなたの持つてる物について教えてくれない？」

「何でそうなるわけ!?!」

「そりゃ色々教えてもらうのよ。故郷のこととか他の持ち物のこととか。知らなかったからこんなことになっちゃったんだし、教えてもらえればもうこんなことしないわ!」

「勝手なこと言ってんじやないわよ! そもそもあんたが使い魔に聞きもしないで勝手に持ち出すからこんなことになったんでしょ!」

再び言い争う。そしてもう少しでお互いに飛び掛ろうとしたとき、突風が二人を吹き飛ばした。その風を起こしたのは当然、

「迷惑」

タバサであった。爆心地から離れていて、かつ木の下にいたといつても爆風からは逃れられなかったらしい。衣服が乱れており、髪もボサボサになっていた。なるほど、これ以上のことを起こされるのは迷惑極まりないことだろう。

だがルイズは今度こそ堪忍袋の緒が切れたらしく、顔を真っ赤にしてすばやく起き上がり、タバサに近づいて文句を言おうとした、その時であった。

背後に巨大な何かの気配を感じ、ルイズは振り返った。そして、自分の目を疑った。

「な、なにこれ!」

ルイズは大きく口を開けた。何と、巨大なゴーレムがそこにいたのである。しかも、こちらに向かってくるではないか!

「きゃああああああ!」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出し、タバサもその後が続く。その背を見ながら、ルイズどうするか迷ってしまう。

だがそれがまずかった。

思ったよりもゴーレムの歩く速度は早く、気が付けばルイズの目の前にゴーレムが迫っていた。

「……ッ!」

喉が悲鳴を上げようとし、足が逃げようとする。しかし双方共に

この事態についていけず、固まったままだった。

もうだめだと思い、ルイズは目を瞑った。しかしいくら待っても襲ってくるであろう衝撃が無い。しかも、感触に覚えのある何かの腰に回されていた。

(まさか……)

うつすらと目を明ける。そこにあっただのは、自分を脇に抱えながらゴーレムを睨みつけている使い魔の姿だった。どうやら踏み潰されそうだったところに飛び込んで、助けてくれたらしい。

そのことを頭が理解すると、とたんに頬が赤くなった。鼓動が早くなり、まともに使い魔の顔が見られない。

(や、やだ、どうしちゃったのよ私。……!! い、いいえ、こんなこと考えてる場合じゃないわ! ゴーレムよ!)

ルイズは視線をゴーレムに戻す。ゴーレムは宝物庫の壁にその巨大な拳を打ち付けていた。それを見たルイズは慌てる。

(あいつ、まさか宝物庫の宝を狙ってるの!?)  
このことに気付いたのだ。

「使い魔、離しなさいよ! あいつを止めなきゃ、宝物庫の宝が奪われちゃうわ!」

使い魔の腕を引きはがそうとするルイズ。だがそんなルイズに、  
「……無駄だ」

と、ゴーレムから視線を外さずに、使い魔が淡々とした声で返してきた。

「何ですって! 私じゃ無理だつて言うの!？」

「……それもあるが、おれが言いたかったのは、動いても無意味だということだ」

「……? どういうこと」

いつている意味が分からず、問い返したときだった。突然ゴーレムが崩れ始めたのである。

「え!? 何で……」

何故ゴーレムが崩れたのか分からず、戸惑うルイズ。しかしキョ

ウスケは冷静に答えてやる。

「……おれの手榴弾が爆発してゴーレムが現れたときには、あの壁はほとんど崩れていた。恐らく残りの壁を壊すのにたいした手間はかからなかっただろう。そしてあのゴーレム、引いては操っているメイジの目的が宝物庫である以上、ゴーレムを消したのは……」

「！まさか！」

「ああ。……そいつの目的が果たされたからだろう」

使い魔の淡々とした声が、夜の闇に流れる。しかしルイズは食い下がった。

「で、でも今からなら間に合うんじゃない？」

「……いや、恐らくそれも無理だ」

「何だよ！」

「戦力になるゴーレムを消した理由として考えられるのは、後一つしか残っていないだろう？」

「……！」

ここまで言われようやくルイズも気付く。

それはつまり、もうゴーレムが必要ではないこと。安全な場所まで、賊が逃れたことを示唆していたのである……

学園の近くの草原を駆けながら、黒いローブに身を包んだフーケはかぶったフードの下で満足気な笑みを漏らしていた。こんなうまくいくとは思ってもいなかったのだ。

（人生何があるか分からないもんね）

掴んだ情報を元にまず宝物庫の壁の厚さを調べていたのだが、とても物理的な力に弱いとは思えないほどの厚さだった。そのためどうするか思案していたのだが、その時ミス・ヴァリエールをはじめとした学生達が現れ、なにやらもめ始めたのである。フーケは隠れてその様子を見ていたのだが、ある時その中の男、確かヴァリエールの使い魔だったか、が何かを投げるそぶりをし、そしてあの爆発が起こったのである。

(あれは心臓が止めるかと思ったよ……)

そんな感想を持つ程の爆発だった。しばらくの間爆発のショックでフラフラしていたが、意識がはつきりと戻ると壁が崩れかかっていることに気付いた。

にわかには信じられなかったが、しかし絶好の機会であったため、フーケはすぐさまゴーレムを呼び出した。

崩れかかっている壁は数回殴りつけただけでいとも簡単に壊れた。そして宝物庫の中に入り、見つけたのである。

フーケは走りながら、レビテーシオンをかけて脇に抱えている鉄製のケースを見る。そこにははつきりと『破壊の杖、不壊の鎧を封ず』と書かれたプレートが付けられていた。

かなりの距離を走った後、ようやく立ち止まるフーケ。そして満面の笑みを浮かべながらケースを下ろし、

(さあ、見せてもらおうよ……)

興奮と共にケースを開けた。そこにあったのは、

「……これが『破壊の杖』と『不壊の鎧』……?」

怪盗として名を馳せたフーケが戸惑いを隠せない声を上げるほど、ハルケギニアでは見慣れぬ品々だった。

## 出発、フーケ討伐

外からは爆発で叩き起こされた学院の生徒や教師らが騒ぐ音が聞こえる。夜であるに拘わらず、学院は蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

(……この程度でここまで騒ぐとはとはな……しかも対応が遅い……)

そんな彼等の様子を苦々しく、そして情けなく思うキョウスケである。この魔法学院は国のいざというときのために戦士を育成する場でもあったはずなのだ。それが容易く敷地内に入られた上に、こうまで取り乱すとは。

(……貴族云々を言う前に、こいつらはまず自分たちのことを省みたほうがよさそうだ。……もつとも、おれも人のことは言えんかもしれんが……)

思い返すのはゴーレムが出現したときである。実はキョウスケはゴーレムが現れた際、既に戦う体勢を整えていた。キョウスケやルイズのほうに向かってくる時点で敵意があることは見抜いていたし、キョウスケはこの程度の不測の事態で動ずるほど柔ではない。またガンダールヴの力でキョウスケの力を増加させれば、ゴーレムを足止めすることも容易かっただろう。

だがゴーレムに向かおうとした際、その足元でどうするか迷っている主人の姿が目に入ってしまったのだ。

キョウスケは迷った。このままゴーレムに向かうべきか、それともルイズを助けるべきか。

(だが今思えば、判断を誤ったことが良く分かる……)

ルイズを使い魔として守ると決めたこともあり、結局キョウスケが選んだのはルイズを助けることだった。しかしそれが明暗を分けてしまった。ゴーレムはキョウスケがルイズを助けたときには宝物庫の壁を壊しており、ゴーレムを押さええる機会も、フーケを押さえ

る機会も失ってしまったのだ。

難しい状況ではあったが、あの時ゴーレムを足を狙い、ルイズを助けることと同時に進めていればとキヨウスケは思わずにいられない。ガンダールヴの力がある以上尚更そう思う。

（この借りはいずれ返す。……しかし、どうも疑問が残るな……）  
キヨウスケは自分の失態を思う一方、この一件にどうもしっくりと来ない疑問を感じていた。

思考から意識を引き上げ、目の前にある光景を見る。

「……なるほどのう……」

額を押さえ、苦渋をたつぷりとにじませた声で話すオスマンがそこにいた。その隣にはオスマンの話し相手をしていたコルベールがおり、そしてその前、キヨウスケの横にはしょんぼりとした顔をしたルイズたちが並んでいた。あの騒ぎの後にすぐ、キヨウスケ達は学院長室に来ていた。理由は報告と、爆発の真相を話すためである。「あ、あのー、この場合、やっぱり私のせいになるんでしょうか……?」

キュルケがおずおずとした声でオスマンに聞く。オスマンはため息をついた。

「……まあミス・ヴァリエールの部屋に勝手に入り込んだのは事実じゃし、それにキ……と、ミス・ヴァリエールの使い魔の私物を許しも無く勝手に持ち出したしの。どんなものか分からなかった以上迂闊だったと言わざるを得んじやろうな」

「そうです学院長、この責任は全部キュルケにあります！ しかも使い魔の持ち物を勝手に持ち出して、しかも話も聞かないで言い寄ってたんですよ！ 当然しかるべき処分をするべきです！」

そこにルイズが嬉々とした声で乱入する。しかしキュルケも黙っていない。

「なによ、私はキヨウスケの話を聞こうとしてたわよ！ でもあんたが掴みかかってくるから、えーと、そう、ピンだとかいうのが外れちゃってこうなったんじゃない！」

「私が悪いって言うの!？」

「そうよ、あなたがあんなふうに突っかかってこなきゃ良かったんじゃない! そうすれば大人しくキヨウスケに返してたわよ!」

「自分のことを棚に上げてよく言うわね……!」

この期に及んでも言い争う二人であった。オスマンはそんな二人を見て再びため息をつく。

「……しかしまいったのう。盗まれたのはよりにもよって『破壊の杖』と『不壊の鎧』、そして賊がああ『土くれ』のフーケとは……」

その言葉に言い争っていた二人の動きが止まる。事態の重さに騒げなくなったのだろう。

学院長室に来る前に、ルイズたちはまず宝物庫に足を運んでいた。そこには二つの品の入ったケースの代わりに、フーケが盗んだ後に残していくサインがあったのである。

「……はじめにああは言ったが、今回の一件は何もミス・ツエルプ・ストーリーばかりが悪いというわけにはいかん。今日の門の当直は……」  
「ミス・シュヴルーズです。学院長」

隣のコルベールが答え、オスマンは頷いた。

「彼女からは何の知らせも無かった。あの爆発の後にはさすがに起きたじやろうが、恐らくそれまでは眠ってでもおつたのじやろう。」

しかし、わしも含めてじゃがまともに当直をした者などおらん。まさか魔法学院が賊に襲われるとは思ってもおらんかったし、メイジの集まる虎の穴に入ってくるなど想像もせんかった。それはミス・ヴァリエールも同じじやろ?」

「……」

反論できずにルイズは黙り込み、予想以上の管理の杜撰さにキヨウスケは呆れた。

だがキヨウスケにとっては、そこが疑問となっている部分であった。ゴーレムという人目を引くような手を使っているながら、余りにもフーケの盗みがうまく行き過ぎていた点である。

（今もそうだが、まだ夜もそう更けてはいない。それに普通忍び込

んでくる際には、いくら威力を持つ手札があるといっても人目につかないようにするはずだ。しかし奴はゴーレムという札を惜しげもなく使っている……)

壁についてはいいかもしれない。丁度いいと思って仕掛けたというのなら話は分かる。だがゴーレムを呼び出すことは、あれだけの大きさのため、大きなリスクが伴う行為であることは明白だ。すぐに誰かの目に付くだろうし、しかもその前には手榴弾の爆発という人を更に呼ぶようなことをしていたのだ。いくら何でも警戒してしかるべきはずだ。

そして考えを進めていくうちに、ある結論にたどり着いていたのである。

(……フーケは、このことを知っていたとでもいうのか……?)

これから導かれるのは、学院の内部事情を知っている者、学院関係者の犯行である。

キヨウスケはこれを言うべきか迷ったが、対案の存在、更に確証が無い以上言っても混乱させるだけと考えると、止めておくことに決めた。外部から侵入するにせよ事前に下調べはするだろうし、それを元に計画を立てたとも考えられるため、関係の無い第三者の犯行とすることもできるからだ。

「責任があるとすればこの油断を生み出したわし等全員にある。……そういうわけで、ミス・ツェルプスターだけに責任を取らせることは無いから安心してよいぞ」

オスマンはこう言い、この一件を締めくくった。

キュルケはほっとした表情になり、ルイズは不満そうな顔だったが学院長の言葉となれば従わないわけにもいかなかったようで、ふん、と顔を背かせた。

さて、とオスマンが声を上げてイスから立ち上がった。

「爆発はフーケのせいとでもしとけばよいじやろうし、皆と対策を立てるとしようかの。君達も証人としてついてきなさい。どうせこの騒ぎじゃし、皆宝物庫に集まっとるだろうて」

宝物庫に着いてみると、オスマンの予想通り宝物庫には人だかりができていた。当直だったミセス・シュヴルーズは非難を一身に浴びていたが、そこに現れたオスマンが学院長室で言っていた全員の職務態度について言及して仲介し、事なきを得た。……ただし、このことに感動したシュヴルーズに父と呼ばれ、しかもいくらでも尻を触って言いといわれたオスマンは困った顔をしていた。

「失礼します！」

そして現場にいたルイズたちの話を聞いてこれからどうするかを決めるかという段になった時、勢いよく宝物庫のドアが開いた。

現れたのは、ミス・ロングビルだった。

「どうしたのですか、ミス・ロングビル？」

慌てた様子にコルベールがロングビルに問いかける。しかしロングビルは頭を下げながらも言葉を続けた。

「申し訳ありません。しかし先ほどの轟音で起きてみたら、学院に賊が入ったと大騒ぎじゃないですか。しかも話を聞いてみたらあの『土くれ』のフーケの仕業といえます。そこで報告した方がよいと思われる情報を思いましたので、急いでここに来たのです」

「情報？ 何のです？」

「はい。……フーケのアジトに関する情報です」

「な、なんですと!？」

コルベールが素っ頓狂な声を上げ、周りの教師もざわめき始めた。だが、キョウスケだけは眉を少し上げる。

「どういうことじゃ、詳しく説明してくれんかね」

オスマンがそんなコルベールを横目に、続きを促した。

「はい。……以前学院の外に出かけたとき、たまたま近在の農民が近くの森の廃屋に入っていく黒ずくめのロープの姿を見たそうです。しかも異様に辺りを警戒しているようだったとも言っていました。その話から察するに、恐らくその黒ロープはフーケではないかと思うのですが……」

ここまでロングビルの話を聞いていて、しかも先ほどまで考えて

いたこともあり、キヨウスケははつきりと思った。

余りにもタイミングが良すぎる。

ここでここまで詳しい話を持つてくるといのは、どうにもおかしい気がするのだ。

(……まさか……いや、それならそもそもこんなことはせんか)

一瞬浮かんだ考えを、キヨウスケはすぐさま断ち切った。

オスマンの目が鋭くなり、タバサを見た。

「確か君の話では、使い魔のウインドドラゴンの背からゴーレムを見た際、黒いローブの人影が見えたと言っておったな」

タバサは無言で頷く。そして「でも宝物庫に入っていた後、見失った」とも伝えた。オスマンは再びロングビルに尋ねる。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で八時間、馬なら二時間程度といったところですよ」

「ならば話は早い。すぐに王室に連絡しましょう！王室衛士隊に頼んで兵隊を差し向けるよう頼むのです！」

コルベールが叫ぶ。しかし、オスマンはその声に目を見開き、怒鳴った。

「そんなことをしてどうするのかね！ わしらは貴族じゃ。わしらの身に降りかかったことを自分で払えんでどうする！ この問題はわしら魔法学院の者で解決する！」

キヨウスケはこのオスマンの言に感心し、いつもの微かな笑みを浮かべた。

(こういう人間は、どこにでもいるものだな……)

そんな感想を持ったのである。

オスマンは咳払いし、有志を募った。

「では、搜索隊を編成する。我こそはと思う者は、杖を掲げよ」

しかし、教師達は困ったように顔を見合わせるだけだ。オスマンがもう一度呼びかけるも、その態度は変わらない。

(となると……)

キヨウスケは次にどうなるのか、予想がついていた。すると、予

想通りルイズが杖を掲げたのである。

(やはり、か……まあ、おれとしても都合がいいが)

キヨウスケが質問した日からルイズを『ゼロ』と呼ぶ声はほとんど聞こえなくなった。ルイズ自身もそのことを喜んでいいる。

しかし、未だに爆発が起る理由は分からずじまいであった。そのため陰口を叩く連中は完全にはいなくならなかったのたのである。そして、そんなことをいつまでも見逃すルイズではない。で、案の定完全に連中を黙らせるために捜索隊選抜に杖を掲げたのであった。

ふとキヨウスケは視線を向けられていることに気付く。そちらのほうを向くと、見ていたのはルイズと、彼女の後ろにいたオスマンであった。ルイズは何か訴えるような目をし、オスマンはキヨウスケの動作を注視している。

(言いたいことは大体分かるがな)

ルイズは「戦いに関することなんだから、だまって付いて来なさい」とでも言いたいのだろうし、オスマンはキヨウスケのガンダールヴの力を当てにしたいのだろうとキヨウスケは考えた。(オスマンの方は、実はそれだけではなかったがキヨウスケが知る由も無い)キヨウスケはただ、一つ頷いてやる。するとルイズは顔を赤く染めながらふん、と顔を背け、オスマンは頷き返してきた。

そうこうしているうちにルイズに対抗してキュルケが、キュルケを心配してタバサが杖を掲げた。他の人間は今なお顔を見合わせるばかりであり、結局この三人が行くことになりそうだ。

(やれやれ、一々メンバーを決めるのにも面倒なことだ。……しかし……)

そこまで話がまとまったところで、キヨウスケには腑に落ちないことに考えを巡らせた。

先ほど、というかロングビルの話聞いた辺りからだろうか？  
ロングビルが言う場所に向かうことを考えると何か胸騒ぎがするの  
である。

(これは、アルトを壊そうとしたあのときと同じか……?)

そしてその正体は、自分の感覚が伝える、その場所に向かうことへの得体の知れない不安であった。

しかし、なぜ不安になるというのだろうか？

畏が待っているかもしれないし、また、何か思いもよらない札をフーケが切ってくるかもしれない。しかし、それらのことはキョウスケの今までの戦いの中で幾度も経験してきたことだ。勿論不測の事態に対する不安は皆無というわけではないが、それでもここまで強い不安を抱くのは解せない。ゴーレムが出てきたとしても、自分にはまだ手札は残っているのだし……

(一体そこで何が待ち構えている……?)

釈然としないまま、ルイズたち三人と、オスマンにサポートを任されたロングビルに付いていくキョウスケであった。

フーケが居場所を変えないうちに、ということですぐに出発することとなった。少しの時間を準備に使い、ロングビルが用意した馬車に乗って出発する。馬車の前方に吊るされたランプが示す道を、ただひた走る。

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

途中でキュルケが黙々と手綱を握る彼女に話しかけた。すると、ロングビルはにっこりと笑った。

「いいのです。わたくしは貴族の名を無くした者ですから  
キュルケはきよとんとした。」

「だって貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょう?」

「ええ、でもオスマン氏は貴族や平民ということに余り拘らない方ですから」

「差し支えなかった事情をお聞かせ願いたいわ」

キュルケが興味津々の顔で聞いてくる。しかしそこでルイズがキュルケの肩を掴んだ。キュルケは振り返り、ルイズを睨みつける。

「なによ、ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔の事を根掘り葉掘り聞くなんて」

キュルケはふんと呟いて荷台の柵に寄りかかり、頭の後ろで腕を組んだ。

「暇だからおしゃべりでもしようと思ったんじゃない。……でも、こんな大きな馬車を用意する必要があったんですか？」

キュルケがロングビルに聞いた。確かに四人を乗せるには大きな馬車である。

御者を務めるロングビルはくすりと笑った。

「当然です。あなた達はフーケを捕まえるのでしょうか？ そのためにも空きを用意しないといけないではないですか」

これにキュルケが調子に乗る。

「分かつてるわね、あなた。そうよ、私たち三人がいるからにはフーケなんて目じゃないわ。特にダーリンまでいるんだし！」

しかもちやつかりと嫌味をつけていた。しかし、その内容をルイズは見逃さない。

「ちよつといいかしら」

「なに？」

「何で三人なわけ？ 今いるの、確か四人よね？ それにダーリンつて……」

「あら、戦力にならない人間を数えるわけ無いじゃない」

ひく、とルイズの頬が引きつった。

「……戦力にならない、ねえ……それって誰のことかしら……？」  
「分からないの？ へえ……」

「何がへえよ！ あと誰がダーリンなわけ！？」

……まだ言い争い足りないらしい。しかもキュルケの友人であるタバサは勝手に本を読み進めており、ロングビルは無視して御者を務めていた。誰も止めようという素振りすら見せなかった。

キヨウスケは本気でどうでも良くなってきた。

（もう勝手にやっている。……それよりも、だ……）  
先にある闇を見据える。

未だにキヨウスケを蝕む不安は消えていない。それどころか道を

進むことにますます強くなってくる。

(……しかし、暗くてよく分からんがこの道は……)

「……どうしたい相棒。何か妙な雰囲気出しゃがって」

そこでカチャカチャと音を立てて、デルフリンガーがキヨウスケに声をかけてきた。キュルケが買って来た剣もあつたが実際に試し切りをしたわけではないため信用できず、既にその切れ味を知っていたデルフリンガーをキヨウスケは持つてきていた。

「……妙な雰囲気とは何だ」

「いや、睨むなよ！……何つつか、ピリピリしてる、そんな感じがすんだよ。しかもこれでもかかってくらしいに」

「……そこまで緊張しているように見えたのか？」

「ああ、見えたね。お前さんはいつもそんな感じらしいが、伊達にこれでもかなりの年月を生きてるんでな。俺の目はごまかされねえぞ」

キヨウスケはどうしたものかと考えていたが、やがて肩の力を抜いた。

「……そうか……そうだな。お前の言うとおりだ。……どうも、不安だな」

「おいおい、そんなに不安になるこたねえじゃねえか。お前さん力は確かだし、ついでにまだあの爆発するやつも残ってたんだろ？」

「ああ、行く前に何個か持ち出してきた」

「それなら何も不安がる必要なんかねえじゃねえか。例えゴーレムが出てきたっておれなら叩き切れるし、いざとなったら爆発するやつでふっ飛ばせばいいんだしよ」

「……そうなんだが、な……」

しかし、これほど言ってもキヨウスケの声は重いままだった。彼自身何が原因でここまで不安になるのか分からないため、一層声に重さが混じっている。

そんな彼等に乗せながら、やがて馬車は森の中に入っていった。

お前達を・・・

ある程度森を進んだ所で、ロングビルが馬車を止めた。そして、「ここから先にあると言います。しかしもしかしたら罠があるかもしれない。そこでこれから私が先に偵察に行こうと思いましたが、どうでしょうか」

こう提案してきた。

「……偵察は、すばしっこいの」

タバサが反論し、使い魔を指差した。しかし、ロングビルはやはりと首を振った。

「わたくしもその使い魔の方の实力は聞いています。しかし罠があったとなればどうしようもありません。ここは罠を探る意味でも、今はオスマン氏から貴方達のサポートを任された私が行くべきです。使い魔の方には、その後をお願いします」

こうまで言われては反論などできようはずがなかった。

ロングビルは馬車を木々の合間に隠すために馬車を少し進め、そして森の闇の中に消えていった。

「……ミス・ロングビル、大丈夫かしら……」

ルイズは不安げに呟いた。知らず、視線が使い魔のほうに向く。だが、その使い魔は、

(あれ?)

いつもの無表情ながら、どこか感じが違うように思えた。ただじつと、ロングビルが消えていった方を向いている。何か気になることでもあるのだろうか? しかも、手に何か持っている。

「どうしたの。じつとミス・ロングビルが行ったほうを向いて」

「……いや、何でもなし。気にするな」

と言ってすぐに持っていたものをポケットにしまい、木に寄りかかった。

しばらくしてロングビルが戻ってきた。どうやら罠の類は仕掛け

られていないらしい。そして彼等はランプを下げたロングビルを先頭にして森の奥まで進んだ。

すると、開けた場所に出た。森の空き地と言ったところだろうか。魔法学院の中庭ぐらいの広さで真ん中に確かに廃屋があった。元は木こり小屋だったらしく、朽ち果てた炭焼き窯と壁板が外れた物置が隣に並んでいる。

「あそこがフーケのアジトだそうです」

ロングビルが廃屋を指差しながら言う。

ルイズたちは相談を始めた。とにかくあの中にいるのなら奇襲が一番である。寝ていてくれたら尚更だ。

相談の結果、タバサが立てた案でいくことになった。

まず偵察兼囷役が小屋のそばに行つて中の様子を確認する。そして中にフーケがいればこれを挑発して外に出し、魔法で一気に攻撃するというものである。小屋の中にはゴーレムを作り出す土は無く、外に出ない限り得意のゴーレムを使えない。それを利用し、集中攻撃で作られる前にフーケを沈めてしまおうと言うのだ。

囷役は今度こそ使い魔に決まった。しかし使い魔は文句を言うでもなく、一言

「……了解した」

と言つてデルフリンガーを抜き、作戦を始めるとすぐに小屋の側まで近づいていった。その動きは卒が無く、手馴れていた。しかも動きにまるで恐怖が感じられない。

ルイズは思う。

あの使い魔が怖がることなどあるのだろうか。そして、一体どんなことをしてきたのだろうか。

そんなことを思っていると、使い魔がジェスチャーで中に誰もいないことを伝えてきた。恐る恐る、ルイズたちは小屋に近づく。

「誰もいない。それに、中も少し調べたが罠がはられている様子も無かった」

近くにある窓を指し、使い魔が言う。

念のためにと、タバサがドアに向けて杖を振った。

「……あなたの言う通り」そう呟いて、ドアを開けて中に入った。続けてルイズが入り、キュルケは外で見張っているとタバサと使い魔に言っ入り口に残った。

(つくづく嫌味をしてくるわね……)

盛大に文句を付けたいところであったが、状況を考えて何とか自制した。

そして残ったロングビルは、まだ何かあるかもしれませんと行って再び森の中に消えていった。

小屋には炭焼きに使われたと思われる木炭があり、その隣には鉄製のケースが無造作に置かれていた。ルイズとタバサがそれに近づいて取り付けられているプレートを見ると、何と破壊の杖と不壊の鎧を封ずと書いてあるではないか。二人はすぐさまケースを開ける果たして現れたのは、紛れも無い二品だった。

「これで終わり、なの？ ……なんかあつけないわね」

ルイズが困惑した様子で言い、使い魔も同じ様子を見せた。だが、……本当にそれが『破壊の杖』と『不壊の鎧』、なのか……？」

使い魔が困惑していたのは、これら二品を見たせいであった。しかも無表情を貼り付けた頬が硬くなり、驚きの強さを表している。

使い魔の様子を怪訝に思いながらもルイズは答えてやった。

「そうよ。私、前に宝物庫を見学したときに見たことがあるし」  
「……」

使い魔が黙りこむ。ルイズは不審に思い、どうしたのかを聞こうとした、その時であった。

外からキュルケの悲鳴が聞こえてきたのである。続けて何か大きなものが歩く音も。

外に出てみれば、キュルケがゴーレムと戦っていた。ファイアーボールを打ち出し、懸命に攻撃を仕掛けている。しかし相手は土でできたゴーレムであり、火など物ともしていない。タバサもゴーレムを確認してすぐに攻撃するが、結局キュルケの攻撃同様効果があ

るようには見えなかった。

「無理よこんなの！」

キュルケはとうとう攻撃をあきらめ、こちらに向かって逃げた。

(ど、どうすればいいの……いいえ、ここで逃げてどうするの！  
ここで私の実力を示して、皆に認めさせるんだから！)

ルイズはゴーレムの力を目にして挫けそうになる心を叱咤し、毅然とした表情でゴーレムを睨みつける。杖を取り出してキュルケたちと同じようにゴーレムを攻撃しようとし、駆け出そうとした。

「……そうか、そういうことか……」

そこで使い魔のこんな声が聞こえてきた。振り向くと使い魔は先ほどと同じように片手で何かを握り、それを覗き込んで操作していた。

こんな状況になっても悠長なことをしている使い魔に、ルイズが切れる。

「何やってんのよこんなときに！ 早く何とかしないと私たち皆あいつにやられちゃうわ、あんたも手伝いなさいよ！」

「……分かってている。だからこそこれを見ていた。……ご主人、きつuitとは思いが少しの間持たせる」

「え？」

「おれがこの茶番を終わらせる。……そうはかからんはずだ」

ルイズは使い魔が何を言っているのか分からない。しかしそれを問い詰める間もなく、使い魔は背負ったボロ剣を握り、森に向かって走っていった。慌ててルイズも追おうとしたがこちらに迫ってくるゴーレムを見て、

「つ………使い魔の馬鹿……！！！」

と叫ぶことしかできなかったのであった。

(早く使ってくれないかしら?)

森の中でフリーケはルイズたちが戦う様を見ていた。キュルケとタ

バサが逃げ回り、ルイズは何か叫んでいる。しかし、『破壊の杖』等を使う素振りは見せていない。

(盗んだはいいけど、使い方が分からないなんてね……)

だからこそ彼女はルイズたち学院関係者を呼んだのである。そうでなければだれが自分の居場所や盗んだものを返すような真似をするものか。

(特に使い魔君には期待が持てるしね。ヴァリエール嬢が来たことには本当に感謝しているわ)

薄い笑みを浮かべるフーケ。だがそこで、ふとおかしな点に気づいた。肝心の使い魔の姿が無くなっている。

(……? どうしたのかしら。まさか逃げて……!?)

驚きにフーケの思考が中断する。頭に、何か硬いものが押し付けられたのだ。しかも、

「そこまでにしてもらおう、ミス・ロングビル。……いや、『土くれ』のフーケと言った方が良いか」

かけられた声は、あの使い魔の声ではないか! しかも自分の正体に感づかれている!?

(どうということ!?! いえ、今はそんなことを考えている場合じゃないわ!)

ロングビル、いや、フーケは内心の動揺を抑えつつ、うろたえた様子を作った。

「いきなり何をするんです!?! 私はさっきここに帰ってきたばかりですよ! しかも私をフーケだ何て……」

「……確かに大したサマ師ぶりだった。それは認めてやる。元々情報を持つてくるタイミングといい、疑問に思う要素は多々あったが確信が持てる段階までにはいかなかったからな」

だが、と使い魔が言う。

「場所が悪かった。……ここにはおれ達五人以外誰もいない。この場所ならば、おれにはそれが分かる」

「!?!」

「おれを含めた四人にはゴーレムを作るなどできんし、しかも襲わせることなど誰も考えんたろう。となると、自然に答えが出てくるというわけだ。……サマはもう通用せん。その代償を払ってもらおうぞ」

「……ッ」

ぎり、フーケは歯をかみ締める。

どうやら誤魔化しはできそうに無いらしい。原理は言っていないが、この様子から周囲に人がいないことが分かるのは嘘ではないようだ。しかも後ろを取られ、何かを頭に押し付けられている状態では……

(……だからって……このまま捕まるか！これで終わったなどと思っただのは間違いだったと思い知らせてやる！)

後ろで見えないだろうが薄い笑みフーケは浮かべ、気楽な口調で話す。

「……分かったわ、どうやら本当に見破られてるみたいだしね。観念するわ。私もここで貴方とやりあうなんて馬鹿な真似、する気は無いもの」

「……言葉だけでは信用できん。さっさと杖を落とせ」

フーケはやれやれと肩をすくめた。両手を上げて杖を落とす。

「用心深いのね。まあ当然だけど……ね！」

そして落としざま、注意がそっちにいくとすばやい身のこなしで振り返って蹴りを見舞った。盗賊家業で体術もそれなりに鍛えられている。この距離なら当てられるはずだった。

(これなら……え!?)

しかし足は空を切ったのみだった。慌てて周囲を見るも、この使い魔相手では遅すぎた。

首に鋭い手刀を当てられ、何が起こったのかを知る暇も無くフーケは意識を刈り取られた。

「……ある意味、予想通りだったな」

キヨウスケは意識を失ったフーケの体を支え、デルフリンガーをしまつて肩に担ぎ上げた。

「やるじゃねえか、相棒。あんたを選んで正解だったみてえだね」  
山場を越えたと見たのか、デルフリンガーが口を開く。

「しかし、何でこいつは自分のアジトを教えるような真似をしたのかね？」

「……何となくだが、想像はつく」

「……つうと？」

「恐らく、こいつはあれらの使い方が分からなかったんだろう」

「あれら……ああ、『破壊の杖』と『不壊の鎧』かい」

キヨウスケは無言で頷き、歩き始めた。

ルイズたちのほうを見れば、ゴーレムは崩れはじめてきていた。あれならもう心配は無いはずだ。

「学校関係者なら使い方を知っているとでも思ったんだらう。……」

少々浅はかだったかな」

「へえ……なるほどな……しかしよ、相棒」

「何だ？」

「……別にもう敵はいねんだぜ。なのになんでそう身構えてんだ？」  
「……」

デルフリンガーの言うとおりだった。まだキヨウスケはその身に入れた力を解いてはいない。まだ不安が消えないのだ。

「……この不安はフーケの罠のことかと思っていた。しかし、フーケを捕えてもまだ消えてはくれん……」

フーケを捕えた以上、緊張を継続させる意味も無いというのに。一体何に不安を感じているのだろうか。

「……気になるといえば、あれらもそうだが……しかしあれらは……」

そして考えながら、ルイズたちのいる広場に出た。すると、

「何よ、何がどうなったわけ!? 何でいきなりゴーレムが崩れたの!?! しかもあんたは何でミス・ロングビルを担ぎ上げてんのよ

「おおおー！」

……喚き散らしながらこちらに突進してくる主人と、

「そんなの決まってるわ、キヨウスケがフーケを倒したのよ！ ミス・ロングビルはどうでもいいわ。やっぱりダーリンね！」

ここぞとばかりに言い寄ろうとキュルケがルイズと同じく突進してきた。

途端、思いつきり疲れた気分になる。唯一タバサは周囲にほかに何か無いか見回しており、同じようにこなかったのは良かったが。

しかし説明しなければ、特にルイズは騒ぎ続けるだろう。一層疲れることになるだろうが、やらなければもっと疲れることになるに違いない。

(……おれには考える暇も無いのか……ん!?)

キヨウスケが彼女等に歩み寄ろうとした、そのときであった。突然、体中にぞわりとした感覚が走った。

そしてそれはルイズたちも同じらしい。何、など言いながら、先ほどのタバサと同じく周囲を見回し始めた。

「お、おい相棒。こりゃ一体なんだ!？」

デルフリンガーも感じているのか、戸惑った声を上げる。しかし、キヨウスケは聞いていない。なぜなら、この肌を刺すような感覚に覚えがあったのだ。

まさかと思い、Dコンを取り出してセンサー反応を見る。果たして、キヨウスケの考えは当たっていた。

(……馬鹿な……転移反応だと……!?)

そしてまばゆい光を伴いながら、それらは現れた。

「……う……ここは、一体……次元転移は、成功したのか……？」

コックピットの中で、彼は目を覚ました。

彼はシステムXN・リユケイオスにより、平行世界への転移をしただけだった。事前にこの転移は不安定で、成功する確率はかなり低いと教えられていたのだが、今こうして自分が生きているという

のなら成功したのだろうか？

「た、隊長……ご無事ですか……？」

そこでモニターの一部に隊員の顔が出る。

「無事だったか。他の隊員はどうした？」

「はい。どうやら皆、無事の様子です。周囲にありました。……しかし、ここはどこなんでしょう？ 見かけない景色ですが……」

「慌てるな、事前に転移地点が狂うことも大いにありうると教えられていただろう。地形から確かめればすむことだ」

言いつつ、機体のAIに地形等から現在地を特定するように指示を出した。だが、その結果は……

「何だと!？」

予想をはるかに超えたものであった。驚愕に彼の顔が染まる。

「隊長？ どうかしたんですか」

「こ、こんな馬鹿な……こんな馬鹿なことがあるか!！」

ただならぬ様子に何かあったのか不安になったのだろう。隊員も緊張した声を上げた。

「隊長、一体何があつたんです!？」

「……座標が、特定できん……」

「え？」

「座標が、特定できんのだ!！」

彼は声を荒げる。驚くべき事態であった。

技術の発展によって全世界の地形のデータは大概入っている。しかもCPUの記憶容量も大幅に向上したため、地上の磁場と言った要素と絡めれば座標を割り出すことができるはずなのだ。しかし、それができない!

「ど、どういうことです、それは!！」

「俺に聞くな! 一体どこに出たと……ん?」

レーダに反応がある事に彼は気付いた。しかも生体反応で、五体ある。近くに人がいるらしい。

「どうしたんです?」

隊員が聞いてくるが答えず、彼は機体をそちらに向けて外部スピーカーをオンにした。

(この際だ、聞いてしまった方が早い。……しかし、なぜ現在地を割り出すことができないのだ……)

機体を向き終え、そこにいる者たちの姿を確認する。

(……なんだ、あの姿は……いや、今はそんなことよりも……)

疑問に思うが気にしていられない。用意した口上を頭に浮かべ、口を上らせる。

「我々は連邦軍の特務部隊である。任務中、AIの故障により……」

口を開きながら、一人一人を目で追って行く。最後に、そこから離れてた場所に位置する人間に目を移した。

「……現在地を知ることができなくなって……ッ!!!!!!」

だが、彼にはそこまでしか言うことができなかった。最後に視界に現れた人物、それには覚えがあったのだ。……言葉では、言い尽くせないほどに。

しばしの思考停止の後、何故ここにいるのかという疑問を伴って彼は叫ぶ。彼の属する部隊を追い込み、そして世界を崩壊に導く孤狼の名を。

「……べ……ベーオウルフ!!!!!!」

現れたのは、グレーのスマートなボディにテスラドライブとツインビームキャノンを搭載したバックパックが特徴の機体と、青いボディに赤いセンサーバイザーと左腕に三本のネオ・プラズマカタールを装備した機体であった。そしてそれらは、キョウスケもよく知る機体である。

(……エルアインスに……ゲシュペンストMK-2だと!?)

転移してきたそれらの機体を見上げるキョウスケ。だが、これらの機体を保有していたあの部隊は……

(おれ達が全滅させたはずだ。ならば何故こいつらがいる? 生き残りがおれと同じようにあの次元転移したとでも……! まさか……)

…)  
仲間の一人から聞いた話が脳裏をよぎり、それなら説明がつくと  
気付くキヨウスケ。

「おい相棒、一体なんだあのゴーレムは!? あんなモン見たこと  
がねえぞ!」

デルフリンガーが騒ぎ出す。ちなみにルイズたちは目の前にいる  
ものに理解がついていかず、呆然としていた。

「土でできていねえし、しかも魔力で動いているのでもねえ! —  
体ありやあ……!」

そうしていると、転移してきたエルアインスがこちらに向きを変  
えて呼びかけてきた。そして、

『……べ……ベーオウルフ!!!!!!』

と叫んだのである。それはキヨウスケであつて、キヨウスケでな  
い者の異名であつた。

(その名を呼ぶということは、やはりあの部隊か……となると……)  
そして叫んだ直後、腰部ラッチにマウントされていた武器を取り  
出し、向けてきた。

(そうくるか!)

しかも悪いことに、向けてきたのはM950マシンガンであつた。  
空いている左手でデルフリンガーを握り、加速する。そのすぐ後、  
大量に吐き出された弾丸が大地を抉っていった。PTであれば当た  
っても耐えられるが、人であれば耐え切れるものではない。シヨッ  
トガンでなかったのは不幸中の幸いだったが……

「おいおい、あれ銃か!? 何て破壊力だよ!!!」

「……黙っている、死にたくなければな……!」

初めてこれらを見るために、驚くのは仕方の無いことかもしれな  
いが今は耳元で騒がれていい状況ではない。しかも、

(あちらの方はまだ立ち直らんのか……!)

ルイズたちはまだ呆然と突っ立っていた。今までの経緯からタバ  
サは何とかなっているかと思つたが、やはり初めてPTを見たシヨ

ツクは大きかったらしくルイズたちと同じく呆然としていた。

他のPT、ゲシュペンスト四機とエルアインス一機もこちらに機体向け、武器を取り出してしている。このままここにいれば、流れ弾に当たって命を落とすのは確実だろう。自分が原因であるのだし、そんなことになったら目覚めが悪い。

上昇した身体能力に物を言わせてルイズ達に近づき、いつもと同じく有無を言わずに持ち上げた。……ちなみに、左腕で脇にルイズを抱え、右腕で担ぎ上げているフーケの上にタバサを乗せ、更に背中にキュルケを乗せるといってもない状態である。

いきなり持ち上げられてまたルイズが文句を言おうとする。

「ちょ、ちよつと!」

「黙っている!」

「……ッ!」

しかし即座にキョウスケに黙らされた。今はそんなことを言っている場合ではないのだ。

他の機体も完全に攻撃態勢を整え、こちらに銃を向けて弾丸を放ってきたのである。

舞い上げられる土ぼこりと着弾の衝撃、銃撃の轟音にルイズとキュルケが口を揃えて悲鳴を上げた。

デルフリンガー同様、初めて見るPTの姿や威力に戸惑いを隠せないのも無理からぬことではあるのだが……

(集中を欠いて、こいつ等を抱えたままここにいれば奴らに確実に殺されるだろう。……この世界では、使うまいと思っていたが……) だがこの場を切り抜け、ルイズ達を生き残らせるには手は一つしかない。キョウスケは確信し、覚悟を決めた。どの道エルアインスやゲシュペンストを見られている以上、ルイズ達に隠す必要も無いだろう。

走る方向を変え、森の更に奥に突っ込んでいく。

「ど、どこに行くのよ!? 逃げるんじゃないの!」

またルイズが文句を言ってくるが無視。そしてある場所にたどり

着き、それを隠していたシートの中にもぐりこんだ。

そう。これがフーケの正体を見破れた原因であり、現状を打破するキョウスケのジョーカー……

（使わせてもらうぞ……アルト！）

「……何よこれ……ルイズ、一体これって何よ!?」

「し……知らないわよ！なに、これ!?」

「……」

驚きの連続のためだろう。突然目の前に現れた赤い巨人に三者三様に驚き、叫び、目を丸くしていた。しかし説明などしている暇は無い。

一足に機体に飛び移り、コックピットに駆け寄ってハッチを開放ルイズ達を抱えたまま、中に入ってシートに腰掛け、フーケとルイズたちはシートの後ろのスペースに放り込む。……もう何がなんだか分からなくなってきたらしく、ルイズたちはひたすら騒いでいたが。

（……まあ、いざとなったら本気で黙らせるがな）

ガンダールヴの力も借り、すぐさまアルトを起動シーケンス、更には戦闘態勢に入らせる。

（TCOS 起動、各コンディションチェック……機体各部に異常は無い……よし！）

キョウスケは頭に流れ込んでくる情報を活用し、エンジンとシステムを起動させた。

グオン、という音と振動がコックピットに響き、コンソール、続いて機体周囲を映す全天候モニターが作動する。そして機体を覆っていたシートを払いながら、遂に異世界の空の下でPTX-003-SP1、アルトアイゼン・リーゼは完全に起動し、その大地に立ったのだった。

キョウスケは向かってくる敵機群を見ながら、レーダーに目を走らせてその数を確認する。

（熱源から数えてゲシュペンスト四機とエルアインス二機と言った

ところか……だが……)

そこでキヨウスケは、直接通信をこちらに呼びかけてきたエルア  
インスをメインに、他の機体にサブとして回線を入れた。あの言い  
方から、このPT小隊の隊長機と判断したのだ。

キヨウスケは、その部隊の名を口にする。

「……聞こえるか、『シャドウミラー』」

『！ ベーオウルフ、貴様か！』

すると、すぐに先程の男から返事が帰ってきた。

「ああ、そうだ。……だがおれはお前達の言うベーオウルフじゃな  
い」

『何？ どういうことだ！』

「おれはその名前で呼ばれたことも無ければ、特殊鎮圧部隊の隊長  
でもない。お前達が知るベーオウルフとは、何の関係も無い人間だ。  
……おれは、お前達にとつての平行世界のキヨウスケ・ナンブだ」

『……なに……に……！？』

驚きを多分に含んだ声ガスピーカーから漏れ、銃口が下がった。

他の機体もそれにならう。一方キヨウスケは、今までのやり取りか  
らこのシャドウミラーの正体にはつきりとした確信を持った。

(ラミアから聞いた、リユケイオスによる転移に失敗した者達か……)

彼女の話によると、システムXN・リユケイオスによる転移で二  
千機近くの機体がキヨウスケの世界に転移したらしい。しかしその  
際、半数以上は不安定な次元転移による時空の歪みに飲み込まれて  
消滅したという。だがもし、その歪みがこの世界につながっていた  
としたら……

(全員が転移してきたとは思えんが、この状況に説明がつく。……  
ならば、ベーオウルフでないおれのアルトも知らんはずだ)

「又聞きだが、お前達の知っているアルトアイゼン……ゲシュペン  
ストMK-3とは色も、形状も違うだろう。これが何よりの証拠に  
なる」

『……た、確かに言われてみればそうだが……ならばここは、我々の目指した……！？』

息を呑む気配がし、エルアインスが再び銃口をこちらに向けた。

『なぜ我々の存在を知っている！ 貴様が平行世界のベーオウルフなら我々の存在を知らないはずだ！』

「……確かに初めは知らなかった。だが、知らざるを得ない状況になったのでな」

『知らざるを得ない状況だと？』

「ああ。……簡潔に言わせてもらう。お前達シャドウミラーは、転移した平行世界でも敗れたということだ」

『何だと！？』

「お前達には信じられんかもしれんが、事実だ。……リユケイオスからの転移に失敗し、ここに流されてきたお前達は知らんだろうがな」

そしてキヨウスケはそれまでの経緯を、そしてこの世界の話も話してやった。キュルケたちに自分の正体がばれてしまうが、もうこの際である。

『……シャドウミラーが、ヴィンデル司令が……そしてここが……平行世界ではない異世界だと……』

困惑した声流れる。

「初めは信じられんだろうが、これも紛れも無い事実だ。少し辺りをうろつけば嫌でも分かる。おれ自身、この世界に妙な手段で来させられたに過ぎんしな。……だからこそ、提案がある」

キヨウスケは一呼吸置き、

「戦いを避けることは、できないか？」

と続けた。通信を入れるときから考えていたことである。

「ここで戦っておれに勝ったとしても、お前達には司令官も、シャドウミラー自体も既に存在しない。そしておれはベーオウルフじゃない。……戦う意味も、もう無いと思うが？」

『……』

エルアインスのパイロットが黙り込む。いつしか場の雰囲気にも飲まれたのか、ルイズたちが騒ぐのを止めていた。

しばしの間、ただ静寂のみが狭いコックピットの中を包んだ。だが、いきなりキョウスケはレバーを横に倒した。

「きゃあああ!」

襲い掛かる衝撃に悲鳴を上げるルイズとキュルケ。しかし、キョウスケは聞いていない。

「……これが、お前達の答えか」

目を細め、低くなった声を相手に投げかける。先程までアルトがいた場所を、弾丸が切り裂いていったのだ。

『そうだ、ベーオウルフ……いや、キョウスケ・ナンブ』

「……おれの話聞いていただろう。にも拘らず、戦うつもりか」  
そこでふ、と言う声がスピーカーから流れた。……冷笑、だろうか。

『その言葉はそっくりお前に返してやる。お前は我らの司令官から、一体何を聞いた?』

「……貴様らの、目的を」

『そうだ。そして我らはシャドウミラーだ。我らは我らの意思で司令の思想に賛同した。そして我らは大いなる覚悟と共にあの方の意思を遂げようとしたのだ! 今一度言えばいいか? われらの目指すものは唯一つ。……闘争の世界だ!』

狂気に似た信念と、熱に狂った口調で語るシャドウミラー兵。

『確かにここは異世界らしい。場所を特定しようとしても、データに無いという答えが帰ってきたからな。説明がつく。しかし、だからどうした? 例え世界が違おうとも、例え司令がいなくなろうとも、我々のやることに変わりはない。戦いの炎で全てを包むのだ。』

……そして、

エルアインスが、ゲシユペンストが、火器をアルトに向ける。

『その障害となるものを、排除する!』

キョウスケは目を伏せた。

(こうなることは、何となく分かっていたがな……)  
避けられるものならと思っただけで呼びかけてみたが、無駄だったよう  
だ。

(ヴィンデルの考えに賛同し、共に次元を超えようとした、か……)  
仲間の話では次元転移に成功する確率はかなり低いという。それ  
を承知で転移を望むほどの決意を持っているのであれば、もはや何  
を言っても考えを変えることはできないだろう。

(……今となつて考えれば、アルトを壊そうとしたときに感じた不  
安はこのときを指していたのかもしれない……)

キヨウスケは覚悟を決めた。目を開き、眼前にいる『敵』を睨み  
すえる。

「いいだろう、そこまで言うのならな。……だが、おれはこのまま  
殺される気も、貴様らの思い通りにさせるつもりも無い……！」

アルトを前傾姿勢にし、ブースターとテスラ・ドライブを起動さ  
せる。

「お前達が闘争の世界を望み続ける以上、放置することはできん。  
それにこの世界をそんなものにされるのも業腹だ。ならば、おれの  
やることは唯一つ……お前達を……」

そしてリボルビング・バンカーを前に突き出し、底知れぬ闘志を  
こめてキヨウスケは言う。

ただ撃ち貫くのみ

## 噛み砕かれる『影』

『来るか！』

そう言つてエルアインストの通信が途切れた。

同時にエルアインストとゲシュペンストが距離をとり、アルトを囲むように展開する。そしてマシンガンやメガビームライフル、スラッシュリッパを乱射してきた。

轟音と共に飛来する銃弾や熱線が木々を吹き飛ばし、なぎ倒し、焼き尽くす。キョウスケはそれらを避けながら、動きから彼等が何をしようとしているのかを覚った。

（距離をとって取り囲み、一斉射撃で仕留めるつもりか）

さすがに平行世界のアルトと戦つていただけはある。近距離用の兵装しかないアルトと戦う上では有効な手だろう。しかも事前にある程度の距離をとつていたようで、今ではかなりの距離になっている。ここから相手の周到さが窺われた。

だが、少々認識が甘かった。

アルトは確かに近距離用の武装しか装備していない。頭部プラスマホーンと右腕のリボルビング・バンカーは言うに及ばず、左腕の五連チエーンガンや肥大化した肩部に装備した武器も同様だ。だがそれでも相手を撃破することのできる機体であり、そしてそれを完璧に使いこなすことのできるパイロット、キョウスケ・ナンブが操縦しているのだ。

平行世界のキョウスケの情報がある以上彼等もそのことは知っていただろうし、この戦法も決して悪くは無いため悪く言う必要も無いだろうが、しかし認識が甘いことはどうしても言わざるを得ない。更に彼等が知らないことがもう一つある。

ちらりと、キョウスケは左手に目をやった。そこにあるのは伝説の使い魔、ガンダールヴのルーンである。それが今、輝きながらキョウスケに銃を扱ったときと同じくアルトをより巧く扱ったための情

報をキヨウスケの頭に流し込み、キヨウスケの感覚を鋭敏化させていた。

(十分だ。……いけるな)

キヨウスケは後ろを振り返り、目を白黒させて騒いでいる主人達に言っておいた。

「……ご主人達に言っておく。今からかなりの衝撃が来る。そこら辺のものにしがみついている」

「……へ？ どういう意味……きゃ!!」

言った直後、前に向き直ったキヨウスケはペダルを踏み込んだ。するとアルトの背部に装備されたテストラドライブのウイングが展開し、ブースターが火を噴いて凄まじいGがキヨウスケとルイズ達を襲ってくる。アルトが近距離用兵装しかなくとも敵機を撃破できる要因、過激なまでの加速力である。しかもその過程で敵機の攻撃を何発か当たったが、その程度の攻撃では怯みもしないほどの強固な装甲もアルトには備わっているのだ。

過激なまでの加速性と、そして分厚い装甲と重武装による敵陣突破。この無茶とも言えるコンセプトを実現できる機体、それがアルトアイゼン・リーゼである。

銃弾を食らいつつも、アルトは恐ろしい速度で一機のゲシュペンストに近づいていく。だが黙ってこちらの接近を許してくれるほど甘い相手では無い。

こちらが突っ込んでくると知ると、四機のゲシュペンストが今まで撃ってきたマシンガンやメガビームライフルだけでなく、背部に装備している二つのスプリットミサイルを四機とも放ってきた。しかもそれだけではない。残る二機のエルアインスもゲシュペンストと同様、手に持った火器と一緒に自機最大の攻撃力を誇るツインビームカノンを撃つ。

シャドウミラー隊に近づいてくる今を好機と見て、彼等は持てる最大威力の攻撃を放ってきたのだ。

(……ここでジョーカーを切る、か。まだそれほど消耗せず、全機

残っている現時点だからこそこの手が生きることを知っている。なかなかの判断力だな。……だが！)

「止められるなら……止めてみる……！」

しかしそこでキョウスケは、言いながら更にペダルを踏み込んだのである。アルトのデュアルセンサーがそれに応えるかのように光り、ブースターとスラスターが巨大な炎を吹いてアルトが更なる加速を始める。

「……………！！！」

「……………！？ ……！！？」

顔色が青く、Gで苦しいことが丸分かりであるにも拘らずルイズとキョルケがキョウスケに口をもごもごさせてきた。

どうやらここでアルトを加速させたことについて文句を言いたいらしい。だが確かに文句を言いたくなるのは分らないでもない。

あれだけの銃弾やミサイルの中に加速して突っ込むなど、普通なら自殺行為以外の何者でもない。

だが、キョウスケとアルトは『普通』ではなかった。

四方八方から迫り来る銃火の嵐を、キョウスケは加速している状態で機体进行操作し、まず左腕のチェーングンで進行方向上にあるミサイルを落とした。そして機体に致命傷にならないマシンガン等は何発か当たりつつも、アルトに損害を与えうるエルアインスのツインビームカノンは確実に避けてこの嵐を突破して見せたのだ。

しかし簡単に言ったが、これらは並大抵のことではない。加速している中で機体进行操作するというのは暴れ狂うじゃじゃ馬を扱うようなもので、かなりの腕がいる。しかもこの加速だ。難易度は普通の機体とは比べ物にならない。

だがキョウスケはそれをやってのけた。ガンダールヴの力を借りたおかげでもあるのだろうが、しかしキョウスケ自身のもつ卓越した操縦技術があつてこそその芸当であつた。

あれほどの銃火を避けてみせたことに、後ろのルイズたちはもはや言葉も無い。

銃火の嵐を抜けたキヨウスケは、アルトをゲシュペンストに肉薄させる。慌てて火器を捨てて左腕のプラズマカッターを抜こうとするも、今のキヨウスケにはその動作の全てが遅すぎた。

キヨウスケは必殺の手ごたえを感じ、言い放つ。

「とつたぞ……！」

アルトの右腕が唸りを上げ、リボルビング・バンカーがゲシュペンストを撃ち抜く。しかし、キヨウスケはそれだけでは済まさない。ゲシュペンストを貫いたままキヨウスケはガンダールヴの力も借りて強引にアルトを方向転換させ、近くにいたもう一機のゲシュペンストに向かつていったのである。

包囲網を抜けられ、先程のような弾幕もできない以上、アルトを止めるのは不可能だった。瞬間間に二機目のゲシュペンストが撃ち抜かれる。

そしてキヨウスケは加速を停止させ、二機のゲシュペンストを頭上に持ち上げてトリガーを引いた。

腹に響く重低音が周囲に響く。ゲシュペンスト二機にリボルビング・バンカーの杭がたたき込まれ、その衝撃に機体が粉碎された。

ばらばらとゲシュペンストの残骸が辺りにばら撒かれる。

与えられた命令のままに行動し、命を捨てることも厭わないシャドウミラーであったが、ここまで早く味方が倒されるとは思ってもいなかったらしい。僅かながら動きに動揺が生まれる。

（これで後四機。……無慈悲なようだが、立ち直る暇は与えん……！）

この機に敵を全滅させるべく、キヨウスケは再びアルトを加速させた。

アルトを加速させた状態のまま、再び眼前に残り四体となったシャドウミラー隊を捉える。キヨウスケはチェーングンを牽制に乱射しながらアルトを突撃させた。

すると、ここで彼等は思いもよらない行動に出た。残り二機となったゲシュペンストが、弾幕を再度張りつつも後退を止め、エルア

インスの盾となるかのように立ちはだかったのである。恐らく最大の威力を誇るエルアインスのツインビームカノンを当てるために、動きを引き付けようという魂胆なのだろう。

だが、これは無謀な手だった。

近距離での戦闘におけるアルトの戦闘能力はゲシュペンストでは及びもつかない。装甲の厚さ、装備、更にはパイロットの質に機体の自身の運動性といった性能まで、ありとあらゆる点で劣っている。現に先程のゲシュペンスト二機は何の抵抗もできずに撃ち抜かれた。しかも今は動揺が抜けきつていないため、動きがはじめと比べて若干鈍い。これでは死ぬだけだ。

(どういうことだ?……いや、構わんか。今はただやつらを仕留めるだけだ。他はどうでもいい……!)

キョウスケは眉をひそめたが、すぐに考えを切り替えた。相手の方が切る札を間違えてくれたのだ。わざわざそれを逃す手は無い。

弾幕を切り抜けながら一機にはチェーングンで牽制して動きを封じ、片方にそのままの速度で迫る。

そしてアルトの右腕が再度唸りを上げ、ゲシュペンストに襲い掛かる。

惜しくも直撃と言うわけにはいかず、胴体ではなく肩部にバンカーが撃ち込まれた。ヒットの際上体を反らせ、当たる部分を変えたのだ。

しかしバンカーが突き刺さっていることには変わりがない。このまま加速し、先程と同じくもう一機を巻き込むだけである。

そうキョウスケが思った、その直後だった。

貫かれたゲシュペンストが手に持っていた火器を捨て、明らかにゲシュペンストの限界を超えていることが分かる炎を背後のブースターから吹かせてアルトの右腕にその両腕を巻きつかせてきたのである。

「何……!?!」

その行動に驚くキョウスケ。振り払おうとするも、離さないと

う執念のためかどうしても振り払えない。しかも牽制していたもう一機のゲシュペンストも同じ様に火器を捨て、炎を吹かせつつ今度は左腕に絡み付いてきた。

ここでついに、キョウスケは彼等の無謀な行動の真意を覚った。

（こいつらもろともおれを葬るつもりか……！）

間違いないだろう。性能の限界を超えた炎を背から吹かせ、アルトの動きと加速を止めようとしていること。そして眼前に捉えていたエルアインスがテストドライブによって高度をとり、手持ち火器とツインビームカノンを展開させ始めたことから明らかだ。

シャドウミラーという部隊の本質を知っていながら、この動きを見切れなかったのは失敗だった。

（……ラミア達から聞いていたが、これがシャドウミラーか……）

兵士は任務のためなら死も恐れず、ただただ忠実に、機械的に任務を遂行する。それがシャドウミラーという部隊なのだと言う。

確かにそれは兵士が最もあるべき姿なのかもしれない。軍隊という性質上、上からの命令を下の兵士が聞かなければ作戦も実行できず、統率もとることができなくなってしまっただろう。

……だが……！

（そうだとすると……おれは……）

キョウスケはコンソールを操作し始めた。その表情はいつもの無表情であったが、そこには底知れぬ怒気が現れていた。

「……気に入らん……！！」

怒気を込めて吐き捨て、そして操作を終えた。すると、アルトのブースターとスラスターが更に巨大な炎を吐き始める。

キョウスケがスラスターのリミッターを解除させたのだ。リミッターを外したアルトの加速には、ゲシュペンスト二機が食い止めようとしてもまったく効果が無かった。ゲシュペンスト二機を巻きつかせたまま、アルトは再び加速し始める。

慌てて上空のエルアインスが攻撃を始めるが、加速し始めたアルトにはかすりもしない。アルトは加速とテストドライブによってエ

ルアインズと同じくその身を空に躍らせる。

そしてその尋常ではない加速の勢いによって緩み始めた拘束を頭部に据え付けられたプラズマホーンを振り回して一気に振り切り、同時にエルアインズがいる前方に放り投げた。

「……アルトやお前達を動かさすぎた。そろそろ片を付けねばならん」

戦闘が始まって以来ブースターやスラスター、銃声など轟音がそこから一体に響き渡っている。いくら夜とはいえ、これ以上戦闘を続けていけば人に見られてしまうだろう。大きな残骸は回収するとしても、小さい物や弾だけでは何かは分かるまい。しかし、実物を見られるのはまずいのだ。

前方に敵機が固まっていることを確認し、キョウスケはFCSにアルトの肩部に仕込まれた武器、アヴァランチ・クレイモアを使う指示を出す。

「総取りでいかせてもらう……！」  
肩部前方のシャッターが開き、そこからチタン製のベアリング弾が大量に撃ち出された。

大地を、木々を、ゲシユペンストとエルアインズをそれらが貫き、粉碎していく。腕が、足がもげ、そして彼等の機体はついに蜂の巣同然となり、地面に落ちていった。

墜落の轟音が響き、その後にはただ、加速を止めて空中に浮かんだアルトが炎を吹かせる音だけが残っていた。

## 極めて遠く、限りなく異なる世界に

ルイズは眼前にある緊迫した雰囲気には押しつぶされそうだった。

「さて、今回は正直に話してもらおうかの。……今回も遠見の鏡で見せてもらったが、あのゴーレムとはまるで違う鋼鉄の巨人達は何じや？　そしてそれを操るおぬしは、一体何者なんじや？」

そこは学院長室であり、机に肘を突いているオールド・オスマンがその前にいるキョウスケに問いかけていた。しかしその声は硬く、いつものどこかふざけた様な感じはまったくしない。もつとも、この部屋に集まっている人間は皆同じ様なものだろう。……あんな鋼鉄の巨人達を、そしてその威力を見せ付けられたのだから。

（今でもあの時のことは全部幻だったんじゃないかって思えるわ……）

ルイズはあの『ゲシユペンスト』やら、『エルアインス』とかいうらしい巨人が現れたとき、そして使い魔に『アルトアイゼン』という巨人に押し込まれたときは本気で気が狂いそうだった。『ゲシユペンスト』らが現れたときから敵方への突撃まではまだ騒ぐ気力があつたものの、戦いが本格的に始まった後は目に飛び込んでくる光景と体にかかってくるとんでもない力で喋る余裕も無かった（……そして思い出したくも無いことだが、戦闘中は緊張のせいで抑えられていたのか吐かなかつたが、終わつた途端吐いた。使い魔のムツツリ顔は崩れなかつたが、ものすごく嫌そうだったことを追記しておく）

今まで目にしたことのない戦いが、そこにはあつたのだ。

巨人達は手に持った何かを撃ちまくり、対する使い魔の巨人も、その中で映し出された光景からは全体像が見えなかつたがその全身に装備している何かで戦つた。しかしその規模は、ルイズの知っているものとは桁が外れていた。光が通過すれば森の木々が焼き尽くされ、凄まじい速度の何かが通過したと思えば大地が抉り取られ、

巨人が動けば何本もの木々が倒された。

轟音に次ぐ轟音、爆発に次ぐ爆発、破壊に次ぐ破壊。

そしてそれらが終わったと思つたときには、元々森であつたそこから一帯の光景は様変わりし、荒れ果てた土地が広がつていた。例え戦であつてもここまでの破壊にはならないと言つほどの、圧倒的な破壊。それが巨人達が戦いをしていたほんの十分ぐらいで引き起こされたのだ。

乗っている巨人が動くたびに体にかかつてくる凄まじい力と一連の光景に、しばらくの間ルイズたちは言葉を発することができずにいた。だがその後、突然タバサがキヨウスケに杖を向けてきたのである。

「タバサ!？」

キユルケが驚きの声を上げる。しかしそれには構わず、タバサは使い魔に杖を向けたまま、

「あなた、何者？ あれらと、この巨人は何？ ……異世界って？」と問いかけたのだつた。その目には不審がみなぎっている。

その目と様子を見た使い魔は、ふ、いつもの微かな笑みを浮かべた。

「……その通りだな。今のおれは、お前達から見れば不審の塊にしか見えんだらう」

振り返り、ルイズたちの顔を次々に見ながら言う。

「いいだらう。……ここまで付き合わせた上、こいつも、そしてやつらも見られたしな。包み隠さず、おれが知っていることを全て話す」

ただし、と使い魔は言った。

「少し作業をした後、別の場所に移つてで構わんか？ 小さいものならともかく、大きいやつらの残骸は回収しなければならんし、それにおれ達を見ている人間にも説明しなければならんだらう」

そして使い魔は、自分の巨人で人目のつかない夜のうちに壊した敵の巨人達の残骸を回収した後、戦闘でやったように巨人を学院近

くまで飛ばし、昼近くに学院に戻ったのである。

フーケはすぐに牢屋に入れ、タバサがこっそり持ち出していた二品も宝物庫に返されたが、そんなことはどうでもいいとばかりにキヨウスケが学院長に呼び出され、そしてあの巨人と一緒に乗ったと言うことでルイズたちも同じように呼び出されてここにいる。しかし、それはルイズにとってもありがたかった。

(あんだ、一体何者なの……?)

その思いが渦巻いていたからだ。

緊張を耐えながら目の前を見ると、静かに使い魔が口を開いた。

「……オールド・オスマン。今まであの巨人……『アルトアイゼン』を黙っていたことは申し訳ありません。タバサにも言いましたが、これから包み隠さずおれの知っている全てを話します。ですがその前に、こちらからも一つ質問があります」

「ん？」

「あの二品、『破壊の杖』と『不壊の鎧』のことです」

むう、とオスマンが唸り声を上げた。

「やはりあれらは……」

「ええ、おれたちの世界のものです。『破壊の杖』は対PT用簡易ミサイルランチャー、そして『不壊の鎧』はパイロットスーツ、あの巨人に乗る際に身に付けるものです。……あれらは何故この世界にあるんですか？」

「……あれらはわしの恩人が残したものだ」

オスマンが遠い目をする。話によると、オスマンが若かりし頃、ワイバーンに襲われた時に助けてくれた男が持っていたらしい。だが、その男は既に瀕死ですぐに亡くなってしまったらしいが……

「……そうですか」

「うむ。その時『ここはどこだ』、『行かなければならないのに』、『任務を果たさなければ』とうわ言のように何度も呟いておったよ」

「まるで知らん格好をしていたこともあったし、彼が何者なのかは結局分からずじまいじゃった。そのことも含めて似たような雰囲気  
の武器を持っているおぬしに相談しようと思っておったんじゃが、  
やはり彼も……」

「……お考えの通りですが、少し違います」

「なんじゃと？」

「その男は、おれの世界に『極めて近く、限りなく遠い世界』から  
来た人間です」

一瞬、ルイズたちは使い魔が何を言っているのか分からなかった。

「……そ、それはどういう意味じゃ？」

オスマンが頭にたくさんの疑問符を浮かべて聞く。しかし使い魔  
は、いずれ話しますといつてこの話を一旦打ち切った。

そして使い魔は、あれらの巨人の話始めた。

「……あれらはPT、パーソナルトルーパーという人型機動兵器で  
す。おれはそのパイロットをしていました。そしてお気づきのよう  
に、あれらはあなた方の知っているゴーレムとはまったく違います」  
「ではその『ぱーそなるとるーぱー』とは一体……？」

オスマンの隣に立ったコルベールが、使い魔に聞いてくる。好奇  
心半分、そして恐怖半分と言った感じであった。

使い魔はコルベールに目をやり、

「おれが元いた世界、その世界の科学技術によって作られたもので  
す」

と答え、続いてTCOSだのサーポモーターだのと言ったわけの  
分からない単語が出てきたため、全員でそこまでいいと言った。

「ところで、ねえダーリン。その『カガクギジュツ』って何？ あ  
と何度も言ってたけど、異世界って何よ」

ルイズの隣にいるキュルケが聞く。

使い魔はルイズに以前説明したように科学技術を一部の人間しか  
使えない魔法を誰もが使えるようにしたものと教え、そして自分が  
この世界ではない、別の世界であることを全員の前ではっきりと言

った。

今まで知らなかったキュルケたちが驚いたのは説明するまでも無  
いだらう。

「……しかし、あのようなものを魔法以外で作り出し、そしてあ  
のような戦闘能力を持っているとは……貴方の世界の『カガク』とは、  
恐ろしいですな……」

しかし、とコルベールは続ける。

「あれらと貴方が持っている『アルトアイゼン』と言う巨人で終わ  
りでしょう？ あんなものが、そう、多く……」

軽い口調で言うコルベールだったが、その言葉は後半に進むにつ  
れて小さくなっていった。使い魔は苦笑しながら、首を振っていた  
のである。その様子にハルケギニアの人間全員が固まる。言葉には  
出さないまでも、あんなものがそう何体もいるものかとハルケギニ  
アの常識で思っていたのだ。

「残念ですが、パーソナルトルーパーはそう特別なものではありません。  
……おれたちの世界にはパーソナルトルーパーも含め、多く  
の人型機動兵器が普通に活動しています」

その言葉で更に石化する。しかも、使い魔は更にとんでもないこ  
とを言い出した。

「ですが、おれの言葉だけでは信用できないでしょう。……今から  
証拠を見せます」

そして一歩進み、オスマンの手前にある机に何かを置いて操作し  
始めた。すると、何と空中に映像が映し出されたのである。

「細かい説明は省きますが、これが元いた世界での、おれとアルト  
の戦闘記録です」

と使い魔がいったが、そんなことはもはやルイズたちは聞いてい  
ない。目の前にある映像に心を奪われてしまったかのように、見入  
っている。

(何……これ……！)

ルイズは呆けた思考でそんなことを思った。

そこでは多くの巨人達が戦っていた。あのゲシユペンストとか言うのも、エルアインスとか言うのもいた。しかし、使い魔の言ったとおりその数が半端ではない。何体も何体も、十や二十どころの話ではない数がいた。そしてそれらは、様々な巨人と戦っていた。

ゲシユペンストよりも更に大きい、何か妙な眼鏡をしたような青い巨人もいた。黒い鎧をまとった、とんでもない大きさの剣を振り回して戦っている巨人もいた。羽みたいなのを背中に付けた、すごい速さで空を飛び回っている白い巨人もいた。

その戦いの規模はルイズたちが見たものとも、更に桁が外れていた。ルイズたちから見れば、言うなれば神々の戦いであるかのようにだったのだ。

そんな映像が数分続いた後、使い魔はようやく映像を消す。

「……これがおれたちの世界での戦い、そして、パーソナルトルーパーを初めとした機動兵器の力です。……少々、刺激が強すぎたようですよ」

使い魔がこういったのも無理は無い。ルイズたちはそろって腰を抜かし、元々座っているオスマンを除いて地面に尻を落としていたのである。

「あ……あなたたちの世界は、一体何なんです……!?!」  
杖に縋りながら、コルベールが震えた声を出す。キュルケがそれに激しく頷いた。

「わ、私はあんなのが暴れ回っていて良く滅びないわねって思うわ……」  
タバサはこくこくと頷く。

「で、でもあんなのが魔法なしでできるなんて、私まだ信じられないわ。……あんなの世界って本当に何なの……!?!」

ルイズが力なく言う。しかし使い魔は苦笑を浮かべたままルイズに目をやり、

「何も変わらんさ。……人がいる、ただそれだけだ」  
そう答えた。

「持っているものが違うとはいえ、やっていることは単なる戦争だ。そのことに関してまるで違いなどは無い。それにこのままいけば、いずれお前達もおれ達と同じくらいの力、いや、魔法がある分おれ達以上の力を持つだろう。……話が逸れたな」

笑みを消し、再び使い魔はオスマンに向き直った。

「おれがこの映像を見せたのは先程言ったとおり、おれの話が真実であることを知ってもらうためですが、何より機動兵器の力をより深く見てもらいたかった。……ここからが、おれの本題です」

「本題、じゃと？」

ええ、と使い魔が言う。

「おれが森で戦ったやつら……『シャドウミラー』についての話です」

「『シャドウミラー』……じゃと？ 何じゃそれは」

「……『シャドウミラー』、正式名称『地球連邦軍特別任務実行部隊』……これがあのゲシュペンストとエルアインスが属している部隊です」

「では彼等もあなたのいた世界から来たのですか？ たしか、その『チキウウレンポウ』と言うのはあなたのいた世界における政府と聞きましたが……」

未だに腰が抜けたままのコルベルが聞く。その内容に同じく腰を抜かしているルイズはあれ？ と何か引っかけたが、使い魔は首を振ったことでそんなことを気にしている場合ではないと考え、使い魔の話に集中しなおした。

「いいえ、やつらは確かに地球連邦に属していた部隊ですが、おれたちの世界の地球連邦ではありません。……『平行世界』、と言う概念を知っていますか？」

「……『平行世界？』……」

タバサを除く全員がオウム返しに聞き返した。使い魔が息をつく。「……知りませんか。……おれも完全に概念が分かっているわけはありませんが……」

使い魔は一つ間を入れ、続けた。

「『平行世界』とは異世界とは違う、異なった可能性をもった同一世界のことです。例えばこの世界でご主人はおれを召喚しましたが、平行世界においてはおれではない何かを召喚したかもしれません」

「……？ どういうことよ。私が召喚したのはあんたよ。それに、その話だと私が何人もいるみたいじゃない。そんなことあるわけ無いわ」

ルイズが何を言っているんだというような口調で言う。だが使い魔はルイズをちらりと見、至極真面目な声で応えた。

「確かにそうだ、ご主人。この世界のお前はお前しかいないし、呼び出したのもおれだ。だが、そうでない可能性をもっていたかもしれんことは事実だろう？」

「……それはまあ、そうだけど……」

「『平行世界』と言うものは、その可能性が実現した世界と考えればいい。……ご主人がおれを呼び出さなかった世界、フーケがとらわれていない世界、貴族がない世界。ありとあらゆる可能性が実現されて枝分かれしていった世界。つまり、『極めて近く、限りなく遠い世界』だ」

話のあまりの内容にルイズたちは口をあぐりと開けた。そして、一番早く立ち直ったコルベールが驚いた口調で言った。

「で、では、一つ一つの行動、事象ごとに枝分かれしていった世界と言うことですか！？ ですが、それは……」

使い魔が頷いた。

「その通りです。……『世界には無限の可能性が存在する』……おれの世界の仲間の一人がそういつていましたが、まさしくその言葉通りになります。そしてやつらはおれたちの平行世界、その中の一つからやってきました」

「……なんとまあ、さっきの巨人の話だけでもとんでもなかったと言っのの……」

呆然とした様子で言うオスマン。

「やつらは見ての通り、ゲシュペンストやエルアインストといった人型機動兵器を所有しています。そして平行世界で培ったおれたちの世界に無い技術を持ち、おれたちの世界に侵入し、そして様々な勢力と手を結び、やつらはやつらの目的を達成するために暗躍しました」

「……目的？」

無口なタバサが珍しく口を開き、使い魔に問いかける。

使い魔は目を伏せ、切り出した。

「やつらの目的、それは……」

絶えず戦いが行われている世界。戦いを一時も絶やさないと、『闘争の支配する世界』

……これを、作り出すことです」

学院長室が一瞬、シン、と静まり返る。ルイズたちは、これで何度目になるか分からない呆然とした顔を晒した。これまでに何度も驚かされ、腰を抜かされ、もう何を言われても驚かないつもりであった。しかし、今度の話もルイズたちの理解をはるかに超えていたのである。

キュルケが「なによそれ……」と呟く。

「わ、私も好戦的などころがあるけど、そんなのわけが分からないわ！ 何でそんな世界を、そいつらは作るうって言うの！？」

そして、困惑のあまり叫ぶ。

それを見て使い魔は、再び苦笑を浮かべた。

「やつらの言い分では、平和の世界こそがそんな世界と思っているだろう。……『闘争によって、人は進化する』」

「……それは一体何じゃ……？」

理解できないことから来る戸惑いからか、自分でも知らぬ間にオスマンの声はコルベールと同様に震えていた。使い魔は首を振りながら答える。

「やつらの持論です。……『平和は腐敗を生み、人は退化する。文明も人も、闘争によつて技術を高め、進化してきた。ゆえに闘争を途切れることなく続けることにより、人の進化は止まらず、腐敗もまた起こることは無い』。……やつらはこの理論を固く信じています。そして、だからこそおれたちの世界でも戦いを引き起こしました」

「……それはそうかもしれないが、じゃがその理論や世界は……」

「ええ。腐敗や進化し続けると言うのも所詮は確率の問題です。それに戦いを望むか、戦争を続けたいと願う人間にとつては理想かもしれません、そうでない人間にとつてはただの地獄でしかないでしょう。……正しいかどうかは知りませんが、身勝手な理想であることは確かです」

「……」

ルイズたちは押し黙る。使い魔の言っていることはそれ程に衝撃的であつた。そしてそれは、その恐ろしい理想を本気で実現しようとする者達の声を直に聞いた者たちにとっては特にそうであつた。

「……なんなのよ……」

そこで、怒気がこめられて震える声が部屋に流れた。全員の視線が声の方に向けられる。それは果たして、ルイズであつた。

「なんなのよ、そいつらは！ そんな理想、馬鹿げてるわ！ いいえ、何より自分達の世界でやろうとしないでなんであんた達の世界や私達の世界でやろうとするわけ！？ 迷惑どころの話じゃないわ……」

ルイズは怒りのままに怒鳴る。あの『アルトアイゼン』に乗せられたとき、その際は彼等のいつていることの意味が分からなかつたが、ここに来てその意味が分かり怒りが爆発したのだ。

「……おれの仲間もそんなことを言っていた。……ここからの話はおれも又聞きで聞いただけで、おれが自分の耳で聞いた話ではないが、その理由も知っている」

すると使い魔が目を開き、そんなことを言った。全員の視線が今

度は使い魔に集まる。

「ご主人の言うとおり、やつらは元々自分達の世界で地球連邦に国旗を翻し、その『闘争の世界』を作るつもりだったらしい。……そのやつらがおれたちの世界に来たのは、やつらの世界である一つの部隊に敗れたためだ」

「ある……部隊？」

「ああ。……連邦軍特殊鎮圧部隊、『ベールウルブズ』と言う部隊に、な」

ルイズやキュルケ、タバサはその名前を聞いたとき、引つ掛かりを覚えた。

「……あれ、ちょっと待って。その名前って、たしかやつらがあなたに……」

キュルケが代表として聞く。その質問に、使い魔は「そうだ」と言った。

「『ベールウルブズ』の隊長は部隊名からとった異名、『ベールルフ』を持つ男。……平行世界でのおれ、キョウスケ・ナンブだ」

「……そういう、ことだったの。だからあいつ等はダーリンのことを『ベールウルフ』っていったのね……」

キュルケが納得したように呟いた。となりでタバサがこくりと頷く。二人ともようやくシヨックから立ち直ってきたらしく、立てるようになっていた。

「やつらがそう言ってた訳がやっと分かったわ。……でも、確かダーリン。そのとき、『シャドウミラー』は壊滅させた」って言ってなかった？」

そのキュルケの問いに、使い魔が「ああ」と答えた。

「そうだ。おれはもといた世界で仲間と共にやつらと戦い、勝利した。だが、やつらの残党が思いもよらなかった形で残っていたということだ」

「思いもよらなかった形って、何よ？」

キュルケたちと同じく立ち直ったルイズが使い魔に聞く。

「それは、次元転移の不安定さに関わることだ。……これも人からの又聞きだが、平行世界への転移のような世界をまたぐような転移は不確定要素が多く、成功する確率がかなり低いらしい。そしてそれはやつらにも当てはまった」

「どづいこと？」

「……やつらがおれたちの世界に転移する際、転移した数の半数以上はこちら側の世界に来れなかったそうだ」

「え!？」

「『次元転移と言うものは例えるなら、濁流の中で一本の糸を見つけるようなもの』。……そうおれの仲間が言っていた。それほどまでに、平行世界への転移は難しいらしい」

「で、でもあんたは私に呼び出されているけど、成功しているじゃない! それは何ですよ!」

その質問に、なぜか使い魔は一瞬答えるのを尚巡る様子を見せる。だがすぐに立ち直り、ルイズに答えた。

「……それは恐らく、ご主人が呼び出したときおれは特別な状況にあったからだ。だが、この話は今の話題とは関係ない。飛ばさせてもらうぞ。……おれたちの世界に行こうとして、やつらは世界の間にある空間に紛れ込んだり、もしくは時空の歪みに巻き込まれて消滅してしまつたらしい。……だが、そうでない者たちもいた」

……ここまでの話を聞いていて、ルイズたちは使い魔の話の内容にはほとんどついていけなかったが、ともかく異なる世界へ飛ぶ『次元転移』というものは成功する確率が低いことと、命の危険もあり得ること、そして……

「なるほどの。つまり、その元の世界から転移した『シャドウミラー』の、おぬしの世界に行こうとして失敗した者達がこの世界に流れ着いたということが」

それらのことは分かり、オスマンが使い魔に確認するように聞いた。使い魔が頷く。

「その通りです。やつらと話をしてみても、そのことも確認が取れま

した。……ですが、ここまでの、とくにおれたたちの世界でのやつらについての説明は単なる事実には過ぎません」

使い魔のその言に、髭をなでながらオスマンはため息をついた。

「その通りじゃの。ここまでの話はわし等には直接の関係は無い。本当の問題は、失敗した連中のうちどれくらいの数がこの世界に来るかと言うことじゃのう」

オスマンが言った言葉は、ルイズたちに重くのしかかった。

その通りなのだ。

今までの使い魔の話、森に出現した『シャドウミラー』についてはともかく、は単に別の世界で起きたことを言っていたに過ぎず、ルイズたちに直接関係することではなかった。

しかし、ここからの話は違う。『シャドウミラー』の脅威が、現実に自分達に迫っていることを改めて実感させる話、このハルケギニアに来るかもしれない彼らの話なのだ。

すると、そこでコルベルが立ち上がり、ためらいがちに使い魔に問いかけた。

「……つかぬことを、お聞きしますが、その転移したという『シャドウミラー』はどのくらいの規模だったのですか？ その半数以下があなたの世界にたどり着いたとは聞きましたが……」

使い魔を除くハルケギニアの人間が、はっとしたようにコルベルを見る。

それは聞かなければならないことではあっても、ある意味聞いてはならない事柄であった。もし、もしである。使い魔の操る『アルトアイゼン』でも敵わないほどの数の巨人がこの世界に流れてきたとしたら？ 使い魔の巨人が強いのは知っているが、もしそれを上回る物量で攻めてこられたらどうすればいいというのだろうか？

不安に揺れる瞳で、彼等は使い魔を振り返った。それを見て、しかし、使い魔は変わらぬ淡々とした様子で言った。

「……これは最悪の事態と受け取っていて下さい。話した通り、次元転移には不確定要素が多すぎます。次元転移で引き起こされるの

は場所だけの移動だけではなく、時間すらも超えてしまう可能性もありますし、おれも実例を目にしました。それにおれが森で戦ったシャドウミラーや、オールド・オスマンを助けたシャドウミラー兵にしても時系列で考えればおかしい存在です。そのため、今から言う全ての機動兵器の半数がこの世界に転移してくる確率は相当低いはずです」

そして、使い魔がその数を言う。

「……おれがその仲間から聞いた話では、戦車や飛行機といった人型機動兵器以外も含めての、やつらの兵器転移総数は……」

およそ、二千機近く

その数字に、今度こそルイズたちは凍りついた。

(そんなの……そんなの、無茶もいいところじゃない……！)

使い魔はこの半数は使い魔の世界に行ったという。しかしそれでもあんなのがその半数、千もの数がいるのである。

背筋に走る悪寒、そして、振り払おうとしても浮かんできってしまう光景がルイズの心を蝕む。

倒れ付す『アルトアイゼン』。それを尻目に、地平を覆い尽くし、森を、大地を焼き払いながら侵攻してくる青と灰の巨人達の群れ

有り得ないはずの最悪の事態とはいえ、そんな光景が頭を占めてしまう。だが、

「……言ったはずです。これは最悪の事態です。ここまでの数がこの世界に転移してくるとは到底思えません」

使い魔の変わらぬ淡々とした声が、凍りついたルイズ達を今度は解凍し、安心させた。しかし、

「それよりもむしろ、シャドウミラーが既にこちら側に来ていることを念頭において考えを進めた方がいいとおれは思っています」

と言って、ルイズたちに再度の緊張を促した。

「ど、どういうことじゃ？ そやつらの目的は『鬪争の支配する世界』とやらなのじゃろう？ もし彼等が機動兵器を持ってこのハルケギニアにたどり着いていたとしたら、既に行動を起こしているのではないのかね」

オスマンが使い魔の言葉の意味を問うた。

「そうだ、とルイズもオスマンの考えに同調する。もし『シャドウミラー』が既にたどり着いて、しかもあの機動兵器とやらを持っていたとしたら、行動を起こさないはずが無いのだ。」

「そ、そうよ！ 一機だけでもメイジが束になっても敵わないほどの威力があるのは、比べれば誰にでも分かることですよ！ なんてそんなこと言うわけ！？」

興奮しながら疑問を口にするルイズ。それに使い魔は、首を振って冷静にその問題点を指摘した。

「確かにその通りだ、ご主人。一機だけの機動兵器でもこの世界では無類の強さを誇れるだろう。だが、ここで言わせてもらうが機動兵器はそれほど万能じゃない」

使い魔はそこで、機動兵器の調子を整えるには様々な設備や技術、そしてそれから作られる部品があることを説明した。

「この話はおれの『アルトアイゼン』にもいえることです。……もしやつらがこのハルケギニアにいたとしても、設備や技術がない以上所有する機動兵器をそうそう動かす、消耗させることはやつらの戦力の低下に直結します」

「でも、ダーリン。それなら『固定化』の魔法を使えばいいんじゃない……」

キュルケが口を挟む。しかし使い魔はまったく動じない。

「その案は俺も考えた。確かにそれをかけておけば劣化は防げるだろう。だが、それは動かしていないときだけだ」

「え？」

「機動兵器が動く際には、あの外見の中の機関で行われる動きが必要となる。だが『固定化』はかけた物の状態をかけた時点のまま、

固まらせる魔法だったはずだ。これから考えれば、外部装甲に使うことはあっても、内部の機関にも『固定化』を使ってしまうえば機関自体が動かなくなるだろう。恐らく、その点については心配は無いはずだ」

この使い魔の魔法についての考察の鋭さに、ルイズたちは今までの話を一瞬忘れてぼかんとした面を晒した。それに構わず、使い魔が話を再開する。

「これらの事情から、よほどの馬鹿で無い限りやつらは所有する機動兵器をそうそう使わないでしょう。……もし使ったら、それなりの下準備をしてからです」

「……下、準備？」

タバサが、悪い予感におびえてだろか、心なしか震えている声で聞き返す。

一瞬タバサに視線を向けた後、再びオスマンに使い魔は向き直る。

「……やつらの強さは兵士の錬度の高さもありますが、何よりも恐ろしいのは軍の裏方の仕事をになってきたことから来る情報収集や諜報能力、そしてそれらを生かした政治手腕の巧みさです」

「政治手腕の、巧みさじゃと？」

「ええ。……前述したように、おれの世界においてやつらはその平行情世界の技術や兵器を餌に様々な勢力と手を結びました。しかしいくら餌とできるものがあつたとしても、手を結ぶに至るまでには様々な交渉をしなければならぬのは周知の通りです。そして、そのことはこの世界においても当てはまる……」

はっとしたように、ルイズたちは目を見開いた。

「気付いたようですね。……例えどれかの国や組織と手を結んだとしても、元々の技術の違いがありすぎますし、機動兵器を量産できるとは思いません。それは整備も同様です」

しかし、と使い魔は続け、同時にポケットにしまっていたあの見慣れない銃を取り出した。

「この銃には連射機能がついていますが、この世界では銃の連射機

能はほとんど、というよりまるで存在していないと聞きました。ですが、おれたちの世界においてはこの機能は珍しいものでもなく、普通に使われています。……もしこの機能を簡略化させ、ハルケギニアでも作れるようにして伝えたとしたら……」

「……………」

「……ここまで来れば言う必要も無いかもしれませんが、あえて言わせてもらいます。平民が貴族の魔法におびえているという話を聞いた事があります。それに、現段階での銃や剣では魔法には太刀打ちできないとも。そんな不満を持っている人間に、もしくは勢力の拡大を図っている国や組織にこの機能が、利用できる技術を伝えれば……もう想像はできるはずです。そしてその時こそ、より大きな闘争を引き起こすためにやつらは機動兵器を動かす。……そう、おれは考えています」

ルイズたちは目を見開いたまま、言葉を発することができなかつた。使い魔とルイズを除いた者達は銃の連射機能にも無論驚いていたが、それを遥かに上回る戦慄が彼等の、ルイズの口を塞いでいた。使い魔の言うとおりであった。彼等、『シャドウミラー』の目的が『闘争の支配する世界』なら、十分起こりうる事態なのである。

……平民と貴族との全面戦争。もしくは、世界を巻き込む大戦争でさえも……

ここまで話した使い魔は、一息をつく。そして、

「……言い訳じみているかもしれませんが、おれはこの世界に『アルトアイゼン』も来ていると知ったとき、どうあいつを扱うか迷いました。あれの威力はご覧の通りですし、やろうと思えばこの世界の各国の軍事バランスを一瞬で崩壊させることもできるでしょう。ですがおれはそんなことは望みませんし、銃のことについてはやつらが現れたことで危険性を確認したため何もいう資格はありませんが、それでもこの世界に混乱を呼び込もうとは考えてもいません。

……これがおれに話せる全てです。最後に、『アルトアイゼン』について黙っていたことは、申し訳ありませんでした」

と言って頭を下げ、長い話を締めくくった。

## 第一章：エピソード　鋼鉄の孤狼、その役割

しばらくの間、沈黙が学院長室に落ちた。

その中でもルイズは、自分の考えの浅さに穴があつたら入りたくらいの気分であつた。ルイズもあの『アルトアイゼン』を見たとき、使い魔のくせに何故黙っていたのかという感情が芽生えてしまふのは抑えきれなかつた。だが彼の話を聞き、『シャドウミラー』と違ってこの世界に無用の混乱を起こさないようにと考えていたことに気付かされたのだ。

（そこまで……　そこまであなたは考えていたんだ……）

ルイズは、今度こそこの使い魔の凄さを実感した。自分はただ、『ゼロ』だとか『使い魔』だとか騒いでいただけなのに……

なにか、自分と使い魔の差を思い知らされた気分になつたルイズだつた。

「……顔を上げてくれんか、キョウスケ君」

続いていた沈黙を破つたのは、穏やかなオスマンの声であつた。使い魔が顔を上げる。

「おぬしが謝る必要は無い。むしろ、謝るのはわし等の方じゃ。……ここまでのおぬしのお話を聞いて、あの『アルトアイゼン』のことを黙っていたのはただ秘密にしていたのではないことはよく分かつた。それを考えもなしに問い詰めた、わし等の方が悪いのは一目瞭然と言うものじゃしものう」

ふう、と息をつく。そして鋭い視線を使い魔を除く全員に向けた。「……分かっているとは思うが、いまここで見聞きしたこと、特に『アルトアイゼン』については他言無用じゃ。わし等の方があれで揉め事を起こしては彼に申し訳が立たん。ただ、見慣れぬ武器や技術の話聞いた際は必ずわしかコルベールに連絡するようにするんじゃ。よいな？」

ルイズたちは杖を掲げ、「杖に掛けて！」と唱和する。

それを見てオスマンは頷き、使い魔に再度目を向けた。

「無論わし等も動くでしょう。ここまで生きていると色々つながりは増えてくるもんじゃし、そこから色々と情報も回ってくる。多少は役に立てるであろうよ」

「オールド・オスマンの仰るとおりです。力の限り協力させて頂きませぬ」

「……ありがとうございます。オールド・オスマン、コルベール教諭」

「いや、こんなもんおぬしにかかる負担を思えばどうってことも無いわい。ともすれば、いや、確実に一人で『シャドウミラー』の巨人達と戦わなければならんおぬしに比べればの。……異世界から来たおぬしに頼りきりになってしまうのが、心苦しくてかなわん」

気落ちした声、そして表情を見せるオスマン。続いて、ルイズたちも同じ様な顔を見せた。

そうなのだ。現時点でのメイジの実力ではあの巨人達にはどうあがいても敵わないだろう。彼等が巨人を持ち出してきたときは、使い魔に頼るしかないのである。

そのことにルイズたちが気落ちしていると、使い魔は、しかし笑みを浮かべ、

「気にしないで下さい。こんな状況で、ただ元の世界に帰るといっただおれは無責任ではないつもりです。それにもしやつらがおれに気づけば見逃さないでしょうし、おれもやつらを見逃すつもりはありません。……既に、覚悟はできています」

何の気負いも見せず、普段とまるで変わらない様子で言い切ったのである。

この使い魔の言い分に、ルイズたちは信じられないものでも見るかのような顔になった。使い魔が使えるのは、強力であったとしても所詮『アルトアイゼン』一機のみである。対して『シャドウミラー』は、まだいるかどうか分からないが、もしいて多くの巨人を持ち込んでいたとしたらどんなに不利な状況になるか、あそこまで

の状況分析と大局を読む力を持っている使い魔なら分らないはずが無いのだ。

にも拘らず、この使い魔はまったく怯んだ様子も見せなかった。まさしく、不屈の精神としか言いようが無い胆力である。

「……まじで信じられんくらいに動じん男じゃな。話し始めてからもほとんど表情変えとらんし……慌てるわし等の方が馬鹿らしくなってくるわい。おぬしが取り乱してるところとか、いっぺんではないから見てみたいもんじゃ」

オスマンは額を押さえて疲れたように言う。……実のところを言うと、ルイズにキスされたときはそれなりに取り乱していたが、そのときもあまり表情が変わってなかったため気付かれなかっただけである。

そしてそのオスマンの言葉に、使い魔はいつもどおりの無表情にもどつて首を振った。

「おれの場合は単に鈍いだけです。それにおれは、死ぬまでの今を必死に生きられればいい、その程度のことしか考えていないからでしょう。……自分でも、単純だとは思っています」

「……ああもう、分かった分かった！ こつちとしてはそんなことで済まされる方が困るし、それにお前さんと話していると調子狂って仕方がないわい！ この話はここまでじゃ！」

せつかくここまで重苦しい雰囲気だったというのに、まったく動じてもない使い魔にオスマンはあきれ、もういいと言わんばかりに声をあげて話を打ち切った。

その後オスマンはフーケの処遇や精霊勲章がルイズたちに贈呈されること、更にはこの夜に行われるフリッグの舞踏会のことを伝えた。

なおその際、フーケを何故秘書として雇ったのかを使い魔に問い詰められ、オスマンがあまりにも情けない事情（本当に口にするのも情けない事情だった。ちなみにこれを聞いた使い魔は「こいつも

おれの見間違いだっただのか……？」と小さい声で呟いていた。で雇ったことを白状し、その他の人間からとても冷ややかな目で見られたのはご愛嬌である。

そして話が全て終わり、退出する際になってルイズはふと気になり、オスマンに使い魔にも何か褒美は出せないのかと聞いたが、オスマンが「使い魔の話聞いた後もあつてだろうか」とても残念そうな顔をして「出せない」と言ったことに加え、使い魔自身も「いらん」と言ってきたため何も言えなくなってしまった。部屋に残っていることから、まだ話したいことが彼等にはあるらしい。

ルイズは廊下を歩きながら考える。

先程までの話と使い魔の背負っているもの、更に呼び出してしまったことへの責任、そして褒美も何もなくても自分を助けてくれたこととこれらの活躍にも拘らず、まだプライドを優先させて彼を「使い魔と呼んでいること。何より、今回のことで気付かされた彼との差。

これらのことを考え、ルイズはある決心をしていた……

「相棒はいつもあんな調子なのかい？」

デルフリンガーが軽い調子でキョウスケに声をかけてくる。

「どういうことだ？」

「学院長室での話だよ。あの爺さん、最後あたりは本気で呆れてるみてえな顔してたじゃねえか。見てるこっちとしては痛快だったけどよ」

「……ああ、あれか。別におれは嘘を言った覚えも無い。どの道このことは俺が関わらざるを得ん問題だろうし、例えやつらがどれほどいようとおれのやることは変わらない。だからああ言っただけ」「ひどく簡単にいつてるが、言ってる内容自体がとんでもねえつてことに気付いてるか、相棒」

デルフリンガーが疲れたような声を出した。実はデルフリンガーも学院長室でキョウスケの話その背中を鞆に収まったまま聞いて

いたのだが、前科と話がややこしくなると困ると言うことで例によって話が終わるまで黙らされていたのである。

既に周りには夜の帳が下りていた。キョウスケたちが話しているのは、アルヴィーズ食堂の上の階、そこにある大きなホールに面しているバルコニーであった。キョウスケは手に杯を持ち、その枠に背をもたれていた。手にはシエスタが持つてきてくれた肉料理が乗っている皿と、ワインの入った杯がある。ホールの中では華やかな衣装に身を包んだ生徒や教師達が豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談していた。

とはいえ、別段キョウスケはこの『フリッグの舞踏会』とやらに興味があるわけではない。実を言えばこのバルコニーにいる必要すらなかったでは何故彼はそうしているのかというと、彼の主人であるルイズに「必ず出席するように！」との厳命を受けたからである。何故、とおもったがそのときには既にルイズは身を翻して歩き去ってしまったため否定の意思を示す暇がなく、仕方なくここにいるのであった。

ルイズを待つている間に、キュルケやタバサがキョウスケに近寄ってきた。その体に合わせた派手なドレスを着たキュルケは「惚れ直したわ」とか何とか言いつのり、あとで踊りましょうと言ってホールに入ってしまった。黒のパーティドレスに身を包んだタバサは、アルトの中で杖を向けたことを謝りに来た。オスマンに言ったように気にするなどキョウスケは言ったが、タバサはそれに構わず「この借りは、必ず」と言って立ち去り、今はテーブルの上にある料理と格闘している。

そんな様子を見ながら、キョウスケとデルフリンガーは話を続ける。

「それにしても、相棒の世界にそんなやつらがいたたあね。『闘争の支配する世界』、か……俺たち武器にとつても理想の世界かも知れねえけど、俺にとつちゃあそんな世界はごめんだね」

「……おれは元いた世界では兵士だったが、だからと言ってそんな

世界はおれもごめんだ。第一、軍人の義務は民間人を守ることだ。それを無視して戦いを求めるのは、戦う目的を履き違えていると思えん」

「違えねえ」

けらけらとデルフリンガーが笑い、キヨウスケは持っていた酒盃を傾けた。

「……しかし、その『シャドウミラー』とか言うやつらが流れ着いてきて、しかも呼応するみてえにお前さんが流れてくる、か……」

「……？ どうした？」

突然感慨深げに言うデルフリンガーを怪訝に思い、考えを一時中断してキヨウスケが問いかける。

「いや、気障ってえ台詞だが、なんかしら『運命』みたいなもんを感じちまったんだよ。……相棒は元いた世界で、その『シャドウミラー』やらとあんな巨人を使ったとんでもねえ戦いを繰り広げてきたって言うじゃねえか。それに、その『証拠』まで見せられちゃあもう文句の付けようもねえ」

「……」

「そんでそいつらは平行世界とやらの相棒と戦って、しかも流れ着いた先では相棒と戦って、しかもそのどちらでもねえこの世界でも相棒と戦うことになるんだぜ。……いや、もういつペン戦ったけどよ。ともかくそんなふうはどこに行っても戦い続けていると、端から見ちゃどうしても『運命』みてえなもんを感じちまうのよ」

そして俺らしくもねえし、感傷かも知れねえけどなと付け加えて話を終えた。

しかし、キヨウスケが返してきた答えは、

「……まさしく感傷そのものだな」

という、まるで風情も何も無いものだった。

「運命などという陳腐な言葉を言う気にはならん。それにおれの話聞いて何を感じても構わんが、やつらが敵だから戦った。……単に、それだけだ。他には何も無いぞ」

「……少しは空気読んでくれよ……」  
身もふたも無い言い方に、思わず拗ねてしまうデルフリンガーである。

と、そこにふれ係の声が響いた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~!」

キヨウスケはほう、と感嘆の息を漏らした。ルイズは長い桃色がかった髪をバレッタにまとめ、ホワイトのパーティドレスを身に付けていた。肘までの白い手袋がルイズの雰囲気によく似合っており、胸元の開いたドレスがづくりの小さい顔をよく引き立てていた。

(映えるものを持っていると思っていたが、これはなかなかのものだな)

キヨウスケもそんな感想を持った。

その美貌に驚いたのだろう。多くの男達がルイズに群がる。だがルイズは彼等にも、その到着にあわせて始まった音楽とダンスに目もくれず、バルコニーにいるキヨウスケに気付くや否や一直線に近づいてきた。

ルイズはキヨウスケの前に立つと、緊張しているような調子で話しかけた。

「た、楽しんでるみたいね」

「……まあ、料理や酒はうまいが、な」  
肩をすくめながら答えるキヨウスケ。

デルフリンガーがルイズに気づき、「おお、馬子にも衣装じゃねえか」と言う。

「うるさいわね」

そして当然のごとくルイズに睨まれた。しかしルイズは首を振って「こんなことしてる場合じゃないわ」と小声でいい、キヨウスケの視線から逃れながら、手を差し出して言った。

「……き、キヨウスケ。踊ってあげても、よ、良くてよ」

一瞬、キヨウスケは何を言われたのか分からなかった。

(……なんだ？ 踊っていい？ いや、問題なのはそこじゃない。その前に、何と言った？ 確か、『キョウスケ』と……)

そこで名前で呼ばれたことに初めて気付き、ルイズにキスをされたときと同じく目を白黒させた。

「……どういう、風の吹き回しだ……？」

まじまじとルイズを見つめながら、不審さむき出しで問うキョウスケ。

その様子ルイズは真っ赤になり、

「い、いいじゃない！ 何度も助けてもらったし、私も少しあなたにきつくあたりすぎたって思ったから、名前で呼んだげようと思っただけよ……！」

あと踊ってあげるのもお詫びの一環だから！ と言って顔を背けた。

その言い草にぼかんとするキョウスケだが、ふ、と口に笑みを浮かべ、

「戦いに関することだけに、おれは使い魔として従うんだが？」

と、からかうような口調で言った。ルイズはその言葉に更に顔を赤く染め、うくと唸り、

「き、今日だけだからね」

と言つて折れた。振り返り、ドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を下げてキョウスケに一礼した。

「私と一曲踊っていただけませんか、ジェントルマン」

顔を赤く染めて頭を下げているルイズをみて、再びキョウスケは笑った。

「おれはジェントルマンなどというものとは、かけ離れているんだがな」

そして、ルイズの小さい手をとった。

「わ、私、絶対あなたに負けないから」

「ん？」

踊りながら、ルイズがキョウスケを見上げて言う。キョウスケは踊った経験がないためルイズにリードされる形となったが、かなりの身長差があるため端から見れば奇妙なダンスに見えないことも無い。しかし、彼等はそれでも踊り続けていた。

「い、いくらあの『アルトアイゼン』を持つてるからって、『シャドウミラー』とか言うやつらに対抗できるのがあんただけだって、いい気にならないでよね！ ちよつとは、なんか、色々なことを分析できるみたいだけど、あんたは私の使い魔なんだから！ いつかあんたがそんな態度ができないようなメイジになって、絶対に見返してやるから！」

そしていつものように、ふん！ と顔を背ける。

どうやらルイズは、この一言が言いたくてこの舞踏会に引つ張り出してきたらしい。

（まあ、こういうのも悪くは無い、か……）

キョウスケは呆れつつも、そんな考えを抱き、

「ああ、楽しみにしている。ご主人」と言った。

ルイズはそれにますます顔を背けようとする。その様子もどこがおかしく、自然と笑みがこぼれた。だが、笑みの下でキョウスケは三度目となる決意を固めていた。

それは、使い魔として、キョウスケ個人としてルイズを守るという決意である。

（『シャドウミラー』がおれとルイズの関係を避けることは避けなければならん……）

今まで自分の呼び出された状況から考えていなかったが、『シャドウミラー』の出現で考えざるを得なくなったことがあった。

もしルイズの召喚が、あのアインスト空間の崩壊と人の意思の光に無関係だったとしたら、ということである。そしてそれが行き着く結論は、たった一つしかない。

（ルイズが、次元転移装置の役割を果たすことができるということ

だ……)

キョウスケはそのことをオスマンとコルベルに伝え、ルイズの周辺に対する警戒を強化するように促した。自分だけの召喚だけですめばよいが、そうではなく、しかも『シャドウミラー』に力を利用された場合、こちらの世界も、このハルケギニアも空前の危機に陥るだろう。だからこそ、

(必ず守る……)

踊りながらルイズを見つめ、キョウスケは決意を固めなおすのだった。

そんな様子をバルコニーから見ていたデルフリンガーは、

「おでれーた……ほどもねえか」

と呟いた。今までに相棒と一緒になつてから起こったことに比べれば、はつきり言つてこの程度のことなど驚くほどのことでもないように思えてくる。

(それによお、相棒。あんたは大したことしてねえって思ってるかも知れねえけどよ、端から見てみりゃ十分大したことなんだぜ)

彼の言動、そしてその胆力はまったくもって感嘆する以外に無い。そして、その上にご大層な役目を担つたとしてもそれに押しつぶされることなく受け止めている。これをどうして感嘆せずにいられるだろうか。

ふとそこで、あるフレーズがデルフリンガーの頭に浮かんだ。この舞踏会の優雅な雰囲気当てられたのか、どうも自分らしくない言葉ばかりが浮かんでくるような気がする。しかし『鋼鉄の孤狼<sup>ペーオウルフ</sup>』もいいが、キョウスケと彼が操る巨人『アルトアイゼン』がこの世界で負う『役目』にこれ以上相応しいものは無いと思ひ、口を上らせた。そう、それは



## 第一章：エピソード 鋼鉄の孤狼、その役割（後書き）

わーい、やっちゃんしました。また話がでかくなりました。

というわけで、ゼロの使い魔第一話分終了です。ここまで書いて設定で「あ、ここ絡められる」とか思いついたことを入れてつた話がどんどんでかく……（わーわー）

とりあえずこれからも続けるつもりですが、まだちょっと考えがまとまっていません。少し考え直してから、また書き始めます。ともかく、こんな無茶をした作品をここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

### 後書き追加

話が多くなりすぎたので少しまとめさせていただきました。

## 第二章：プロローグ 狼、怒りの咆哮

(あれ……なに、ここ……?)

ルイズは黒に、星らしき光が埋め尽くしている空間に浮かんでいた。ルイズは知らないが、そこは宇宙空間という、地球の外にある空間であった。

ルイズは何故自分がこんなところにいるのか分からず、呆とした思考のまま首を回してみる。すると太陽と月と、そして、

(！ うわぁ……すごい……！)

とても大きく、蒼い綺麗な球体がそこにはあった。

その球体は蒼い部分が大部分を占めており、それに茶色や緑色の部分が混じり、その上を白いもやのような物が覆っている。それらが混ざり合い、とても美しいコントラストを作り出していた。

しばしその美しさに見とれて呆けていると、突然近くで光が起った。

ルイズは驚き、慌ててそちらのほうを向く。そして、更なる驚愕に包まれることとなった。

(こ、これって……!?)

視線を向けた場所には、彼女の使い魔であるキョウスケ・ナンブが見せた巨人達が激しい戦いを繰り広げていた。羽らしきものを背中に生やした白い巨人など、ルイズの知っているものも多々いたが、知らないものもかなりいる。その中でも、人の形を取っていないオレンジ色の鳥らしきものや白い虫らしきもの、人型であってもルイズが知っているものとはまるで種類が違うように思える緑色の巨人や、ずんぐりと潰れているような形状をしている黄色の巨人は異彩を放っていた。

巨人達が争う。光や銃火が飛び交い、爆発が視界を埋める。

ルイズはこのような光景にあっても定まらない思考に、そして突然このような戦闘に巻き込まれたことに戸惑いながらその光景を見

ていると、視界にあるものが飛び込んできた。それを見た途端、ルイズは息を呑んだ。

(『アルトアイゼン』……!?)

間違いがなかった。かなり形は違っているものの、特徴となっている角や肥大化した肩部、小さいものの杭打ち機もしっかりと右腕についている。

しかし、これらを見てルイズは一層混乱してしまう。

(……な、なんで……何で私こんな戦いに巻き込まれてんの……しかも『アルトアイゼン』みたいな鉄の巨人が、こんなにいるなんて、もしかしてこっつて……わ……)

ルイズの近くで光が爆ぜる。何とかしなくてはと思うのだが、頭も体も動いてくれない。だが近くで爆発が起こってもルイズには何の影響もなかったことだけは働いていない頭でも分かった。

どうやら自分はこの戦いで被害を受けることは無いらしい。そのことには安堵するものの、体が動かない以上何もできない。しばらくどうするか考えていたが、ルイズは被害が無いならということでも割り切り、戸惑いながらも戦いを見続けることにした。

やがて戦いは鳥や虫、緑や黄色の巨人の方が劣勢になっていった。このまま『アルトアイゼン』の側の勝利になる、そうルイズが考えたときだった。何もなかった空間から、多くの緑と黄色の巨人が現れたのである。

『シャドウミラー』の件やあまり頭が働いていないせいもあってか、驚きはしたがさほど動揺せずすんだ。しかし、何もなかった空間から現れたことよりもルイズの気を引いたのは、それらの奥にいる巨人である。緑や黄色の巨人と違い、どことなくキョウスケたちの側の巨人に似た形状をした、ライトブルーとホワイト、所々に配された赤のボディカラーとシャープなラインを持っていた。

それはR・GUNと呼ばれた機体であり、キョウスケたちを裏切ったある男が駆る機体であった。

ルイズは無論そんなことは知らなかったが、その巨人から漂って

くる雰囲気が尋常ではないことだけは彼女にも分かった。

(何よ……この、威圧感……)

ただ対面しているだけだというのに、胸が苦しくなってしまうほどの危険な気配をその巨人は纏っていた。見れば、『アルトアイゼン』側の巨人達も動きを一旦止め、注意をそれに向けている。

『久しぶりだな……まだ生きていたのか』

その時、渋い男の声がルイズの耳に響いた。きよるきよるとルイズは首を回すも、近くに人の姿は無い。だが、その男の言葉に答えるかのような、別の声も耳に聞こえて来た。どういう理屈かは分からないが、あの巨人と、『アルトアイゼン』に乗っている者たちの会話がルイズには聞こえるらしい。緊迫し、張り詰めている雰囲気がルイズに直接襲い掛かってくる。

その会話を聞いていると、青い巨人の隣に、大きな槍のようなものを持っている白い巨人が寄り添うように現れた。

『エクセレンツ！』

そこで彼女の使い魔、キョウスケの声がした。しかし、いつものような淡々としている声ではあるのだが……

(……どっか、感じが違うような……？ それに『エクセレン』って……？)

ルイズはいぶかしむ。しかし、どこがどう違うのか、そして『エクセレン』の意味も分からない。その後が続く会話もどこか遠くに聞こえるようで、良く理解できなかつた。だが会話が終わり、全体が再び動き始めたときになって、初めてキョウスケの感じが違うことの意味に気付く。……いや、気付かざるを得なかつた。

(ひ！?)

『アルトアイゼン』が発する気配が、先程までとまったく違う。凄まじいまでの気迫と殺気に、思わずルイズは悲鳴を上げかけたほどだ。それはあの時、初めて部屋に来たときに見せたものとは比べ物にならないほどの……！

そうこうしている間に戦闘が進む。白い巨人がなぜか途中から『

アルトアイゼン』側にたつて緑の巨人達と戦っていたが、そんなことなどまったく気にならない。怖いと思っけていても、ルイズは恐ろしい気迫で戦場を駆ける。『アルトアイゼン』から目を離せないでいた。そして、ついに青い巨人が『アルトアイゼン』側の機体の一機に打ち倒された。このまま戦いが終わるのかと、ルイズが思った時である。

青い巨人が爆発的な光を放ち、光が収まった後には先程までの巨人の二倍近くにも及ぶ大きさの巨人がそこにはいたのである。しかも形も変わり、紫色のボディカラーや背に生やしている翼らしき突起など、全体的に不気味なフォルムとなっており、より一層危険な雰囲気をかもし出していた。

『この機体は……お前達のデータを基にして造り上げた、R-GU Nリヴァーだ』

再びあの男の声が響く。その声はどこか嘲りのような、人を見下した感触があり、神経をざらつかせてくる。そして男が更に言葉を口にしようとした、その直後。

『しゃべるな』

ルイズがキョウスケの言葉を聞いたと思った時には、『アルトアイゼン』は巨人に肉薄しており、

『イングラム……お前は潰す……！』

その右腕は、巨人を撃ち抜いていた。

## 第二章：プロローグ 狼、怒りの咆哮（後書き）

通称、ブチキレウルフです。この見事なまでのかつこよさにほれてしまい、私はキョウスケファンになってしまいました。少しでも原作の雰囲気が出ていれば幸いです。

## 新たなる日々1

ルイズは目を開け、窓から差し込んでくる朝日に顔をしかめた。起き抜けに朝日はなかなかきつい。しかし、今のルイズにはそんなことに気を回している余裕はなかった。

「……………何だったんだろう、今の夢……………」

毛布を払いながらベッドの上で身を起こし、ルイズは呟いた。なぜあのような夢を見たのだろうか？

今の夢の光景はルイズは見たことが無いし、知りもしない。しかもあのように鉄の巨人が大勢いる場所など、この世界のどこにもありはしないだろう。となると、今の夢は使い魔の記憶ということになるのだろうか？

（確か、使い魔が見た光景を主人は見ることができるって言われてたっけ。それに似たようなものって考えればいいのかしら？）

というか、可能性として考えられるものなどそれくらいしかなかった。夢を見た理由など推察することしかできないし、それで納得する以外なさそうである。それにそんなことよりも、気にすることがルイズにはあった。

ルイズの脳裏には、先程までの夢の光景がこびりついている。…いや、こびり付いているものを厳密に言えば、夢の中の使い魔の姿だ。他の事はぼやけているくせに、そのことだけははっきりと思い出すことができる。

（あんなキョウスケ、初めて見た……………）

あの殺気と気迫は忘れられるものではなかった。今でも思い返すと体に震えが走る。そして夢の最後に見せた、まさに電光石火しか言いようが無い一撃も……………

（でも、なんであそこまで怒ってたんだろう？）

そこがルイズには分からない。確か、槍みたいなものを持った白い巨人だっただろうか？ それを見たときから様子が変わり始めてい

たような……

ルイズがそこまで考えた、そのときであった。ふと移した視線の先には時計があり、それを見てルイズの顔色がさっと青ざめる。もう朝食の時間ではないか！

慌ててベッドから跳ね起き、身支度を整え始める。

夢の内容も気にはなつたが、それよりも現実にあることのほうが重要である。自分より早く起きているのなら起こしてくれても良いではないかと、扉近くに転がっている使い魔の寝床　それは大きな袋のようなもので、寝袋と言うものらしい　を見ながら心の中で愚痴る。

使い魔との関係はあの舞踏会の後もあまり変わらなかった。以前のように使い魔としての仕事を押し付けようとして使い魔がぼつさりと断り、口論し、そして何だかんだ言って使い魔はルイズをフォロ―してくれると言う毎日である。

ただ、確実に変わったこともあった。彼の名前を呼ぶようになったこともそうだが、それ以上に受け答えの感触が多少滑らかなになり、ほんの少し、ほんの少しではあるが、彼との距離が近くなったような気がする。

そしてルイズ自身においては、以前から立派なメイドになることは目指していたが、そこに彼のこの世界での『役割』について自分ができる限りで助けていこうという強い決意が加わったことだ。

（このまま差を開かれたままじゃ、貴族としての沽券に関わるからよ！　そうに決まってるわ！）

……このような言い訳を考えるあたり、ルイズの性格はまったく変わっていないようだ。

また、この場には使い魔はいないが、今の時間のことであれば気にすることはなかった。彼が今の時間、何をしているかルイズは知っていたからである。

ルイズは身支度を整え終えた後、窓に一瞬目を向けて部屋を出て行った。



きが訪れた、その瞬間である。コルベールからは見えなかったがキヨウスケの目が鋭い光を放った。続けて、何かを踏み込むような動作をする。すると、

「!? うわああああ!」

三度目となる悲鳴をコルベールは上げた。敵にめがけて、凄まじい速度で『アルトアイゼン』が突撃し始めたのだ。

とんでもない重圧がコルベールに襲い掛かる。しかし、むしろ気にするべきはそれでは無い。敵に向かって飛び出したと言うことは当然火線が集中して『アルトアイゼン』めがけて飛んでくると言うことだ。

そして、現にそうだった。光が、銃弾が、雨あられと『アルトアイゼン』めがけて集中する。

コルベールは思わず目をつぶった。しかし、何も起きない。耳に聞こえてくる砲火の音も相変わらずだ。まさか、と思いきる恐る目を開いてみる。すると

(こ、これは……!)

思わず目を疑いたくなるような光景がそこにはあったのである。何と『アルトアイゼン』はこの銃火の嵐の中をいくぐっていたのだ。しかし、そのことがコルベールには信じられない。

確かに以前もこの世界に現れた『シャドウミラー』相手にこのような銃火をかくぐる様を『遠見の鏡』越しに見た。だが今目の前で行われているそれは以前の比ではない。敵は倍の数、その上攻撃にいたっては更にバリエーションに富、より多くの『ミサイル』やら『ビーム』やらが飛び交っている、まさに銃火の壁とも呼べる代物だ。だが、この男はそれすらも

!

思わず、彼はキヨウスケを見る。その顔にはいつもとまったく変わらない無表情だけがあり、現実ではないとはいえこれだけの銃火にさらされていてもまるで動じていなかった。

そしてついに、『アルトアイゼン』はその銃火の嵐を抜け、敵機に接近する。だが接近してもキヨウスケは加速を続け、『アルトア

イゼン』にあの『クレイモア』とかいう前方に弾を大量にばら撒く武器を使わせた。

弾幕を張るために一箇所固まっていた敵部隊が、大量に打ち出された弾によつて蹴散らされていく。しかし、それを見てもキヨウスケは『アルトアイゼン』の速度を落とさない。

『クレイモア』を撃つのは先程の敵を蹴散らした時点で止めたが、今度は『アルトアイゼン』左腕に装備されているという『チェーイング』を放つて残りの敵機を牽制し、動きを止める。そこにキヨウスケはアルトアイゼンを突撃させた。

懐に飛び込まれた時点で、もはや敵機にキヨウスケと『アルトアイゼン』を止めることはできなかった。

次々に撃ち抜かれ、倒されていく巨人達。コルベールはその様を目の当たりにして呆然としながら、最後の敵機を『リボルビング・バンカー』で撃ち抜いたキヨウスケの眩きを聞くのだった。

「……………状況終了」

そしてその言葉と共に、周囲の画面が切り替わった。

## 新たなる日々1（後書き）

やっと、やっと更新できました……  
ちよつと最近近況が妙に忙しい上にちよつとした心配ごともあった  
せいでなかなか手をつけることができませんでした。ようやくや  
ることができました。これからは少しペースアップして書いていき  
たいです。

## 新たなる日々2

「いやはや、まったくあなたの世界の『カガク』は恐ろしいですな。あそこまで本物そっくりに映像を作り出し、それで戦闘の訓練ができるとは……」

アルトアイゼンのコックピットから出ながら興奮気味に、そして少々の怯えを含ませてキョウスケに話すコルベール。ついでに言えば気分が悪そうだ。

このところキョウスケは機体に搭載されているシミュレーターを使った訓練をしているのだが、それを聞きつけたコルベールは「是非ともやっているところを見せて下さい！」と鼻息荒く押しかけてきたのだ。しかしこの有様を見るに、やはり刺激が強すぎた、そしてシミュレーションといってもアルトの加速が強すぎたらしい。

彼に続いて出て来たキョウスケは、その様子に苦笑しつつ答えた。「あれでもまだ荒い方なんですが、ね。本当ならもっと鮮明な画像が出せますし、より練度の高い動きを相手にさせることもできます。……あれでは正直、物足りない」

最後の言葉を不満げに呟くキョウスケ。だが、コルベールはそれどころではなかったようだ。

「ち、ちよつと待ってください！ あれで、あそこまでの砲撃を切り抜けておいてまだ物足りないのですか!？」

コルベールは驚愕を顔に貼り付けながら、キョウスケに問い詰める。しかし、答えるキョウスケは平然としたものだ。

「あの程度の動きなど、奴らはやってきません。これならこの世界に来た『シャドウミラー』と戦ったほうが、よほどきつかった」

そして、やらないよりはマシですがと付け加えた。

先程まで彼等がやっていたのは、アルトアイゼンに残されている『シャドウミラー』の機体データを使用したシミュレーター訓練である。彼等がこの世界に現れ、もしものときはアルトアイゼンで戦

わなければならぬためにアルトアイゼンのAIを使って訓練をしていたのだ。

(だがこれでは、やつらとの戦いの参考になるとは思えん……)

しかし先程の言葉のように、キョウスケはやりながらもそんなことを考えていた。

理由として挙げられるのは、やはり訓練内容自体の甘さがある。

本来このような訓練をする場合、その戦場のデータや敵機のデータ、そのパイロットデータを揃えなければならないのだが、しかしそこまでやるとなると膨大な量のデータが必要になる。しかも敵機の動きの制度やバリエーションを持たせると更にデータが必要になってくるため、アルトアイゼンに搭載されているAIだけでは限界があり練度の低い(キョウスケにとっては)相手の訓練しきれないのだ。

「そ、そうなのですか……」

はあ、と一息をつくコルベール。キョウスケにとっては『この程度』だったが、彼にとってはそうではなかったようだ。その顔の眉が下がり、情けない面をさらしていた。

「……前々から聞くこうとは思っていたのですが、一体あなたは元の世界でどんなことをしてきたのですか？ あなたはただの一兵士と言ってますが、いくら『ガンダールヴ』の力があるとは言え、あんな動きができるなんて私には信じられません。以前見た『シャドウミラー』の巨人達も、あなたほどの動きはしていませんでしたし……」

「……」

その質問に、一瞬キョウスケは言葉につまった。

確かにキョウスケはある部隊の指揮官を任されているが、それでもただの兵士であることには変わりはない。しかし、本当にただの兵士かと言われれば疑問を抱かざるを得ない点がある……というかありすぎる。

ひとまず言えるのは、その戦績が凄いと言うことだ。……という

か、この場合は恐ろしいといったほうが正しいかもしれない。

地球圏の再統一を図ったDC、ディバインクルセイダーズとの戦いである『DC戦争』。その次は異星人という非常識な存在との戦いである『L5戦役』、この上につい先程まで繰り広げていたインスペクターと言う第二の異星人や『シャドウミラー』との戦い。

これだけの戦いを生き抜き、活躍してきた時点でただの兵士ではできないような戦果を挙げている。しかもその戦いの中には、彼我戦力差12:1という数字の戦いもあった。極め付けにその戦果を称えられ、実際に『L5戦役の英雄』などと言われていたこともある。

よって本当にただの一兵士かと言われれば、はっきりそうだななどと答えられるわけが無い。

だが、だからと言って正直に自分のことを話しなどしたらそれこそルイズたちを混乱させることになるのは目に見えている。そのため一応一兵士であることは変わりようのない事実であるため、心苦しいがここは「そうです」と答えておいた。

コルベールは納得できないと言う顔をしていたが、それ以外キョウスケが答える気がないことを察したのか、ため息をついて「分かりました」と言った。

「……しかし、今更ですが私がこの『アルトアイゼン』に乗り込んで良かったのですか？ いえ、私としては嬉しいのですが、あなたのお話を聞いている限りでは……」

そこでコルベールは、不安げな顔をしてキョウスケに聞いてきた。どうやら以前キョウスケが話したことが気にかかっているらしい。たいしたものだとキョウスケは思う。

（好奇心や知識を備えているにも拘らず、状況を理解して抑えることができる。こういう人間ばかりなら別に隠す必要もないんだが、な）

そして、だからこそキョウスケは彼には見せたのである。

「心配は要りません。以前も話したことです、おれたちの世界の

技術で作られたものをこちらの世界で複製することは絶対にできません。それはコルベール教諭、いくらあなたが知識があつたとしても同じことです。あれを見せたのは、この場所を貸してもらつたことへの感謝もありますから、気にしないで下さい」

言いつつ、キヨウスケは首を回す。

そこは森の中でも開けた場所であり、そこに赤い鋼鉄の巨人、アルトアイゼンは横たわっていた。その上にはいつかと同じ様に周囲の木々に同化する迷彩シートと森の偽装がとりつけられており、また巨体の近くには小屋が建てられ、この場所に人が住むことができるようになっていた。

あの『シャドウミラー』との戦いの後、キヨウスケは『アルトアイゼン』を学院の近くまで飛ばし、ここに着地した。そしてルイズやオスマンに説明した後で再びどこか隠せる場所を探すつもりだった。だが、そこでオスマンが学院の近くにある森を使ってはどうかと提案してきた。

「あの場所なら学院にも近いし、行き来も楽にできる。それに近くにミスタ・コツパゲ……こほん、コルベールの研究室を移動させて管理してもらえばよい」

彼のことじゃから飛んで嬉しがつて引き受けるじやろつしのと付け加えて。

キヨウスケとしもこの提案はありがたかった。生体反応を感知するセンサーを搭載しているとはいっても、直接見張ってくれる人間がいるというのはとても心強い。教師としての仕事があるため常時小屋にいられるわけではないのが残念だが、まあそこまで言うのは贅沢と言うものだ。

「なら良いのですが……」

そこでなぜか、コルベールの顔に暗い影が落ちた。

(……何だ？ なぜここでこんな顔をする？)

だが、それが分からない。今までの話で、彼の気に障るようなことを言ってしまったのだろうか？

「どうかしましたか？」

そのまま気にしないでもできたが、落ちた影の濃さがどうしても気にかかり、キョウスケは声をかけた。

「……いえ、何でもありません。……そろそろ朝食の時間です。戻りましょう、キョウスケ殿。今日はありますがとうございました」

しかしキョウスケが声をかけるとコルベールはすぐに影を消し、笑みを浮かべる。そしてアルトから降りて、学院の方に足を向けた。……どうやらあの影にはあまり触れてほしくないようだ。気にはなるところではあったが、触れてほしくないと言っているのであれば仕方が無い。

「……分かりました」

そう返事をし、キョウスケもアルトから降りて学院に向かう。だがそのとき、

「……おい相棒、俺の事忘れてるわけじゃないよなー……」

という、悲哀に満ちた声が近くの小屋の中からした。続けて「ほんとに泣いちまうぞー」という情けない声。

キョウスケは一瞬顔をしかめ、掌を額に押し付けた。

(……あいつのことを忘れていた……)

今日は騒がしくなりそうだという予感に肩を落としながら、一旦キョウスケは足を小屋に向けるのだった。

## 蠢くモノたち

さてキヨウスケが騒がしい一日の予感に肩をすくめていたその頃、遠く離れたトリステインの城下町、その一角にあるチエルノボーグ監獄で土くれのフーケは怒っていた。そりやもうとんでもなく怒っていた。警備や警戒が厳重だという噂のこの監獄のことも、自分に対して他の囚人よりも一層の注意で監視がされていることもこの怒りの前ではまったく気にならない。

「まったくあの使い魔のせいで……！」

ベッドに腰掛けながら、怒りのせいで思わず不満を口に出してしまふ。彼女が怒っているのは自分に対する不甲斐無さもあるが、一番はやはりあのヴァリエールの使い魔のことだ。

捕まることや捕まった後に続くことに対する覚悟はこの家業を始めたときからできていた。だが、だからといってここまであっさりと捕らえられるとは思ってもみなかった。しかも容易く後ろを取られて至極簡単に、だ。それが余計に腹が立つ。

「……けどまあ、大した奴ってことは確かみたいだけど」

そこまで愚痴っていたフーケだが、ひと段落着いたところでふうとため息をつき、そんなことを漏らした。

そのことに間違いは無いだらう。

常時無表情で貴族相手にもまるで媚びず、はつきりものをいう男。見知らぬ東方から来たといわれ、見たことの無い武器を扱う男。そして魔法は使えないにも拘わらず高い戦闘能力を持ち、トリステイン中に悪名を馳せた自分をあっさり捕らえた男。

最後のは自画自賛が入っているかもしれないが、その前の部分だけでも十分大したものだと言えるはずだ。

(……でも、あいつは一体何者だったのかねえ?)

今更だが、一体彼は何者だったのだらうという疑問が芽生えてくる。

東方から来たという話だが、しかしいくら東方の人間が珍しいといってもあんな服装や武器は聞いた事が無い。考え方もメイジが権力の全てを握っているこの世界では考えられないものだ。

(それに、もう一つ気になることもあるんだよねえ……)

夢なのだろうとは思っている。だが、体の感覚があれば現実だったのだと伝えてくる奇妙な、そして恐ろしい光景。

そこは見たことも無いものが詰め込まれ、そしてあるものの中と分かるにも拘らず外の光景がすべて見ることができると言う部屋だった。ぼやけた視界の前には桃色と赤色、青の髪があり、その前には椅子らしきものに座って茶色の髪だけを出しているヴァリエールの使い魔。

そして、外には

思い出すだけで恐怖がぶり返してくる。あんなものは有り得ない、有り得るはずが無いと理性が訴えているのに、それでも思い出すだけで体が竦んでしまう。

(あの、青と灰色の巨人達……)

自分の操るゴーレムなど比較にもならないほどの破壊力を備えた巨人が、そこにはいた。しかも、そんなのが合わせて六体も。あれらが放ってくる光や恐ろしい速度の何かは容易く大地をえぐり、夜の闇を業火で照らし上げ、木々を粉碎していった。

(だけどあんなものに会ったっていうんならあたしが生きてるはずが無いしねえ……)

頭に思い浮かべられるのはその前後の光景だけだ。だがもしあんなものが現在するのなら、自分はとうにやつらに殺されているだろう。だから、あれは夢に違いないと思えるのだ。……体が訴えてくる感覚を無視すれば、だが。

しかし、今となつてはあの光景も、使い魔ももう関係の無いことだ。どうせ近日中に縛り首なり何らかの刑を受ける身だ。あれこれと考えていたところで意味が無い。

愚痴るのも飽きてきたし、そろそろ寝ようかねとフーケがベッド

に横になったときだった。

階段を誰かが下りてくる音がする。それに、ただ降りてくる音だけではない音。これは、拍車の音だろうか。も混じっていた。(牢番……じゃないね。牢番だったら拍車の音が混じるわけが無い。すると……)

フーケはベッドから身を起こし、鉄格子の向こうを見据えた。やがて現れたのは、白い仮面で顔を覆っている、長身の黒マントを纏った人物だった。マントの中から長い魔法の杖が出ているところを見るとどうやらメイジらしい。

フーケは鼻を鳴らした。どうやら自分の推測が当たったようだ。即ち、自分を殺しに来た刺客。

「おや、こんな夜更けにお客さんなんて珍しいわね」

しかしそこで、フーケは砕けた口調でその人物に話しかけた。同時にフーケはひそかに体を緊張させる。

散々国中の貴族から盗みを働いてきたのだ。裁判なんてまだるっこしいことが面倒になって自分を始末する気なのだろう。

それにそうされる理由もこちらはありすぎるくらいに持っている。盗んだ宝の中には王室に無許可で手に入れた禁断の品など、他人に知られてはまずいものも含まれているからだ。何のことは無い。口封じというわけだ。

しかし、フーケはこのまま殺されるつもりはなかった。

「おあいにく。見ての通りここには客人をもてなすような気の利いたものはありません。でもまあ、茶飲み話に来たって顔じゃありませんわね」

話を続けつつ、値踏みするかのように黙っている白仮面の様子を窺う。あの使い魔にはまるで通用しなかったが、体術にはいささかの心得がある。鉄格子越しに魔法を放たれては手の打ち様が無いが、何とか油断させて中に引き込んでしまえばとフーケは考えていた。

「『土くれ』だな？」

そこで白仮面が口を開いた。年若く、力強い声から察するに男ら

しい。まあ、身長から男だろうとは思っていたのだが……

「誰がつけたのかは知らないけど、確かにそう呼ばれているわ」

男は両手を広げて敵意のないことを示した。

「話をしにきた」

「話？」

怪訝な声でフーケは言う。何を話すと言っただろう？

「弁護でもしてくれるって言っただろう？」

「何なら弁護でもしてやっても構わんが？ マチルダ・オブ・サウスゴータ」

フーケの顔が蒼白になった。それは捨てた、いや、捨てることを強制された貴族の名。そして、その名を知るものはこの世にはもういないはずだ。

「あんた、何者？」

平静を装うが、無理だった。震える声でフーケはたずねる。男はその問いには答えずに笑って言う。

「再びアルビオンに仕える気は無いかね？ マチルダ」

「まさか！ 父を殺し、家名を奪った王家に仕える気なんてさらさら無いわ！」

いつもの冷たい態度を捨て、フーケは怒鳴った。

「勘違いするな。何もアルビオンの王家に使えろと言っている訳ではない。アルビオンの王家は近いうちに倒れる」

「……どういうこと？」

いきなり振られた話の内容に興味を引かれ、フーケは怒鳴るのを止めて先を促した。

「革命さ。無能な王家は潰える。そして我々有能な貴族が政を執り行うのだ」

「でも、あんたはトリステインの貴族じゃないの？ アルビオンの革命とやらと何の関係があるっていうのさ？」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えてつながった貴族の連盟だ。我々に国境は無い。今現在主な活動場所はアルビオンだ

が、各国にも既に我々の同志がもぐりこんで工作を開始している」

男が杖を持っていない方の手を持ち上げて握り締める。

「我々はハルケギニアを一つにする。そして、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

そして、力強い声で宣言した。

「馬鹿言っちゃいけないわ。夢の絵は、寝てから描くものよ」

だがフーケはその言葉に、小ばかにしたような薄ら笑いを浮かべて吐き捨てる。

ハルケギニアを一つにする？

トリステイン王国、帝政ゲルマニア、故郷のアルビオン王国、そしてガリア王国。未だに小競り合いが絶えないこれらの国々を一つにまとめることがどれほど夢物語であるかは馬鹿でも分かることだ。しかもあの強力なエルフどもから『聖地』を取り返すなど、ある意味ハルケギニア統一よりも難しいことではないか。今までに『聖地』奪還のために各国から送られた兵たちが喫してきた無残な敗北、それが何よりの証拠だ。長命と独特の尖った耳、文化を持つエルフ達はその全てが強力な魔法使いであり、優秀な戦士だ。同じ数で戦えば人間に勝利の機会などあるはずが無い。

しかし男はフーケの言葉に怒った様子も見せず、むしろ笑いながら言葉を重ねてきたのである。

「今までは確かにそうだろう。だが今度は違う。……面白いものを見せようか」

男が杖を振った。何かの魔法を使ったらしい。そうした上で空いている方の手をマントに差し入れ、何かを取り出した。見慣れない形をしているが、どうやらあれは……

「銃、かい？ でもそんなものがなんで面白い……」

フーケはそこまで言いかけて、そしてその後を続けられなくなった。男が壁に向けて、銃を撃ち始めたのである。しかしただ銃を撃つだけでは黙りはしなかつただろう。彼女が黙ったのは、その銃を撃った際に生じる炸裂音の数だ。

それは、六回鳴っていた。それも続けてだ。

フーケは驚愕に目を見開いて、男に問いかける。

「ま、まさかその銃は……！」

「驚いたかね？ まあ私も最初に見たときは驚いたがな。……そう  
だ。これは、連射ができる銃だ」

その様子を面白がっているのか、笑みを含んだ声で男が言う。し  
かしフーケはそれどころではない。

「ば、馬鹿な！ 連射ができる銃なんて、在るはずが無い！ もし  
あったとしてもそんなものの存在を貴族連中が黙っているはずが無  
いんだ！」

興奮と焦りに満ちた様子で、彼女はまくし立てた。

銃は威力において魔法に劣るが、詠唱が必要が無いため速攻をか  
けることができる。しかし単発での発射しかできないため、魔法に  
劣るとされていた。しかし、今目の前にある銃はその理屈が通用し  
ない。速さにおいても、威力においても魔法と同レベルの脅威とな  
りうるのだ。

だが、だからこそそれが存在していることが解せなかった。平民  
と貴族の壁を作る唯一にして絶対のもの、魔法。そしてそれを使っ  
て世を牛耳っている貴族としては絶対に排除しなくてはならないも  
のであり、存在させてはならないものはずなのだ。では何故、目  
の前にいる男は貴族でありながらそれを持っている？

フーケの言葉に、男は一つ頷いた。

「お前の言っていることはもつともだ、『土くれ』よ。確かにこれ  
は我々貴族の人間からすれば存在してはならないものだ。だが、そ  
の心配は無用だ」

「……どうということだい？」

「我々と、そして我々にこれを提供してくれた組織に属する者しか  
これのことを知らないし、持っていないからさ。それにこれを提供  
してくれた彼等は我々とおなじ貴族、メイジだ」

「な！？」

その事実にはフーケは再度驚きの声をあげた。

「私も最初は何故我々と同じメイジがこんなものを作るのかと不思議がり、そして疑いを持ったよ。それなら自分達だけが持つていけばいいのではないかと。しかし彼等は我々が何故と問うと、こう言うてきた。『使えるものは使うべきです』とね。しかも、こうも続けている。『確かに我々にとって魔法を使わずに銃といった武器を使って戦いをすることは不名誉といわれています。しかし、ここで疑問が生じます。何故仕えるものを使って不名誉なのでしょう？

失礼な物言いかもしれませんが、武器を使おうと魔法を使おうと敵を殺すことを目的として使うところには変わりありません。そこから考えれば、この銃を持つことが不名誉となることなど有り得ないのです。更に我々には、これ以上の威力を持つ多くの兵器を作り出す技術があります。そして私達の兵器の力と、あなたがたの魔法を使えばこの世界で敵うものなどいなくなるでしょう。無論、東方のエルフ達でさえも、ね』以来彼等は我々に武器を、技術を提供し、支援してくれている。そして私も彼等の話を聞き、今までの考えを改めざるをえなくなった」

「……………」  
男の話の内容に、フーケはただ黙って聞いていることしかできなかった。

「我々はこの力でもってアルビオン王家との戦いもより優位に進めることができた。このハルケギニアでは我々にもはや敵などいない。トリステインも、すぐさま我等の版図としてくれよう。私と共に来い、土くれ。これからのことに備え、我々は優秀なメイジを一人でも多く必要としている。だが逆に断れば、我等の存在を知った以上ここで死んでもらわなくてはならない。……だが、断っても何の得にもならないことは先に言うておこう。この時期を見逃せば、おまえがアルビオン王家に復讐する機会も、生き延びるチャンスも失うことになるのだから」

言い終えた男は、杖と、そしてあの銃の両方を向けてきた。

沈黙が両者の間に落ちる。そしていくらかの時間が過ぎた後で、フーケはため息を付いた。

「……分かったよ。確かにあなたの話は本当そうだ。その銃や、他にもいろんな武器と魔法を併用すればあの夢物語もいくらか夢じゃなくできそうだし、今あなた等と行動を共にしなかつたら復讐の機会も失っちまうだろうね」

でも、と言ってフーケは男に強い視線を向けた。

「まずあなた等の名前を教えてくださいませんか？ ああ、それとあなた等に武器や技術を教えてくれたって言う連中の名前も。それ以外にも組織なんだろう？」

「何故そんなことを聞きたがる？ 入れば自然と分かるだろう」

「これから旗を振るんだ。入る前にその組織の名前を知っておいたっていいだろう？」

杖と銃を治め、この牢の鍵を取り出しながらこちらに近づいてくる男。そして近づきながら自らの組織の名を言い、

「我等はレコン・キスタ。そして、その盟友の名は」

男は続けて言う。この世界に混沌をもたらす、遠い世界から来た者達の名を。

「シャドウミラー」



キヨウスケは肩をすくめ、今朝の予想どおりの一日になりそうだ  
と思いつながらモデルプリンガーの愚痴に耐え続けた。

しかしデルプリンガーは拗ねて拗ねて拗ねまくっていたようで、  
食堂についても愚痴は終わらなかつた。キヨウスケもそろそろ限界  
かと思つたとき、ようやくデルプリンガーは機嫌を直したらしく「  
……ま、これぐれえ言えりやあ良いか」と言つて愚痴が止まつた。

危なかつたとキヨウスケは思う。もうそろそろ堪忍袋の緒が切れ  
て喋れないように鞆の口の部分を縛り付けるところだつた。そんな  
ことをしていたらもつと現状が悪くなつていただろう。

本来の調子を取り戻したデルプリンガーが聞いてくる。

「で、相棒。娘っ子はどこだあね？」

「あそこだ」

キヨウスケは顎でルイズのいる方を示す。三つあるテーブルの内  
の二つ目、その丁度真ん中くらいの位置に座つており、少し遅れた  
のが気に入らないのかぶすつとした顔をしていた。キヨウスケは歩  
みを進め、彼女の横にあるイスに腰を下ろす。……そのせいで他に  
座つている生徒の一部がむつとした顔にはなるが、それはここで食  
事するようになってからいつものことなので気にしない。

「ちよつと遅かつたじゃない。どうかしたの？ ……もしかして」

ぶすつとした顔のまま聞いてきたが、最後の方はイスから身を乗  
り出してキヨウスケの耳に口を近づけ、小声で聞いてくる。

「『アルトアイゼン』に何かあつたの？」

「いや、別に何も無い。ただ少し、訓練の時間を増やしていただけ  
だ。……今日はコルベール教諭も来たから、それもあるかもしれん  
が」

彼女の配慮にキヨウスケも声を小さくして応じた。

「コルベール先生が？ 何で……つてあの先生ならあんなのあれに  
興味持つてもおかしくなさそうね……」

ルイズが呆れた顔でいう。

「でも好奇心のせいであれが動かなくなつた、なんていつたら目も

当てらんないわよ。ほんとに大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だ。まあ触りたいとは思っていただろうが、今日の訓練の際もおれと一緒にアルトに乗っていただけで、実際に機械に触ろうとはしなかった。あの人は好奇心は強いだろうが、それくらいは分別はあるぞ」

「それならいいんだけど「あら、仲良いわねー」んな!？」

いきなり割って入ってくる声。ルイズがなぜか顔を赤らめて慌ててキヨウスケから離れる。その隙を見逃さず、声の主は体の方もキヨウスケとルイズの間に（わざわざイスを持参して）割り込んだ。き

「な、何言ってるのよツエルプストー！ あと何勝手に割って入ってくるわけ!？ 離れなさい！」

「良いじゃないの別に。それにここは食堂だしどこに座ろうと私の勝手よ。ね、タバサ？」

あつげらかんと言いつつ、隣を見るキュルケ。いつの間にかタバサまでもキュルケの隣に（こちらモイス持参で）座って本を読んでいた。

「あ、あんたいつの間に……って違う。とにかく離れなさいよ！キヨウスケは私の使い魔なんだから!！」

「だから前にも言ったじゃない。好きになっちゃたって。しかもあんな強い巨人を操れるんだもの。凄くかっこいいわv」

そしてキヨウスケにしなだれかかってくる。

その様を目の当たりにし、腕を振り回してルイズが喚きたてる。

しかもルイズの体がぶるぶると震え始めていた。

これはまずいとキヨウスケは直感し、何か言おうとするがそれよりも早くキュルケが怒りの炎に油を注いでしまう。

「それとも何？ 私がキヨウスケに近づいたら何かまずいことでもあるのかしら？ ……もしかして」

で、にやりと笑って決定的な一言。

「やきもち?」

「な、な、な……!!」

5、4、3、2、1、0。……大爆発。

「何いってんのよおおおおおおおおお!!!!!!」

顔を真っ赤にして杖を引き抜き、ものすごい勢いで腕を振り回し始める。さっきのよりも更に動きが激しい。

そして当然の結果として立て続けに爆発が起こり、瞬時にして食堂が阿鼻叫喚の地獄絵図に成り果てる。

「あらら……ちょっとやりすぎちゃったかしら」

「確信犯」

とか言いつつも、安全な食堂のすみっこに避難している辺り油断なら無い。無論その傍で冷静に突っ込みを入れたタバサもだ。

彼女ら同様に非難してきたキヨウスケは、そんな相変わらずの彼女らに呆れつつ、しかし若干不満げである。

「……やるなら場所を考えてくれ。ご主人をからかうのはいいが、ここいらで騒動を起こされると食事もできん」

「あら、その点は問題ないわよ。私が食べさせてあげるからv」

いつの間に持ち出してきたのか、キュルケが今朝の朝食に並んでいた鳥のローストの皿を見せる。……ルイズが暴れ始めてからここにくるまであまり時間がなかったと思うのだが……

「……まさか、こうするためにご主人を怒らせたのか？」

と、そこでそのことに考えがいたる。しかしキュルケは笑みを浮かべたまま空いている手にローストを握り、差し出してきた。

「さあ？ どうかしら。とにかく今は食べましょvはい、あーん

「あにやってんのあんたらはああああ!!」……ちっ」

今度はキュルケが邪魔された。ルイズが暴れることを放り出してこっちに向かって突進してくる。

「何よ興味が無いって言つてたくせにいちやいちゃしていえやつぱりそうねそうなんだわあんたキュルケのほうが良いって言いたいわけねえええ!!」

そしてものすごい早口でまくし立てるその姿はまさしく悪鬼も同

然の迫力であった。しかしその迫力にも負けずにキュルケが言い返す。

「何よ、キヨウスケはあんたの恋人って訳じゃないんですよ。それとも、ほんとにできちゃってたわけ？」

「！！　ち、違うわ、そ、そんなわけ無いじゃない！」

「だったら邪魔しないで。はい、続き　「だから私の使い魔なんだから手を出さないでって言うてるでしょうが、この年中発情女！！」

「何ですって！　言ってくれるわね『エロ』のルイズ！！」

「誰が『エロ』のルイズよ！！」

……もう收拾がつかない。キヨウスケは思いっきり深いため息をついた。

「けけけ、相棒もてもて「黙れ」ごめんまじごめん」

余計なことを言いそうになったポロ剣を即座に黙らせ、ともかく食事を取ろうとキュルケが持ってきたローストに手を伸ばすキヨウスケだった。

## 調査報告

ようやく騒動が終わり、食事も済ませたキヨウスケは学院長室に向かっていた。(ちなみにルイズたちは現在あの騒ぎを起こした罰としてこっぴどい説教を教師の一人から受けている。)

キヨウスケがなぜ学院長室に向かっているのかといえば

「でもよ、相棒。コルベールのおっさんから何か聞いてねえのかい？ 事前になんか話だとか聞いてんだったら教えてくれよ」

「いや、あの人からは何も聞いていない。……話の内容が内容だ。そうそう外で話せるわけでもないということもあるだろう。いつも通りだ」

「そうかね？ あの『アルトアイゼン』の中でだって十分できるんじゃないね？」

「できるだろうが、この話はおれとコルベール教諭、そしてオスマン学院長の三人でしたほうがいいだろう。意見も交えられるし、事情を知っている人間全員で話したほうがいいはずだ。……何よりアルトをそんなことに使うな」

「真に受けるなよ。冗談じゃねえか。まあ、確かにそっちのほうがいいか。……つうかあの爺さん、あの部屋から全然でてこねえよな。もしかして移動すんのがめんどくせえとか言ってるんじゃない」

「……」

有り得ない、とさえないのがなんと困るところではある。

「……ともかく、『奴ら』に関する情報だ。周辺の国の動向や国内の情勢には注意しておくにこしたことは無い」

そう、オスマンの調査の報告を聞くためである。あの一件の後、キヨウスケ自身も図書館に行くなどして情報を集めていたが、さらに彼の推測に基づいてオスマンもまた自分の持っているコネを利用して、各国の情報を集めてシャドウミラーに関係する可能性を調査していた。

今日は、その報告が上がってくる日なのである。

やってきた学院長室では朝別れたコルベールとオスマンが待っていた。コルベールは今朝の感謝なのか、頭を下げていたが。

「おお、来たかキヨウスケ殿。調子はどうじゃね？ それか誰か新しい嫁さんになる娘でも見つけたとか？」

「そんな娘はいません。……何か分かりましたか？」

「……せつかちな男じゃのう。何も来て早々本題を切り出すこともあるまいに」

「このことに関してはそうせざるをえません」

冗談を叩ききつて早々本題に入ったキヨウスケに文句を言うオスマンを、持ち前の無表情と強い口調でたしなめる。

その様子にオスマンも難しい顔になった。

「……むう……そうまで言われるとのう……しかしあんまし雰囲気がかきつすぎるとわし、困るんじゃけど」

「あなたの都合に合わせる気などありません」

「おぬし、そんな風に言つとると嫌われるぞ……」

デルフリンガーのようなことをぶつぶつ言いながら、オスマンが机の上に載っている何枚かの書類を取り出した。

「一応調べてみたが、このトリステイン周辺には怪しい動きは起っていないらしいの。貴族どもは表面的には王家に黙って従っておるしの。それにおぬしの言っていた通り平民の動きも注意して調べてみたが、別段変わった動きも無い。むしろ問題は国外じゃの」

「細かいのを上げれば切りが無いが、大きいだけでもガリアの『無能王』に対する不満分子やゲルマニアの皇帝親族同士の争い、アルピオンでは王家に反対する貴族派の反乱がある。まさしく不安要素の大盤振る舞いじゃのう」

「オスマン学院長、それはちよつと……」

オスマンの茶化したような言い方を見かねてコルベールがたしなめた。

「いや、すまんの。じゃがキョウスケ殿の話聞いた後では言いたくもなるわい。ここまで火種が多いとなるとのう」

その通りだった。戦いの火種は彼等『シャドウミラー』の最も好むものだ。彼等がその火種を利用し、火種から炎に燃え広げることこそが彼等の目的なのだから……

「……学院長。その中で一番可能性がありそうなものは何だと思えますか？」

腕を組んでオスマンの話を考えていたキョウスケが、オスマンに尋ねる。

「……ふむ、そうじゃのう。この中ではやはりアルビオンの一件かの」

キョウスケと同じ様に少し考えてから、オスマンは答えた。

「いくら現王家に不満を持っている貴族が一斉に蜂起したとしても、王家には王家で忠誠を誓った貴族達がついておるはずじゃ。いくらなんでもここまで早く王家を追い詰めるなど考えられん」

「……」

「無論彼等が単純に強かったこと、兵の数や動かし方が優れていたことも可能性として残しておかなければならんじゃろうが、だとしても何か引つかかるんじゃよ」

「あと、これは私の私見なのですが……」

ここで躊躇いがちにコルベールが口を挟んだ。

「オスマン学院長の仰るとおり、私もアルビオンの貴族派の動きが気になります。それに未確認の情報ですが、彼等は新しい火系統の魔法を使うというのです」

「火系統の？」

「はい。火の気配をそれが使われる様を見た者は言っていたのです。ただその使い方が奇妙で、魔力の動きを感じなかったとか。しかもそれでいて使われた相手は倒れている……」

「……魔力を使わない、火系統の魔法……」

考え込むキョウスケ。そして組んでいた腕を外し、コルベールに

問いかける。

「それを見ていた人間は、その様子を詳しく見ていたのですか？」

「いえ。戦場で偶然見かけた程度で、はつきりとみたというわけではないようです。しかし、もしかしたらこれが……」

「ええ。……どうやらお二人が言うように、アルビオンの内乱が怪しそうだ」

そういうキヨウスケの目はすでに鋭い闘志の光を放っている。

キヨウスケの様子を見たオスマンは頼もしそうに頷きながら、問いかける。

「行くのかの？ あれに乗って」

「ええ。やつらの影を逃すわけにはいきません」

「うむ。分かった……といたいところじゃが、今はちょっと待つてもらえんかの？」

「……？ 何故です？ 『今は』というのが少し分かりませんが」

「まあ、ちよいと都合が悪いというだけじゃよ。学院の内外で、今はちよつと人だけがあるんじゃ。ほれ、おぬしとしてはあれを見られてはまずいんじやろ？ 昼過ぎか夕方ごろには収まると思うでの。そこまで待つてほしいんじや」

なるほど、とキヨウスケは納得した。確かにそう人が集まっている状態であればそうそうアルトを動かすわけにも行かない。

「しかし、何か今日あるのですか？ 普段ならそうまでの人だけかりなどできないでしょう？」

「まあ。しかし、今日は特別なんじや。なにしろ王女がお見えになるんじやからの」

## 王女の来訪 1

「なるほど、あれがこの国の王女か」

キヨウスケは呟く。

キヨウスケは見張りのために作られた塔から、サバイバルキットに武器と一緒に収められていたスコープを外に向けていた。その視線の先には、学院にやってこようとしている金の冠を御者台の隣につけた四頭立ての馬車と、それを取り囲む群衆の姿がある。その上学院の中でも、彼女が来るのを今か今かと待っている生徒達が大勢いた。

オスマンから王女が学院に来ることを聞き、シャドウミラーの件もあってこの国の指導者の一員である王女がどれほどの人物なのかという興味が湧いたため、ここから彼女の姿を見ていたのである。

だが、馬車を囲んでいる国民に姿を見せるために開かれたカーテンの内にある彼女は、キヨウスケの世界のある王族ぐらいの人間を期待していたのだが、期待外れもい所だった。

均整の取れた体にすらりとした気品のある顔立ちと薄いブルーの瞳は、彼女のために詭えられた純白のドレスに金細工のティアラが引き立てているのだろうが、確かに「美しい」という評判の通りの容姿であった。しかし、キヨウスケにとっては容姿などどうでもいい。彼女が為政者として相応しい能力や覚悟があるのかが問題なのである。しかし、キヨウスケの見立てでは彼女は、

(……使えんな)

その一言に尽きた。

表面上は国民に対する体裁もあるため、微笑んではいる。しかしその実、彼女が馬車を囲んで賛辞と政治に対する期待を向けている国民などどうでもいいと思っっていることは、鬱を含んだ雰囲気と、不安に揺れている瞳を見ればすぐに分かった。

思わず、舌打ちを漏らす。

シャドウミラーの暗躍を警戒しなければならぬこのときに、何と言う人間が為政者の中にいるのかと言う考えがキヨウスケを苛立たせていた。

ただの貴族であれば、別段政治に関心が無くてもいい。

彼女の隣にいる、丸帽と灰色のローブを身に付けた痩せぎすの男は恐らく現在のトリステインで政治上の実権を握っていると噂されているマザリーニ枢機卿だろう。一動作にも窺える隙の無い立ち振る舞いなど、なかなかの人物であろうことは予想できる。彼のような能力を持った人間に任せてしまえばいいからだ。

しかし王族となると、少し話は違ってくる。

国を権力で動かせる範囲が、ただの貴族とは次元が違うのだ。その気まぐれで軍が動くことも、どんなにそれが無駄で無意味であろうともできてしまう。今はマザリーニのような人間がいるから良いが、もし彼がいなくなる、もしくは奴らに陥れられるといった事態になり、彼女が今のような状態ではこの国はどうなってしまうのか（確かに国内に不安は無いかもしれん。今のところはな。だが将来においては、他の国と同じ位に不安があるように思える……）

オスマンの言葉を借りるわけではないが、まさしく不安の大盤振る舞いというやつだった。しかもあのような人間が来るためにアルトを動かさなかったのかと思うと、苛立ちが募ってくる。

これ以上見るものは無いと考え、スコープを懐にしまって塔から降りるキヨウスケ。その頭は、これ以後情勢の変化によってどう動くべきかという考えで埋め尽くされていた。

学院内外の群集がいなくなるには、夜になるまで待たなければならなかった。そして現に夜になった今、ようやくアルトを動かすことができる。

ただ、一応このことはルイズに伝えておくべきと思い、キヨウスケは足をルイズの部屋に向けていた。昼の内にルイズにアルビオンにアルトを使って行くことを伝えようと思っていたのだが、都合が

悪く会うことができなかつたためだ。

学院の廊下を歩き、彼女の部屋に向かう。そして彼女の部屋の近くに来たとき、中から話し声が聞こえてきた。

(? 何だ?)

かすかに聞こえてくる声の一つは、ルイズもので間違いない。もう一つも、どうやらルイズと同様の少女のものらしい。それに声の感じには親密さがあり、どうやらルイズの友人であることは推測できた。だが……

(誰か来ているのか? しかし、確かルイズには友人らしい友人はいなかつたはずだが……)

その疑問が、キヨウスケの脳裏に真つ先に浮かんだ。……そういう発想が真つ先に浮かんでしまうのが、少々いたたまれないのであるが。

ともかく話をしている最中なのは悪いが、こちらも急いでいるのだ。キヨウスケは意を決し、ドアをノックして呼びかける。

「ご主人、キヨウスケだ。とりこんでいる最中悪いが、話したいことがある。入らせてもらおうぞ」

「へ? キヨウスケ……て、ち、ちよつと待! 今はダメ! 入るの禁止!」

慌てた声の中からするが、お構いなしだ。ドアノブを掴み、さつさとドアを開ける。

だが部屋の中に入った瞬間、キヨウスケは自分の目を疑った。部屋の中にいるのは、あちゃーと額に手を置いているこの部屋の主であるルイズと、もう一人は、

「アンリエッタ、王女……?」

確かに、スコープ越しに見たアンリエッタ王女の姿をしていた。

何故王女がこの部屋にいるのかという疑問はあつたが、とりあえず何故そこまで二人は親しげなのかと尋ねたキヨウスケであつた。そして、それは意外と単純な答えであつた。

「なるほど。ご主人と王女は幼馴染だったのか」

「そ、そうよ。何か文句でもあんの」

ベッドに座っていたルイズが、どこか落ち着かない様子で答えた。それをアンリエッタが引き継ぐ。

「ええ、ルイズの家であるヴァリエール公爵家が王族との血縁なので、幼いころから相手をしてもらっていたんですよ、使い魔さん」

それにしてもと、椅子に座ったアンリエッタがキョウスケをしげしげと眺めてくる。

「人を使い魔にするなんて、昔から変わっているとは思っていたけど、相変わらずね」

「す、好きで使い魔にしたわけではありませんわ。でもさつきから妙に感心してるけど、私と姫様が知り合っているのって、そんなに意外だった？」

「……いや、まあ、な。意外なところで接点というものは出てくるものだと考えていたが、ただそう思ったただけだ」

「……あんたのその言い方にはすごく嫌味を感じられるんだけど、それは気のせいかしら……？」

びき、と額に青筋を立てるルイズ。キョウスケにとっては本当に意外だったという意味でいっただけで、嫌味のつもりはまったく無かったのだが。

「そう言うな。あれは本当に意外だったから言ったただけで、別に他意はない」

キョウスケはひとまず断っておき、誤解を解いておいた。しかしルイズはジト目でキョウスケを睨んだままである。

「そんな言い訳でくらいでごまかされないわよ。あんたには前科がたっぷりあるし、それで怪しむなって言われる方がどうかしてるわ！」

「……そんなに疑われるようなことをやってきたか、おれは」

「してきたじゃないの！ まさかどれだけ私の言うこと聞かずに独断専行してたか忘れたわけじゃないでしょうね！！ 私に許可なく

野宿したりあの馬鹿ボロ剣買ったろ『アルトアイ』むぐ!!」

突然ルイズの口から恐ろしい単語が飛び出してきたため、いつものごとく有無を言わず口を塞いで黙らせた。

「ふぁによ! ふぁにふんの、よ……」

徐々に声が小さくなり、視線がつーと横にそれていく。そこにはアンリエッタ王女がぼかんとした顔をなさっていた。

キョウスケは声をルイズだけに聞こえる音量まで絞り、耳打ちする。

「……おれの言い方が悪かったのかもしれないが、さすがにさっきのは見過ごせんぞ」

「ふお、ふおめん……。ふおうひひでひよ、ふえをふぁなひて」

何となくだが言っていることは分かったため、望みどおりにしてやった。口を尖らせ、なにか言いたげにしているが、とりあえず騒ぎ出すことはなさそうだ。

くすくす、という笑い声がそこで聞こえてきた。笑っていたのはアンリエッタであった。

「仲がいいんですね、お二人は」

「!!! そ、そそそなことないです姫様! 何を言われてるんですか!!!」

真つ赤になりながらわたわたと否定するルイズ。それを見えます笑い転げるアンリエッタ。しかしひとしきり笑った後で、一つため息を付いた。

「いけませんね、私は。こんなことではだめだと分かっているのに……」

「? 姫様、どうかなされたのですか? ため息などつかれて」

「いえ、なんでもないので。ごめんなさい、こんな姿を見せて」

「そんなことはありません! 昔はあんなに活発だった姫様がため息をつかれているなんて、ただごとじゃありませんわ! よかったら事情を話してはくださいませんか!」

ルイズの言葉に顔を輝かせるアンリエッタ。

「ああるイズ！ やっぱりあなたは私の一番のお友達だわ！」

「姫様！」

……二人は自分で言った台詞によっているのか、妙に盛り上がっている。今二人が抱き合った。

その一方でキョウスケは、ぶつちやけ白けていた。言葉自体はまあいいとしても、その言葉が出てくるまでの過程が確実に間違っている。

（そもそも自分の醜態を見せたくないのなら、この部屋に来るなど言いたいんだがな）

つまるところ、自分の哀れな姿を見せてルイズに慰めてもらおうという算段なのだ。こんなものを見せられても感情が動くはずがない。その上昼間の評価に今の醜態が追加され、さらにキョウスケのアンリエッタに対する評価が低くなった。

（……しかし、これですめばいいが……）

どうもいやな予感がするのである。

アンリエッタの様子から、ただこの部屋に泣き言を言うために来たというわけではないのは十分推測できる。では何をしにここにきたのであろうか？

（何もなければいいんだが、な）

しかし、このようなときのキョウスケの勘は悲しいかな、異様なほど当たるのである。そして今回も、その勘は見事に的中することになったのであった。

## 王女の来訪1（後書き）

今回の更新は書き溜めていたのがあったのでできましたが、感想の返事にも書きましたがことによっては書けな苦なる時期が長くなるかもしれません。無論更新は頑張りますが、どうかご容赦を……

## 王女の来訪2

アンリエッタの悩みを聞いたルイズは即座にその解決を自分があると言い出し、そしてアンリエッタもそれを了承した。

ルイズはアンリエッタが自分を頼りにきたことに歓喜を覚えていた。

キョウスケの意見とフーケを捕らえた功績により、最近は『ゼロ』と呼ばれることもなくなった。

しかしそれでも、魔法が使えないということだけは変わってこなかった。

いくら教師に尋ねたり図書館の本をあさってみても、爆発が起る理由は分からずじまい。いくら馬鹿にされなくなったとは言え、魔法が使えないという事実は変わっていないのだから、影でいまだ『ゼロ』といわれているのではないかという不安がルイズの中に残っていた。

だが、そんな自分をアンリエッタは頼ってくれたのだ。まあ隣国のゲルマニアとの同盟云々は気に入らないが、それは彼女からの期待に比べれば些細なものである。

「お任せください、姫様！ 見事その任務を無し遂げて見せます！」  
イスを蹴飛ばして立ち上がり、アンリエッタの手に両手を重ねるルイズ。アンリエッタも勘当した面持ちでルイズを見ていた。

「……少し良いですか、王女」  
と、そこで無粋な声が横からかかる。腕組みをしつつ椅子に座り、目を閉じてアンリエッタの話聞いていた使い魔のキョウスケだ。  
アンリエッタはいい雰囲気邪魔されて気分を害したようだが、それでも表面上はその様子を見せず「なんですか、使い魔さん？」と問いかけた。

一方何でこんなときに姫様に話しかけんのよと思ってしまうルイズである。せつかく姫様と話していて、しかも頼みごとの話まで姫

様の厚意で聞かせてあげてんのに。

しかしキヨウスケは閉じていた目を開きつつ、アンリエッタを見ながら一言。

「あなたは、自分の過失でその『大切な』友人を殺すつもりですか」と言っただのである。

一瞬ルイズとアンリエッタは何を言われているのか分からなかった。しかしその意味を理解できた途端、ルイズは驚きで動けなくなり、アンリエッタはうろたえ始める。

「な、何を言われるのです！ 何故私がルイズを殺さなければならぬのですか！」

「……何故こんなことを言われたのか分かっていませんか？」

キヨウスケは開いた目を鋭く細め、アンリエッタをその視線で射抜く。

その心の中までも覗こうかという視線にアンリエッタは自然、椅子に座っているにも拘らず後ろに下がろうとしていた。

「隣国『ゲルマニア』との同盟のための結婚のために、『アルビオン』の王子から過去の恋文を手せよと貴方は言った。ですがそれを彼女一人に任せ、しかも行く先が戦争している真つ最中という状況で、あなたはルイズに行けと？ ……何の戦いの訓練も、その上経験すらない人間を行かせるのは、その人間に死ねと言っている様なものだと思いますが」

「！！ そ、そんなことなど考えてません！ 私だって危険だと思っっていますし、それに彼女には腕の立つ護衛だっつけます！ そんなことを言われる覚えは「ならば何故、初めからそういう人間に頼まないのですか？」な！？」

そして、決定的な言葉が放たれる。

「ご主人は確かに貴方のご友人らしいが、こんな任務を受けられるほどの強さを持っていないことは貴方だって分かっていたはずです。

しかもこの手のことに対応する機関の一つや二つ、あなた方のような王族なら持っているはずだ。だが、それを使おうとしない」

「……」

キヨウスケの言葉を聞いているうちにどんどんアンリエッタの顔が青ざめていく。キヨウスケの言葉から、彼が何を言おうとしているのかが分かってきたのだろう。

「恐らくご主人も、その護衛を頼んだ人間も、自分にとって「キヨウスケ、もう止めなさい!!」……」

そこで、驚きのせいで今まで動けなかったルイズがキヨウスケの言葉をさえぎった。

「なぜだ、ご主人」

「何でも何も無いわよ！ あんた姫様に何てこと言ってるの！ 今まで固まってたけど、これ以上はいくらキヨウスケでも許せないわ！！ それに私がこの任務を受ける強さが無いですって！？ 今すぐ今までの言葉を撤回しなさい！！」

言いながらキヨウスケに近づき、怒りに染まった瞳で椅子に座ったキヨウスケを見下ろす。しかし、キヨウスケはまったく動じることなく彼女に答えた。

「それはできません。……逆におれからも聞きたいことがある。王女から頼みごとを受けたのは良いが、それではご主人はどうやってアルビオンまで行くつもりだった」

「え！？ ……そ、それは……」

突然の質問、そして聞かれたことに言葉をつまらせるルイズ。何とか言い返そうと言葉を捜し、

「そ、そうよ、あんたがいるじゃない！ わたしが行くんだから、使い魔のあんただって付いて行かなきゃいけないじゃない！ あんただったら私を助けられるでしょ！」

「……まあ、そうだろうな。だが、今聞いているのはおれがついていった場合じゃない。おれがない時の話をしている」

「え？」

「確かにおれがいれば、何とかやっていくこともできるだろう。だが、おれがいない場合、それに途中でおれとはぐれたりした場合はどうするつもりだった？　しかもそんなときに敵と遭遇した場合はどうする？」

「！」

言われて初めてルイズは気が付いた。そうだ。こういった任務のときは、普段では考えもしなかった可能性も現実のものとなりうるのだ。

そう、キヨウスケと別れるといった事態も……

「ご主人は爆発を起こすことしかできず、その爆発もコントロールできるわけではない。今のご主人も自分が満足に戦うができないのはわかっているはずだ。それに、行くルートをどうすればいいか、危険、もしくは刺客が潜んでいそうな場所はどこか。食料はどの程度持つていくか、宿が確保できない場合はどうするか。こういった危険の想定をすることもできないだろう。……無論想定どおりに全てが進むわけではないだろうが、ある程度は予測しておくのは当然のことだ。この程度のこと、しかも戦いも一人でこなせんようでは、足手まとい以外の何者にもならんぞ」

「……！」

はつきりといわれたその言葉に、怒りを忘れてルイズは立ち尽くす。

キヨウスケはそんなルイズから少しの間目をそらし、再び視線を向けて言葉を続けた。

「……きつい言葉だと思う。だが、ここまで言えば分かっただろう。おれは以前、ご主人は貴族であることに誇りを持っているといった。恐らく今回のことには、それも関わっているんだろう。だが今のご主人はまだ学生で、戦える段階までできていない。それにも拘らずこんなことを引き受ければ、無駄死にするだけだ」

「……ッ！」

反論しようとする。しかしキヨウスケの視線と先程の言葉のせい

で、いつもの癪癢を起こすことができなかった。

それはそうだ。彼の言っていることは、まったくの正論なのだから。

アンリエッタから頼みごとをされたことに舞い上がって、実際に旅をするという事実にはまるで目を向けていなかったのだ。そのことを何度も助けてもらっているキョウスケに指摘され、反論などできるはずが無い。

(……でも、でも……!!)

しかし、頭では理解できて納得することはできなかった。

実力を持たず、自分のあだ名である『ゼロ』そのまま、しかも姫様の頼みにも応じることができない。そんなことは、断じて認めることはできなかった。彼の言うように自分がこの任務を受けることは無謀以外の何者でもないのだから、しかし……

(私だって……!)

引くことなどできなかった。ささやかだが、自分には貴族としてのプライドがある、それに反することだけは、できないのだ!

ルイズは悩んだ末に行くことを再び決心し、そのことを伝えようとする。が、ルイズのその様子を見たキョウスケはいつもの無表情に笑みを浮かべ、

「それでいい」

とルイズに言ったのだった。キョウスケに何を言われたのか分からず、再びルイズが凍りつく。

キョウスケは凍りついたままのルイズに言葉を続けた。

「すまん、こんな真似をして。だがさっきまでの様子では、自分が任務を受けて何をやるか分かっていなかったらどう?」

「え? あ、う、うん」

「だれもが初めは巧くできるわけがない。今回の一件でも、そこまではご主人には望まん。これから学んでいくことでもあるだろうし

な。だが、心構えすらもできていないようでは同行することの方が困る。ならば……」

そこまで言われてルイズはは！ と気付いた。つまり、今までの  
は！

「あ、あんたまさか！！」

「察しの通りだ。多少は覚悟というものを持ってもらった。……どうも、警戒心といったものがかけていたような気がしたんでな」

しれっとした様子で言うキョウスケ。対してルイズの顔は真っ赤に染まる。

「あ、あああああんたねえええそんなことだったらはつきり言  
って伝えればいいじゃないのよこのムツツリ使い魔なによそうだっ  
てわかってたらこっちだってあんなにやきもきしなくてすんだのに  
ってあたし何言ってるのよあんなのせいだからね分かってんの！？」

勝手に暴走して言いまくり、最後にはキョウスケのせいにするル  
イズである。

無論この程度のことにはキョウスケが動ずるはずがなく、至極落ち  
着いた様子でルイズがおとなしくなるのを待つのであった。しばらく  
時間がたち、はー、はーと肩で息をしつつようやくルイズが落ち  
着く。……その間、まったく表情を動かさなかったキョウスケだっ  
たが。

うー、と唸りながらキョウスケを睨むルイズ。「いつかぎゃふん  
と言わせてやる」などと不穏なことを呟くが、当然キョウスケは気  
にもしない。気にはしなかったが、

「……まあ、すまん。確かに直接言っても良かったが、こちらの  
ほうが効果があったらどう？ ……それに、話したいこともあった  
んでな」

と言って謝ってきた。悪気はあるらしい。だが、すぐに言葉の調  
子を変え、ルイズのみに声が聞こえるように声を落としてきた。ル  
イズはその様子からただならぬものを感じ、自然神経をキョウスケ  
に集中する。

「……実のところを言えば、ご主人のことがなくてもおれは『アルビオン』に行くつもりだった」

「え、そうなの？ でもなんであんなにアルビオンに……！」  
喋っている途中で気付く。キヨウスケが自分から動く理由など、  
一つしかないではないではないか！

「ま、まさか……」

「そつだ、ご主人。……アルビオンに、『奴ら』の影がある」

王女の来訪2（後書き）

よ、ようやく更新できました……  
とりあえず、一ヶ月に一回は更新していきたいです……

### 王女の来訪3

キヨウスケの言う『奴ら』、その言葉が意味するものはただ一つ。  
『シャドウミラー』のことである。

キヨウスケの『平行世界』から彼の世界へ来て、戦争の絶えない世界を作り出そうとした恐るべき異邦人達。その影が、アルビオンにある……!?

アンリエッタの前ということも忘れて、ルイズはキヨウスケに詰め寄った。

「それ、ほんとなの!？」

「……まだ可能性の段階でしかないが、恐らくな。それに、今日コルベル教諭から聞いた話からも十分疑いは持てる」

そこでキヨウスケは手短に今日オスマンやコルベルから聞いた報告をルイズに伝え、内容を補足した。

「オールド・オスマンもアルビオンの貴族派の勢いには疑問を抱いていた。その勢いの裏には、奴らのもたらした技術があるのかもしれない。ならば尚更、いつて確かめなければならん」

キヨウスケはそこまで言った後でルイズを見やり、付け加えた。

「こついつた事情もあつたんでな。ただでさえ戦場という危険な場所に奴らがいるかもしれないという可能性。にも拘らず中途半端な覚悟、その上自分の力量も何も理解していないようなら、ただ足を引く張るだけということくらいは分かるだろう?」

「う……」

「まあ、ああ言っても何も理解せず、ただ任務任務というようだったなら本気で残ってもらうつもりだったがな。……だが、今のご主人なら大丈夫だろう」

言い終えたキヨウスケの顔には、かすかな笑みが張り付いていた。  
「……う~~~~~!!」

キヨウスケの笑みに赤くなりながらも言われたことには何も反論

することができず、うなるしか無いルイズ。

「こ、これからはああいったことをする前に言いなさいよね！ あんたは私の使い魔なんだから、まあ、その、感謝してるけど、けどやり方が回りくどすぎるわよ！」

そしてひとしきり唸った後で、ばつが悪そうに言った。……使い魔がどうかという部分は回りくどく言う云々にまつたく関係ない気がするのだが、それに追求することなくキョウスケは

「ふ……了解した。善処しよう」

と言つて返すのだった。しかも返す際の表情に余裕がにじんでいてますます憎らしい。

（っもう！ ご主人つて言うんだつたらもう少し敬いなさいよ！）そして他にどうすることもできず、心の中で愚痴るのだった。

そんなルイズを見て笑みをうかべるキョウスケ。そして笑った後で顔を引き締め、そのままルイズの耳に顔を寄せて音量を絞った声でルイズに話しかけてきた。

伝えてきたのは今回の旅ではアルトアイゼンは使わないことだ。ルイズとキョウスケだけならまだしも、アンリエッタが言った護衛が同伴するとなればアルトアイゼンの存在がばれるのは好ましくないという。それにはルイズも同意できたため、頷いた。

しかしそれを伝え終わった後で、最後にキョウスケはルイズに言い含める。

「ただ、これだけは言っておくぞ。……おれは初めに言ったことだけは撤回する気は無い。あの女には、深入りするな」

「へ？ 初めに言ったこと……って、あー！」

そこでルイズは思い出した。そういえば、アンリエッタ姫に対して何かとんでもないことを言っていたような……！

シャドウミラーの件で忘れていたことを一気に思い出し、再びルイズはキョウスケに詰め寄った。

「な、なにあんた言ってるのよ！ 『シャド』……とつと、あいつらのことまでつきり忘れてたけど、それだけは撤回してもらおうよ

！！ しかも姫様をそんな風に言うなんて無礼以外の何者でもないわ！！」

「無礼だろうがなんだろうが、事実だ。ご主人を自分の過失のために死ぬというような人間に、なぜ言葉を撤回する必要がある？ それに」

キヨウスケは一瞬ルイズたちのやり取りについていけずにぼかんとしているアンリエッタを見た後、イスから立ち上がりドアに近づいた。

「魔法に頼っているばかりで、こういったことを見逃しているのなら尚更だ」

いきなりドアを開けるキヨウスケ。直後、何か部屋の中に転がり込んできた。それを見たルイズは驚きの声をあげる。

「ギーシュ!?」

そう。転がり込んできたのは先日キヨウスケに決闘を吹っかけ、そして見事にボロ負けしたギーシュだった。

「いたた……何で急にドアが、って君は……！！！！」  
頭を押さえていたと思ったら、キヨウスケを見たときに親の敵でも見つけたような声で叫ぶ。

「どっかで聞いた声だと思って「どうやら盗み聞きをしていたようです」たら君だったのか！ 聞いたぞ「どうしますか？ ご主人、そして王女」さっきの無礼な発言！ 前はあのような醜態「極秘任務という話でしたが」を晒してしまっただが、今回は「このまま帰らせますか？ それとも」ああはいかな「最悪、口封じを」って人の話を聞け……！！！！」

まったく反応を示さないキヨウスケについてギーシュが切れた。しかし実はキヨウスケが本気ではないにせよ物騒な発言をしたことに気がいかなかったあたり、幸運だったかもしれない。もつとも、「もう限界だ！ 今度こそこのギーシュ・ド・グラモンが君をムギユ……」「うるさい」

こうやって簡単に転ばされて床に取り押さえられるあたり、物悲

しさを誘うのであるが。

「グ、グラモンと申しましたが、あなたはグラモン元帥の……？」  
アンリエッタがギーシュに問いかける。

今までのキヨウスケとルイズのやり取りについていけなかったこと、そしてキヨウスケに言われかけたことから戸惑いの色が色濃く出ていたが、何よりキヨウスケからもう追求されたくないという腹積もりもあるのだろう。可憐な外見とは裏腹に、中々に腹黒い。

そうとも知らずにギーシュがアンリエッタの問いかけに息巻く。

「そ、そうです！ グラモン元帥の息子であるこのギーシュ・ド・グラモン、偶然とは言え見目麗しい姫様を見つけてその後を追い、そして再び偶然ながら任務の事を聞いてしまいました」

「はあ……」

「ここまで偶然が続けば、それは私にその任務を遂行せよとの始祖の啓示に間違いございません！ どうかこの私に、その任務を仰せ付けられますよう」

……単にアンリエッタの姿を見つけてストーカーのごとく後を追いかけて、その上盗み聞きまでしていたことが啓示なのかと突っ込みたくなるだろうが、そこは気にしてはいけないのだろう。

アンリエッタも突然の申し出に困った顔をしていたが、意を決し、「分かりました。任務の事を聞いていたのであれば、仕方ありません。このまま返すというわけにも行かなかったでしょうし、ギーシュさんでしたっけ？ あなたにも任務を任せることとします」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！ 姫殿下が！ トリステインの可憐な花、薔薇の微笑みの君が僕に微笑んでくださった！」

興奮してキヨウスケに押さえつけられていることにもめげずに悶えまくる。正直、かなり気持ち悪かった。

「はあ……まあ別にいいけどね……」

今までのやり取りに疲れたのか、ルイズはため息をつく。

気を取り直してアンリエッタに向き直り、真剣な声で言った。

「では私達三人と、確か」



くけけけけけけ、ととんでもなく底冷えする声で笑い始めた。そうよね。そんなお馬鹿で無礼でムツツリな使い魔にはお仕置きしなきゃね。たあああああつぷりと、もうやめてください失礼しました私はあなたさまの忠実なる下僕です奴隷です僕ですともかく言うこと聞きます見たいな感じで。

すちや、と杖を抜き、

「まてえええええこの馬鹿無礼ムツツリ犬ううううう!!!」  
と部屋を飛び出していった。

ちなみにいくら探し回っても結局キョウスケを見つけることはできず、とぼとぼと部屋に帰ってきてアンリエッタから段取りの説明を受けたそうである。

一方でキョウスケ達は、

「相棒良いのかい？ 今頃かんかんだぜあの嬢ちゃん。後が怖いぜ」

「別に構わん。それに今のご主人の様子だとアンリエッタの事を分からせるのは無理そうだしな。シャドウミラーのことも伝えたいし、最低限のことは分かっただろうから問題は無いだろう」

「ほ、なるほどな。やっぱ相棒無表情で愛想無いように見えるけどきちんと嬢ちゃんのこと考えてんだね」

「それほど大したことじゃない。それに、逃げてきたわけはもう一つある」

「へえ、そりやなんだい？」

「……これ以上、あの三文芝居には耐えられん」

一瞬の間。そして響く大爆笑。

こちらの方は、こんな感じであったそうだ。

場所は変わって、ここはトリスティン国境近くの空である。



騎士の目がこれ以上無いくらいに見開いた。相棒の竜もまた、更に震えをましている。

なんだあれは、そう考えることしか騎士はできなくなっていた。何かが凄まじいスピードで通り過ぎていった。それは分かる。しかし……

(な……んだ、つたんだ？ あれは……！?)

自分の目が見たものが信じられない。

それは、空を飛んでいるにもかかわらずゴーレムのように大きく、一応は人の形をしていた。しかし、問題なのはそこではない。

その速さもそうだが何より恐ろしかったのは、その姿だ。夜の暗さもあってよく見えなかったが、それでも一度目にしたら忘れられるはずが無い。

あの全身の異様さと気味悪さ、そして何よりその翼。

騎士はぼつりと、呟いた。

「あ……悪魔、か……？」

騎士はしばらくの間、身動きも取れずにいた。

### 王女の来訪3（後書き）

ただひと言言います。長い間更新停止してしまい、申し訳ありませんでした！！！！

## 旅立ち

「まったくあの使い魔ときたら……！」

昨日のことが忘れられず、名前なんて呼ぶのもおこがましいと考えて呼び方を戻してしまつたルイズが魔法学院の前の校門に立っている。当然のことながら不機嫌丸出した。

「ま、まあそこらへんにしておきたまえルイズ。これから嫌でも共に行くことになるのだし、そのせいでチームワークを乱して任務を失敗するわけには行かないのだしね」

それを隣に立っているギーシュが何とかなだめようと恐る恐る話しかける。

こう言っているギーシュもキヨウスケには決闘のことや昨晚のこともあるため、余り良い感情を抱いていないのだが、自分よりも更に深刻な事態になっているルイズを見てはそうも言っていられなかつたようだ。

ギーシュの言葉にも一理あると思つたのか、うつと言つ顔になつた後若干ながら不機嫌さの度合いが下がる。

「うーうー、確かにそれはそうかもしれないけど……」

（キヨウスケにいわれなかつたら自分がどれだけ考えなしに任務を引き受けたのかも分からなかつただろうし……）

ちらりと視線を下ろす。そこには自分の持つている知識を総動員してまとめた、旅に必要なと思われる品々が入つていけるケースがある。キヨウスケに言われなければ、すべて使い魔に任せていただろう。

しかしそれでは自分の認識が甘い事が分かり、その上思い返してみればフリッグの舞踏会でああ宣言した以上、みつともない姿をさらすわけには行かないと思ひ直して準備したのであつた。

（もう、姫様のこと以外だったら別にキヨウスケを……つて違う！  
！ あ、あいつは使い魔なんだから私を助けるのは当然！！ ついでに使い魔は使い魔で名前でなんかもうキヨウスケを呼んでつてち

があう！！！！）

頭の中で勝手に空回りし、一人百面相をするルイズであった。隣にいたギーシュは……

多分、こういう人間を見たときに当然する事をする。

少しはなれたところに下がり、あの使い魔でも良いから早く誰か来ないかなーと首を回して周囲を見ていたのであった。すると、

「待たせたか」

と声がかかってきた。

ギーシュは声のした方をむくと、ギーシュたちに向かって歩いてくるこちらでは見かけない服装をした男がいた。

そして当然その男の声が聞こえたとなれば、

「キョウこの馬鹿犬うううううう！！！！！！」

わざわざ言い直して突撃していく桃髪一人百面相である。

キョウスケの前に立つてぎゃあぎゃああと「昨日の態度は何よ！」

だの「さっさと謝りなさい！」だのといった口論（主にルイズが一方的にまくし立てているだけともいう）になり、結局落ち着くまで半時間ほどかかった。そして当然

「で、すぐに出発するのか」

と何もなかったかのように二人に確認を取るのがキョウスケという男のわけだ。

こうなるとわざわざ半時間もかけてまくし立てていたルイズがもう哀れで仕方が無い。

「……………うううううううううううううううううううう！！！！！！」

ルイズはぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりという擬音がとても似合いそうな、歯軋りをしている恐ろしい顔で睨みつける。そしてそれすらも当然にスルーしているのであった。

もう言葉では言い表せないくらいぎすぎすした空気に耐えられなくなったのか、冷や汗びっしょりの背中でギーシュはおずおずと手を上げ、

「す、すまないが僕の使い魔を連れて行っても良いだろうか…………？」

と発言する。

「あ、あによ。あんた使い魔なんて、いたの？」

ゼーゼーと息を大きく荒げながらギーシュにルイズが聞く。ギーシュは空気を変えたいがためか、必要以上に大きく頷き、

「もちろんさ。来たまえ、ヴェルダンデ！」

と、これまた必要以上に気障な仕草と声でどこへともなく呼びかけた。すると地面が盛り上がり、出て来たのは

「ジャ、ジャイアントモール？」

そう。普通のものとは比べ物にならないくらいに大きい体をした、モグラだったのだ。

「どうだい可愛いだろう？ この愛くるしい丸みを帯びた体。とくにこのくりくりとした目など最高だね！」

そう言っただけギーシュはジャイアントモールに抱きつき、すりすりとは頬ずりをし始める。

その様に呆れつつ、

「……でもあんた、分かってんでしょうね。私達が今回のたびで目指してるの、アルビオンだってこと。ジャイアントモールじゃどう考えたって連れてけないじゃないの」

と無情に言い放つのだった。シヨックを受けたかのように顔を真っ青にし、「一緒に行けないなんて寂しすぎるよ……」と言って更に勢いを増して頬ずりする。

どうしようかしらこいつ、このままおいてっちゃおうかしらとルイズはひそかに思った、その矢先である。どこからか羽ばたきの音が聞こえ始めた。

何かと思っただけその音がするほうを向くと、そこには鷲の頭と獅子の体を持つ幻獣、グリフォンがこちらに近づいてくるところだった。しかもその体躯は他と比べて一回り大きい。

ルイズを初めとしてキョウスケやギーシュも何事かと思っただけそちらの方を向き、ギーシュは驚いた顔を、キョウスケは相変わらぬ無表情でなにを思っているのかさっぱり分からなかったが、してい

た。

「ず、ずいぶん大きなグリフォンじゃないか。もしかしてあれかい？ 今回の旅で姫様が君につけるといつていた護衛は」

驚いた顔のまま言うギーシュだったが、ルイズは彼の言葉など聞いていない。一瞬乗り手の顔が見えた瞬間から、彼女の考えは止まってしまうている。

やがてグリフォンが降り立ち、乗り手が降りてくる。広いつばの羽根付き帽子に黒のマントをしており、口元には髭を生やしている。しかしその顔はルイズにとって忘れられるものではなく、また、見間違うはずのないものだった。

彼はルイズに気付くと笑みを浮かべ、大またで近づいてくる。そして近づくや否や、いきなり抱き上げて

「久しぶりだな、ルイズ！ 僕のルイズ！」  
といった。

誰であるう、彼はワルド伯爵。

「荣誉ある魔法衛士隊グリフォン隊長にして、ルイズの婚約者なのだ。」

突然婚約者と出会ってしまい、ルイズは頬を染めながらただ「その…… お久しぶりでございます…… ワルド伯爵……」と、普段とは似ても似つかないしとやかな様子で言うのだった。

「姫様？ どうしたのですかな？」

「……は！？ い、いえ、何でもありません」

オスマンに呼びかけられ、ぼうとしていたアンリエッタは我に帰った。

彼等がいるのは学院長室である。ここから二人は今から旅立とうとする一行の無事を願っていた。しかし、肝心のアンリエッタはといつとどこか心ここにあらずといった様子だった。

「お会いしたときからどうも様子が変ですぞ？ もし気分が悪いのであれば……」

「本当に何でもありません。すみません、余計な心配をかけてしまつて……」

「それなら別にいいのですがな……」  
そういいながらもどこか心配そうにしているオスマン。それに対してアンリエッタはすまなく思う。

思い出すのは昨日の夜のこと。ルイズの使い魔に指摘されたことがどうしても頭を離れないのだ。

普段なら無礼なことと怒っていただろう。事実初めはそうだった。しかしあの男に睨まれ、心の底まで見透かすような目で見られた途端そんな怒りの感情などどこかにいってしまい、代わりに出て来たのは自分の心の底まで見られてしまふというおびえだった。

(私がそんなこと、思うわけ……)

心の中で何度も何度も否定し、ルイズの使い魔であっても貴族ではない平民の言うことなのだからと、犬にでも噛み付かれたとでも思つて忘れようとする。しかし何度否定しても、あの男の言葉は消えてくれなかった。

いい加減消えてくれないことにイラつき始めたときだった。

「オールド・オスマン！ いいい一大事ですぞ！」

頭が禿げ上がっている一人の教師が、大慌てで部屋に飛び込んできたのは。

「なんじゃ、コツパゲールくん。騒々しい。ここには姫殿下もおるのだからもつと落ち着いてだの」

「ふざけてる場合でも悠長なこと言つてる場合でもありません！」

フーケがチェルノボーグの牢獄から脱走したとの連絡がたつた今入つたのです……！」

「……ふむ」

ふざけた調子で教師に言つたのときとは一変し、真面目な顔になるオスマン。一方アンリエッタの顔からは血の気が引いた。

「わかつた。このことはわしで預かつておく。今は下がりにさい、ミスタ・コルベール」

そう言つて教師を下がらせるオスマン。

「なんてこと……！ こんなときに、脱獄だなんて！！」

アンリエッタは落ち着かない様子で体を動かす。そんな彼女とは対照的に落ち着いたまま「まあ落ち着いてくだされ」といった。

「これが落ち着いてなどいられませんか！ 此度の任務にはトリストインの未来がかかっているのですよ！？ それを……！！」

「それも分かつております。しかし我等にはもうどうすることも出来ません。既に杖は振られてしまい、彼女達は旅立ってしまったのですからな」

「……！！」

ぎり、とアンリエッタは齒をかみ締める。彼女にもオスマンの言っていることは理解できた。確かに今となつては自分達にできることなど何も無い。しかしだからと言つて落ち着いていられるかといわれれば、そうできるほどには自分は大人ではなかった。

「そういう貴方は随分と落ち着いていられますね、オールド・オスマン」

思わず、彼に噛み付いてしまう。彼が悪いわけではないのに。

しかしオスマンは笑つて言う。

「確かにわしも心配は心配です。ですがその心配は、恐らく無用になると思える事を知っているのです。だからこうして落ち着いていられるのですよ」

「何ですつて？」

「ミス・ヴァリエールの使い魔となつている青年……知つておられますかな？」

その事を言われた瞬間、どきりと心臓がはねるのをアンリエッタは感じた。動揺する。

だが、態度には出さないように勤めた。

「え、ええ。知っています。ですが彼がどうかしたのですか？」

「姫は始祖ブリミルの伝説をご存知ですか？」

「一通りは知っていますが……それが何か？」

「ではその中のある一節に、ガンダールヴのくだりがあることもよく存知でしょう。……彼は、そのガンダールヴなのですよ」

これにはアンリエッタも目を見張った。

「まさか、彼が!？」

「ええ。そして彼はまた、異世界からやってきた青年なのです」

「異世界？」

「ええ、このハルケギニアではないどこか。そして彼はその世界で多くの戦いを切り抜け、生き抜いて生きてきた歴戦の勇士とすら言える青年なのです。公にはなっていないせぬが、事実フーケを捕らえた際にも彼は抜群の働きをしましてな」

「なんと……」

「それゆえの安心です。たとえ世界が違っても、彼の戦いの経験はミス・ヴアリエールたちをきつと正しく導いてくれるでしょう。それに、これは余談ですが、彼がいた世界では彼はその戦いぶりからこう呼ばれていたそうです」

そこでオスマンはアンリエッタに彼、キョウスケがどう呼ばれていたのかを教える。(その後でオスマンは「もっとも、呼び名だけは『違う彼』の話ですがな。ま、箔つけかの」とアンリエッタには聞こえない声で言っていたのだが)

それを聞いたアンリエッタは学院長室の窓に近寄り、複雑な表情をしながら、こう呟くのだった。

「ならば祈りましょう。異世界からやってきたという、『鋼鉄の孤<sup>ベール</sup>狼<sup>ウ</sup>』に」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9954c/>

---

Zero of the Beowolf

2010年10月16日08時15分発行